



第927話

オリンピックが何だ

オリンピックが始まった。マスコミは連日、その報道合戦に熱狂していた。新聞紙面も、そのことばかり。テレビのチャンネルをひねるとは今は云わない、押せばというのか、とにかくどの局も朝から晩までオリンピック、オリンピック、オリンピックばかりだ。

食堂でご飯を食べている兄弟がいた。みんなスポーツ一家として、関西では有名だった。それが、三人とも面白くないような顔をして、飯を食っていた。

食堂のテレビではやはりオリンピックダイジェストを放送していた。夜中に中継しているのを見ている暇人もいるが、寝不足になるから、こうして特番で見るよりなかった。

食堂の客たちは、飯もそっちのけでテレビの前にかじりつき、声援を送っていた。結果がすでに判っていることに応援するというのも虚しい。やはり、競技は生中継に限る。それでも、みんな熱中していて、ビールを片手にして、あるいはフォークやナイフを振り回したり、実に危ない光景もあった。

多分、日本全国、こんな光景はあたりまえで、街頭のテレビでも、携帯電話のテレビでも、会社の休憩室でも、みんなサボってテレビを見ていたりしていた。

三人兄弟は世間が騒げば騒ぐほどますます慥然としてくる。終いには聞きたくもない。煩いと思うようになった。

「煩い、いい加減にしろ。テレビを消せ」

と、長男がとうとう爆発した。その怒鳴り声で、食堂の全員の目が、三兄弟に注がれた。

「毎日、毎日、オリンピック、オリンピックって煩せえんだよ」

次男もみんなを睨むようにきつい言い方をした。

「そうだよ、普段、スポーツ音痴の人間でも、こんなときはかじりつき。猫も杓子もテレビの前だ」

三男も文句たらたら。確かに、テレビの前には、食堂で飼っていた猫がちょこなんと座って見ていたし、何故か、杓子も置いてあった。

すると、客のひとりが三兄弟に云い返した。

「みんなが楽しんで見ているときに、文句があるなら、こんなところで飯なんか食わなければいいんだ。黙って家にいな」

「なんだと、ここは飯を食うところであって、テレビを見るところじゃない。テレビなら、家に帰って見なよ」

長男が受けて立った。

「おもしろえじゃねえか。やろうってのかい」

客のひとりが立ち上がった。

「第一、日本人の悪いところだ。流行というと、わあっとみんなそれに群がる。冬のソナタだという、おばちゃんが、群がる。オリンピックも同じだよ。お祭り好きの典型的な日本人がおま

えたちなんだ」

「よくも云ってくれたな、そういうきさまたちは、ブランドものの服は着ねえのかい。アイドル歌手の歌は聴かないのかい。日本人じゃねえのかい」

「おれはそんなことは云っちゃいねえ。もっと個性を持ったらどうなんだと云いたいんだ。みんな右へ倣えでは面白くもなんともない国民じゃないか。そんな国民だから、熱しやすく冷めやすい、軽佻浮薄な単細胞って呼ばれるんだよ」

「なんだと、おれたちが全部、馬鹿と云っているのかよ」

「そうは云っていない、そんなもんだと云っているんだ」

「そんなものも、こんなものも同じじゃねえか。おう、表に出ろい」

客の何人かが、立ち上がった。みんな、スポーツの観戦で熱気が覚めない興奮状態で、かっかしていた。それに、異常な猛暑が苛々を助長していた。

「兄さん、やめなよ。また新聞沙汰になると、出場停止処分になるから」

三男が長男を止めに入った。

「おう、どこかで見たことのある顔だな」

客たちは、三兄弟が、新聞やテレビに出ていたのを思い出そうとしていた。

「ええ、ここいらでは有名なんですよ。ですから、喧嘩だけはやめてくださいな」

食堂の親父も仲裁に入った。

「そうか、思い出した。あんたは、プロ野球選手だろう」

その一言で、長男はひるんだ。

「そして、あんたは、確か、オリンピックの選考で外された陸上選手」

その一言で次男も退いた。

「そして、次の若いの。あんたは、いま、やっている高校野球の地元の選手じゃねえのか」

その一言で三男も俯いた。

三兄弟はその場でしょんぼりとなってしまった。

客のひとりがしんみりとなって云った。

「そうだよなあ、みんなオリンピックばかり見ているから、プロ野球と高校野球の影が薄れて、視聴率も落ちたろうしなあ。頭に来るよなあ」

オリンピックは世界の紅白歌合戦だった。裏番組の悲哀は誰にも判らない。

第928話

怪談・深夜のタクシー

真夜中まで呑んで、帰るときはタクシーだった。わたしの家は郊外の新興住宅街だが、まだ建物はまばらで、裏の山が迫ってきていて、なんとなく寂しいとこ

ろにあった。

たまたま拾ったタクシーの運転手が、話し好きの人で、のっけから話しかけてくる。

「お客さん、幽霊って信じますか。いやね、こんな話、信じていない人に話してもバカにされるだけだから」

「ぼくは見たことはないけど、信じますよ」

「それなら、こんな蒸し暑い日にはちょうど寒くなるような話なんですがね、この前の夜中に、若い女性を乗せたんですよ。それが、車なんか通らない、農道でしてね、辺りは畑ばかりで民家もなにもない。第一、真夜中に人が歩く場所じゃない。おかしいなって思いましたよ。振り返ると、雨が降っているわけでもないのに、髪が濡れているんですよ。なんとなく暗い押し黙った女でしたが、そうね、年の頃は二十歳過ぎってとこですかね、これがまた滅法美人ときていましてね、うつろな目をこっちに向けて、云うんですよ。わたし、お金持っていないんですけど、家に着いたら払いますからって。よく聞く話ですよ。家の場所も寂しいところにある農家だ。そこまでは、川の土手を遡るように走るんですね。夏だから霧が出てきて、フォグランプでなければ前が見えない。あまりスピードが出せないんで、注意しながら走っていました。エアコンが効き過ぎで、どうも寒いんで、お客さん、エアコンを止めて、窓を開けましょうかって、云ったんですが、人の乗っている気配はするが、何か存在感っていうんですか、それがありませんよ。小型タクシーだから、人を乗せたときの重みが判るんですが、まるでわたし一人しか乗っていないような感触ですね。それで、バックミラーを見たんです。わたしは驚きましたね。鏡に後ろの席の女が映っていないんですよ。わたしは、ぞっとするより、不思議に思いましたね。それで女の人に訊いたんですよ。お客さん、失礼ですが、あなたの姿が鏡に映らないんですよ。ひょいと振り返ると女は坐って、悲しげな顔を向けてきていました。だけど、鏡には映らない。何か悪いことを訊いたように思って、わたしは慰めるつもりで云ったんです。お嬢さんも大変ですね。年頃の娘さんが、鏡に顔が映らないと、化粧するときは不便でしょうね。すると、女はしくしくと泣くじゃありませんか。わたしは悪いことを云ったと思い、言葉が続けました。ひょっとして、鏡だけではなく、写真を撮っても映らないとか。そうなんですね。彼氏とツーショットで写真を撮っても、あなただけ映らない。それは可哀想だ。いまの若い子たちは、携帯電話のカメラで写メするとかいうのも、仲間はずれにされちゃうんですね。わたしは、喋ってはいけないことをぺらぺらと話していたようでした。そのうち、バックミラーにもものすごい形相の女の顔が映りました。口が耳まで裂けているんですね。あまり驚いたから、わたしは振り返って確認しました。女は目を吊り上げ、本当に口が真っ赤で耳まで裂けているんです。わたしは、少しは驚きましたが、急に女が不憫に思えてきましてね。なんだ、あなた、もっと自信を持ちなさいな。ちゃんと鏡に映ったりもできるんじゃないですか。でも、その顔はいけません。さっきのほう

が美人でしたよ。何もわざわざそんな顔をしなくても、彼氏に嫌われるでしょう。ああ、そんな口だったんですね。また余計なことを云ってしまいまして、すみません。口が大きい人は美人だと昔から云いますから、そう考えこまないでくださいよ。おちょぼ口というのは愛嬌はあるが、それは戦前なら美人の条件でしたでしょうが、近頃の日本の娘たちは、背丈も大きくなり、スタイルも外人並によくなった。美人のパーツも変わってきたようでね、いまは顔の造りが大きいほうがいいようだ。目も大きく、口も大きくとね。それに、あなたのように大きいと、おいしいものを食べる時に人より一気に入るから、いいですよ。それに、奥歯まで見えているから、歯磨きがしやすいでしょう。歯医者も治療がしやすいなんてね、いろいろと利点があるわけだから、嘆くことはありませんよ。そこまで話すと、女は怒り狂ったように、赤い舌を蛇のように長く伸ばしてきた。しかも先が割れているんですね、そいつをヒュルヒュルと音を出しながら、わたしの頬を舐めてくるじゃないですか。くくくくと、わたしはあまりこそばゆいので、女に云いました。やめてください。わたしはそんなのに弱いんですよ。感じやすいんです。女は口を大きく開けて、わたしを飲み込む真似をするんですね。そこで、わたしは子供のときを思い出したんです。ああ、判った。あなたは、生まれつきのそんな体で生れてきたんですね。よく、昔は、見世物が花見のときに公園に来ていてね、あなたのような蛇女を興行で見せてお客から金を集めていましたよ。いまじゃ、そんなことしたらお縄でしょう。昔は人権もなにもなかったんだね。あなたも、そのようにして生れてきた自分を呪ったりしちゃいけないですよ。すると、女はわたしの首に手を回してくるんですよ。ぞくぞくしましたね。お客さん、やめてください。こんなところで挑発するのは、わたしもまだ若いし、独身なんだから、その気にさせないでくださいな、って。わたしは相手が客だから不調法してもいけないから、丁重に手を解いてやったんですが、どうもしつこい女で、わたしの耳とか胸なんかにも手を入れてくるんですね。わたしも、いままでいろんな女と交際してきましたが、いまのちゃらちゃらした女には飽きた頃でした。わたしは、車を止めて、振り返って云いました。わたしでよかったら、つきあってくれませんか。あなたのようななどこにもいない珍しい女性を探していたんだ。みんなに自慢できる彼女が欲しかったってね。すると、女は逆に怯えた顔をして引き下がるじゃありませんか。わたしは逆に女の手を握り、引き寄せようと思いました。そのときです。女はキキキキとかいう妙な泣き声を上げて、突然消えてしまったんです。まあ、話というのは、それだけなんです、誰も信じないんですよ。わたしの作り話だとか、夢でも見たんだろうってね。お客さんは、どう思いますか」

タクシーの運転手は、わたしに口裂け女の存在を信じるかと、尋ねてきてた。わたしは、ようやく外を見て、タクシーがいままで見たこともないところを走っていることに気が付いた。それはこの世の情景とは思えない石があちこちに積んである河原の道だった。

「運転手さん、ここはどこなんですか。どこを走っているんですか」

すると、ちらりとバックミラーに顔を合わせた運転手の口が、耳まで裂けているのを見てしまった。そして、ヒュルヒュルと赤く先が割れている舌を出してきているのを……。

第929話

怪談・靈感少年

末っ子のノブは何でも見える子だった。生まれたときから奇妙な行動をとる。何でも知っているような大人びた口を利く。突然、言葉が低く、本人でない口調で話し出したりして両親を驚かせた。

時折、痙攣しておかしくなるので、小さいうちはひきつけとっていたが、それが五歳を過ぎても起こるので、一度大きな病院で調べてもらおうと、検査に連れて行った。

医師は検査結果を見てこう云った。

「脳波に異常が少しだけ見られますね。てんかんの疑いもあります。どなたか身内におりますか？」

両親とも心当たりはない。

「それなら、赤ちゃんのときに頭に怪我をしたということは？」

それもなかった。遺伝でも後天性でもないとするれば、原因不明としか書けないでいた。

「もし、てんかんの薬を投与するのなら、お出しいたしますが、途中で止めてはいけないので、ずっと何年も呑み続けなければなりません」

医師はそう云ったから、うちの子はてんかんではないと確信している母親はそれを断った。医師としては自信がないから、呑んでも呑まなくてもいいような云い方をしていた。

痙攣は治まった。だが、それからノブの異常な様子が家族を驚かせた。夜になって、ダイニングルームの食卓の下をじっと見ているのだ。別に恐れているふうもなく、ただ、目が釘付けになっているのだ。

「どうしたの？」と。母親が訊くと、

「うん、髭のおじちゃんがいるの」と、云うのだった。そうかと思うと、いつかは台所の隅をやはりじっと見ている、

「よその子が入りこんでいるよ。ほら、そこに隠れているよ」

と、不気味なことを云うのだった。ノブには、人が見えないものが見えているのだと、家族は話し合った。上の兄たちは、ノブのことをノブ神様とわざと呼んでいた。末っ子だけが変わっていた。四人の男の子でひとりだけ靈感が強い。

だが、どこにいても、霊が見えるらしく、慣れてしまったノブは恐がりもしない。いるのが普通だった。きっと、うじゃうじゃと、周りには浮遊霊がいるのだろう。小さいときから、霊と同居しているのがあたりまえのことと思いこんでいたから、それがノブの日常なのだ。

日曜に、家族で中古車センターに車を見に行った。父親が車が廃車になるから、別の車に乗り換えようと、展示車を選びに行ったのだ。あまり人が来ていない。がらんとした展示場には、いろんな車が並んでいた。ある車のところで、父親が立ち止まり、

「このセダンがいいな。まだいくらも走っていないし、年式も新しい。車検もついている。ちょっと塗装した跡が気になるが」

値段も格安だった。目玉商品かもしれないと、中を覗いていた。すると、ノブがまたじっと車の中を凝視している。いつも何かに囚われたように動かなくなる。

「どうしたのノブちゃん、また何か見えたの？」

と、母親が訊いた。

「うん、この車の中に乗っているおじちゃんの顔がないの。血だらけだよ」

それを聞いて、父親はぞっとした。この車は事故車に違いない。だから安いのだ。その車はやめることにした。

ノブが風邪で熱が上がり、病院に連れて行ったときのことだ。そこは設備が整っている総合病院だったが、ノブは玄関から中に入ろうとしないのだ。母親が手を引いて、無理に連れて行こうとすると、ようやくノブは口を開いた。

「ここは、嫌だよ。青い顔がいっぱいいるもの」

「誰もいないじゃないの」

「いるよ、廊下にもいるし、玄関にもいるし、びっしりというよ」

それを聞いて、母親は嫌な予感がした。藪医者なのかもしれないと、別の病院に変えた。

ノブの話を、母親だけは信じて、何を見たのか、どんな顔だったかと、絵に描かせたりしていた。だが、まだ幼稚園児のことだ、お絵描きはあまりうまくない。家の中にいるのが、どんな人なのか、昔のアルバムなんかを開いて見せていたら、亡くなった祖母の写真を指さしていた。

「いまも、後ろに立っているよ」と、云うから、お盆で戻ってきているのかと、母親は思った。

ノブに異常が起こったのは、その日の午後であった。

テレビでは、政治番組をやっていた。普段は子供たちが見ない番組であったが、ノブは、そのテレビをまたじっと吸い付けられるようにして眺めていたが、急に、

「怖いよう」と、泣き出したのだ。そして、母親の陰に隠れるようにして震えているのだ。

「どうしたの、ノブちゃん」と、母親はいままで示したことの無い反応に躊躇していた。こんなに怯えた息子の格好を見たことはない。

「あれ、あれ、あれだよ。怖いよう」

と、ノブがテレビの画面に出ている政治家たちを指さして泣いているのだった。

「誰が怖いのよ」と、母親は初めは笑っていたが、それが総理始め、閣僚の面々であることに、疑いを抱いた。そして、ノブは泣きながら、図鑑を開いて、髑髏のイラストを指さしていた。

第930話

柳町界隈

郷土館に鈴木正治さんの個展を見に行ったら、ご本人が意外にも会場にいて、ホールに座り、木を削っておられた。石と木の彫刻の他に平面も手がける。御年八十五歳で、現役の彫刻家だ。たまたま両親を連れて行ったので、挨拶した。わたしは古本屋にもよくおいでになられたので、以

前から知っていた。

前に詩の同人誌をやっていたときの挿画を先生に頼んで、無料でいつも引き受けてくれていた。同人全員に石に頭文字を彫った落款をプレゼントしてくれた。そして、よく先生と呑んだ。昔話をするうちに、先生が柳町に小さいときから住んでいたということ話を話したから、それじゃ、うちが戦前に柳町で商売していた煎餅屋を知っているかどうかと訊いた。知っているものにも、家が向かいだった。そして、うちの叔父と新町小学校で一緒に、よく遊んだという。

「して、太三ちゃんは元気か」と、訊くから、わたしは半世紀以上経って、いまだ知らない旧友がいることに気が付いた。

「太三造叔父は、沖縄で戦死しました」

「そうか。忠ちゃんはどうした」

「ボケちゃって、老人ホームにいますよ」そうわたしは、一番上の忠一伯父の消息を伝えていた。

「忠ちゃんは、わたしの憧れだった。青森中学で級長をしている印が、袖に付いていてな」

大正から昭和の初めの話だった。

その頃の柳町はいまのように人も通らず、寂れた町ではなかった。青森の中心地であり、新町との角に松木屋デパートがあり、川が海まで流れ、岸辺に柳の木が垂れていた。道の両側は商店が軒を連ね、その歩道を挟むようにして、市場のような小店がずらりと並ぶ。人通りもよく、賑やかな町であったという。

わたしの親たちは、その川に入って幼少の頃に遊んでいた。泥鰌や鮒、ナマズも掴まえたという。

新町小学校と長島小学校、橋本小学校と学区があり、町の子たちは互いに勢力争いで喧嘩もした。新町しりくそ、長島ながいも、橋本はなくそと、馬鹿にしあった。そんな三つどもえの中心にあったのが柳町だ。

大正時代から、その川のある町柳町で、曾祖父が南部煎餅の店をやっていた。間口二間の店の中で煎餅を整形して焼いていた。店にいつも出ていたのが、一番上の姉で当時柳町小町と云われていたコウ伯母であった。色白でふっくらとした顔が写真で残っている。どこかで見たことのある顔だと思っていたら、それは棟方志功の彫っていた天女の顔だった。

志功はやはり、鈴木正治先生の近くに暮らしていた。板金屋をやっていたという。柳町から近いから、いつも志功は、煎餅のみみを貰いにうちにやってきたという。煎餅屋のコウちゃとは仲がよかった。いつもコウちゃ、コウちゃと呼んでいたという。その伯母も去年九十三で亡くなった。

子供のときから奇人扱いをされていた志功は、すりきれた草履に、叩けば埃の出る汚い着物を着て、縄を帯代わりに縛っていたという。そして、いつも石ころでも草花でも、しゃがんでじっと見つめているのだ。その志功が面白いと、いつもうちの親父たちは後ろをぞろぞろとついて歩いていた。シコーの馬鹿っことからかっては、虐めていた。

郷土館で、何十年ぶりかで親父と逢った鈴木先生は、懐かしく当時の話をし始めた。

「煎餅のみみは袋に入れて、一銭だった。たまに小遣いが貰えれば、あんたところに走って、煎餅

の生焼けを二銭で買ったもんだね。あの生焼けが美味かった」

生焼けとは、焼き損じたクズであったが、それはそれで安く売られたのだ。　白い髭に澄んだ目があった。先生の作品は、すべて手で触れて遊んでいいと、係りの人も云っていた。普通なら、触るのは厳禁なのだが、それは芸術であって玩具であった。先生の描いた不動明王は、「ウゴカズ」という題がついていた。わたしには、それがヤッターマンに見えた。どこかあどけなさの線が残されていた。一本の木をくり抜いて、二重三重の絡んだ輪を作る。どこにも張り合わせたところがない。それが手品のようにあり、にやりと笑える遊び心であった。

老いて、どこか子供に還ってゆくのは、親父を見ているもそう思う。俗っぽいものがすべて枯れてゆくと、人は純粋な赤子の心だけになるのか。

展覧会を見たあと、すぐ近くの柳町を歩いた。鈴木正治さんを育て、志功を生み、親父もわたしもそこで生まれそこで育った。いまは、柳の木はすべて切られて、川は暗渠として埋められ、町は妙にモダンになった。そこには遊びの影はもうなかった。

第931話

休戦記念日

戦争が終わり、来年で六十年を迎えようとしている。ということは、兵隊として戦場に行った人は日本の人口でほんのわずかになってきている。記憶にあるという当時の子供たちも七十を過ぎた。

世の中には堂々と教科書を書き換えて、歴史を歪曲しようという動きがあって、引き戻しながらも徐々に右へと流されているのは事実だ。

これは、十年後の小学校の授業風景だった。

「起立、礼、着席」

教室は、一年生だけが男女一緒だが、二年生からは男児、女児とクラスが分けられた。戦前と同じに戻りつつあった。この起立、礼というのも、お隣の韓国ではだいぶ以前から止めていた。軍隊式のやり方が何故か学校に残っていた。

先生はぎろりと眺め回していた。男児はすべて坊主刈になっていた。先生も軍隊式の特訓で強く逞しくなっていた。もう、ひ弱な先生はいない。生徒は鞭を持って叩いてよし。父兄には文句は云わせない。教育のためなら、ひとりふたりぐらい死んでもいいという上からのお達しもあった。

教育は凶育へと変貌していた。

社会科の授業で歴史を教えていた。

「さあ、昨日の宿題だ。歴代天皇様の御名前を百二十六代すらすらとつつかかることなく申す練習をしてきたか。風晴、お前はどうか」

「はい、ジンム、スウゼイ、アンネイ、イトク……」

「よし、よくできた」

「先生、うちのじいちゃんが、神武天皇から後は、みんな神話の話で、いなかったんだって云うんだ」

先生は手を挙げた笹田の方を怖い顔で睨んだ。

「笹田の家ではそんな間違っただけの教育をしているのか。よし、後でおじいさんには、憲兵のおじさんに行ってもらおうようにするから」

「先生、日本の国は、イザナギ、イザナミノミコトが二人して国をお造りになられたと昨日は勉強しましたけど、それがいまから二千六百七十六年前だと習いました。そのあとにわたしたちの祖先が、この世に出てきたんだって覚えました。そうすると、いまから五千年前にここに住んでいたという三内丸山遺跡は嘘なんですか」

橋本が立ち上がって訊いた。先生は質問責めにうろたえていた。

「うるさーい。ごちゃごちゃと、いらぬことは考えるな。教科書がすべて正しいのだ。おまえたちが疑問に思うことはすべてこれ不敬罪なんだぞ。これから、変な知識には耳を貸さないように、もし、そんなことをおまえたちに吹き込むやつがいたら、先生にすぐ教えるように。いいな」

授業は日本国憲法の時間になった。

「この我が国の憲法は、アメリカからの押しつけ憲法であった。であるからして、いまから十年前に憲法は作り直したのだ。特に第九条だが、【戦争の放棄】とあるのを【戦争の蜂起】と直した。それは、他国の侵略を許さないばかりか、こっちが侵略してゆける道を付けたものといえる。おほん」

それに絡んで、太平洋戦争のことについて習う段になった。

「みんな、昭和二十年の八月十五日は何の日か知っているか」

「はい」と、日土が立った。「終戦記念日でーす」

「ちょっと違うな。昔はそう呼んでいたが、いまは違う。判るもの」

おずおずと小さく手を挙げた田村に先生の指がゆく。

「あおう、うちのじいちゃんが、敗戦記念日って云っていたけど。そのう、日本は戦争に負けたからだって」

先生は突然赤い顔になって、わなわたと震えていた。

「田村のおじいさんのところにも、後で憲兵のおじさんに行ってもらおう。日本は負けたのではない。教科書のどこにもそんなことは書いていないだろう。いいか、あのときは、一時、中断しただけなのだ。だから、いまでは、八月十五日のことを正しくは休戦記念日という。みんな、よく覚えておくように」

世の中、とうとうそこまで酷くなっていた。十年経ったら、戦争体験者はゼロに等しい。

「さあ、次は体育の時間だが、今日は軍事教練と、防火訓練を併合して行うことにする。さあ、みんな家庭科のときに作った防空頭巾をかぶり、校庭に整列すること」

児童たちはぶつくさと云っていた。

「また、竹槍訓練とバケツリレーだよ。たまにはバスケットボールとかソフトボールをやりたい

よな」

小学校の上空を日本空軍のジェット戦闘機の編隊と、爆撃機の編隊が西の方に向かって飛んでいった。隣国を侵略したあと、日本は大陸へと軍隊を進めていた。

第932話

夜道

最近夜道のひとり歩きは、男でも怖い。痴漢だけでなく、通り魔や親父狩りが横行している。自転車が無灯火で背後から近づいてくると、つい手に持っている鞆を抱きしめていたりする。

拓也は、仕事場から家まで十分もかからない距離なのだが、帰るのがいつも九時過ぎたりしていた。田舎の市なので、夜が早い。九時ともなると、街は眠っているようだ。商店は閉めているし、住宅も灯りが消えていたりする。田舎時間というものがあるって、みんな早く寝るのだ。だから、晩くなって外を歩いている人も少ない。

そんな不気味な夜道をひとり歩いていた。拓也の二十メートルくらい前を若い女が歩いていた。他には通行人らしき影もなく、車も通らない通りだ。二人の足音だけが闇の中に響いていた。女は拓也が後ろから来ているのに気が付いたようで、直接後ろを振り向くことはなかったが、何か後ろを盛んに気にしているように、そわそわして歩いていた。

拓也は紳士だった。そんな若い子の不安な気持ちを察して、できるだけ距離を置いて歩くように努めた。随分と気を遣っていた積もりだった。相手は、見えない相手が後ろから尾行しているものと思っているだろうし、拓也はそう思われぬように、間を離していた。

ところが、女の歩き方が苛々するほど遅いのだ。元来、拓也は人より早足のほうで、大股で歩行速度が速い。それを女に合わせて、ちまちまと歩くのに耐えられなくなってきた。

地下道が前方にあった。階段を下りてゆき、歩行者用の地下道を歩いて、線路の向こう側まで出なければならない。地下道というのもまた不気味なもので、一種の密室状態を作る。犯罪には格好の場所になる。ライトが点いていて、その照射位置で、人影が異様に長く見えたりしていた。拓也の影が女の影と並んでいた。女はその影にも怯えるように少しゆっくりと歩いていた。わざとゆっくりしているようにも見えた。きっと、先に行けという合図なのだと拓也は思った。それで、女の先に出れば、後をつけているような誤解もないだろうと、拓也は早足になった。その足音が地下道にカツカツと響いていた。女は急に、後ろの男が歩を早めたので、ちらちらと後ろを気にしながらも、身を引き締めて緊張しているのが拓也にも伝わってきていた。女との距離が五メートルになった。ここで一気に抜いてやると、拓也は別に痴漢でも引ったくりでもないということが実証されるのだ。そこで、今度は少しゆっくりと走り出した。すると、女は何を思ったか、急に走り出した。女の足音も高く響いた。まるで二人の足音の競争のようであった。地下道を出ると、女は階段を急いで上がっていた。拓也は一段づつ上がるのではなく、三段くらいまとめて上がるので女よりは早い。距離が三メートルに近づいた。女の呼吸音が近くに聞こえていた。

外に出ると、灯りが無い。ぽつぽつと外灯があるだけで、辺りは真っ暗だ。線路際の道路というのも淋しいものだ。相変わらず、寝静まった町は音もしない。二人の足音だけがカツカツコツコツと聞こえている。次の曲がり角を女は右に曲がった。拓也も同じ方角だ。まずいと思った。拓也も曲がる。さもさも、後ろを付けているように思われる。女は今度は路地を左に折れた。本当にまずい。拓也の家もそっちの方向だ。そうそう、行き先が一致するのも怪しく、相手の女は、もう完全に拓也に狙われているものと思っていた。

それなら拓也はここで一気に抜いてやろうと、走り出した。すると、女はキャーと悲鳴を上げて一緒に走り出した。拓也が後ろから襲いかかろうとでもするかのように勘違いしたのだ。そんなに叫ばれたら心外だ。よく、地下鉄の車内で痴漢にされる冤罪にでもなったら、拓也は周囲の人間から笑い者にされて、

「あいつか、やりそうだと思ったよ」とか、

「拓也だって、年頃の娘を抱える親父だよ。何を考えているんだろう。婦女暴行だなんて新聞に書かれて、全く恥ずかしい」とか、

「きっと、奥さんと家庭内別居されて欲求不満気味なんじゃないの」と、いうふうに、世間から攻撃されるのは目に見えている。そうはなりたくない。そのためには、なんとしても身の潔白を証明するためにも、女の先に出なければならない。拓也は全速力で走った。女も全速力で走った。中年太りの拓也は体力が落ちていた。女のほうが若い分、早かった。それでも誤解されてたまるかと、ようやく拓也は女を抜いてトップに出た。抜かれた女は、目を瞑って走っているのだから、抜かれたことに気がつかないで、ますます恐がり、一目散に逃げていた。そして、キャーと悲鳴を上げながら、また拓也を追い越して行った。

それをまた拓也が追い越す。それは、見知らぬ男と女の夜の短距離だった。

「冗談じゃない。おれが何をしたっていうんだ。このまま痴漢にされてたまるか」

拓也は、全身汗びっしょりになって、最後の力を振り絞って、また女を抜いた。いままで、自分の出したことのない最高の走りだった。人間というものは、いざというときには信じられない力を発揮するものだ。

と、突然、夜の帳が開いたように目の前が明るくなった。と、思うと、拓也は競技場の白いラインが引いてあるコースを走っていた。目の前にはゴールのラインが見えていた。観客が総立ちになって拍手していた。カメラのフラッシュがたかれた。

「よくやった。おめでとう」と、バスタオルを持ったコーチが拓也の体を包んだ。

「世界最高記録を樹立したよ。金メダルだ」

何が起こったのか判らなかった。どうして急にこうなったのか。女の姿はいつのまにか消えていた。

ある無業者

失業者と区別するために、無業者という言葉が出てきた。広辞苑にも載っているから、新しい言葉ではない。仕事をしたくてもない者が失業者とすれば、仕事をする気がないのが狭義の意味で無業者か。

自閉症という幼児性のものから、若者、成人者に対しては引きこもりという言葉も生まれたが、彼らの大半がそれに属する。

ここにGさんと云う無業者がいる。実は、わたしと幼馴染みで、彼が幼少のときから遊んだ記憶がある。わたしよりひとつ下だから、いまは五十二歳になっている。

子供のときから、よく人の目を気にする子だった。何も悪いことをしているわけでもないのに、びくびくしていたのを覚えていた。それは、彼の家に行くとその意味が判った。父親が船員をしていて、荒っぽい海の男であったが、船乗りだから、たまにしか帰らない。帰ってくると何ヶ月も家にいた。普段は、父親のいない家庭で、ひとり息子だから母親に異常に可愛がられる。

父親は、母親にいつもベタベタ甘えている息子が気に入らない。それで、いつも馬鹿呼ばわりして、怒鳴り、暴力を振るうこともあった。そうした幼児体験から、いつのまにか、Gさんは、おどおどと人の顔色ばかり見る子供に育てていたのだ。大人になっても、上目使いに見上げるいじけたような視線は変わらなかった。

そして、何よりもその態度に顕著に出ていることは、引っ込み思案で、何をするにも自信のない口調であり、いつも言い訳ばかり考えていることであった。

彼とは一緒に仕事をしたこともあった。背は高く、男前であった。入社試験はトップの成績で頭もよかった。ただ、適性がまるでない。営業は無理だということで、厨房に入れられた。ここでは、パートのおばさんたちからかわれ、辞めたいと云い出す始末。自分よりずっと年下の女の子と喧嘩して、ぱたりと店に来なくなったこともたびたびだ。無断欠勤が続いたので、わたしは上司として、彼と話し合う時間を持った。

彼の会話はとてもまともに相手ができないほど、いじいじしていた。すべて相手の悪口ばかりで、三十男が、しかも主任という役職のものが、云うべき内容ではなかった。女の子同士のいがみ合いを聞いているようなものだった。

彼は、配置転換をして、配送もしたりしたが、どこでも人間関係がヘタで辞めたがる。逃げたがる。とうとう、会社に辞表も出さないでいなくなってしまった。

どこへ行っていたのかと思ったら、東京に仕事を求めてあちこち転々としたという。どの仕事もひと月と持たなかった。そうして、また郷里に戻ってきたところで、街中でぱたりと彼に逢った。顔は色黒く、髭を顎からたくわえて、外見は逞しい男のように見えたが、口を開くと何も変わってはいなかった。結局、どこでも使えずに挫折して戻ってきた。

彼の地獄はそこから始まる。いや、それは家族の地獄でもあった。それから彼は二十年もの間、家から一步も出ないで、部屋に閉じこもった。自分自身に失望し、それを受け入れない社会へも失望した。だが、絶望ではないから、死に至るまではゆかない。

そんな性分だから、友達もいない。仕事をする意欲もなく、遊ぶ気もなく、欲しいものもなく、欲望すらなくして、ただひたすら、喰うことと寝ることだけをした。ブロイラーのように、何

も考えずに、そればかりの生活を二十年もしてきた。

親は共に七十半ば。年金を貰って、借家住まいであった。彼は、親に喰わせてもらっている。テレビだけは見ているから、世間との関わりといえば、テレビだけのようだった。親と一緒に食事にはしない。親が食べてから、のっそりと自分の部屋から出てきて、顔を合わせないようにして、いつのまにか冷蔵庫の中身をぺろりとたいらげているようだ。その喰う量は尋常ではなかった。老夫婦二人の一日分の量を一食で喰ってしまうという。親とひとつ屋根の下に暮らしても、たまに顔を合わせたりすると、ぎろりとすごい目で睨み、

「煙草は吸っていねえだろうな。酒なんかも飲んでいねえよな」

と、父親に嗜好品は贅沢だとばかり、叱りつけていた。そんな金があったら、もっとまとなものを喰わせろといわんばかりだ。子供のときに馬鹿だ馬鹿だと親に頭ごなしに叱られていた復讐をしていたのだ。病氣と老いで弱った親を怒鳴り、嫌がらせをする。いつまでもパラサイトしながら、ただひたすら太ってゆく。

いまや、体重は相撲取り並の百五十キロはあろうか。

病気がちの老父母はいつまでも養ってられるわけではない。もし、二人とも入院したり、ホームの世話になって家を出るようになると、誰も食事は作らない。Gさんは確実に餓死するだろう。もっとも身近なところに最悪のケースがあった。

政府はようやく全国にいる無業者のための対策を打ち出してきた。だが、どうやって彼らを外に出してくるのか。わたしも、何度かGさんを出そうとして失敗した。それはもう手遅れだった。いまとなっては、家を壊して出さなければならなかった。

第934話

目下失業中

異変が起こっていた。親族にも失業の波が押し寄せてきている。従弟は、いままで勤めていた仕事を失職すると、年齢的に就職先がない。まして、この津軽は有効求人倍率が全国最下位の記録を更新しつつあり、単純に就職の倍率は三倍だ。それで、五人の子供を抱えて、単身中京方面に出稼ぎに出なければならなくなった。

甥や姪、従弟の子供たちという若い人たちも、仕事がなくてぶらぶらしていた。親がコネを使って、あちこちへ頼み込み、なんとか修まる人もいたが、とりあえずのバイトで急場をしのいでいるものもいる。

三男の拓人がいままで勤めていた広告代理店を辞めたとケイタイにメールが来ていた。関東の方で働いている息子たちから連絡があるのは、このケイタイのメールが多い。

拓人は外見だけに惑わされやすい。職種が横文字で、会社もなんとかインターナショナルというと、さもどでかい仕事をしているような錯覚を覚える。

「おい、大丈夫かよ。インターナショナルだなんて、怪しい会社だな」

三男からケイタイに電話が来た。どんな仕事に就くにせよ、ひと言連絡しろと云っておいた。まだ若いから、その仕事の内容がどんなことなのか判りもしない。飛び込んでから後悔しても抜けられなかったりする。

「社長が二十六歳で」というから、起業家なのだろう。実績のない若い会社だ。

「社保はあるのか」「何、そのシャホって」訊いてみると、そんなものはない。株式会社で従業員を使っているわりには、違法行為を平気でしている。就業規則もできあいで、交通費も出なければ、労働保険も掛けていない、会社という名前ばかりの会社はいくらでもある。

「一年、頑張れば、エグゼクティブになれるんだ」と、拓人は云う。

よく、ダブルのスーツを着て、高い車に乗った若いセールスマンがうちの店にやってくる。名刺を見るとエグゼクティブ。外資系の会社だとか。

「おまえ、意味が判っているの?」「ううん、全然」

結局、格好いいというだけなのだ。仕事の中身は完全歩合給。広告を取ってきたら、そのうちの三割が給与だ。全然取れないときも何日も続いた。この不況下で各企業は、経費節減の筆頭に広告費を挙げたりする。だから、あちこちと足を棒のようにして歩いても、どこでも断られる。広告会社はいまはどこも苦戦していた。それで、何ヶ月か外回りをしたが、月に十万しか稼げない。六万のアパートの家賃にバイクのローンも払えなくなっていた。

それで、生活費を送金してくれと泣きついてきた。

「ばかやろう。仕事を探すのに、看板で探すな。地味な仕事でもいい仕事はあるし、コツコツと収入を得られる堅実なところがいいんだ」

拓人の話では、会社内で、成功体験発表なんかあり、ホールにみんなが集まって、年収五千万を実現したエグゼクティブに全員で拍手していたという。よくあるセールスの会社の心理的なやり方で、新興宗教にも似たやり方だ。まだ二十一の息子はころりと騙され、載せられる。

甥のひとりが、やはり大学を出てから就職試験で失敗して、最後に商品取引の会社に入った。いい会社もあるが、そこはなんとか組に近い会社で、抜けられない。何も知らないで、商品先物の営業をしたが、お客に大損も与える。中には、家屋敷を売って、それでも足りずに一家心中。そんなことは日常茶飯事だ。それで責任を感じて逃げるようにして辞めた。

こんな不況になればなるほどブラックマーケットが跳梁跋扈する。インチキ商法、詐欺商法。マルチ商法まがいのマネーゲームの会社。それに荷担することになるかもしれない。何も知らないと云っても、摘発されれば、豊田商事のときのように、我が息子も一緒に逮捕されるかもしれない。それが悪いことか判断がつかないから大変だ。

友人も、仕事がないからと、電気代を節約する機械を売る会社に行った。うるさいほど電話セールスする会社だが、彼女からわたしの店に電話が来ていた。

「知っているよ。二日に一遍電話が来るから。でも、怪しいから辞めた方がいいよ」と、忠告しておいた。親戚、友人に頼み込んで、一台高くて百万以上もする機械を売り込んだ。ところが、それが何の効果もないと、インチキ商品であったと新聞で暴露されると、まるで雲隠れするように会社は畳んで、倒産。被害者の会が全国的に結成されることになった。

「わたし、今度は、リフォームの会社に勤めたの」

と、その友人からけろりとした声で電話があった。さんざん周りに迷惑をかけて、信用がなくなったのに、また今度は何をするのか。

一攫千金を狙うものは、いつもそんな多収入を得られる会社ばかり渡り歩く。拓人にはそうはなってもらいたくはないから、電話でこんこんと説教してやった。親父の説教だ。

「とにかく、いまは失業中なんだから、いいか、突飛なことは考えるな。生活を安定させることだけを考えろ。明日喰う飯代もないくせに、将来の大きな夢なんかは、しまっておけ。コンビニでもスーパーでもいつでも募集しているバイトがあるだろう。いまは、時給が安くても、それで確実に給料をもらえる仕事に就くんだな。判ったか」

拓人はいつも、兄貴たちを意識して、抜いてやろうと大きいことばかりを考えているようであった。青年が自信と野心を持つのは悪いことではないが、それが思い上がりになり、利用されるのが怖い。若い人たちを使い捨てる会社はいくらでもある。

三男からまた電話だ。

「親父、今度はちゃんとした固定給の会社だよ。〇〇コーポレーションという、デリバリー関係のサブコンなんだ」

また横文字だ。日本語で云え。早い話が、宅急便の下請けじゃないか。

第935話

呼 吸

古い民家に住みたいと思った。わたしたち一家は、転勤で東北の古都と呼ばれる人口十万の市へと移り住んできた。町並みが条例により保存されているという。

いままで、わたしは東京の団地住まいであったから、どうも、同じ造りの部屋ばかりが並ぶ、飼育場のような鉄筋コンクリートは好きになれなかった。それで、会社の勧めで、マンションをと思ったが、どうせ古い町に暮らすのだから、日本的な情緒のある住まいをと、築百年は経っている民家を借りることにした。明治の建物といっても、土台や壁、柱、外壁などは当時のままだが、後は、すべてリフォームされている。電磁調理器も使えるし、窓も内側はサッシだ。トイレもいまは水洗だ。いわば、古い外観の建物の中は、近代的な生活ができるよう手が入れているというわけだ。

それでも、戸や、廊下のぎしぎしと鳴る黒光りした板、床の間や縁側という、いまはもうあまり見られなくなった懐かしいところが残っていた。

妻はわたしより十以上も若い三十そこそこだから、こんな生活は知らないだろう。珍しがってきよろきよろしていた。

「おいおい、床の間にドレッサーなんか置くなよ。そこは飾るためのゆとりのスペースなんだ。物置の代わりにされても困る」

「あら、そうしたら、何を置くのよ。勿体ないでしょう」

「ここには、掛け軸と壺などの置物だな」

妻は笑い転げた。

「年寄りくさーい」

二人の子供たちも、昔の生活をするようだと、揃って縁側から庭に直接降りて遊んでいた。

引っ越し荷物は一日でかたずけた。翌日からは営業所に出勤、すぐに仕事に入らねばならない。一部屋をわたしの書斎とした。仕事は持ち帰ることもある。また、わたしの趣味のパソコンと音楽と読書が一緒にできる部屋として、一番古い部屋を選んだ。その部屋だけは、壁紙も貼っていないで、しっくいのみだった。敷居も鴨居も歴史を刻んだ色を見せていた。なんとなく陰気臭い部屋だったから、子供たちも妻も嫌っていた。

「何か、いそうな気配がするわ」と、勘の強い妻は、最初からその部屋には近づこうとしなかった。

それは、わたしがノートパソコンを開いて、ネットに接続する設定をしているときであった。何か、スースーと音がするのだ。どこから聞こえるのだろうか、耳を澄ませた。空耳ではなく、確かに聞こえてくる。この家は平屋だが、隣近所は垣根と庭もあり、少し隔たっている。隣家の声も聞こえないほどだから、これはこの家のどこからか聞こえているのだ。

「おい、何か聞こえないか」

と、わたしは妻を呼んで、部屋に立ったままじっとしていた。スースーとはっきりと聞こえて

いる。

「なあに、人の寝息のようじゃない。それとも、病人の呼吸のようだわ。気味が悪い」

妻は、さっさと寝室に逃げ帰った。わたしは、どうにも気になれば仕方がなくなる性分で、それが何の音で、どこから聞こえてくるのか科学的に解明したくなかった。わたしは、いま流行の自縛霊だとか、オカルトだとか、そんなまやかしは信じない。

夜中まで仕事をしていて、電気もすべて消すと、暗がりですぐとまた耳を澄ます。いよいよ判然と聞こえてくる。わたしは、その音の方角を知りたかった。聞こえているのは、しっくい壁の中からのようだった。次に規則正しい音は、生き物の呼吸に違いないと確信した。それは人間とは限らない。小動物のそれではない。少なくとも、音の大きさからして、人間大かそれ以上の大きさの哺乳類のものと思った。ということは、この壁の内側に、何者かが潜んでいるのか。そして、いつもそいつは寝ているのだろうか。起きているものの呼吸ではない。まして、病人のように苦しそうな呼吸でもない。実に安らかに、スーハーと聞こえてくるのだった。

呼吸音は、日曜の休みにも一日中、部屋にいて、確認していたが、ずっと変わらない音だった。止まることもない。音が変わることもない。一定の間隔で、同じ音を二十四時間続けているのだ。壁に耳をあてがうと、さらによく聞こえた。この壁の中に何かがいる。そう思うと、わたしはぞっと背中に走るものを感じた。

あまり不気味なので、この家を世話した不動産屋のところに苦情を云いに行った。

「あの家なんです、北側の四畳半の部屋ですね、壁から何か生き物の呼吸が聞こえてくるんですよ」

そう云うと、お茶を事務所で飲んでいた年老いた不動産屋は、扇子で扇ぎながら、

「ああ、のっぺら様だべ」と、判っているように云うのだ。

「のっぺら様？ それはなんなんですか」

「ああ、この地方に昔から伝わる家の主ですよ。壁の中に住んでいるんです。のっぺら様が息づいている家は火事には絶対にならねえから、安心してくだせ」

不動産屋は当然といった顔をして涼しい。話しにならない。

わたしは、また家に戻り、怒りに震えて、壁をがんと叩いてやった。これではうるさくて眠れないものも出てくるだろう。のっぺらだかなんだか判らないが、二十一世紀の世の中に、こんな民話のような話があってもいいものだろうか。壁が生きている？ わたしには許すことができない。それでも壁は、寝息を止めない。どんなに叩いても、スーハーと規則正しいリズムはなんなのだ。

とうとう、わたしは、怒り狂い、長い釘を何本も買ってくると、壁一面に釘を打ち付けていた。するとどうだろう。壁はぴたりと寝息をたてるのをやめた。生き物の気配は消えていた。

「ざまあみろ」

わたしは、釘の一本から血のようなものが伝わって落ちているのを見たような気がした。

その夜のことであった。深夜に不審火で火事になり、家は全焼した。わたしたち家族は寝間着のまま外に飛び出すのがせいっぱいで、家財道具を運び出す間もなく、火はあっというまに家全体を包んでいた。

第936話

死人に口あり

交番に青ざめた中年男性が飛び込んできた。衣服がよれよれに乱れていて、血糊がべったりと着いていた。目が空を泳いでいる。精神的に錯乱しているのは一目瞭然だった。

「殺人です。人が殺されているんです」

警官は「何！」と血相を変えて立ち上がった。

「あんたたちがぼんくら揃いで、職務怠慢だから、死体はもう腐っているんですよ」

「なんだと。そんなこと、知るわけがない。それより、どこに死体があるんだ」

「この先のアパートの部屋の押入の中です」

「あんたが、第一発見者なのか」

「はあ？」

「まあいい、パトカーに乗りなさい。案内してくれ」

男はミニパトカーの助手席に乗り込んだ。

「いまから、中央署に連絡をするから」

警官はパトカーの無線で署に連絡をしていた。

「殺人事件と目撃者が通報に来ましたが、これから現場に確認に行ってきます。一応、応援をよこしてください」

警官は久々の大事件を前はかなり興奮している。

「くんくん、何かもの凄く匂うな。あんた、お風呂に入っていないだろう。体臭というか、汗くさいというか、これはたまらん」

警官は窓を開けた。そして、薄汚れた男をちらりと横目で見て、あることに気が付いた。

「あんたは、その被害者というか、死人とどういう関係なんだ」

「どういう関係って訊かれても困るが、一番よく知っているのはきっと誰もが認めることでさ」

「それで、あんたは、部屋の中に入った。鍵は玄関にかかっていたんだな」

「いや、鍵は掛けました。殺したのは友人のKというやつで、鍵はそのままで逃げて行ったんです」

「どうも、云っていることが判らん。どうして、見たように云えるんだ？」

パトカーはそうこうするうちにアパートの前に着いていた。上下に四世帯づつ入居できるようになっているが、古いアパートなので、住人はみんな新しくできたアパートに引っ越したようで、どれも空部屋になっている。

「二階のF号室です」

男が案内して、ドアの前に立った。警官がドアを開けようとしたが、鍵がかかっている。強くノブを引いてもチェーンロックもしているようで、開かないのだった。警官は、はたとあることに気が付いた。

「あんたは、さっき死体を目撃したようなことを云っていたな。押入の中で腐っているとかなんとか。どうして、鍵がかかっているのに、そんなことが判るのだ。どうも怪しい」

男はいよいよ焦って早口で喋り出した。

「だから、おれは、この部屋の中にいたんだ。犯行の一部始終を見ていたんだ。友人のKとは借金のもつれがあって、諍いになると、あいつは激昂して台所の庖丁で、首を切ったんだ。そして、その死体を押入に隠して窓から逃走しやがった」

「なんだ、窓はそれなら開いているってわけか。あんたは、現場に三人でいたんだな」

「いや、二人しかいなかった」

「何を云っているか、さっぱり判らん」

警官は裏に回って、応援のパトカーも来たので、窓から中に入った。部屋の中は確かに異臭が漂い、鼻を塞ぎたくなる。部屋の畳には争った跡や、血痕がついていて、凶器の庖丁もそのまま置かれていた。押入を開けた。そこにも血糊がついていたが、肝心の死体がない。

警官は男に向き直って訊いた。

「あんたの証言と、現状は合致している。だが、よくあることで、第一発見者を装いながら、そいつが犯人であるということがああるんだ。この話、あまりにできすぎていないか。あんたが、やったんだろう。どこへ死体を隠した」

すると、男は周章狼狽しながら、

「だから、さっきから云っているでしょう。犯人は友人のKだって。指紋を調べたら判るでしょうが」と、警官にくってかかった。

「そうかな、あんたの衣服についている血痕はなんだね。それは返り血ではないのかな。特に首の辺りから血がひどい。いままで気が付かなかったが、それは、犯人でなければそこまで血を浴びるか。いや、おかしいな。その血痕は、どうも古いな。もう、何日も経っているように黒ずんでいる」

男はなんとか判ってもらえるように説明していた。

「そうでしょう。もう一週間は経っているんだ。誰も気が付かない。夏の猛暑で死体は腐乱する。このまま、白骨死体になるのかって思うと、気がきじゃない。早く誰かに教えなければって、おれは通報しにわざわざ行ったんだ。死体はこんなふうには海老型に横たわっていたんだ」

と、男が押入に入ると、こてんと横たわった。すると、みるみる顔が変わり、手や足の色も黒く変色していった。そして、体が腐っていったのだ。蛆が鼻穴からぼろぼろと出てきていた。

「うわー」と、警官は後ろに下がった。他の警官たちも、たったいまのできごとを信じがたいように立ち尽くしていた。

三年ぶりの東京だった。山手線に乗っていたら、駅のホームから立ち食い蕎麦屋の蕎麦つゆの匂いが漂ってきた。匂いは最も記憶を引き戻す。その匂いですべてが判ってしまうということもある。わたしは、それだと確信した。それが東京を云い表すすべてだった。

仕事でもない、家庭サービスでもない、たったひとりで気楽に出かける旅行も久しぶりだった。だが、東京に行くのは旅とは云わない。いままでは、そこには相応しくない言葉だと思っていた。

子供たちも大きくなり、上三人は社会人で、千葉に居を構えていた。下の娘と息子も高校生となると、親と一緒に歩かない。もう子育ては卒業して、親の役目はそろそろ終わろうとしていた。老父母も、だんだんと遠出ができなくなっていたから、旅行に連れ出すことはなくなった。女房は日曜も休めない仕事で忙しい。これからは、どこに行くのもひとりでいいのだ。独身時代によくひとりで旅行したものが、三十年近く経って、またひとりに戻っていた。

渋谷から東横線に乗っていた。それは別に予定していた行動ではなかった。

自由が丘。その駅に降り立つのも、二十一の年が最後だから、三十二年ぶりということになる。当時、わたしは大学に二つ行っていた。二重学籍で、夜昼と通っていた。その昼の大学があるのがこの自由が丘から歩いて十分。

毎日朝夕と通学していた街なのだが、わたしは駅前広場に立って、全く覚えのない街であることに愕然としていた。駅からいくつも道路が放射状に伸びているのだが、そのどの道を歩いたのか。街はさらに賑やかに、いろんな店が張り付いて、すでに見知らぬ街になっていた。

まだ夏休みだから、学生の姿は見えない。わたしは、ぎらつく朝の太陽の方角から、行き先を決めていた。坂道が多い住宅街を歩いてゆく。途中でケーキ屋があったはずだ。その店らしき古びたパティシエと書かれた看板が出てあり、年老いた夫婦が店に出ていた。店名までは覚えていなかった。ただ、あのときの職人であれば、いまは六十はとうに過ぎているだろう。

わたしは、買うでもなく、冷蔵ショーケースに並んだケーキを眺めていた。あのときは、確かレモンパイであった。それがいまは置いていない。アルバイト代が出たときだけ贅沢をした。若い男が、ケーキの二個はいった小さな箱を手にして歩くことは恥ずかしかつたらうか。

だんだんとわたしの勘は戻ってきていた。そうだ、ビートルズの話をした喫茶店がどこか二階にあった。熱っぽく語る口から聞いた曲名はイエナ・リグビー、そうだった。思い出した。すると、わたしはチェロの合奏をバックにいつのまにか口ずさんでいた。

なだらかな坂があった。その坂からはきっと目を瞑っても行けるだろう。坂は突き当たると左に曲がる道だった。少し高台になっていて、教会の高い塔が見えていた。思い出した。夕焼けがやけに綺麗だったのだ。しかし、悲しいことに、家はすべて新築だ。アパートもいまはやりのモダンな建物になって、思い出を破壊していた。どこにもない。あの部屋と、窓と、灯りがどこにも見あたらないのだった。

別になんか覚えることもない。変わってあたりまえなのだ。この広い都会に、変わらないものを探すほうが難しいだろう。わたしの目は、どんな小さな看板にも、古い町の跡を探していた。隣の庭には百日紅。赤い実がなっていた。そんな些細なことも思い出せるほど、時間が逆流したかのようだ。

わたしは駅前まで引き返した。駅の改札口に見える喫茶店を探したが、それは不動産屋の事務所になっていた。あの頃のわたしは、何時間でも、終電まで喫茶店にねばっていた。改札口に見える窓辺の席で、吐き出される人なみの中に、ひとりの顔を認めようとしていた。お冷やを注ぎにくるウエイトレスは無然としていた。それが毎日となると、狂気に近いものがあった。待つてどうすることもできないのに、ただ、ひたすら待ち続けていた。

わたしは、あのときと同じ視線で見たいと思った。不動産屋の隣が、牛丼屋になっていた。大手のチェーン店で、いまだに牛肉はダメなようで、豚よりない。わたしは、こんな感傷にひたっているときに、隣の店で朝飯代わりに、豚丼を食っていた。がつつと喰いながら、繊細だったもうひとりの暗い自分を捜していたのだ。いや、死んだ分身の供養に来たような気がしていた。

この豚丼は少し醤油がききすぎてしょっぱい味がした。そばつゆもそうだ。東京にはしょっぱい思い出だけが、いつまでも匂っているのだった。だから、仕事以外では訪れたくもない街だった。

それが三十年以上も経つと、味が熟成して、つゆもまたいい。ぐびりとお茶を飲み、おしぼりで顔も拭いた。すっかりとやることがオヤジだった。愛だの恋だのと云えない年になってきて、あんなに暗いやつだったが、もうひとりの自分を羨ましいとさえ思う。

外に出ると、気温は上がってきていた。まだ八月だ。真夏日の記録はまだまだ続くだろう。さて、これからどこへ行こうか。

第938話

そばつゆ東京 二

水道橋から三崎町まで歩いた。ビル街の照り返しがより暑くする。小さな出版社がひしめきあっているところ。出版不況と云われて久しい昨今、どこも立派なビルに入っているが大変なのだろう。

用事で中堅どころの出版社に寄った。実は、来月に本を出すことになった。その打ち合わせもあった。

「せっかくのお休みのところ、大変でしょうが、あまり時間がありませんから、明後日まで初校を終えたいもので」と、どっさりと校正を渡された。これは大変になった。気ままな旅行が校正旅行になりそうだ。

「どうですか、お仕事のほうは？」

社長が近況を訊いてくる。

「出版社がよくなければ、印刷会社や新刊書店もよくありません。そして、古本業界もまた、同じ傾向を辿ります。運命共同体みたいなもんです」

いい話はなかった。どこを見ても青息吐息。

「でも、貴重な文学関係の初版本なんか高くいまだに取引はされているんでしょう」と、一部の

マニアの話を出してきた。

「いいえ、最近では、出る本はすべて初版本ですから」

「そうそう、重版が出ないんだ」と、互いに苦笑していた。

わたしは、ひんやりした冷房のビルから出され、またうだる暑さの通りへと出た。白山通りから、神保町の古書街を覗くでもなく、通り過ぎるだけにして歩いていた。というのも、うちと取引のある古本屋が結構ある。いちいち挨拶していれば、日が暮れてしまうから、通過することにした。

わたしの大学のある街でもあり、懐かしさを覚えて裏通りばかりわざと歩いていた。大学は古い建物を取り壊して最近、新しくモダンに建て替えた。昔の風格はなく、いくつかの校舎を見て周りながら、その中にやはり七十年安保の欠片を探しているのだった。別棟の古い校舎が残っていた。窓ガラスには、赤い文字のビラが貼ってあった。「授業料値上げ阻止」とだけ書かれていた。全共闘はどこへ行ったのだろうか。そんなスローガンは自分たちのことではないか。どこにもイラク派兵反対とか、憲法改悪阻止とかは書かれていなかった。時代が変わった。建物も街も学生も変わったのか。地下室の入口に壊された建物の一部とガラスの破片が転がっていた。そいつは、古いものだ。わたしは、道路の上から見下ろしながら、発掘調査員のように、かつての闘争の遺跡を凝視していた。

男坂と女坂がある。男坂は真っ直ぐに降りてゆく石段だ。女坂は曲がって降りてゆく。その石段に、かつてひとりの青年が座り込んで、火炎瓶闘争の炎と喧噪を遠くに見聞きしていた。何もできなかった。

近くにレモンという喫茶店がいまだにあった。がらりと雰囲気は変わったが、場所は同じところだ。わたしは暑さを避けるようにして、そこへ入った。コーヒーは今も昔も高かった。画材道具を店頭で売っていたのが、いまは並べてもいない。絵描きの溜まり場のような雰囲気がすっかりとなくなって、きっと、高いドリンクでも飲める上品な客ばかりが座っている。わたしは、しびしび校正をしながら、窓からの風景も変わったことに思いめぐらせていた。窓がひとつのカンバスならば、その絵は一年一年と変わってゆくのが東京だ。なにか、地方にいて、いつまでも変わらないのは自分だけであるような気がした。

秋葉原まで湯島聖堂の脇を歩いていった。学生時代にうろついた秋葉原は、電器街というイメージから、アニメの街へと変貌しつつある。パソコンとゲームソフト、アニメのキャラクターグッズの店が軒を連ねる。

JRの改札口で息子たちと待ち合わせていた。車で迎えにきていた。孫のミオは車の中で眠っていた。二歳だから大きくなった。盆も正月も仕事が忙しいと戻ってこなかった息子たちと、一年ぶりで会った。秋葉原に会社を移したのが先月だ。新しい事務所を見せてもらう。

ビルの上の一フロアを借りて、受付もあり、コーヒーメーカーの置いてある商談室もある。アニメのプロダクションといっても、机とパソコンがずらりと並んでいるだけの工房だ。なにか雰囲気が違う。たまたま夏休みで社員は一週間の休暇中だった。息子たちの描いたアニメの原画が飾ってあったり、いままで出版した本が展示されてあった。

窓からは秋葉原の電器街が見下ろせた。息子たちは、息子たちで、新しい世界へと歩み、わたしにはとても理解のできるところではない。父親がマルエン全集を読み、全学連のデモに走った

年頃に、彼らは自分たちで会社を興し、アニメという仮想現実の世界へと没頭している。

「お父さん、これからお昼を汐留で食べようか」

車で連れてゆかれたのは、新橋だった。そこもどこの街だか判らない。超高層ビルが林立し、日本テレビのお祭りだとかで、ものすごい人が押し寄せていた。すっかりとお登りさんになって、きょろきょろしていた。昔は、ここいらは何んだっただろうか。新しい別の巨大な街が出現していた。

「お父さん、面白いだろう」と、息子は云うが、芸能人が出たり入ったりしているのを見ても、全然面白くもない。食事も風変わりが高かった。

「こんなもんなのかねえ」

目が覚めた孫を抱きながら、時代に取り残されてゆく自分をどこかで見送っていた。

第939話

そばつゆ東京 三

久しぶりにフリーで来た東京なので、親戚回りもした。亀有の従兄のところに行ったのだが、やはり街自体ががらりと変わり、駅の南口にあった伯母のオートクチュールの店はみつげられない。

五歳のときに祖父とここ亀有の伯母のところに長く滞在した夏休みを思い出した。わたしは、遊びはぐれて、商店街で迷っていた。北口の映画館や食堂のある賑やかな入り組んだ通りで、涙を堪えながら伯母の家を探していた。夕方になってくるとより不安になった。癪癪まで起こしていた。いまにも泣き出しそうなときに、伯母の店の前に出た。心配していた伯母が店の前に出て待っていたのだ。

「どこへ行っていたの」

伯母の顔を見つけるとどっと涙が出た。いまも同じことをしていた。従兄に電話をして、店が判らないというと、迎えに出るからと云った。わたしは、迷っていたが、ひょいと店の前に出た。従兄が立っていた。あのときの状況と同じだった。

「昔は、道が車一台ようやく通れる狭い小路だったからね」従兄は云った。

今は、歩道もカラータイル。道幅は倍以上に広くなり、ヨーカドーが隣にでんと建っていた。

わたしは、去年亡くなった伯母の仏前に手を合わせた。従兄も七十を過ぎた。それでもちゃん付けで呼び合っていた。子供のときの云い方は直らない。

当夜は千葉の柏に住む次男夫婦のところに厄介になる。三男は仕事が決まったと、背広姿で帰ってきた。次男夫婦のところに居候している。

親子と嫁、孫で外食した。それもまた暫くぶりのことであった。生ビールがことのほか美味かった。

会計で払おうとしたら、

「ここはおれらが持つから」と、お父さんより稼いでいる息子たちが払った。息子に奢ってもらうことは嬉しいことであった。いつから親と子は逆転するのだろうか。食えないでいた三男に小遣いと、金を握らせると、兄二人は文句を云った。

「お父さん、ダメだよ。甘やかせれば。頭に乗るから」

三男は仕事をころころと変えて安月給でアパートも借りられないでいた。下には甘いのが親だ。

翌日は日曜で、息子たちに柏を案内してもらい、飯を食ってから、駅まで送ってもらった。

「あれ？ もう帰るの？」

まだ、ゆっくりしているのかと思っていた息子たちは、父親が突然、帰ると云い出したので戸惑っている様子だった。一日三十万人の乗降客がいるという駅はすごい人混であった。改札口のところに二人が立っていた。わたしは、手を振った。階段を下りてゆくときも、いつまでも息子たちはわたしを追っていて、手を振っていた。何かかなしいものを感じた。今度はいつ逢えるものか。

中野ブロードウェイ。いまもそう呼ぶのか。それから、わたしは中央線の中野駅の北口に立っていた。ここも人が多い。どこに行っても人人人だ。ここは住むところではない。

わたしの眼はまた思い出探しの悲壮な視線をおずおずと送っていた。全蓋アーケードの商店街を歩いてゆきながら、左の小路を気にして見ていた。ある喫茶店を探しているのだ。まさか、あるわけがないと思っていた。ところが、近代的に変わった商店街の裏に、取り残されたように「クラシック」という喫茶店はいまだそこに残り続けていた。レンガと石が崩れたように積んである外観は、まさに前世紀の遺物のように、そのままの姿を留めていた。どんなに街が変わり続けようが、流れに留まって頑固に変わらないものもある。

三十数年ぶりのクラシックに入った。入口で先にオーダーを取る。それは今も同じだった。しかも、メニューは三種類だけ。コーヒー、紅茶、オレンジジュースというのも同じだ。ただ、学生時代は八十円が四百円になっていた。物価は五倍か。

わたしは、一階のスピーカーの前の席に座った。当時のままの壊れた楽器や、古いスピーカーが墓石のように並んでいた。油絵だとか壺だとか、燭台だとか、壁や手すりにびっしりと置かれている。赤いワンピースを着た髪の長い女が黙ってジュースを置いていった。床も天井もガタガタでそのままだ。この建物は歪んでいる。地震が来たら危ないだろう。二階を歩く客の足音がぎしぎしと聞こえ、声も降りてくる。中央が吹き抜けになっていて、三階まである。天井の低い穴蔵が迷路のようになっていて、そこに無言の男たちが煙草をくゆらしながら、音楽を聴いている。

その音楽といったら、音の悪いスピーカーから出るガサガサした音だ。傷だらけのレコードなのだろう、針が雑音を拾っている。しかも、ステレオではなくモノラルのような籠もった音が流れていた。明らかに音まで昔のままなのだ。中年の男性が、リクエストをしていた。

「マーラーの五番を」

それまではメンデルスゾーンの交響曲が流れていた。フルトヴェングラーなどの古い録音がいい。わたしは、ここでミッシャ・エルマンの甘いメンチャイの協奏曲を聴いた。昔の録音には

臨場感などはどうでもよかった。トゥティが低くて聴きとれなくても、主役のヴァイオリンだけが甘美に前面に聴こえていればよかった。

ここだけは時間が止まっていた。わたしがあの人ときたとき、別れたあと札所のようにひとりで来たときも、そのまま有り続けた。そして、実に長い不在を経て、いまも、いや明日もそのまま有り続けるのだ。

そんな場所があったっていい。

わたしをひとりにさせると、こんな女々しい旅をする。喫茶店巡りというのもなんだか芸がなさすぎる。

そして、最後に、わたしは同じ沿線の阿佐ヶ谷の駅を降りていた。北口の線路づたいに歩いてゆくと、そこに「ポエム」という喫茶店があるはずだった。だが、そこもがらりと街の地図は変わっていた。飲み屋街になっていた。うらぶれた雰囲気だけが残り、スナックや居酒屋、焼き鳥屋の看板だけが間が抜けて見えた。昼間は誰も歩かないところになっていた。ポエムはついに見つからなかった。

ポエムというと、学生時代に好きで訪れた喫茶店だった。永島慎二のマンガの舞台となったところだ。漫画家残酷物語や黄色い涙シリーズに登場する、貧しい芸術家や漫画家の溜まり場がそこであった。つげ義春が社会主義リアリズムのマンガなら、永島のそれは純文だった。昔、よく通ったポエムには、マンガに出てくるよく似た髭のマスターがいて、マンガの原画がさりげなく飾られていた。

そこではわたしはダージリンを、あの人にはヴィンテージだった。何を話していたのか、思い出せないほど、遠くに来たようだ。

これから早稲田へ出て、池袋から私鉄に乗り換え、姉のところへ寄ろうと思う。そして、帰るだけのことだ。

わたしは、どうしてもこの街が好きになれないでいた。もう、許してやってもいいとか、そんな時間が解決してくるというものではなかった。聖書にあるごとく、ここは白く塗りたる墓の街だった。なにもなく、そしてさらになにもない。

第940話

どこまでもついていないやつ

仲間うちのメーリングリストで、利用促進のために主宰が考えたのは、メールのカウンターの何千番目に図書券を進呈するという景品を出すことにしたことだ。北村拓也は、毎日メールを出しているのに、いつもその切れのいいラッキーナンバーを獲得したことはない。前後賞も獲れないと運のないやつだった。

以前は宝くじも買っていたが、当たった試しがないから、買う気が失せた。何事も、たまに当たるから買うのであって、全然当たらないと、どんなくじでも買わなくなる。

クイズも懸賞も小説の新人賞も、自分の才能を抜きにして当たらないとぼやいていた。

それは子供のときからずっとそうだった。駄菓子屋でも、スルメに赤い甘ダレのついたものを当てるに、くじを舐める。それには、蠟燭でアタリとスカが書いてあるのだ。それでそのくじの紙片を舐めると、文字が浮き出る。わたしは、いつも外れのスカばかり。スカは、イカのゲソなのだ。甘納豆の小袋に入っているくじも外れ。いつも上にぶら下がっている月光仮面のサングラスとマスクを取れないで見上げていた。

世の中に何をしてもダメなやつというのがいる。それが北村拓也であった。家を建てたときも、屋根の上にはウダツが上がらない。やることなすこと裏目に出る。

会社勤めをしても、二度の倒産の憂き目に遭った。サラリーマンがダメならと、独立して自営業をした。だが、やり始めた軽印刷所も閉めた。ギャラリーも閉めた。ゲームソフトの店も閉めた。あちこちへ店を出しては閉めた。そのたびに借金が残る。結局、最後は社員もいなくなって、ひとりでやっている古本屋だけが残っていた。

家族はこんなふう云う。

「もう、何もしないほうがいいんじゃないのかい。余計なことを考えずに、動かないほうが」と、まるで無能扱い。

一度目の女房にも逃げられ、二度目の女房にも逃げられようとしていた。三度目までは頭が回らないほど、落ち込んでいた。何をしてもダメ、何をしても不運。

思えば、道でお金を拾ったこともなかった。商売でひと儲けしたこともない。つきあう女はすべて下げマンだった。金だけは吸い取られた。

「ああ、何かおいしい話はないかな」と、こんな不景気が長引けば、拓也だけではなく、みんながそう溜息をつく。

そんなときに、拓也は何者かにいつもつけられているのを感じずようになった。何か後ろに立っている。しかも、それが人間の雰囲気なのだ。ひとりではない。ふたりだ。ただ、急に後ろを振り向いても、そいつらは目には見えないのだった。薄気味悪いので考えないようにしていたが、どうも気になってしょうがない。探偵だろうかと思ひもした。拓也に張り込むのは、素行調査か。浮気の現場を押さえようと、女房が依頼することはありえないことだ。それなら、何者らがぴったりと尾行しているのだ。拓也は気にしないようにすればするほど、強く意識するようになった。

車を購入したら、不良車で、故障ばかり、修理代がかさむばかり。その車もぶつけられる。さらに、ねずみ取りから、白バイと、やたら取り締まりに捕まる。車のことでも、全くついていない。調子のいいやつは、運よくすり抜けられるものを、ぐずぐずとのろまな拓也はみんなと同じに走っていても、ひとりだけ違反で捕まったりしていた。

店は泥棒によく入られた。隙があるから狙われる。万引にもなめられて、すっかりと馬鹿にされていた。頭にきて、窓という窓に警報装置を取り付けた。子供たちが店に入らないように、十八歳未満入店お断りとした。知らない人は、アダルト本専門店と誤っているくらいだ。それでも、万引は大人もする。子供はマンガ本一冊と被害額は少ないが、本のコレクターの知り尽くした万引氏は、一冊で万のつく貴重な本を盗んでゆく。

怒髪天を突いた拓也は、店の入口に鍵を二重三重にかけた。それだけでも不安なので、まるで台風が来るように、ベニヤ板を何枚もドアに打ち付けた。

「ざまあみる、これで万引はされないだろう。はははは」

と、笑っている場合ではない。

「おかしいな、今日は、客がひとりも来ない」

と、ぼやいているが、あたりまえだ。誰も入れない店だった。

毎日、女の人から電話が来る。そんなにもてるとは思われない。それはそうだ。女からの電話はすべて借金取りだった。いい話はなにひとつとしてない。

ある日、拓也は、客から勧められて、占い師のところに行ってみた。ついていないのは、何かあるに違いないからと、見てもらったらいいと。拓也はいままで、神様とか霊媒師とかは信じなかった。そんなものは、まやかして、当たったり、見えたりするわけがないと思っていた。

それでも、いままで五十年生きて、あまりにもついていない人生に転機でもあればと、すがる思いで戸を叩いていた。

七十過ぎた婆が、派手な柄物の洋服を着て、髪を染め、首にはじゃらじゃらと首飾りと、指輪、耳飾りも不気味な髑髏。

「あのう、いままで、何をしてもついていないんですが」

と、運勢を見て貰おうとしたら、婆は拓也の後ろを見て、くくくと笑った。

「ついていないじゃないかい」

と、云うのだが、ついていないと云うのに、どうしてついていと云うのだろうと、拓也は訝しがる。

「ほれ、あんたの後ろに、ふたり、ちゃんといついてる」

はっとして、振り向くと、正体がバレた老人が二人、にこにここと立っていて、拓也に手を振っていた。

「あんたたちは？」驚いた拓也は訊いた。

占い師の婆が代わりに云った。

「貧乏神と疫病神じゃよ」

第941話

喪失感覚

どうにもやる気が起こらない。夏が過ぎて、秋になると、人間は急に淋しくなるものなのか。高谷さんは調子が狂ってきていた。何をしても面白くもない。テレビを見ても、新聞を見てもつまらないのだった。季節の変わり目というのは、人間の体調だけでなく、感情にも変調をきたすものらしい。

ものを云わなくとも唇が寒い。秋風が頼りない薄着の体を抜けてゆくようだ。なににつけても

心細いのはどうしたことだろうか。

高谷さんは、ひょっとして老人性の鬱病にでも罹ったのかなと、病院を訪れていた。そこで、文学仲間の小畑さんと宮内さんと待合室で逢った。

「いやあ、小畑さん、あなたも調子が悪いんですか」

「そうなんです。何かやる気が出なくて、がっかりした感じというんですか」

「宮内さんもですか」と、高谷さんが同病相憐れむように訊いた。

「はい、先週から急に脱力感といいますか、燃え尽き症候群といいますか、なにか急に淋しくなったり、悲しくなったりして、身の置き場がないんです」

三人とも、どうやら同じ症状らしく、頷きあいながら、聞き入っていた。

「恥ずかしい感覚だけが残りましてな。まあ、夏は忙しかったですから。それが、急激に気温と一緒に醒めてゆきます。秋というのは、これはひとつの病気なんでしょうかな」

高谷さんの云うように、秋は夜が長くなり、自分自身を取り戻す時間がありすぎる。

「まあ、それだけでなく、毎年、夏は金を使い果たしますから、金欠病になりますね。お盆だ、祭りだ、帰省だと。うちなんかは、家族で夏休みの旅行もしましたから、貯金もはたきました。なにか寒々とするのは、懐具合もですね」

宮内さんも同感と云った顔をしていた。

見ると、待合室はそんな得体の知れない病気に罹った患者でいっぱいだった。

「高谷さん」と、看護師が呼んだ。診察室に入った。いつもより病院は混んでいた。かなり待たされての番だから、飽き飽きしていたところだった。

「どうしました？」

「はい、何か、ぽっかりと胸の真ん中に穴が空いたような気持ちといいますか、どこが苦しいとか、痛むとかそんな問題ではなくて、なんとといいますか、とても言葉では云い表せない淋しさなんですね。鬱病なんかじゃないかと……」

医者は、すべてを理解しているように事務的に話した。

「先週から、当医院にも同じ症状を訴える患者さんが毎日、かなりおいでになられます。まるで新種のインフルエンザのように蔓延していますね」

「風邪なんですか」

「いいえ、いまのところ原因は不明で、いい治療方法はありません。ウイルスが原因で、伝染するというものでもなさそうなので、何か心因性のものらしいんですが、ともかく、元気の出るような活力剤を注射してさしあげましょう」

結局、病院としては、無難なビタミン注射を打つぐらいしかなかった。

みんな、がっかりときているのは、力が抜けたということだ。そのための処方といえば、ビタミン剤ぐらいよりない。精密検査を受けさせても、どの患者も、別にどこにも異常が見つけれない。この病気は日本全国を覆うように流行していた。

ただ、その病気に罹っていない人もいた。いつも元気で、夏の暑さにも負けず、玄米を一日四合食べ、西に病人がいても見舞いにも行かない北村だった。

「あら、高谷さん、いつもの元気ないですね」

北村の古本屋にちょくちょく顔を出す高谷さんは、しょげかえっていた。

「そうなんだ。いま、病院の帰りなんだが、原因不明の病気に罹ったらしい。そんな人が多いのに、どうして君だけは元気なんだ」

ノーテンキといわれている北村だが、いつもマイペースで、けろりとしている。何かその辺に原因究明の糸口がありそうだ。

北村の古本屋は世の中から隔絶している世界だった。古い本を取り扱うせいもあるが、情報にも疎い。世に見捨てられた商売だから、世に背を向けて生きてきた。どうせ、うちなんか、衰退の一途の商売でさと、ふて腐って毎日やってきていた。世の中、どうひっくり返ろうが、帳場で、伊勢物語なんか読んでいたりする。ベストセラーや話題の本にも無縁だ。そんな本が入ってくるのは、何年も先の話だ。そこに時間的なズレが生じていた。世間とは数年遅れた世界に暮らしているのだった。

季節がどう変わろうが、変わらないのが北村だった。三百六十五日、パソコンに向かい、本を読み、たとえ、女房が呆れて出て行って、いつのまにか別の新しい女房が来ても、変わらないのが北村の生き方だった。

自分だけの狭い部屋に閉じこもっていれば、ウイルスにも感染することはない。現代のウイルスとは情報であった。

高谷さんは、次第に快方に向かっているようであった。病気がなくなると、あれはなんであったのだろうか、みんなはそう思った。一時的な麻疹のようにも思えた。ただ、何か喪失したような感覚はいまだにどこかに残り続けていた。それが何なのか誰にも判らなかつた。

アテネオリンピックが終わって二週間が経っていた。

第942話

プールサイドの遠い夏

ぼくは金槌ではなかったけれど、たいして泳げもしなかった。海が好きなわりに、潜り専門で、長距離なんてとても泳げなかった。

高校になったら、毎日が受験勉強の連続で、海水浴場に行くこともあまりなかった。夏休みも補習があって登校だ。それじゃ、せめて毎日プールに入れるならと、水泳部に入ることにした。

水泳部のコーチは数学の教官だった。入部申し込みに教官室を訪ねたのが二年生の一学期が終わろうとする七月だった。

「おお、いい体しているな。バタフライ向きだな」と、コーチは肉屋のオヤジのように人の体を品定めしていた。

「バタフライだなんて、あのう、ぼくは、あまり泳げないから、平泳ぎでもクロールでも、まず人並みに泳げるようになりたいんです」

人の話を聞いていないコーチは、

「よし、決まった。バタフライが足りなかったんだ。八月の末に市の大会がある。それにおまえはバタフライで出るのだ」

勝手に決めていた。バタフライだなんて、犬掻きしかできない自分が、しかも五十メートルもろくに完泳したことのないのに、何が大会だよと、ぼくは頭にきていた。その日から放課後、水泳部の練習に顔を出すことになった。

「おまえ、バタフライだってな。ひとりしかいないから、がんばれよ」

と主将も人の希望も聞かないで云った。

「だから、まだ泳げないんで、試合なんかより、泳ぎ方を教えてください」

「なんだ、おまえ、金槌か」「まあ、似たようなものです」

水泳部というところは、泳げない人が泳げるようにしてくれるところと勘違いしていた。そんなのは、スイミングスクールにでも行けばいい。ここは部なのだ。試合があり、高校総体から国体、みんな記録を持って、日々特訓をしているところなのだ。

「これから、毎日、五キロ泳ぐ。北村はビート板を持って、ドルフィンキックで五キロだ。いいな」

五キロとはどれぐらいなのか。ぼくの高校は市内でも珍しい五十メートルプールがあった。それを五十往復もするのだ。バタフライをやっている先輩がひとりだけいた。ぼくは、彼から個人指導を受けた。

「おれの後継者ができた。頼もしいな」と、悦んでいたが、ぼくは犬掻きしかできないのに、何をみんな云っているんだとひとり憤慨していた。

「大丈夫だよ。試合までまだひと月もある。おれが特訓してやる」

と、ぼくは、平泳ぎも満足にできないのに、どうやらバタフライの百に出る予定になっていた。

バタフライは両足を揃えて、イルカのように水中を叩くようにして掻く。それは結構体力を使った。疲れるから、長く泳ぐ型ではない。しかも、高校ではやっている人口が少ないときている。ある女子高ではひとりしかいない。いや、この地方都市でひとりしかいないのだ。だから、試合にはならない。たったひとりで二百を泳ぎ、予選は黙っていても通過するのだ。

ぼくは、先輩から夜遅くまで鍛えられた。一日四時間以上も水に浸かって体はふやけていた。

試合まで二週間と迫っていたとき、ぼくはようやく二十五メートルは泳げるようになった。本当は格好のいいクロールがしたかったが、自由形はやっているやつが多い。高校でも百を一分近くで泳ぐのだから、よほど早くなければ予選落ちだ。

陸上も水泳も個人競技というのは、すべて自己のタイムとの闘いで、孤独なものだった。競技とはいうが、相手がいようがいまいが、自己のベストで時間に挑戦するスポーツだった。だから、プールの中では、ただ黙々と泳ぐだけだった。プールの底のラインを毎日追っているだけで、暗くなればそのラインも見えない。

飛び込みと、ターンの練習も毎日させられた。怖い先輩は、プールサイドで、竹棹を手に、疲れたと上がってこようとする者を非情にもどついて休ませないのだ。

試合まで一週間だ。ぼくは、ようやく五十を折り返すところまでバタフライで泳げた。それでも百は無理だった。その半分ですでに疲れきって、息も続かない。泳ぐだけでも疲れるのに、プールサイドでランニングと筋トレもやるから、へとへとなのだ。

「どうだ、北村は。あさっての試合はゆけそうか」

コーチが先輩に訊いていた。

「まあ、根性だけはあるようなんで、なんとかなるでしょう」

なんともならない。ぼくは水の中で泣きながら、ばかやろうと叫んでいた。まだ百メートルを泳いだこともないのに、何が試合だよ。

そして、試合の前の日になった。ぼくは七十五メートルまではなんとか泳げるようになった。こんな大事な試合なら、もっとキャリアのある泳げるやつを起用すればいいものを、ぼくのような溺れかけたシロウトを使わなくても、不安でいっぱいになっていた。

明日は雨嵐にでもならないかなと、祈っていたが、さあ、いよいよ試合当日だ。からりと晴れて、暑い日だった。朝から暗い気持ちになっていた。どうしようか。とんでもないことになった。試合の途中で溺れたらどうしてくれる。一応、高校の代表選手として出場するのに、ぶくぶくと試合中ばで、沈んでゆく己の哀れな姿を想像して、ぞっとした。

プールサイドは他校の生徒と応援団でいっぱいだった。来賓席まであり、華やかな応援合戦が、試合前から始まっていた。ガタガタと足に震えがきていた。

いよいよ、ぼくの出番になっていた。クラスの女の子たちがぼくの名前を呼んで、キャーキャーと騒いでいる。何も知らないのに、いまに大変なことになるのに。

「ようい」と、ピストルが空に向けられた。南無三。もう、どうにでもなれという感じだ。合図と同時にプールに飛び込んでいた。後はとにかく無我夢中で、何がどうなったのかは覚えていない。ただ、ぼくが五十をターンしたときは、すでに周りには誰もいないというのが、なんとなくぼんやりと判ったぐらいだ。トップは百を一分十くらいではゴールするだろう。ぼくはその倍

はかかる。いや、辿りつけるかも判らない。その前にぶくぶくと力尽きて沈没だ。

みんなの声援が聞こえていた。一番の端のコースを泳いでいたぼくの耳に、コーチと先輩の「がんばれ、北村」という声だけがついてきていた。ぼんやりと、ゴールの壁が遠くに見えてくる。水を吞んでいた。息もできない。もう、キックもスクロールもできない。惰性だ。腕も足も他人のもののような。

と、ぼくの手はプールのへりに着いていた。なんとか百を泳いだ。ところが力尽きて、自分の力ではとてもプールから上がれない。歓声と拍手が聞こえていた。先輩とコーチが駆け寄ってきて、ぼくを引き揚げてくれた。

「よくやった。よくやったな」

「ただいまの記録、〇〇高校北村く一ん。二分十秒。」

「おい、市で五位だぞ」

プールサイドに座り込んで、ぼくは、大会新記録を樹立したことを知った。いままでで一番遅い記録だった。しかも、五人で泳いで、何が五位だ。

十七の夏は泳げたという収穫あり。でも、もう二度と試合なんかには騙されたって出ないぞ。

第943話

チャリンコ旅行記 一

青森発二十一時三十分の室蘭行フェリー。わたしは、息子三人を鍛えるために、山登りもよくしたが、今度の旅行はサイクリングであった。道南を回ってくる。一番上が中学二年。中が小学六年。下が小学三年と男ばかり三人だから鍛えがいがある。スパルタ教育を自認していた。

わたしは、若い頃はよく自転車旅行はしたので、また思い出して、行きたくなったのだ。息子たちには初めての経験であった。みんな緊張している。いつもの旅行ではなかった。夏休み最後の家族の思い出と、八月の二十日に四泊五日の自転車旅行をもった。

フェリーは一番先に自転車を載せる。それからバイク、乗用車、トラックの順番だった。こまかい邪魔なものから先に載せるのだ。がらんとしたフェリーに自転車で乗り込むと、息子たちはいよいよ緊張していた。自転車にはシュラフとテント、鍋や飯盒をガラガラと付けていた。船で寝るのも初めてで、きよろきよろしていた。飲み物と夜食を買ってやった。わたしはビール。夏のフェリーは混んでいる。座敷席でごろんと寝た。翌朝まだ夜明け前に室蘭港に着くのだ。

フェリーは後ろから載せて、前から出す。自転車が一番先に出るのだ。まだ薄暗い室蘭の街を自転車で走るようになった。

「ちゃんと、お父さんの後ろについていろよ。できるだけ端を走るんだ。曲がるときは手を挙げて車に合図するからな」

いちいちうるさい。国道五号線を伊達市の方へと走った。ようやく明るくなってきた。さっそくの坂がきつかった。無理をしないで押して歩くことになる。どこまでもだらだらと長い坂は徒

歩なので、車ならすぐの距離でも一時間かかったりする。

峠の公園に着いた。眼下に海が広がる。内浦湾だ。噴火湾ともいう。昔はこの海の底に火山があったのだろう。青森から持ってきた朝食のおにぎりをみんなして食べた。できるだけ余分な費用をかけないようにする旅だった。

伊達市から洞爺湖へと林の坂道を走った。自転車の平均速度は時速十五キロ。子供がいるからそんなものだ。

昭和新山に到着した。煙が噴出している山の中腹まで歩いて登る元気はまだあった。土産を見たり、ソフトクリームを食べさせたりしていたら、静かだった三人もまた子供に戻る。

お金がかからないと思っていたサイクリングだったが、意外にかかったのが、ジュース代だった。炎天下を何時間も走るので、喉が渴き、一時間おきにジュースだ。清水なんかはない。自転車に付けていた水筒の水はお湯になっていて気持ちが悪いと呑まない。

洞爺湖の畔を走る。気持ちがいい。昼過ぎて、腹が減ったと騒ぐので、飢えたる子たちにジンギスカンを食べさせた。食べ盛りで、いくらでも喰うから外食は心配だった。

その夜は、湖畔でキャンプだった。食材を調達するのに、温泉街の小さなスーパーに寄った。バーベキューの材料と缶ビールなどを買った。それと、明日の朝のパンとコーヒーだ。

「あんたたち、内地から来たんだね」と、スーパーのオヤジに云われた。

「はい、青森からです。どうして判るんですか」と、訊くと、

「そりゃそうだ。こっちの学校はもう始まっているからさ。向こうはまだ夏休みなんだろう。子供たちがうろうろしているわけがない」

なるほどと思った。よく、青森から走ってきたなと感心していた。函館ではなく室蘭から上陸したとは云えなかった。

湖畔のキャンプ場は若い人たちで結構賑やかにテント村ができていた。よそは折り畳みの椅子テーブルから発電機まで持ってきているが、こっちは、いつもの原始時代のキャンプだった。息子たちに薪の代わりに木製の枝などを拾い集めさせた。石を組んで竈を作る。ご飯を炊いて、それからイカやソーセージ、とうもろこしを直火で焼いた。

「貧乏なキャンプだね。みんな笑って見ているよ」と、三男が恥ずかしがる。

「うるさい。気にするな。自然の中で自然に暮らす。それが野宿の醍醐味で真髓だ」と云っても判らない。

飯のあとは、湖畔で花火をやる。キャンプの定番だった。わたしは、息子たちの成長記録をやたら写真に撮りまくった。いまという時間がたまらなくいとおいしい。特に夏はそうだった。時間だけが早足で過ぎてゆく。

テントの中で親子四人ひしめきあって寝た。

「さあ、また怖い話をしてやろうか」

「面白い話をして」

「昔むかし、しっぽの白い狸がいました」

「尾も白いんでしょ」

そうしているうちに寝てしまう。

こうした旅には、少し前はもうひとりいた。そのもうひとりはいまごろどこで何をしていたも

のか。普段は考えないようにしていたが、こんなときには足りない家族のことを思うのだ。母親が出ていってからは、できるだけ外に息子たちを連れ出して、親子の絆を深めた。そうすることで、忘れるものは忘れるのだ。

蛙の声が夜にいつまでも合唱していた。

第944話

チャリンコ旅行記 二

三日目の朝だった。壮警町から大滝村へと続く道を支笏湖へと向かっていた。今日は一日で百キロを走る。山道の百キロは容易ではない。平地ならその倍以上は走ったことがある。まして十歳の子連れだ。無理はしない路程で、時間にも余裕を持っていた。

支笏湖までは家もあまりない自然の中を走っていた。サイクリングのいいところは、車では見ることのできない小さな虫たちを見たりすることだ。道路を横断しようとしている大きな蝸牛を見つけたり、蛇と出くわしたりした。

鄙びた温泉がいくつかあった。川に沿うようにして走っていると、川原にキタキツネを見つけたりして息子たちは手を振っていた。

四人で一列になって走るのだが、一番遅い三男に伴走するように、わたしは最後についた。はぐれたりしては大変だ。

長距離トラックの運転手たちが、クラクションを鳴らして、窓から手を振り、「おーい、頑張れよ」と、声をかけてゆくのが嬉しい。

途中でサイクリングの連中と会うことはあまりなかったが、会うときは、必ず礼儀でハンドルを握っている右手の親指を立てるようにして合図しあうのだ。

車は結構走っている国道なのだが、人も歩かない山道だ。標高六百三十メートルの美笛峠まで恐ろしく長い登り坂には泣いた。ペダルを漕ぐ足が痛くなる。汗が止まらない。終いには尻が痛くてたまらない。若いときと違い、四十過ぎたわたしにはきついコースだった。

ようやくの思いで峠にさしかかる。長いトンネルがあった。車が接触しないかと心配で、一応自転車には夜行塗料のシールを貼り付けていたが、

「端を走れ」と、声も荒くなる。トンネルを抜けると、長いカーブの下り坂だった。苦勞して自転車を押してきた分だけ、楽もまたなければならない。ただ、ものすごいスピードが出るから、「ブレーキをかける。あまり飛ばすな」と、後ろからまた声が飛ぶ。何よりも事故と怪我が怖い。ピリピリとして息子たちを見てきた。一気に支笏湖の見える展望台までやってきていた。みんなそれぞれが喉が渇いてしかたがなかった。自動販売機か店ぐらひはあるだろうと、甘く見ていた。数十キロも走っても、そんな店もなければ家もないところを走っていた。太陽だけが照りつける。水を呑みたいと思うと、不思議とますます喉が渇いてくる。

とうとう、三男が泣き出した。自転車を停めて、地べたに座りこむと、喉が渇いたようとわん

わんと泣くのだ。かなり疲れてもいた。

「もう少しだ。湖畔に降りると、好きなだけコーラでもなんでも吞ませてやる」

と、騙し騙し宥めて走らせた。だが、湖畔の道路も山の中をくねくねとアップダウンだ。なかなかドライブインにつかない。

「嘘つき」と、とうとう梃子でも動かない三男にお父さんは怒った。

「よし、そんな根性のないやつは置いてゆく。ひとりになったら、熊が出てくるからな。ヒグマは人を食べるんだ」

そう云って、さっさと先に走っていった。それでも心配だから、途中で停まって待っていたりした。上の兄二人は、弟と仲が悪いから、足手まといだと怒っていた。

ところが三男はなかなかやってこない。心配になって、戻って迎えに行ったら、彼はおいおいと泣きながら、小さな自転車で走ってくるのだった。

ようやく湖畔のモラップへと着いた。売店があった。自販機も見えた。砂漠をさまよう旅人の気持ちはもっと大変だろうが、争うようにして缶ジュースを呑み回した。

賑やかな湖畔の食堂で、遅い昼飯を食べさせた。さすが、みんな口数が少ない。疲れ果てていた。三男だけはひとりもりもりと二人前の皿をたいらげていた。

そこから先がまだある。山道はいい加減嫌になったところだが、今度は車も多い観光地の道路だった。樽前山を右に見て、長い下りの道だった。山から海辺の苫小牧市まで一気に下りてゆく。

「さあ、苫小牧に着いたら、デパートに連れて行くぞ」と、子供を騙すのはこれが一番よかった。まだ美味しいものと玩具で釣れるのだ。息子たちは、自然より街が好きだった。どんな旅行にも必ず街を組み入れ、あるいは遊園地などに連れてゆかなければ、つまらない旅行ということになる。田舎の子なのだ。

苫小牧の街に入った。三男の自転車がそこまで来てパンクした。山の中でなくてよかった。一応パンク修理セットは持ってきたが、水溜まりでもなければいけない。

約束通り、市内のデパートに連れて行った。アイスを食べさせ、ゲームで遊ばせる。こんなところまで来て、子供の世界は同じことをするのだ。三男の機嫌は直っていた。

今日泊まる場所は苫小牧の姉の家だった。市内から西に向かって、さらに十キロはある。昔は何もない原野に家がぽつりぽつりと建っていたが、国道もいろんなチェーン店が張り付き、姉の家は団地の中に埋もれていた。広い家に姉はひとりで暮らしていた。姉の子供たちはみな大きく、札幌や東京の大学に行ったり働いていたりしていた。亭主は姉が四十の年に亡くなり、姑も後に亡くなると、本家を嫁ひとりが守る形になっていた。

わたしは、姉が嫁に来る年の夏に、高校二年だったが、北海道を自転車で回り、この家に一泊したことがあった。そのころの家は駅前にあり、庭に二頭のヒグマの子を犬のように飼っていたのを覚えている。姉も嫁いで二十五年でひとり暮らしだ。

自転車でようやくのこと姉の家に辿り着いたら、ひとり暮らしで淋しい家のはずが、いやに騒がしい。誰か遊びに来ているのかと思ったら、どやどやと苫小牧中の親類が出てきた。

「お疲れさま。よく来たねえ」「さあさ、歓迎会の支度はできているから」

「はい、お父さんは冷えたビール」と、まだ自転車を置いてもないのに、冷たいビールを手渡された。息子たちもきょとんとして立ち尽くしていた。庭には、バーベキューのコンロが置かれ、私設カラオケの舞台まで用意されていた。そして、姉の義妹や義弟、その子供たちと、十数人がわいわいやっている。

息子たちはご馳走を前に呆然としていた。息子たちと同じ年の子供たちが何人もいたから、話が合って、いろいろと学校のことも喋って笑わせていた。津軽弁丸出しで臆することなく喋るから、親のこっちが恥ずかしくなる。

「明るいいい子じゃない。よくぞ育てました」と、親戚のお母さんが誉めていた。片親だから暗く育ったと思っていたらしい。

夜遅くまで、ビールとカラオケ、肉とやきそばと、疲れて倒れそうだった。すっかりと酔って意識が遠くなるところに、笑い声だけがいつまでも響いていた。

第945話

チャリンコ旅行記 三

気を失ったように眠っていた。何日かぶりのふかふかの蒲団だった。かなり吞まされた。親類たちはみなアルコールが滅法強いときている。ここに来るときは、それを覚悟して来なければならない。

朝はゆっくりだった。今日のコースは楽だったからだ。そう距離も走らない。山道ではない海岸線の国道を室蘭まで向かうだけだった。帰りのフェリーも夜の十時。

ところが、いつも晴天とは限らない。八月とはいっても、その日は異常に寒かった。しかも朝から雨模様。わたしたちは、姉に別れを告げて、国道三六号線をまたひたすら走る。途中から土砂降りの雨になった。雨合羽は持ってきていたが、それを来ても足と手が濡れた。横殴りの激しい暴風雨はまるで台風のような感じだった。自転車は向かい風で前に進まない。それに、合羽がきかないほど全員がびしょ濡れになった。

雨をやり過ごそうと、牧場の建物で雨宿りをしたりしていた。気温が急激に下がったから、寒くてしかたがない。歯ががちがちと鳴る。予想もしていなかった事態だ。雨はなかなか止みそうもないし、先に進まなければ、フェリーの時間もある。

震えている子供たちが心配だった。風邪を引かせたらどうしようかと、そればかりが気になっていた。次男の合羽が安物で破れて水が入ってくると訴えた。何もない牧場で止まってもしょうがない。わたしは前進することを決めた。白老まで行けば、町だから何か店があるだろう。とにかく、全員着替えさせないといけない。

じゃじゃ降りの中、泣きそうな気持ちになって、ペダルを漕いだ。車がそんなわたしたちにさらに追い打ちをかけるように水をかけてゆく。バケツで水を浴びせられたように上から下までびしょびしょだ。

白老の町が見えた。ひとつの町から別の町まで距離が長い。そして、その間には何もないのが北海道だった。

町中に入ると、スーパーを見つけた。助かったと思い、駆け込んだ。次男の雨合羽を買い、みんなの長袖のシャツも買って着せた。温かいものを喰わせようと、ラーメンを食べさせた。少しは体が温まるだろう。

いろんな苦難が旅にあっていい。それがまたいい思い出になる。順調でリッチな旅ほど後々何も残らないのだ。

子供たちが、大きくなり社会に出るようになって、どんな旅行がよかったかと訊くと、三人共に、このチャリンコ旅行だったという。それほど、強烈な印象を与えていた。そして、もうひとつ、いい旅を残そうと思ったら、写真やビデオは残さないことだ。いつでも、見られる思い出があると、懐かしさは半減する。わたしは、たまたまビデオとカメラを持参していったが、そのどちらも故障していて、帰ってから見ると写っていなかった。そのときの写真と映像は全くないのだった。いままでの旅行でも、そんなことはいくらでもあった。何も証拠のない旅が一番印象に残り続けていた。

雨が小降りになったところで、わたしたちは白老を出た。寒いのに違いはないが、雨がひどくなければ、いまのうちだと思った。登別を通過したのは夕方だった。遊ばせる時間はなかった。観光地を覗いてゆく時間の余裕はまるでない。ただ、地点から地点まで走るだけで、競技にも近いものがある。

苫小牧でゆっくりしすぎたのと、雨宿りでロスタイムがあった。辺りがすっかり暗くなると、自転車は怖い。何が怖いって車が後ろから猛スピードで追い越してゆくのだ。ルート三六は通称弾丸道路と呼ばれていた。高速道路でもないのに、みな百キロ近く出して走っていた。その脇をそろそろと走るのだから、怖くないわけがない。まして、夕闇と雨という、ドライバーの視界がきかないから恐ろしい。

雨は小雨だった。東室蘭に着いた。そこからフェリー乗り場まではまだ走らなければならない。なんとか間に合った。

室蘭の商店街を歩いてみたが、不景気でシャッターを降ろしている店が多いのに驚いた。室蘭は製鉄会社で持っているような街なのだが、その製鉄会社が不況で従業員の大幅なリストラをしたから、市の人口が減ったと聞く。ひとつの巨大な企業城下町は運命を企業と共にする。飲食店もデパートも問屋もすべてが、コバンザメのように企業にくっついているのだ。下請け工場も閉鎖すれば、地元にはダメージが大きい。

そんな死んだような街で、わたしたちは食べ放題の安い食堂を見つけた。

「さあ、腹が減ったろう。好きなだけ喰え」

と、云っても、元気のない子供たちだ。疲れ切ってもものも云えない情けなさ。まだ、中年のお父さんのほうが元気だった。

わずか二百五十キロにも満たない短いサイクリングだったが、達成感というものがある。

なによりも親子の絆を深めるには、共に苦労するなにかが欲しい。家族がそれであっさりともとまることもある。

フェリーにはゆとりで乗れた。息子たちは安心したようで、快活にお喋りしだした。出航するときは、甲板に出て、夜の室蘭の灯りを見送った。

「どうだ、また来年、別のところにサイクリングで行きたいか？」

とわたしが訊くと、

「うん、また来年行こうね」

息子たちは口を揃えてそう云った。

さて、あさってからは二学期が始まる。

「ところで、夏休みの宿題はやったんだろうな」

三人とも急に現実に戻ったように元気がなくなっていた。

第946話

艱難辛苦

高浜幸司は生まれたときから大富豪の家であったので、なんの苦勞も知らずに育っていた。家のある一帯は昔から高浜町と呼ばれ、いまでも地主様であり、土地をショッピングセンターに貸したり、マンションを建てて、不動産業を営み、そのほかいくつかの会社を親族で経営していた。同族会社なのだが、経営は辣腕の雇われ社長に任せていた。そのほうがうまくゆく。経営のノウハウというものは、その道のプロに任せたほうがいい。幸司の父親がグループの会長に納まり、幸司は子会社の社長をやらされていた。別に仕事はしなくとも、土地代といくつかの賃貸マンションからの家賃収入だけでも過分であった。

幸司は大学は好きな文学を専攻していて、いつかは小説家になろうという夢を持っていたが、才能がないから、新人賞は悉く落ちていた。それで、良家の娘と見合い結婚すると、父親の経営していた郊外型シアターの社長に納まった。

四十近くなって、息子娘二人も中学生になり、家庭円満であり、仕事も順調、利益は出て、株配もあり、何も考えなくていい日々が続いていた。好きな小説を昼から会社の社長室で読んでいて、それに飽きると、ふらりと出張と偽って旅行に出たりしていた。

妻は育ちもよく、なんのとりえもないが、穏和で気品がある。幸司は申し分のない配偶者と思うのだが、どこか、なにかが足りないような気がしていた。いや、妻や家族だけではない。仕事も人生のすべてが、退屈の一言であった。このまま、幸福で順風満帆の生活を続けていれば、自分はダメになるような気がする。幸司は最近になって疑問を感ずるようになった。なにが変革が必要だ。

会う人に、「お宅はいいご家族をお持ちで」とか、「いい奥様でらっしゃいますね」とか、「おぼっちゃまは優等生でいらして」とか、「堅実な経営で、地元の誇りですな」と、云われ、終いには、「いいですね。われわれのような下々の苦勞はないんですからな」とか、「なにも考えなくていいでしょう」と、皮肉を云われ、妬みから無能呼ばわりまでされるのが、時々聞こえてきていた。

別に、好きこのんでこの地位にいるのではないと、幸司は思っていた。彼は苦勞していたり、

貧乏や病気や不幸と闘っている周囲の人間たちには頭が上がらない。裕福で、仕合わせだということは居心地のいいことではなかった。昨今の不景気で、街の大半の会社や商店は赤字経営で喘いでいた。倒産も続出、失業者が巷に溢れていた。そんなときに、ひとり余裕があるということは、周りといい関係が保てない。イヤミを云われ、身に覚えのない醜聞に耳を塞いだりしていた。

幸司は天に向かって、祈願するように叫んだ。

「我に艱難辛苦を与えたまえ」

だらだらとした人生には飽き飽きしていた。己を鍛えるためには、このままの温室の中でぬくぬくとこれから先を送るわけにはゆかない。

その翌日から高浜家の不幸が始まった。父親が突然倒れた。脳溢血で、寝たきりになってしまった。

市内にマンションが次々に建っていた。マンションブームなのだが、大方は業者にのせられ、騙された地主たちが、街の人口が減っているのに、やたら建物ばかりをどんどんと建てていた。幸司たちの会社のマンションも老朽化してきていたので、同じ家賃を払うのならと、借り主たちが、次々に新しいマンションに引っ越してゆき、部屋はがらがらになっていた。

映画館のほうも、郊外のショッピングセンターがシアター付きで進出してきて、映画館の飽和状態をさらに越すと、便利で綺麗なほうに客を取られ、興業収益はガタ減りだった。

いままでのほほんとして経営を任せてきたのが、収益が悪化すると、有能な幹部社員や雇われ社長まで敵方にトレードされて、会社を去った。代わりに来たのが、詐欺師に近い。会社の金を横領する。資材は横流し、湯水のように資金を使い果たした。経理を人任せにしてきていたので、帳簿の見方も判らない。身内で数字に明るいものはひとりとしていなかった。不正があっても判らない。

そして、気が付いたときは、銀行から不足資金を電話してきた。借入は目いっぱい。しかも手形が落とせない。

そんなときに幸司は、愛人のところに雲隠れしていた。それを妻に尾行されてひと騒動。ごたごたしているときに、中学から電話で父兄の呼び出し。息子がグレテ恐喝に傷害事件を起こしていた。夫婦でもめている場合ではない。

そんなことも治まらないうちに、娘がバイクの二人乗りで交通事故だ。病院から電話があった。

と、うろうろしているところへ会社の専務が血相変えてやってきた。会社はついに倒産。自宅もすべて差し押さえ。親戚たちは、いままで群がっていた高浜家からさっと手を引き、確保するものを確保したらほうっかむりだ。

「どうしてくれるのよ。娘は入院。義父さんは寝たきり。義母さんだって、アルツハイマーで徘徊するし、息子は保護観察で、損害賠償は請求される、わたしたちはもう住む家もない。わたしも、あなたの浮気で慰謝料を取れるものなら取りたいわ。はい、離婚届。さあ、ハンコ押しでちょうだい」

幸司は呆然と立ち尽くしていた。思えば、あの天に向かって叫んだときを境目に、がたがたと運が落ちていった。この三ヶ月で、家庭崩壊、無一物に零落していた。

幸司はふたたび、天を仰いで、云った。

「与えすぎなんだよね」

第947話

悲しきサーカス

公園にサーカスがやってきた。昔は街中をパレードして、象を歩かせたりして、サーカスが街に来たよと、宣伝して歩いたものだ。いまは、そんなデモンストレーションは許可がうるさいのだろう。広告媒体でCMを流して終わりだ。

「おい、サーカスが来るぞ。子供たちに見せてやりたいな」

杉村さんが奥さんに新聞見ながら云っていた。

「でも、いまの子供たち、悦ぶかしら」

奥さんは、いまどきサーカスというのとも思っていた。

「懐かしいだろう。おれが子供のときはよく親父に連れて行ってもらったよ。あのときの脅威の感動は忘れられない。おまえだって、子供のときは見たことがあるだろう」

「そりゃ、面白かったわよ。他に何も娯楽がない田舎だったもの」

「そうそう、思い出した。サーカスの子ってのがいたろう。二週間だけ、クラスに転校してきてね。初めは珍しいから、みんなに囲まれて、羨ましがられたんだ。だけど、後でみんなして無視するようになってね。ひとりぼつんと友達もいなくて、教室の隅にいたね。あれは差別だった。可哀想なことをしたと思う。サーカスの子ってバカにしてね」

杉村さんは三十年以上も昔のことを思い出してしんみりとなった。

「サーカスの音楽、ジンタっていうだろう。あれは、唱歌で習った『美しき天然』の歌なんだよね。太鼓やクラリネットなどでもの悲しいメロディだったよな」

杉村さんにとっては、少年時代の郷愁としてのサーカスであった。小学生の息子と中学の娘にも、一度はサーカスというものを見せてやりたい親心で、さっそく切符を買いに行った。

いよいよ、サーカスに行く日曜日が来た。公園の広場に、大きなテントがあり、動物の檻が積まれてあった。

「なにさ、サーカスって」と、サーカスも知らない子供たちであった。昔は日本にもドサ周りの小さなサーカスがいっぱいあったと聞く。いまは、そういくつも残っていないのだ。

入口にピエロがいた。楽隊も小編成だが、高見にいて、ジンタではなく、軽快なマーチを演奏していた。洋服を来たチンパンジーが迎えに出て、愛嬌を振りまいていた。高いテントの中には、空中ブランコの櫓が組まれて、綱渡りのロープに華やかなステージ。大きな風船がカラフルに飾られていた。

「お父さんが子供のときには、よく親にサーカスにやるよと脅かされたもんだ」

「サーカスって、子供たちを買ったりするの？」 「それとも誘拐するの？」

そんな童話があったような気がする。杉村さんは、どうして大人たちがそう云ったのか考えていた。子供をサーカスに売り飛ばす貧しい時代があったのだろうか。よく、子供のうちに体を柔らかくするために酢を毎日呑まされる話などを聞かされた。サーカスそのものが、未知の外国のような気がしていた。

最初にピエロが出てきて、前座でお笑いのパントマイムを披露していた。笑っているのは中年以上で、子供たちはふんとそっぽを向いている。どうも笑点が大人と子供ではズレているようだ。

次にステージに登場したのが象にラクダにライオンに虎の行進だ。杉村さんも奥さんも、動物園で見たり、テレビの動物番組でいつも見ているし、隣のサファリパークに夏休みに連れて行ったので、別に大人は驚かないが、子供の手前、驚嘆してみせた。

「おお、見ろよ。本物の虎だぜ。すごいなあ」

「ふーん、別にいい」と、子供たちはしらけている。

一輪車から自転車の曲乗りが始まった。台の上を走ったり、クルクル回ったりと手足のように使っていた。

「うまいもんだな」と、杉村さんが感嘆の声を挙げると、

「うちのクラスの子で、あれぐらいはできるよ。いまみんな公園でやっているもの」

杉村さんは、忌々しく思っていた。子供たちの大人びた口調。何でも知っているといった醒めた云い方。もっと子供らしくはしゃいだらどうなんだ。最近の子供たちはマスコミの影響で、刺激が多い生活をしているから、感動というものが判らなくなっているのだ。杉村さんはそう思った。

サーカスのメインイベントの空中ブランコが始まった。空中で三回くるくると回り、ブランコのバーを掴んだ。ブランコの上で逆立ちして体を逆回転させたりしていた。拍手をしたり溜息をついているのは、みんな中年以上の観客ばかり、子供たちはこんなときにケイタイでメールを打っていたり、ゲームボーイでぴこぴこと遊んでいて、サーカスを見ていなかった。

(全く、可愛くないな。こんなだったら連れてくるんじゃないか。どうして、いまどきの子供らは、純粋に驚いたり、悦んだり素直にできないんだ)

杉村さんは面白くなかった。

ボールを巧みに操るダンスも、人間の梯子も、中国雑伎団の様々な曲芸も、子供たちには人気なかった。

「すごいだろう」と、杉村さんが相づちを求めると、

「ふーん、それがどうしたのさ」と、全く興味もなく見ようとしなない。

頭にきた杉村さんは、他の観客が振り向くような大声を出した。

「なんなんだよ、おまえたちは。こんなにすごいのに、どうして見ないんだ」

すると、子供たちは、欠伸をしながら答えた。

「だって、これよりすごいのを、さんざんアテネオリンピックで見たもの」

そうだったのか。オリンピックはサーカスだったのだ。人間の限界を超えて、これでもかこれでもかと技を披露する。もう、本物のサーカスの出る幕はなかった。

第948話

二重生活

別宅と本宅があり、わたしは行ったり来たりしていた。というと、本妻と二号がいて、二つの家庭を行き来する男の甲斐性ということになるのではない。嫁姑戦争、と云っても、ばあさんの一方的な思いこみが原因なのだが、姑が負けて家を出てから二月が経っていた。嫁はどうしてそうなったのか、いまだに判らないでいるだろう。間に入っているわたしが全部知っている。ただ、誤解が積み重なり、毛嫌いしてきたのだが、いちいち説明しても老人のこと、頑固で人の話を聞くものでもない。

ということで、老人二人だけを住ませるマンションというのがないから、わたしが一緒に住むということにして、家を出たのだ。それからは、週に二日は嫁のいる家へ、五日は老父母のいるマンションで暮らすということになった。

この前は十日も顔を出さなかったから、嫁は怒っていた。怖いから、週に二日は顔を出す。あとの五日は介護士みたいな生活だ。両親のために、朝晩のご飯の支度はする、部屋の掃除はする、洗濯もする。手が利かなくなったばあさんは料理ができない。歩くのもやっとだ。後、数年で寝たきりになるのか。

じいさんは、ここ数年でがたがたと年にとって、ボケが進行してきていた。云うことは普通なのだが、それは初めて会う人の弁だ。

「年とってくるとよくなることはありません。みんな衰えてくる。人間の生き様には、生老病死という苦がついて回るのですから、自然体で望むよりないですね」と、云うのを聞いて、「お宅のお父さんは全然ボケていませんよ」と、皆さんそう仰る。

「そうですね、一週間、我が家で生活しなければ判らないかもしれませんね」

と、わたしは答える。その話は一字一句も違わずに、毎日、朝から晩まで聞かされてみなさい。それも一年、二年と云うことが同じなんだ。壊れたプレーヤーいや傷あるCDなんだ。

ばあさんは、嫁について被害妄想に罹って、憎々しく思っているから、ひとり息子のわたしが、向こうの家に泊まりに行くというと、嫉妬のあまり、目を剥いて睨む。それが恐ろしい。

「子供たちに貰い物のお菓子でも持って行ってあげなさい」

と、じいさんが心配して云うと、ばあさんは、向こうにあげるくらいなら、ゴミ箱に捨てたほうがいいと、すごい口調で云うのだ。だんだんと憎しみが酷くなる。

ボケが、単調にものを忘れ、ぼんやりとして、自分が誰であるか判らないというのはまだ可愛いボケ方だと思う。一番手に負えないのが、こうした妄想を抱いたボケ方だ。

「わたしを殺そうとしている」とか、「金がなくなるから気を付けろ」とか、だんだんとおかしくなってくるのが判る。じいさんの方が、可愛いボケ方に近いが、頑固だから、云うことを聞かないで怒るのに手を焼く。自分の思った通りにしなければ、子供みたいに気にいらぬのだ。

わたしは、その二人の毫碌ぶりをいつも記録していた。これを私小説ふうにまとめて、「介護入門」というタイトルで、新人賞に出してみよう。そうすると、芥川賞になったりしてと、思っていたら、あれれ、先に書かれていた。それなら、介護は題材にはならない。それなら、現代版榎山節考でゆこうと、どうやって老父母を捨てるかというような結末の小説を書いていた。

嫁のいる家がわたしの家だから、本宅なのだろうか。仏壇のある老父母のいるマンションが本宅なのだろうか。まだ、わたしはどっちがどっちなのか判らないでいた。

日曜日は、午前中は仕事をして、午後から、スーパーで買い物してから、嫁と子供たちのいる家に行く。行くときは、どっさりと本を持ち、ノートパソコンを持ってゆく。

行っても、みんな子供は遊びに出ているし、嫁は日曜が休めない仕事で夜でなければ戻ってこない。ただ、寝るために家に帰るというのも、何か面白くないから、最近買ったばかりのカヌーに凝っていて、海でひとり漕いでいるのだ。シーカヤックで、海専門だ。海に浮かんでいる間は自由な自分がいた。家族という桎梏に縛られることのない、いまだどこかに少年の心を残している孤独なお父さんだった。

それに疲れると、海辺で陽に焼けながら読書である。どこで本を読んでも同じなら、潮騒を聞きながら本を読みたい。家が嫌いになった。どっちの家にも安らぎはない。お父さんは可哀想な立場にいたのだ。

それにしても、今年は暑かったから、よく泳ぎ、よくカヌーで遊んだ。そして、どっちの家にも、本を読み、パソコンで創作するという生活パターンは変わらない。自分だけの世界に入りこんで、完全に逃避している。ぐちゃぐちゃと女同士の諍いは聞きたくもない。

子供たちが帰ってきて、おなかが空いたというので、

「おお、お帰り、いまから晩ご飯の支度をするから」

と、お父さんは台所に立ち、食器を洗い、じゃがいもの皮を剥いていた。嫁が仕事から疲れて戻ると、

「何よ、本ばかり読んで、晩ご飯の支度もしていない」と、怒鳴られるから、わたしは、しぶしぶとやっていた。世間には格好のいい二重生活も、実のところ、二つの家庭を行ったり来たりしながら、家事をしているのにすぎなかった。情けない。実にこんなところ、誰にも見せられない。

お父さんは、いよいよ自分の世界に入ってゆくのだった。

「今度はいつ来るの？」と、嫁は聞く。「来たくないんでしょう」とも。終いには、「娘も捨てられたと思っている」というから、

「捨てられたのはこっちだ。おれを、海に捨てたり、本の中に捨てたり、パソコンに捨てたのは誰だ。どうせ捨てるなら、愛人のところに捨ててほしかった」

二つの家とはわたしの中では家庭ではなかった。家族はすでに崩壊し、冷めていた。すっかりとお笑いだった。悲惨も通り過ぎると滑稽になる。

第949話

映画館

わたしは、青森県は北津軽の小泊の出身であった。家は貧しい半農半漁の家であったが、地元の中学を卒業すると、おふくろが無理して五所川原の高校へとあげてくれた。成績がよかったので、奨学金を得ると、わたしは東京の大学に進んだ。本当は、漁師に学問はいらねえと、中学を出てから親父の船に乗るところであったが、親父も、零細な沿海漁業には見切りをつけていたようで、わたしには別の道を歩ませたかったのかもしれない。

わたしは、国家公務員になり、都会で暮らし始めると、そこで結婚、所帯を持った。娘二人もできて、田舎に帰るのは盆正月ぐらいである。

わたしも五十過ぎた頃から、順調な人生にも翳りが見え始めてきた。というのも、現在の仕事が緊縮予算で、後ろ向きの仕事ばかりなので、ほとんど嫌気がさしてきていた。五十にして惑う。わたしだけでなく、多くの管理職たちが迷子になっている時代なのだ。

そんなときに、人間は振り返る。懐古趣味に走り、いい時代を偲ぶのだ。わたしも、最近、若い頃に聞いた歌をセコハンレコードで買い求めてくると、それをパソコンからCDにダイレクトにコピーしたりして、高校生のときに聞いた歌を口づさんでいた。

そんなときに、親父が酔って海に落ちて行方不明になった。知らせを聞いて、わたしは家族で青森に急行した。八十近い親父は酒からは抜けきれない。すっかりとアル中に近くなっていた。わたしたちが村に到着した午後、捜索隊が海に沈んでいた親父の遺体を発見した。大好きな酒に浸り、海の男が海で死ぬ。それは親父の死に方としては、仕合わせだろうと思った。

葬儀一切は盛大に行われ、わたしは、その賑やかな親戚の酒の席で、ひとり思い出に浸っていた。

「ちょっと、でかけてくる」と、わたしは、家族を実家に置いたまま、バスで懐かしい青春の街、五所川原へと出かけて行った。太宰が浅草のような街だと書いた。同郷の歌手三上寛も、そんなことを手記で書いていた。日本海の荒海に洗われた小さな漁村から、こんな地方の市でも、出てくれば、レストランというものがあり、喫茶店からパチンコ屋、映画館もあり、デパートもあった。わたしたちにとっては都会であった。

子供のときは、年に何度かはおふくろに連れられて、デパートの上の食堂でお子さまランチを食べて、小さい玩具を買ってもらい、たまには映画も観た。

わたしは、ひとり就学前の思い出に浸っていた。

(そうだ、確か、映画館に入ったあと、出てきたらおふくろとはぐれて、迷子になったのだ)

わたしは、賑やかな商店街の通りの裏通りにあった映画館がまだあるかどうか確かめに行った。昔は人も馬車も車もかなりの人出の商店街も、いまは、シャッターを閉めて、閑散としている。郊外型のショッピングセンターが巨大な建物で出現すると、旧商店街は全滅した。

こんな人通りもないところだから、裏通りで映画館なんかやってゆけるわけがない。と、わたしが、裏通りに出抜けると、なんとそこに果たして映画館はあった。当時のままのモルタル吹き

つけのこげ茶色の傾いたような建物がそっくりと残っていた。七十年以上もそこにありつづけていたのか。建物はすでに廃墟のようにボロボロだが、営業はしているようだ。大きなペンキで描いた看板が出ていた。それは昔懐かしい「化け猫屋敷」だった。おふくろと見た映画だった。あの、迷子になったときの映画だった。ついふらふらと切符を買いに寄った。

「大人一枚」

暗い切符売り場で、顔の見えない女が手だけ出して、「百円です」と、云った。

「今頃、百円ですか。間違いじゃないでしょうね」

料金表を見ても、小人五十円と書いている。よくこんな料金設定でやってゆけるものだ。

もぎりのおばさんも、何故か、顔が薄暗くて見えない。手だけが出てくるのだ。映画館の中はがらんとして、誰も観客がいない。暗いからよく見えないが、確かにわたしひとりのようだ。上映のベルも昔のままだ。普通は、予告編が入り、映画ニュースも入った。映画のニュースは迫力があつた。音が全然違う。子供のときにそろそろ村にも白黒テレビがやってきたとき、それで見るとは違った。映画館は、いつも満員で、座れなかった記憶がある。みんな後ろや通路に立って見ていた。わたしたち子供は、大人の足しか見えなかった。大人と同じ映画を見ても、いまでも内容をはっきりと覚えているのが不思議だった。

いよいよ、画面に富士山が出てきて、太陽が光り輝く。これが映画会社によって、岩に波だったり、ライオンだったりするのだ。と、突然、わたしのいまの顔が画面いっぱいに出てきた。ぎょっとした。映画を見ているわたしそのものなのだ。服装も合っている。誰かがどこかで隠しカメラで撮っているのか。ところが、次の画面を見てさらに驚いた。わたしは、フィルムを逆に回したように、後ろ向きに歩いて、映画館を出てゆく。バスはバックで小泊村へと戻っていた。それは今日のことだ。すべてが、逆回転で、しかもものすごい速さだった。場面は東京だ。省庁の建物の中で仕事をしているわたしがいた。ぶつくさと文句を云っているような。だんだんとわたしは若くなってきていた。何者かが、わたしのいままでの生涯のドキュメンタリー映画を密かに撮影していたというのか。だが、どうして、過去へと遡ってゆくのだ。

わたしは、高校生になっていた。部活でも勉強でも忙しい。そして、中学では漁師たちに手伝って、網を引いていた。小学生になった。だんだんと、わたしは怖くなってきていた。この先、わたしはどうなってゆくのか。この映画は、わたしが生まれる前までゆくと、どうなるのか、とても、見ていられない。わたしは立ち上がった。スクリーンには大きく就学前のわたしが写っていた。わたしは逃げるようにして、映画館の外に飛び出した。実に巫山戯た映画館だと、思う気持ちが急に掠れてゆくと、わたしは自分の体が小さくなっているのに気が付いた。半ズボンにランニングシャツだった。靴もゴムの短靴。街も変わっていた。いつのまにか人通りが多くなっていた。表通りに出ると、馬車が走り、クラシックカーが走っていた。

「お母ちゃ」と、わたしは声も幼児のそれだった。急に不安になり、泣き出していた。映画館を出てからおふくろとはぐれた。迷子になっていた。まるでナンジャタウンの中を歩いているように、木の電信柱、ポストも丸いやつ、商店もすべて昭和三十年代のものだ。

わたしの意識は薄れてゆき、退化してゆく。そうだ、すっかりと幼児の茫洋とした意識に解け

てゆくようだった。

「どこへ行っていたの。探したべさ」

若い母が両手を広げて立っていた。

第950話

夏菓子い味

横田慶樹の父が亡くなってから、とみに慶樹の母は口数が少なくなったように思う。家からもあまり出ることがなくなった。家から出るのは病院に行くときだけだ。年も七十近くなってからは、何をするにも億劫になってきていて、毎日、お茶を飲んだり、お菓子をつまんだりしながら朝からテレビばかり見ていた。

家事は慶樹の嫁がパートから帰ると、すべてやるので、ますます母親の出番がない。女が台所を去り、家事一切を剥奪されると、そのときから痴呆が進行してくる。

慶樹の妹の真理恵は実家のすぐ近くに暮らしていた。子供がいないから、ちょくちょくと遊びにくる。

「スーパーで西瓜が安かったから買ってきたわよ」

玄関で真理恵の声がする。慶樹は仕事が休みで、午前中は寝ていた。ひとり娘は小学校へ、嫁は仕事に出ていた。

母の時江は相変わらずテレビを見ながら、何かつまんではぼりぼりと食べてばかりいた。

「おやおや、あんたも仕事はお休みかい。慶樹は寝ていて起きてこないんだよ」

「お母さん、またお菓子ばかり食べて。たまには外に出たほうがいいのよ」

真理恵は台所で西瓜を冷やすため水に漬けていた。

「こんな毎日猛暑で、外に出た日にゃ、おまえ熱中症とかで倒れるよ。エアコンの効いた部屋にいるのが一番さ。それより、西瓜って、今年は高いらしいね」

「そうなのよ、近頃になってようやく安くなってね。今年はあまり口にはいらなかったわよね」

母は座卓の上になにやら白いお菓子のようなものを紙の上に広げて、ぼりぼりとうまそうに食べていた。

「お母さん、何を食べているの？」

真理恵は興味深そうに覗いた。真っ白な砂糖菓子のように、ぼろぼろに砕けているのがどうも市販の菓子のように見えない。

「おまえも食べてごらんよ。美味しいから」

真理恵も手を出して、口に入れてみた。堅いが噛み砕ける。何も味がしないように感じた。

「なによ、これ。全然味がしないじゃないの」

「じっくりと味わうように噛んでいれば、懐かしい味がしてくるんだよ」

噛めば噛むほど、味わい深くなるという食べ物もある。だが、それはいままで、真理恵が食べたことのない味だった。

「どこから、こんなもの買ってきたのよ。なんていうお菓子なの？」

そんなところへ、まだ寝ぼけた顔の慶樹が起きてきた。

「なんだよ、おまえ、来ていたのか。やけに騒がしいと思ったよ」

慶樹は髪がぼさぼさだ。

「兄さん、お母さんたら、変なもの食べているのよ」

慶樹もなにげなく摘んでみた。三人ともぽりぽりと口に入れていた。

「ねえ、お母さんは美味しいって云うけど、何も味がしないし、なんていうか、奇妙な味だわね」

慶樹も首を傾げていた。

「落雁でもないし、ヌガーのできそこないでもないし、どっちにしても砂糖抜きらしいから、ダイエットにはいいようだな」

「美味しくくないでしょ。味がなくていうか」

すると、母はきつとなった顔を真理恵に向けた。

「おまえたちは、こんなに食べ物が豊富なときに生まれ育ったから、この味が判らないのですよ。昔は、砂糖なんか貴重品でしたからね、おやつなんか、こんなにありませんでした。戦時中は羊羹ひときれが一家に配給でしたからね、甘味には飢えていましたけど、それは自然の中から摂ったものです。南瓜や大根、薩摩芋なんかからね。噛んでいけばじわっと甘さが沁みってくる、それがいいのです」

母はなにか意地になって食べているように思えた。

「そうかな」と、二人ともまた手を伸ばして白い塊を口に入れては噛んでいた。

「ほら、じっくりと味わいながら噛んでみなさい、たとえようもない懐かしい味になってくるから。わたしなんか、涙が出てきますよ」

本当に母の目からは涙が零れていた。二人ともしみじみとした気持ちになって、ぽりぽりとゆっくりと口の中で味わおうとしていたが、どうしても不味い。

「お母さん、これって、本当になんなのさ、見たことのないお菓子だね。でも、はっきり云って不味い」

母は急に怒りだした。

「何を云っているんだい、おまえたちは。小さいときから、甘やかして育てたからね、食べ物は粗末にする。お菓子でも気にいらないければ、半分あっても捨てたもんだ。全く我が儘に大きくなってねえ。死んだお父さんに申し訳ないと思うよ」

お父さんの話が出てくるとしみりとしてくる。ようやく一周忌が過ぎたところだ。

「早いもんだね、もう一年だものね」

真理恵がちらりと仏壇のほうを見ると、小さな白い瓶が蓋を開けて置いてあった。

「あれ？ あの瓶、どうしたの？ 確か分骨したお父さんの遺骨だったわね」

「そうだよ。いま、おまえたちも食べたろう。それがお父さんなんだよ」

二人とも口に指を入れて吐こうとした。

「ど、どうしてこんなことを、ゲホゲホ」と、慶樹は青くなっていた。

「お墓に戻したくはないんだ。どうせなら、わたしと一緒にいたいとお父さんも云っているん

だよ」

人は愛の究極にその最も愛するものを食べるという。母はどこかが狂っていた。

第951話

無知の告白

古本屋というのは、何でも知っていなければならない。と、周りがどうやら思っているようで、場合によっては非常に辛いものがあった。確かに、本という知識の宝庫の中に日々囲まれて仕事をしているには違いない。

「ご主人、この本を全部読んだんですか」

と、ある客が驚嘆の声を挙げた。ばかな、そういう目で見られるのが心外だ。これはおれの書齋じゃないんだ。みんな商品じゃないか。おれが、コスメランドの本を読むか。アイドルの本なんかも読まない。

それでも、古本屋というだけで、学者か知識人のように思われて、本の好きな客が対等に話しかけてくる。

「ご主人は、セジウィックの理論をご存じでしょう。ホモフォビアとミソジニーの関係から導きだされるクイアーの理論ですがね」

(こ、こいつは何を口走っているんだ？ 全く意味が判らん)

お客の大半は、ただの読書家ではない。大学の先生だったり、郷土史家だったり、ジャーナリストだったりする。ただの読書家でも、じいさんともなると、もう、五十年も六十年も本を読み続けてきた万巻の書に囲まれたインテリばかりだ。そんな客ばかりが、毎日入り浸る。古本屋など足下にも及ばない。

「あのですね、わたしはただの古本屋のおやじでね、全然偉くもないし、ものも知らないし、本は好きですがね、官能小説しか読まない。その、キョウヨウというものが、あると思われては迷惑でして」

そうなのだ。肉屋、魚屋と同じなのだ。ものを売る商売には違いない。たまたま、それが難しそうな専門書なので、客が誤解をしてしまう。

だが、今回ばかりは、おれは自分の無知をさらけだしてしまった。自己嫌悪に陥っていた。長年、古本屋をしているの常識というものがある。それは、商品知識であって、何もその本を読んでいなくてもいいのだが、当然知っていなければならないことがある。おれは、重大なミスを犯していた。それが、いまのいままで知らなかったことに、赤面していたのだ。

この秘密はまだ誰にもバレてはいないが、あるいは、長い商売だから、いろんな人と話をしているうちに、喋ってしまったかもしれない。それを思うと、顔から火が出る。口からも鼻穴からも火が出れば、それはゴジラだ。

おれは、それに気が付いてからは、一日、静かにしていた。なるだけ口を開かないようにして

いた。口は災いのもとだ。とんでもない恥ずかしいことを知らないくせに平気で口走ることもある。間違っただけでも、ベラベラと喋って、誰かが、にたにたと笑って聞いていたとして、そんなことはおかまいなし。ああ、恥ずかしい。あとで、一生後悔することになるんだ。

この前もこんなことがあった。津軽弁がしみついているから、それを標準語だと自分で思いこんでいるのが沢山ある。「しょっちゅう」と、ひらがなで書くところを、少し訛って、「そっちゅう」だと多分、小さいときから思いこんでいた。それを文章で書くときは、パソコンが多いから、安易に漢字変換してしまい、「卒中」と、平気で長年使っていたのだ。それを人に指摘されて初めて過ちに気が付いた。

「卒中って、どなたか脳卒中で死んだんですか」

ゲゲゲ。そうなのだ。知らないということは、ある意味では仕合わせなことなのだが、別の角度から見ると、実に滑稽で、恥ずかしい。

おれは、その大きな過ちを発見してからは、今日一日、あまり誰とも口を利かないことにしていた。すっかりと自信喪失、自分のばかさ加減がほとんど嫌になっていた。店に来る客だけでなく、外を歩く人も皆、自分より偉く見えてくるのだ。

そうすると、以前、こんなことも知らないのかと、恥をかいたことを思い出していた。

「今上天皇」を「こんじょうてんのう」と読んだら、年寄りに笑われた。

「あんた、大学を出ていても、こんな字も読めないのか。一体、大学で何を習ってきたのか」

と、軽蔑されるから、

「はい、うちの大学ではマルクス経済を勉強しまして、天皇については一字も習っていません」と、ごまかした。

それにしても、そうした恥は、おれの中に長年の間、積もりつもって、石炭になり、石油になり、それが、何十年も経っていても、時折、思い出すと、火がつくのだ。恥は一生おれにまわりついて離れない。太宰もそんなことを書いていた。楽しい思い出はすぐに忘れるのに、忘れたいことはいつまでもこびりついているものだ。

古本屋は、最低、作家の名前だけは覚えていなくてはならない。それは、商品名を知っていなくてはならないデパートの売り子と同じだ。

「アベノウセイの本はあるか」と、お客が聞く。「アベヨシシゲ」ですね、とわざわざ言い返さない。それは、お客に恥をかかせることになるから、随分と気を遣っていた。ツチイバンスイはドイバンスイでもよいことになっている。ヤナギソウエツはヤナギムネヨシが正しい。作家の名前は、みんながそう呼んでしまえば、そうなってしまふものらしい。

おれが重大なミスをしたのを知ったのは、今朝の新聞でであった。

『作家水上勉さん死去する』

記事を読んで愕然とした。長年、ミナガミツトムと読んでいた。ミズカミツトムだったのだ。恥ずかしい。おれは、こんな些細なことで、古本屋をやめようとも思うのだった。

朝帰り

どこをどう呑み歩いたものか、ゆうべは、斎藤と古川と三人でいつもの深酒をやらかしてしまった。一軒目はサパークラブのエルディで呑んで踊って歌ったのは覚えている。二軒目の小料理屋の細雪で呑み直したときも、おぼろげに松子ママの顔と会話が記憶に留まっていた。三軒目になると怪しい。行ったことはなんとか思い出したが、その店がスナック純子であったものか、クラブカノンであったものか、居酒屋侍であったものか、全然覚えていないのだ。

どうやって帰ろうとしたものか、タクシーに乗ったものか、突然、記憶が切れていた。よく、呑み仲間に云われて、その原因が判った。

「おまえ、途中から酔って眠っていたもの。酔えば眠るやつだからな」

それなのだ。眠っているが、どこかで無意識が働いて、帰ろうとする。多分、みんなに大丈夫かと支えられて、うん、帰れるからと、ちゃんと受け答えしていて、それで、タクシーに乗せられる。行き先を告げているから家まで運んでくれる。料金も無意識に払っている。玄関の鍵も自分で開けている。翌朝、起きるとパジャマを着て寝ているので、自分でちゃんと着替えもしているのだ。全く覚えていない。どんなに泥酔していても、日常生活の習慣というのは、無意識のうちに人間を操縦しているのだ。

わたしの家は、市内から車で三十分はかかる市の外れの町だったから、タクシーでは高くつく。それで、終電に間に合うように帰るのだが、酔って寝てまうことはたびたびだ。タクシーなら、家まで送り届けて、たとえ車内で寝ていても、運転手が起こしてくれる。だが、電車はそうはゆかない。誰も起こしてくれないから、いままでもわたしは次の駅まで行ってしまったり、三つ先の駅まで行ったりしたことがある。寝まいとがんばっているのだが、ついうつらうつらとしてくる。寝ないように、本を読んでいたりするのだが、あまり酔っていると、活字を追うのさえ辛くなってくる。そして、本を閉じると、今度は頬をぴしゃぴしゃと叩く。右の頬を叩いたら左の頬を出す。それでもダメなときは、股を抓る。それでも眠いときは頭をがんがんと叩く。どうしてもダメなときはナイフで全身をズブズブと刺す。

終電だから乗り過ごしたら戻ることもできない。それが真冬の吹雪の夜だったら悲惨なことになる。わたしの降りる駅の次の駅というのは、田圃の真ん中にある。周りに民家も商店も何もない。タクシーなんか待っている駅ではない。それで、猛吹雪のときに道路をとぼとぼと歩いて家まで帰ると二時間はかかる。まさに雪中行軍で遭難しそうになる。

だが、この夜はいつもの酒と違っていた。タクシーでも電車でもない。まるで帰れなくて、夜の街をさまよい歩いているかのようだった。わたしは、酔いは醒めていた。だが、気分はどうもすっきりしない。意識もまだ朦朧としているところがあった。

いつも見る駅前から伸びるアーケードの商店街をひとり歩いていた。腕時計は二時を示していた。この時間なら電車もまだ動いていない。始発なら六時過ぎだ。タクシーも走っていない。車という車が走っていないのだ。寝静まった街だった。勿論、歩いている人もみかけない。いまは、不景気だから、夜中まで呑み歩いている酔人もいないのだ。人が歩かないから、車も通らない。動くものがない死んだような街だった。どこかで仮眠してゆきたいと、わたしは深夜喫茶を探していた。田舎街だからそんな真夜中にやっている喫茶店もないようだった。商店街で電灯

の点いているところは一軒もない。

だが、おかしいことに気が付いた。二十四時間営業のコンビニまで閉まっているのだ。外灯だけがぽつりぽつりと点いている。どこで寝ようかと考えていた。女房に電話をして迎えにきてもらうのも、可哀想な気がした。明日の仕事は早いだろうから、始発電車に乗っての朝帰りがいいだろうと、ともかくも横になる場所を探していた。

九月だからまだ夜中でも寒くはない。そうだ、こんなときは駅の待合室というところがある。そこなら、真夜中でも開放しているだろう。それにしてもおかしい。駅前の交番でも灯が消えている。まるで無人の街のようであった。

いや、これはひょっとすると、夢なのかもしれない。限りなく現実に近い夢を見ているのだ。それにしてもリアルすぎる。わたしはアーケードのポールに触れてみたが、金属の冷たい感触が生々しく伝わってきていた。やはりこれは夢なんかではないのだ。

わたしは、よくこんな真夜中に無人の街を彷徨うといった夢を見るが多かった。駅の構内をうろうろしていたり、行き先が定かでない電車を待っていたりする夢。わたしのその夢には人がひとりも登場しないのだった。フロイトの夢判断なら、わたしの現状が宙に浮いていることを象徴するというのだろうか。

駅に着いた。待合室には誰もいない。腕時計は二時で止まっていた。なんだ、電池が切れたのか。駅の時計なら鉄道時計といって正確だろうと、天井から下がっている丸い時計を見て、わたしは驚いた。針がない。長針も短針もないのだ。どの時計を見てもそうなっている。駅員も誰もいない駅というのもおかしい。わたしはまた夢なのかと疑った。急に不安になって、改札口を通ると、階段を上がり、ホームへと駆け下りた。夜はしらじらと明けてきていた。ホームには始発電車が待機していたのだ。わたしは携帯電話があったのを思い出し、時間を見た。六時になっている。それもおかしかった。どんなに酔っていたか分からないが、真夜中を何時間もさまよい歩いたふうには見えなかった。どこか路上で横になっていたというのだろうか。

電車は無人だった。これでようやく横になることができる。わたしは電車のシートに横になって眠ろうとした。すると、ドアが閉まり、ベルも鳴らないのに、電車が動きだした。空は朝焼けにしてはおかしい色を見せていた。まだ闇の部分もあり、まるで黒と赤と青の絵の具を混ぜたような色彩がこの世のものとは思えない配色でどんよりと垂れていた。

少し目を閉じていた。だが、また寝過ぎしてはいけないという意識がどこかに働いていた。電車が止まる音がした。はっとわたしは目が覚めた。わたしの降りる駅にもう着いていた。わたしは跳ね起きて電車から降りた。切符を買っていなかったが、駅員も車掌もいないから、そのまま無賃乗車で駅を出た。

駅から歩いて五分で我が家だ。ここに来ると、ようやく人影がぼんやりと見えてきた。みんな、驚いた顔でわたしを見ている。どうしたのだろうか。車もようやく走り出したようで、いつもの町の朝だった。

朝が早い近所の人たちも家の外に出ていた。

「おはようございます」と、声をかけると、手にしていた新聞を落として、呆然とわたしを見ているのだった。なんだかみんなおかしい。寝ぼけているのか。滅多に朝帰りはしないので、少し

心配だった。女房は怒るだろう。まるで愛人でもいて、女のところに泊まってきたように疑うだろうか。どんな言い訳をしても嘘になるような気がした。何故なら、わたしには記憶にない空白の時間がありすぎた。

玄関の前に木がばってんに打たれていた。ドアには忌中の貼り紙。わたしは焦った。誰かが死んだのか。主人が飲み歩いて朝帰りしたときに。

わたしは急いで、ドアを開けて、靴を投げるようにしてぬぐと、バタバタと居間に入った。すると、娘と女房の悲鳴が聞こえた。おどおどした親戚の伯父、伯母の顔もあり、わたしの遺影と花と線香の煙。そして、誰が入っているのか棺桶が置かれてあった。

第953話

日本よいとこ

成田空港にひとりのユダヤ系アメリカ人が着いた。彼は、サングラスをかけ、髭を蓄えた五十がらみの紳士だった。禁煙を何時間も守ってきたので、解放されたように、葉巻をくわえた。体格のよい胸板にサマースーツがきつそうだった。

「ミスター・ベンダソウですね」

迎えに出たのは、商社からやってきた営業部長と部下たちだった。

「そうです。あなたは、遥商事の……」

「営業部長の山下です。どうぞよろしく」

部下たちは、ベンダソウの手荷物を預かると、車へと案内した。

遥商事は、石油製品を輸入して工場に卸している。ベンダソウの会社は、全米二位の石油化学工場を持っている。

「いいですね、日本は平和そのものだ。空港の警備を見てもいい国だということが判ります。他国はテロが多いから、空港は軍隊に包囲されているようなものですから、警備もものものしい感じです」

ベンダソウは穏和な顔を見せて、徐々に和んだというふうに乗っていた。

「やはり、アメリカでは毎日が緊張の連続です。いろんな噂も流れますが、不審なものについての情報も日々、どこでも警告で出ますから、いつもピリピリしたムードです。それは911以前からもありましたがね。それに比べたら、日本は安心していられる。ここにくるといつもほっとします。第一、怖くないでしょう」

「そうですかな。わたしたちは、これでも毎日が大変だと思いますがね」

山下が流暢な英語で答えた。

「いいえ、あなたがたは知らないのです。日本人は水と安全はいつでもただだという感じが昔からありますからね」

それはベンダサンが云った言葉だ。どこか似ている名前だった。

「確かに、憲法で戦争の放棄を謳った国はなかなかありません。あの憲法のおかげでいままで平

和でこられました。それも、改憲という意見が多くなりまして、最近はどうも雲ゆきが怪しくなりました。隣国はその動きに敏感に反発を見せて、反日感情がまた再燃しているようです」

「わたしの住む、ウエストコーストでは水不足が深刻で、大きな街なのですが、時間で給水制限があります。その点、日本はいつでもどこでも断水ということがないと聞きましたが」

「二十一世紀は水不足の世紀だといいますが、いまのところもこれからも、日本は大丈夫だと思いますよ」

ベンダソウは、車で走りながら見る日本の田園地帯を、実に羨ましく眺めていた。山はびっしりと樹林だ。アメリカは国土は広いが、砂漠や荒地も多く、雨のあまり降らないころも多い。殺伐とした風景がアメリカを象徴している。それに比べて、この日本の自然は実に豊かじゃないか。ベンダソウは、緑豊かな自然だけでなく、徴兵制もなく、戦争もなく、テロもない平和にずっぴりと浸かっている、いわば平和ボケの単一民族を、われわれの犠牲という傘の下で安穩と暮らしていると、心の中では批判していた。

「いいですな、民族間の諍いもなければ、言語もひとつ、宗教戦争もない。そして、繁栄とまとまりのある世界でも珍しい国ではないですか」

つい、皮肉も云いたくなるほど、幸せな国民だと思っていた。

車は長野県の研究所へと向かっていた。遥商事では製品テストも行っている。独自の研究機関を持って、より安全な製品を送りだしているのだ。そのところをベンダソウに見てもらいたいと、案内していた。

高速道路を走っていたら、突然、ハンドルがとられるほどの揺れを感じた。すべての車両はその場で緊急停止していた。かなり大きな地震だ。止まると揺れのひどさを感じた。

「すごい、これがアースクエイクですか。一年に一度はあるんですか」

ベンダソウは座席にしがみつきながら、青くなって訊いた。

「とんでもない。ここのところ、毎日のように全国あちこちで地震があります」

山下はじめ部下たちも、平然としていた。慣れてしまったかのようだ。すると、今度はものすごい轟音と共に、再び地震がきた。近くの山が噴火したのだ。溶岩が噴出し、山肌の木々が燃えるのがはっきりと見えていた。火山弾が飛んでくる。火山灰が雪のように降ってきていた。

「逃げましょう。早く、車を出してください」

ベンダソウはかなり慌てていた。

「大丈夫ですよ。いつものことだから」と、部下たちも山を見ながら煙草なんか吸っていた。

「それより心配なのは、台風ですね、部長」

「そうだな、台風十八号は、関西まで来ているからな。ほら、風が出てきたぞ。まもなく暴風圏に入るぞ」

ベンダソウは次に何が起こるのか判らなかった。雲が早い。木々が揺れてきていた。

「今度は、タイフーンですか」

「ええ、風速六十メートルとラジオのニュースでは云っています。かなり大型の台風だ。各地で被害が拡大しているようです。死者、行方不明で三百人をすでに超えています」

「お願いで一す。こんなところに長居は無用です。早く、車を出してくださいーい」

ベンダソウは悲鳴を上げていた。

「ところが、この先で土砂崩れで通行止めなんです。前にも後ろにも動きがとれません」

と、車が停まっている脇の斜面から石ころが転がってきた。

「これはヤバイぞ。さっきの地震で地盤が緩んだか、地割れができたんだ。逃げよう」

一同、車から離れるや、土砂崩れが起こった。あっというまに、車はぺしゃんこになり、大量の岩石に埋められた。

風がものすごく強くなると同時に雨が降り始めた。ただの雨ではなかった。大粒でバケツをひっくり返したようにどっと降ってきた。道路はまもなく水びたしになった。危険を避けるように、一同は全身びしょりになって、民家のある道路の下へと歩いた。ところが、そこは谷間になっていて、急激に降った雨で、川が氾濫し、床上浸水。一同は胸まで水に浸かりながら、高台めざして歩いていた。

「水が只だなんて、もう二度と云いません。許してください」

「いや、あなたのせいではないですよ。毎年、秋になれば台風は必ず来ますから」

「いつも、こうなんですか」

「ええ、この辺はいつもこうです。今年はすでに台風が七つも上陸しましてね。悪いときに来日しましたね」

てっぽう水で、ベンダソウが押し流されるところをкаろうじて救出された。

「もう、安全も只とは云いません。幸せな国民だと云いませんから、許してくださいーい」

ベンダソウはおいおいと泣いていた。雨の次には強風だ。木の枝が飛んでくる。大木があちこちで倒れた。

「ここにも危険だぞ。困った、周りはずべて濁流だ。どうやらおれたちは取り残されたようだ」

木下部長は悠然と云ってのけた。

「どうするんですか、わたしたち、これからどうなるんですか」

ひとり收拾のつかないのはベンダソウ。みんなは木陰に寄り添って、台風の過ぎるのを待っていた。

「大丈夫ですよ。水が引かなかったら、ヘリコプターが救助にきますから。ははははは」と、みんな笑っている。

「なんという国だ。なんという」

ベンダソウだけが恐怖のあまり震えていた。

第954話

太平の世

津軽藩六代目藩主は、信著ということになっているが、実は、史実には隠された部分というものがあある。歴史に抹消された数行に、薄く肥為という名前が読みとれるのだが、他の古文書には

一切登場してこない。まさに、それは悪意に消された事実上の六代目藩主、津軽肥為の存在を、わたしは発見した。わたしは、郷土史家という立場から、空白の数年を読み取る作業をしていた。それは、四代目信政のときから記録されることとなった膨大な量の藩日記を解読するという原点に立ち返っての地道な仕事から始まった。すでに県の教育委員会と県立図書館、県史編纂室で進められていた津軽藩の日記の注釈付きで出版された本の中では、やはり肥為の名前は一字も出てこなかった。

わたしは、原本にあたることにした。県の文化財だから、慎重にことは進められなければならなかった。そして、意外なところから肥為の名前が出てきた。藩日記の和綴本の表紙の厚紙の中から、日記の反古にされた下りが多数発見されたのである。よくあるのは、襖の裏貼りから貴重な史料が発見されたということがある。昔の人は紙も貴重であったので、フルに再利用していた。

その表紙に厚みを持たせるために貼られた紙が、消された数年間の物語であった。わたしは、打ち震える気持ちを抑えながら、解読してゆく作業を進めていた。

時は享保十八年、華やかな文化が百花繚乱した元禄から十数年を経て、世の中に翳りが出てきた頃の話である。

当時の城勤めの侍、すなわち公務員の日というものは、いまよりは随分となまけたものであった。一般的な武士の日常はこうであった。

七半時(五時)起床、六時朝食、八時登城、午後一時夕食、六時夜食、九時就寝。

八時出勤の昼過ぎまでの仕事で、労働時間は五時間くらいのものであった。

藩主の前に集まり、礼を受けるときは、熨斗目袴を着用、いわゆる正装して謁見することになっていた。

その日も家臣たちが、謁見の間に午前中から続々と集まっていた。じっと、藩主肥為が来るのをいまかいまかと待っていた。

「遅いのう。殿は。いつものことじゃが、まだ寝ておいでか」

初めのうちは、整列して座敷に座っていた家臣たちも、いつもの殿の寝坊には呆れていた。半時正座して待っていたが、次第にくだけてきた。

「やってられのうござります」

「トップからしてこれござりますからな、まったく」

皆は、足を投げ出し、車座になったりして、好き勝手に雑談を始めていた。

「なんでも、他藩においても、殿の噂が出ておりますそうで」

「して、その噂とは」

「ここだけの話でござるがの、バカ殿という専らの庶民の間でもそうザレ歌にされておるとか」

「それは我が藩の恥ですな」

すると、その席に後ろから加わったものが、

「なんでも、顔も洗わずば、風呂嫌いで偉く臭いと申すものがおるとか」

すると、どこかで臭う。

「うんうん、それで」と、近寄っていたものが肥為であった。

「あっ、殿。後ろからのおでましとは不意討ちも同然」

皆、姿勢を正した。

家臣はそれぞれが持ち場に就いて、勘定をしたり、図書頭は、藩日記を整備したりしていた。殿だけがやることがない。馬場での乗馬の稽古も飽きた。武道も、槍も弓もみんな飽きた。さりとて、他にすることもない。奥方は江戸屋敷。常御殿には側室はいるが、昼ひなかから、退屈しのぎに野球拳もつまらない。密かに取り寄せた黄表紙本も、誰かに見られてもいけない。また悪い噂が立つというものだ。それではと、書見台を引き寄せて、四書五経の素読をすれば、ますます眠くなる。

それで、ひとり静かに、石庭を眺めながら表座敷に座っていた。笥の音がポンと鳴る。池では鯉がぴしゃりと跳ねる。風の音がさわさわと流れるように木の葉を揺らしていた。

肥為は、鼻に指をつっこんでは、なにやらやっていた。家老の鹿内博之進は、殿が三十になるまで、傍に仕えて見てきた。

「殿、さきほどより、何を畳の上に並べておるのですかな」

「見れば判るであろう。鼻毛じゃ。それ、十本目じゃ」

これもつまらない。玩具のない子供と同じであった。チチチチと野鳥が飛んできて、庭木の上で啼いている。人の声もしない広い座敷の一隅だ。戦もなければ、大きな事件もない。いまのところ民百姓は飢饉とてなく、平穏無事の毎日を過ごしているようで、世情は安定していた。

肥為は大きな欠伸をした。奥方と子息は江戸に取られているから、話し相手もない。家老のじいと話していても、くそまじめで面白くない。何か、面白いことはないのか。じっと座っていることが退屈を通り越して苦痛でさえある。

「ええい、わしは、こんな生活は嫌じゃ。テレビもない、パソコンもない、ケイタイもないとはな。なんとかしてくれえ」

肥為はごろんとふて腐って横になった。家老も、こくりとうたた寝をしていた。

第955話

あっ

津軽人は大きなことが大好きであった。江戸の昔から、ホラ吹きが多く、大風呂敷で、えふりこき(見栄っぱり)が多い。そこが江戸上方の人には、田舎者と余計に見られてしまう。

本所にあった津軽藩の江戸屋敷は、その大きさや豪華さでは諸藩を抜いていたという。いまの両国は野見宿?神社辺りにあったらしい。

本所には過ぎたるものが二つあり津軽大名炭屋塩原

という狂歌があり、完全にバカにされていた。塩原は炭焼きで立身出世した塩原太助のことで、それはもてはやされていた。

ねぶた祭の起源については、いろいろと説があるが、そのうちのひとつに、文禄二年に津軽為

信公が、京の都の盃盆会で大灯籠を造らせ、都の人たちの度肝を抜こうとしたというのがある。なんとなく、ありそうな話ではある。

お祭り大好き、花火などの派手なものが好きなのは、いまの県民性と同じで、江戸の花火大会の記録で最も古いものより、数十年も早く、江戸時代の始めに、津軽で花火大会をしたという記録が残っているほどであった。

大きいことが好きなのは、歴代の殿様のなかで津軽肥為の右に出るものはいない。なんでも、お調子者で、すぐに人に乗せられ、バカをやらかすのを、津軽ではモツケというが、そのモツケの元祖のような殿様であった。

「のう、博之進、何か、退屈だから、ここで世間をあっと云わせるような大きいことがしたいのう」

肥為は、取る鼻毛もなくなると、今度は、鼻くそを畳のへりに並べていた。

「殿は遊ぶことばかり考えておられるが、先々代の信政様は山鹿素行に師事して、儒学と兵学を学ばれました。津軽新田を拓かれ、治水、植林、山林の整備、産業の振興と、後々の藩の隆盛のためにご尽力されたのですぞ。それに引き替え、我が殿は、なんとも情けのうござりまする」

家老の鹿内博之進は、そんなおちゃめな殿に懇々と説教を始めた。

「産業とはなんぞや。はあ、糸や津軽塗、刺し子などを造ることと申されたな。ならば、それを江戸に売り込むためには、物産をやらねばならん」

肥為は、頭は悪くはなかった。

「その通りです。ただ、まだまだ我が藩の名は、ただただ田舎者扱いで、その、何と申せばよいのか……」

「イメージ戦略がないと申すのだな。それなのだ。まさしく、なんとかどてかいことをして見せて、我が津軽の名を知らしめなければならんの。そのために、江戸の町に出て、みんながあっと云うものをなんとしてでも考え出せえ」

さっそく、家臣が集められ、若手のものを中心としたプロジェクトXが組織された。

そういう話のもとより大好きな人間ばかりが集まっている。誰もが目をらんらんと輝かせ、口角泡を飛ばしながら、議論百出していた。

「ねぶたを造り、日本橋に繰り出そうではないか」

「それは、二番煎じではないか。もそっと、画期的なことはないか」

「ならば、こういうのはどうだろう。今年の参勤交代のときに、全員が女形の格好で江戸入りをするというのは。派手で目立つぞ」

「それは我が藩をさらに安めるだけのこと。しかも、殿が悦びそうで、何か乗ってきそうな悪い予感がする」

「そうだ、わしにいい考えがある」と、一番年上の藩士が手をぽんと叩いた。

「要するに、江戸の大勢の目に留まり、みんながあっと云えばいいわけだな」

「なにに、そんなすごいアイデアがあるのか」

みんなが、膝を交えて寄ってきた。

江戸に正月が来た。肥為は前年の秋より江戸入りをして、久しぶりに正妻と子女と暮らすこと

になった。

本所の津軽藩江戸屋敷では、新年の互礼会が行われていた。

「殿、いよいよ明朝に、決行いたします」

藩士のひとりがすでに手ぬかりなく、計画が進んでいることを肥為に報告していた。

「そうか、大儀であった。成功の暁には皆に褒美を取らすぞ」

肥為もわくわくしていた。明日が楽しみで、今夜は眠れそうにない。

さて、翌日正月二日は快晴であった。子供たちが、川原に出て、凧揚げをしている和やかな正月風景があった。と、その中に畳十二枚はあろうかと思われる、巨大な津軽凧が江戸の空に高く揚がっていた。津軽の名物は凧である。ねぶた絵師たちが、錦絵ばりに和紙に描いた勇壮な武者絵が凧となり、江戸の空に揚がる。その大きさや美しさだけではなかった。人々は、神社にお参りに行く途中の足を止めて、皆一様に空を見上げて指さしていた。そして、口を揃えて云った。

「あっ」

橋の上にも大勢の通行人たちが、空を見上げて云った。

「あっ」

小さな子供たちでも、寺子屋へ行っているチビは、皆、空を泳ぐ巨大な凧を見て、涙を垂らしながらも、

「あっ」と云った。

諸藩の屋敷からも大きな凧は見る事ができた。藩主や奥方たちも、庭に出て、その凧を見上げて云った。

「あっ」

江戸中の町衆が老若男女、口を揃えて云った。

「あっ」

もの見事に江戸中の人をあっと思わせた。それもそのはず、大凧には「あっ」と、大きくその文字が墨書きされていたのだった。

第956話

消 息

正妻より側室がよく見えるのが世の男の恒。津軽六代目藩主、肥為はお国御前の和泉が忘れられない。たまに参勤交代のたびに津軽藩江戸屋敷に人質として置かれている正妻の元美妃と逢えるのもまた新鮮でいいのだが、やはり、釣った魚だから、どうも男の欲として少し離れたものを求めたがる。

元美妃は、やきもちやきで、強く肥為を引きつけておこうとする。それが男には苦痛なのだ。ことに肥為のように自由気儘な生き方をするものにとっては、空を飛ぶ鳳も同然。糸はついてから逃げられはしないまでのこと。いっそ、切れてしまいたいと思うこともしばしばだ。

お国御前の和泉と離れている間は、淋しくて仕方がない。そこで、便りをやりとりすることでなんとか気を紛らすようにしていた。

今も昔も便りというのは嬉しいもので、特に通信手段としてそれよりなかったから、気持ちを伝え合うには歌を贈ったりと洒落ていた。だんだんと、その洒落がなくなると、一筆啓上、おせん泣かすな馬肥やせーのような簡潔で有名な手紙まで現れ、世は次第にせわしくなってくる。

肥為は江戸屋敷からせっせと便りを書いては国元に送った。内容については、現在は一通も残っていなかった。あまりにもくだらないので、時の家老がすべて焼却処分してしまい、後世に伝わることはなかった。

江戸詰の家老の天野惹明は、色ごとにはたいそう理解があるどころか、自ら、毎夜のごとく、吉原に通い詰めるほどの入れ込みようが、江戸の噂にもなっていた。次第に景気の悪くなるご時勢で、藩としては虚勢を張るには、そうした豪遊で見せつけるのがいい。もともと、津軽衆というのは派手好きで、大袈裟で、目立ちたがり家が多い。その気性を持ち合わせているのが家老の天野であった。そのところは肥為と息がぴったりと合う。

「殿、また和泉様に熱々のラブレターですか、うふふふふ」

「よせ、よさぬか。そのような下種の勘ぐりは」

殿が文箱を開けて、筆を走らせているところに来た家老は、肘で殿をこづいていた。

「まあ、殿のお気持ちはよおく判りますぞ。元美妃様は松前からおいでの方、ご気性も荒く、殿が毎日ちくちくとやられておりますのは、我が妻なれば、とても耐えもうさん。それにひきかえ、和泉様は佐竹の出、秋田美人の本場から、しかも優しくあらせられ、それこそ、糸屋の娘は目で殺すそのものでござりますからな、うふふふ」

「その、うふふふは気色悪いからやめてもらいたいものだ。なにか、ぞくぞくしてくる」

江戸から津軽まで奥州街道を走らせる飛脚は、一般庶民の町飛脚から、公用の継飛脚、藩の書状を運ぶ大名飛脚と、いろいろあった。ご公儀の伝達をする飛脚が一番偉く、その通り道は開けなければならない。まさに茶壺の通るときと同じであった。

江戸から津軽高岡まで約二百里を十四日で飛脚は走った。また、飛脚というのは、要所要所の

宿場に待機している飛脚仲間に駅伝のようにバトンタッチされて走るのだが、江戸の最新情報まで口伝えに地方に知らせる役目もしていた。かの松の廊下の刃傷事件が、南部藩に伝わったのが、事件から一週間とかかかっていなかった記録が残されている。如何に、電話のなかった時代に、口づてで伝わっていったかが判る。だが、口づてゆえに歪曲されあるいは尾鱗が付いて、誤報となって伝達されたことも多かった。

「小姓はおらぬか、この文を国元へ送らせよ。速達にするのだぞ。この前は、暑中見舞を出したら、返事が謹賀新年であった。九州なんぞへ出した日には、また翌年の夏になるやもしれん」

小姓は、殿に最新の飛脚情報を進言した。

「飛脚問屋が民営化すると、將軍様が申しておりましたが、それより、殿、最近黒猫の印のついた半纏を着て、なんでも一番早いので大阪と江戸を昼夜交代で走らせて、二日で配達すると申しております」

「なんと、日に七十里を走ると申すか。すっぱ(忍者)でもそんなには走れまいに」

肥為は、さっそくその新しい黒猫の飛脚を頼むことにした。無論、料金はベラボウに高い。当時は、江戸と京の間を六十六時間で飛脚は走った。それが速達だ。並といわれる普通料金なら、半月はみなければならぬ。それも年々早くなってくる。

昔は、元気かと消息を訪ねたら、いまは病に伏せておりますと、返事がきたとする。それはそれはとお見舞いの便りを出すと、返事が、すでに鬼籍に入った由。笑い話のようなことが、あまりに長い配達のうちにある。

珍しく、国家老の鹿内博之進より肥為宛に書状がきた。

一殿、いい加減になされませい。毎日のように文を出すのは結構。しかれども、その通信費が莫大にかかっております。経費節減の折り、他藩でもやりくりを頭に悩ませ、最近地震、飢饉と天災も続いておりますゆえに、お慎みくださいますよう。

肥為は、またじいの小言かと、涙をかねて捨てた。そして、またせっせと側室に便りをしたためる。江戸屋敷の前には飛脚が列をなしていた。ここは商売になる。今日の分が出てからも、「あっ、書き忘れたものがある」と、肥為は、追伸を書いてまた飛脚に持たせて走らせた。たかだか、一行のP. S「こっちは雨じゃ、そっちはどうじゃ」。

あまりに運賃が高つくので、それを容認してきた江戸家老の天野惹明も、殿に一言進言した。

「殿、このような窮乏の時代に、ちょっと派手すぎやしませんかな。便りなぞ、月に一度で足りもうそう。まして、私信とあらばなおさらのこと」

肥為は慚然として云った。

「おぬしまでそのようなことを申すか。飛脚問屋を呼べい。わしが、じきじきに交渉する」

「それは、なんと」

「定額制で使い放題にしてみらうのじゃ」

第957話

売り込み合戦

米が金の代わりに流通していた江戸の中期に、そろそろ米以外の換金作物が各地で作られるようになった。それは、土農工商皆潤うようにするためには、地場産品を造らせることであった。大豆は味噌になり醤油になり、加工すれば米以上の価値が出てくる。宝暦の飢饉は猪ケカジと云われたのは、その大豆を作り過ぎたため、餌にしている猪が増えて、田畑を荒らしたために起こったといわれる。

津軽藩でも、当時より江戸や上方で行われるようになった平賀源内たちが企画した物産に注目していた。今でいう、デパートの特設会場の物産展だ。各地の珍しいものを展示即売するその物産は大当たりした。

津軽でも、全国に出荷したい特産品はある。和紙に塗り物、栗に自然薯。リンゴは明治以降だからまだない。

「殿、我が藩でも、全国的に売り出す銘柄が欲しいものですな。他藩では、織物、茶碗、彫り物から乾物、煎餅とすでに、名物で有名なものを抱えております。それに引き替え我が藩では、藩の知名度もいまひとつ。これといって、売り出すものもない始末」

家老の鹿内博之進は嘆くことしきり。

「ふんふん」

六代目藩主、津軽肥為は、じいの話など聞いていない。

「殿、何をされておるのですか」

「見れば判るであろう。尻毛を抜いておるのじゃ」

「全く、こんな大事な話のときに」

「聞いておる。聞いておるぞ。要するにじゃ、津軽の米でも芋でも津軽塗でも、如何にしたら売れるかということじゃな。敵方の南部藩では、鉄を売り込み、その小藩の八戸では、最近は、なにやら相撲取りを抱えて、藩の名前を知らしめるアドヴァンタイジングをやっておるというではないか」

「殿、そのアドバとか、南蛮の言葉がちょくちょくと出てくるようですが、いまは江戸時代という設定ですぞ、少しお慎みください」

「広告ということじゃ。二万石かそこらの八戸藩の名を全国に広めるには、名力士のスポンサーになればいいということじゃな。我が藩でも、力士は先を越されたから、芸人でゆこうと思うが、どうじゃな」

「げ、芸人とな。そんな身分の低いものを召し抱えたところで」

「いや、じいは古い人間だから、芸人というと、警女やほいど(乞食)を連想するじゃろう。いまは、江戸の若衆たちの間では、岩帯というものが大流行なのじゃ」

「岩、帯？ はて、さて、それはどのようなものでござりますかな」

「じいが横文字は使うなと云うたからじゃ。ロック・バンドとエグレスの言葉ではそう云う。最近、琉球からやってきた、様々な謡い手たちが、江戸を賑わしているそうじゃ。遠く南の国が

ら美女軍団を送り込んでのド派手な広告じゃ。我が藩も負けじと岩帯を出そうと思う」

「して、その方策とは」

「津軽はもとより民謡の宝庫じゃ。それを今様に変調させて、津軽三味線と太鼓の四人組を編成させる。四人はお触れを出して、募るのじゃ。顔と腕と喉に自身のあるものが集まろう。その選ばれた四人に鎧を着せて、三味線を持たせる。組の名をカブトムシと名付けようぞ」

「流行ますかな」

「新民謡を作らせよ。北を歌うと必ず流行る。みちのくひとり旅、北の国から、津軽海峡冬景色といろいろあるじゃろう」

肥為の発案により、さっそく領内に立て札が立てられた。それには芸人の募集要項が書かれていた。城下ではその噂で持ちきりであった。

「おい、聞いたか。三味線と歌で、藩の宣伝をするらしい」

「紅白にも出すというではないか」

「はあ、將軍様主宰の大晦日のあの紅白に」

いつの時代も歌舞音曲は、民衆のものであった。ものを売るには民衆を動かすのが一番だ。

江戸では、突然デビューしてきた津軽から来た四人組の話題で賑わっていた。若い娘たちは、ひと目見ようと、追っかけをしていた。歌舞伎人気をしのぐものがあった。出雲から来た踊子は影が薄れるほどであった。さすが、津軽は民謡の故郷だけあって、若衆の音感はすごいものがあった。ビートのきいたリズムで、じょんがら、山唄とレパートリーを演奏してゆく。投げ銭が舞台に溜まる。それを江戸家老の天野惹明が、我を忘れて拾い集めていた。これが藩の財源になるという実に情けない話だった。

さらに、甲虫という名とメンバーのサインを染め上げた手ぬぐいや、津軽焼きの湯飲み茶碗なども、露店に並べて売られていた。錦絵師は、役者の似顔絵を描いて売った。これすべて津軽藩の売上になる。会場には、肥為の正室、元美妃と子女たちも観覧においでだった。

「さあ、ここで、津軽の甲虫の歌い手が登場いたします。ボーカル担当のコッチーです」

一斉に拍手が起こった。娘たちの黄色い声が飛ぶ。舞台に上がってきたのは、ちょんまげをほだき、ピンピンに立てて、それをカラフルに染めたどこかで見たことのある中年男であった。鎧にもジャラジャラと鎖などをぶらさげて、顔にはおしろいと紅で誰か判らないように派手にパンク風に化粧はしていたが、家老と元美妃は気が付いた。そして、叫んでいた。

「と、殿！」

第958話

儉約令

江戸の太平の世もそう長くは続かない。中頃になると、凶作が続いた。飢饉と天災により、じわりじわりと封建制国家はひび割れてくる。一揆打ち壊しも各地で頻々と起こってきた。時代が閉塞してゆくときに、人間の英知が絞られて、いろんな発明があり、産業が興る。

だが、こんな危急存亡のときを迎えているにも拘わらず、安穩と暮らしているのが津輕藩の殿様肥為であった。

国家老の鹿内博之進と他の家臣たちは日々会議を持ち、如何にして藩の財政を立て直し、餓死者が出、他藩へ村人たちが逃散するのを防ぐかということが討議されていた。

「先代の殿が、城の改築や、増築で、やたらと藩札を発行し、また商家に借入し、果ては、藩士の家禄の借り上げまでやって、なんとか凌いできた有様。金子は底を尽き、やがて米も蔵からなくなった日には、藩は破産となる」

「それもこれも、後は野となれ山となれと、先のことを考えずに、やたら箱ものばかりこしらえてきた先の殿の残された借金よな」

「將軍家もまた諸藩も同じ憂き目を見ているというが」

「この難局を切り抜けるに、年貢を上げようか」

「それはいかん。いまでも四公六民と云われて、年貢が高いと不評なのだ。すべて、弱い民百姓に押しつけてはいかん」

「ならば、公儀に内密に隠し田を密かに開墾しするとか、経費節減では、一番かかる参勤交代には、殿一人で行ってもらおうというのはどうだろう」

「うん、それはいい発案だ。例のカブトムシのときの歌い手の格好で、江戸へ行ってもらおうと、まさか津輕藩の殿様とは誰も思わないだろう。道々で、歌でも披露すると、一分銀ぐらいめぐんでくれる旅人はいるだろう」

家臣にすっかりバカにされている肥為であった。

「前の殿様はやたら錢を使いすぎて、建物にかかりすぎて困ったが、いまの殿様は、何もしないからまた困ったものだ」

「わしから、また説教をしてみよう」

と、家老が立ち上がった。

「殿、というわけで、いまは、領民は皆、暮らしに困っております。第一、凶作で米がなくて、ごはんが食べられないでおります」

まほらっと口を開けたままの肥為は、

「ごはんが食べられないのであれば、お菓子を食えばいいであろう」

と、どこかのお姫様のようなことを申した。

「そんなことではなく、殿、このような一大事に、何か藩主自ら率先垂範してやることはありませんか。かの米沢藩では名君と云われた上杉鷹山殿、そして、松代藩の家老では恩田木工殿、皆、妻子と離縁し、あるいは、城の中に畑を耕して、隗より始めておりますぞ」

「そのような名前は知らんぞ。いい加減なことを申して、読者が判らないとでも思うのか」

「うーん、このようなくだらない小説では、いちいち時代考証などしなくていいのです。それより、殿から、生活を質素にしてくださいとうござります」

「そうか、どのようにすればいいのか」

「そうですね。じいも明日からは一汁一菜にいたしますゆえ、殿もそうしていただきとうござります。さすれば、その噂が城下はもとより、領内に伝わりますれば、民百姓の苦痛は幾ばくかは

救われると存じますが」

「確か、百姓は生かさぬように死なぬようにと、帝王学では習ったぞ。じいもわしも、餓死寸前で、止めておくと申すのか」

「そうではありません。贅沢をせずに、領民が銀シャリを食べられないのであれば、麦飯にさらに増量するためのカデ飯を明日から城内でも食べるのです」

「なんだ、そのカデ飯とやらは」

「お隣の佐竹では、カデ飯の作り方を領民に配布するほどの徹底ぶりであります。米が少ないから、いろいろな野菜穀物と一緒に炊きあげて、ごまかすというものですな」

「それは面白そうだな。さっそくやってみよう」

肥為が命じてカデ飯とやらを作らせた。夜食のときに、家老は殿がどんなものを食べているのか、傍に見にやってきた。

「カデ飯というのは、実に美味しいものであるな」と、肥為はほくほくと食べていた。家老がご飯の中を覗いて驚いた。確かに米の飯は少ないが、増量と称して混ぜているのが、鮑と松茸、海胆と鯛。

「殿、混ぜると云ったのは、米より安いものですぞ。百姓たちは、大根や稗粟を混ぜて食べておるんですぞ。しかも、一汁とはなんですか。蟹から海老、帆立に鮪と、これではブイヤベースの鍋料理ではありませんか。わしの云っているのは、大根の葉っぱと大根のしっぽのただの粗末な汁のことであります。それとたくわんひと切れがあればいいのですぞ」

肥為はぴんと来ない。それはそうだ。生まれたときから城育ち。下々の食事などしたことがない。

「じいが、指示して作らせましょう」

「香の物と、汁だけの飯では喰わんからな。わしとて、育ち盛りだ」

「三十にもおなりになられて、どこが育つと申しませうぞ」

「あれだけは、毎夜使うておるからの。精力がなければ大奥では残業もできもうさん」

「判りました。それでは特別に、殿だけに尾頭付きをお出したしましょう」

「うんうん、楽しみにしておるぞ」

さて、翌日の朝食となった。しずしずと殿の前にお膳が運ばれてきた。腰元たちのそばに家老が付いてきた。

「さあ、たんと召し上がってください」

肥為が見た皿の上には、確かに尾と頭の付いた焼き魚があるにはあった。だが、中は骨だけ。殿はくすりと笑った。

「これは、おかしいら」

ある女流作家が、日本人だけではないが、現代人がかくも幼稚になったのは本を読まなくなったということを新聞に書いていた。確かにいまの若い人たちを中心に本が読まれなくなった。文芸書がベストセラーで十万部を売ったと報じられているが、なんのことはない千人にひとり読むか読まないかというところだから、たかが知れている。大学生でも、月にまともな本を一冊でも読んだかという調査に半数以上が首を横に振った。米国では日本よりさらにひどく、五十人に一人が、ようやく月に一冊の本を読んでいるのだ。

たとえば、自分の周りにどれほどの読書家がいるのかと見渡してみればいい。家族、親戚、友人、隣近所と見てもなかなかいないのではないか。

近年は、ビデオやDVDの普及から、テレビのマチルチャンネル、衛星放送、パソコンのインターネットにケイタイ、テレビゲームと、読書以外の媒体に時間がとられて、本を読むという習慣が敬遠されつつある。

そこで、このままでは無知がはびこり、いろんな犯罪も短絡的で、無目的、幼稚になってきたので、なんとか手を打たないと、大変な世の中になると、審議会で、報告されて、政府は重い腰をあげた。

「総理、法律を改正しましょう」

小島総理は、自分でもあまり本を読まないから、それには無関心であった。だいたい政治家は本を読む時間がないほど、政党と利権、裏工作に忙しいのだ。

「それは、どんな案なのかな」

「はい」と審議委員会を命じられた学者先生が概要を話した。

「読書法と申します。国民に強制的に本を読ませるのです。本を読まない禁固刑、極刑も辞さないというぐらいの拘束力がなければなりません。ただのキャンペーンや、読書週間、啓蒙といった手ぬるいことでは読みませんぞ」

かなり、過激な先生であった。

さっそく、草案ができあがり、さらに慎重に法案が練られると、衆参両院をあっさりと通過可決してしまった。というのも、議員たちにはどうでもよいことと、一部の強行派は、書店組合、古書組合、出版社や印刷の組合、果ては作家やペンクラブの後押しと政治献金でまるめこまれ、世界に例のない読書法が成立施行されてしまったのだ。

菊池は、朝からパチンコ屋に入りびたっていた。仕事は二日連休だ。家でテレビばかり観ているのも飽きた。煙草をくわえて、耳にイヤホンをつけ、演歌を聴きながら、玉の行方を見ていた。すると、そこへ二人の私服警官がやってきた。

「菊池だな。ちょっと署まで同行願おうか」と、連行されてゆく。

警察の取調室に、菊池は慚然として座っていた。

「きさま、先月、提出した読後感だが、あれは盗作ということが判明したのだ。きさまは実際は本を読んでいないのだろう。ええ？」

「あっしは、ちゃんと読みました」

「そうか、それなら、ここにきさまが読んだとする『古本迷宮』という小説がある。そのなかから、質問させてもらう。北村古書店で飼っていた猫は最後にはどうなったか」

「ううん、鼠と結婚した」

「ばかやろう、やはり読んでいないんじゃないか。きさまを逮捕拘留する。月に一冊も本を読んでいないものは、禁固一ヶ月もしくは罰金五十万円だ」

そんな金がない菊池はあえなく刑務所行きとなった。

毎月、警察署か役所に読書感想文を提出しなければならないのが、十八歳以上の国民の義務となった。高校生以下については、学校で指導する。それをどうしても守らないのは、鑑別所送致ということになり、強制的に読書習慣を身につけさせる。活字アレルギーの人にとっては、苦痛だった。刑務所でも、本を山ほど渡されて、読書拷問を受けることになっていた。出所したときには、逆に活字中毒になっていたりするから恐ろしい。

さらに、読書が嫌で、逃亡を図ったものは、指名手配された。そして、一年、それ以上も読書もせずに逃げ回った者が、逮捕されると、死刑ということになる。強盗殺人に匹敵する罪の重さがあった。

新刊書店だけでなく、古本屋も連日の大盛況で、北村古書店は、借金を全額返済するどころか、蔵まで建てた。

代わりに衰退して、国民に見放されたのが、ケイタイやインターネット、テレビなどに関わる産業だった。いまや、誰も歩きながらケイタイを見ているものはいない。その代わりに、二宮尊徳のように歩きながらの読書というのが現代人のライフスタイルになっていた。電車の中でも読書。レストランでも読書。かつてのマンガ喫茶やインターネット・カフェは読書カフェへと業態変更した。

古本屋の北村は、貧乏脱出してからは、気持ちがだらけて、毎日テレビばかり店で見ている。人間、余裕ができすぎると思考能力も落ちてくるものなのか。

突然、店を警官隊が包囲した。客は一斉に店から逃げた。

「おい、北村、きさまの犯行はすでに裏付けがとられている。逃亡など考えずに、おとなしく自首しろ。」

北村はなんのことか判らない。と、はたと気がついた。

「しまった、先月も、その前も読書感想文を未納していた。遊びに忙しくてすっかりと忘れていた」

時すでに遅し。北村古書店のおやじは、御用となった。

国民の知的レベルは少しずつ向上していった。犯罪だけが、ますます巧妙になっていた。推理小説の読み過ぎもあり、読書もいいものか悪いものか。

よく似た顔というものはどこにでもあるもので、同じ町内に住んでいる北村と天野がそうだった。どちらも、一見女にはもてそうだが、あまりにいい男だから、逆に敬遠されて、女性が近づかない。

まあ、年も五十を互いに過ぎたら、もう女云々の余裕もなくなってきた。それが男としての最後の砦のようで何か淋しく、すがりたい気持ちもあった。二人共通の悩みといえばそんなことで、男として認知されるぎりぎりのところで、虚勢を張っている悲しさがあった。

これが六十を過ぎると、もう老人の域で、若い女性が近づいてくると思ったら、ヘルパーさんだったり、横断歩道でうろうろしていると、手を引いてくれたりすると、もう社会の弱者とみなされ、男ではなくなっているのだ。いましかない、いましかという焦りがあった。なんの焦りか。奥さんも子供もいて、まだ愛人がどうのと諦めきれないのか。

そんなときに、町内で頻繁に痴漢が出没した。自転車で暗い夜道をひとり歩きの女性を狙い、後ろから走ってくると、お尻や胸を触って逃げるといふ。それ以上のことに及ばないのは、若い者の犯行ではないと、警察は睨んでいた。しかも、帽子を目深にかぶっていて、よく顔は見えないのだが、ある犯行のときに、女性が暴れて、帽子が落ちたときに顔を見られてしまった。さっそく、似顔絵が作られた。

なんと、その顔は誰が見ても天野と北村であった。ただ、北村のほうが少し太っている。ナイーブそうな男前の顔はどちらともいえない。刑事たちは、さっそく、近所の聞き込み捜査を開始した。

「あら、この顔、ご近所の北村さんにも、似ているわね」

「天野さんのご主人にもそっくりじゃない」

奥さん方が似顔絵を見て話していた。

「その、北村さんというの？」 刑事が訊いた。

「ええ、向こうの白いお家で、古本屋さんをなさっているの。趣味でポルノ小説を書いているっていうから、案外、ありえるかもね」

すると、別の奥さんが北村を弁護するように云った。

「あの方は紳士よ。それは、書くものでは自分のできないことを想像して書いているんだわ。でも、とてもそんなことができるような人ではないわ。優しいし、いやらしいところがひとつもないし、こんなこと云ったら叱られるけど、人畜無害な人よ。あの方の奥さんが云っていたけど、前立腺をやってからは、あっちのほうがるでダメだって」

刑事はすべてメモはしない。そんな動作をすると警戒して何も話さなくなる人がいる。いまは、小さなボイスレコーダーがあり、それを胸ポケットに忍ばせて録音しているのだ。

刑事は北村もマークしていた。あっちのほうがるダメなら、男というのは、鑑賞の方に走るのだ。中年というより老年のいやらしさがそこにある。

刑事たちは、北村の隣の家にも立ち寄った。

「あら、お隣のご主人のことで？ ひょっとして近頃の痴漢のことで調べているんですか？ ほほほ。北村さんはそんなことはしない人です。わたしが保証しますわよ。それは、北村さんは、ドンファンのようにも見えますし、どこか遊んでいるように、女の子をからかったり、女性に対していやらしいことを云ったりはしますよ。でもね、そんなスケベな会話をする人に限って、

中身は真面目なんです。それより、近所の天野さんが怪しいですよ」

刑事たちは、天野もチェックしていた。背の高さといい、顔といい、雰囲気も似ている。北村は自転車に乗ったところを目撃されたことはないが、というのも、どうやら、痔でサドルに座るのがきついらしい。それに引き替え、天野はいつも自転車でふらふらと走っているのを町内で誰もが見ている。奥さんに頼まれて、クリーニング屋に行ったり、買物したりしているところを見られていた。

「どうも、尻に敷かれているらしいのよね」

刑事はそんな証言を得て、家庭内の抑鬱が、痴漢という犯行に走らせることは十分に考えられると次第に天野に関心を深めていった。

天野の隣近所に聞き込みに回る。

「天野さんねえ、やりかねないわね。きっと、犯人はあの人よ」

「一見、真面目そうな旦那さんほど、見えない顔っていうか、裏の顔があるって云うじゃない。そのギャップって怖いのよねえ」

「天野さんに決まっているじゃない。わたしたちを見るとき、あのどこか押し殺したような笑いはうちの娘の言葉じゃ、キモイっていうのよ」

「そうよね、むっつりスケベってあの人のようなことを云うのよね。堅い仕事をしている人って、ええ、あんな真面目な人がっていうような犯罪を犯すものなのよね」

近所の奥さん方の評判は一致していた。犯人というのは、往々にして住民が作る。刑事たちは確証を持って、その夜、天野の家に向かった。

「天野さんですね」

と、玄関で警察手帖を見せられて、天野はぼかんとした顔をしていた。

「あとう、ぼくがなにか？」

天野は、内心、動揺していた。この前、道路で拾った千円札を届け出なかったのがバレたのだろうか。それとも、酔って立ち小便したのが通報されたのだろうか。

「ちょっとお聞きしたいことがありますので、署までご同行願います。いいえね、痴漢のことですがね」

心配して、天野の奥さんも玄関に出てきた。

「痴漢ですって、あなたなら、やりそうだわね」

「ななななな、なんてこと、おまえまで云うんだ。ぼくは、していない。何もしていない」

奥さんにも見放されて、哀れ天野は警察に連れてゆかれた。人は見かけによるものだった。

第961話

ストライキ

とうとう史上初のプロ野球のストライキが始まった。労使交渉が決裂したのだった。土日の書

き入れ時の試合がすべて中止になった。それで、打撃を受けるのは球団だけではない。私鉄やタクシーなどの足も、弁当屋や周辺の飲食店、自販機の売上も激減だ。テレビ局だって、視聴率が下がり、スポンサーが降りると広告収入が減る。

日本プロ野球組織は、こんなことでは屈しない。選手も報酬が減るだけの話だ。誰も得をしないと思いきや、にんまりと笑っているのが、ビデオレンタルと古本屋。テレビも野球がなくて面白くないから、DVDでも借りてきて、映画を観るか、古本屋に行って、マンガ本でも買うか。ということになる。

ストライキは二日やってもなんら効果もなく、NPB側は高飛車な態度を崩さない。

「ストをやって困るのは君たちでしょう。プロ野球だって、企業と同じだ。もし、いま、西武とダイエーが企業合併したらどうします？ そんなことは誰にも止める権利はないはずだ。いまは、どちらの企業も苦しいのだから」

選手会も負けてはいない。

「ひとつの合併を認めると、次々に合併の話が持ち上がるでしょう。パ・リーグが四チームになったら、セパを一緒にして、一リーグにするという目論見も見えました。だけど、世の中がさらに大変になると、その中でもまた合併に継ぐ合併を繰り返したらどうします。そして、最後に、たつた一球団になったら、どこで試合をすればいいんですか」

「それは……、そうだな、思い切って、高校野球に混ぜてもらおうとか」

とうとう、そんなむちゃくちゃな話まで出ていた。

そんなバカな日本野球におさらばしようと、優秀な選手たちは、こぞって渡米して大リーグに入った。年俸の額が違った。だが、向こうも厳しさでは負けない。再契約は目標達成してからだ。

プロ野球は、とうとうどこも二軍を喰わせる資金もなくなり、選手を抱えるのが半分以下になった。そうすると、コーチもいない。経費も切りつめて、みんなギリギリでやりくりしていた。ひとり体調を崩して休むと八人になる。補欠も代打もない貧乏な球団になっていた。

相撲も横綱がひとりしかいないし、面白くなくなってきた。サッカーも身売りが続き、スポンサーが降りたりして、長引く不況が、スポーツ界に暗い影を落としていた。

ただ、プロ野球だけはなんとしても残さなければならない。それは、日本経済のまさに原動力なのだ。国民でも働き盛りのサラリーマンやお父さんたちは、それを楽しみに生きているのだ。スポーツ新聞に、野球、サッカー、相撲が載らないで、夏目漱石特集なんか載った日には、みんなやる気がなくなっているだろう。

ということで、プロ野球選手たちのストライキを最も応援しているのはファンたちであった。あのストに挑むときの悲痛な選手たちの顔を見ていて、涙が零れてきましたと、ファンのおばさんはテレビで泣いた。みんな応援しているから頑張れ選手たち。

と、国民の声はいいが、現実問題が残っていて、解決されないまま、持ち越されていた。ずるずると交渉が続くというのもよくない。ついにストライキは不発に終わった。選手たちは無念の涙を呑み込んだ。

そして、土曜日がきた。昨日から大変なことが起こっていた。その異変にマスコミも選手たち

も気が付いていなかった。中日巨人戦が行われようとしていた。そして、西武ダイエーのナイターも行われようとしていた。何か、様子がいつもと違うことにみんな気が付きはじめた。

「おかしいな、雰囲気はいつもと違うぞ」

そして、選手たちがドームの中に入場したとき、一同あっと息を呑んだ。観客がひとりもない。テレビの前にも誰もいなかった。がらんとした球場で試合が行われたが、選手たちもやる気が起こらない。どうしたのだろうか。視聴率調査はゼロと出た。

まさに、選手たちができなかったことを、ファンがやろうとしていた。

第962話

セピア色の街

南帰と書いて、あきと読んだ。みな、南に帰ったあとは、恥ずかしさと後悔だけが残されていた。秋はなんということもなく悲しかった。ヴィオロンのため息か、コントラバスのおならか。

その不思議なことは、ある秋の日に突然人々の上に起こったのだった。十月のある朝の目覚めに、人々はわが目を疑った。まだ夢を見ているような気分にはたっていた。誰しも、自分の目がおかしくなったように思った。何度も目をこすった。それでも直らないから、今度は頭を叩いた。どうも、視神経というものが、狂ったようだ。後頭部をいくら叩いても、接触不良のテレビではないから、ぱっと点いたりはしないのだ。

高橋和実は、連休のあとの月曜日に蒲団から起きあがって気が付いた。

「あれ、おかしいぞ。二日酔いかな」

そうして、何度も頭を振って階下の居間に行くと、そこには怯えた様子の妻と大学の娘が寄り添いながらしゃがみこんでいた。

「どうしたんだ。一体、何が起こったんだ」

二人共ものも云えないで震えていた。テレビが点いている。やはり、テレビも白黒だ。和実は、急いで居間の窓を大きく開けた。カーテンも開けると、そこに見たものは、色彩のない世界であった。

「色が無い」

空も、木々も、ビルも庭のコスモスも、すべてセピア色に脱色されていた。いや、色が抜けたのではない。退色というか、長く日光に当てている本の色が飛んでしまうのに似ていた。

「おまえたちも、世の中がすべて茶褐色に見えるのか」

和実が、部屋の隅で抱き合っている妻に向き直って訊いた。二人とも、ただこっくりと頷いた。

「何か、科学的な理由があるはずだ。テレビで報道していないか」

和実はいつでも冷静であった。不思議なことは原因が必ずあるものだ。そう確信していた。そ

れを調べようともしないものたちが、ただ、怯え、見えないものにひれ伏し、泣きわめく。

テレビでは臨時ニュースを流していた。車は利用しないようにとの警告が出ていた。信号がすべて同じ色に見えるから、交差点では追突、立ち往生の車で渋滞していた。車のテールランプもブレーキランプもウインカーも昼間は同じに見えるから、走っていて危ないのだった。警官たちが各交差点の中央に立って、交通整理をしはじめた。

道行く人の服装も、スタイルはみな違うが、色がないから、無地ものは同じに見える。トーンだけの違いだった。

和実は、ともかくも会社へ行かねばならないと、鞆を手に外に出た。通行人もみな怖々と歩いている。きょろきょろと誰しも挙動不審だ。和実は、道路は完全に麻痺して、流れないから、諦めて車を捨てて歩く人が出始めていた。クラクションもうるさいくらい鳴らされていたが、次第に音がしなくなった。

電車なら動いているだろうと思ったら、電車もすべて止まっていた。駅は通勤客らでごった返していた。電車も信号で動いている。それが確認できないから危険だという理由だった。駐車場では自分の車が判らなくなり、うろうろとナンバーを見ながら探している者もいた。識別が色別というほど、いままでの生活に色は大事なものであった。

和実がなんとか歩いて一時間で会社のビルに辿り着いた。出社できない社員、遅刻しているものもいて、なんとなく閑散としている。今日は仕事にならないかもしれない。

「よう、高橋君、おはよう」

「専務、大変な事態になりましたね。どういうことなんでしょうか」

専務は、窓辺に立って、都心の混乱ぶりを眺めながら、煙草をくゆらしていた。

「世界的にこの異変が起こっているらしい。これが正常に戻らなかったら、わたしらの会社は倒産だね」

和実の会社はペイントの製造を行っている。ペンキ、絵の具は色が命だ。

「わたしらの会社だけではない。ファッション業界も、化粧品も、食品だって、色がなかったら区別もつかない」

経済的な混乱と、それから生ずる打撃で、今後、世界はどうなってゆくのだろうか。肌の色も区別がつかないとすれば、人種差別はなくなるかもしれない。色で迷うこともなくなる。すべて、うわべだけのことで、どれほど人類は無駄をしてきたかしのれない。

「見たまえ、高橋君。この街を。実に綺麗じゃないか。みんな同じモノトーンの世界にいるということは、何か、親近感すら覚えるようだ。色というのは、グロテスクなものであったのだね。それに、この汚れた街も、なんだか、懐かしい昔に戻ったような気がしないか。そう、ずっと昔の、ぼくがまだ中学のときの東京だね。テレビも、雑誌も、写真もいまだ白黒であった時代の懐かしい街だ」

そう云われると、茶色の街というのは、秋には相応しい。何か、いままでしてきた人類の愚かさをすべて塗りつぶしている。

女子事務員が、震える手でお茶を持ってきた。そのお茶だけは茶色で合っている。全く、お茶らけな話だった。

第963話

溜息

溜息ばかり出る。

「なんだ、溜息ついて」と、今朝も友人に笑われた。

家に帰って、食事の支度をしていると、つい溜息。ばあさんは、女の直感で、

「いま、溜息ついたろう。そんなにここにいるのが嫌なら、向こうの家に行ってもいいんだよ」

と、皮肉たっぷりに云う。じいさんばあさんの面倒をみるために、病院の近いマンションに住むようになり、家族と別居状態が続いていた。そのことで溜息が出るのではない。

げっぷが出て欠伸をしても、そうたいして人は云わないのに、溜息をつく、情けないというような言い方をする。

家族のもとに週に二回泊まりに行くのだが、嫁の小言が溜まっているから、顔を合わせるたびに、愚痴責めになる。つい溜息。

「なによ、溜息なんかついて、そんなにここにいるのが嫌なら、もう来なくてもいいのよ」

と、いきり立って喋りまくる。わたしの居場所がない。また溜息。

溜息とは、どんなときに出るのだろうか。感嘆のとき、辛いとき、どこに溜まっているのだろうか。ふうと出てくる。

そう周囲に云われると、溜息は恥ずかしいことのように思い、人前でも我慢して出さないようにした。ところが苦しいのである。よくよく考えると、わたしは太っているせいか、夜中に例の無呼吸症候群をやっているらしい。それは、昼間もそうだった。あまりに緊張していたり、仕事に精を出しすぎて、忙しさの中に没頭しているとき、息をするのも忘れていたりする。あまりに息苦しくなって、ふうと息を吸ったり吐いたりする。ときには、窒息状態になり、顔が赤くなり、くらくらと目眩して倒れそうになる。そのまま窒息死したらどうしようかと心配していた。だが、息を堪えて死んだという話は聞いたことがない。

食べ過ぎのときや、胃の調子が悪いときに膨満感がある。それで胃が膨らんで、横隔膜を圧迫するから息苦しくなるのだろうか。確かに、胃の具合がいいときは、溜息も少ない。そんなときは、きっと悩みもないくらいすっきりとした一日なのだ。悩みや煩わしさに追われているとき、わたしはすぐに胃にくる。精神的に胃が一番攻撃され、胃潰瘍になったり、胃酸過多になったり、胃炎になったりと忙しい。その胃がやつあたりして、肺を攻めるから、それが溜息になる。これは新しい理論なのではないか。

溜息をなくするためには、悩みを減らせばいいのだが、そうはいかないので、胃薬の世話になる。いろいろと薬を試してみたが、効果がないときは、仕方なく病院行きだ。

「胃カメラにしますか、バリウムにしますか」

と医者が訊くから、

「どっちが美味しいんでしょうか」と、わたしはバカな質問をしていた。医者は真面目なのか、顔色も変えずに答えた。

「そうですね。胃カメラも、蕎麦通なら、つるつると、蕎麦タレに山葵も用意しましょうか。それとも、フォークでくるくると巻いて一気に呑むイタリア式もありますがね。バリウムはどちらかというシェークですから、バナナ、チョコ、ストロベリーと各種好みの味付けで揃えています。そうそう、いま新発売の抹茶味も出ました」

「そうですか。シェークのほうが好きですから、バリウムにします」

ということで、胃のレントゲンになった。ふんわりと盛られたバリウムを手渡された。

「はい、なにも考えずに一気に呑んでください。途中で止めないでね」

と、看護師さんが云うから、よほど不味いものなのかと口にしたら、意外にいけるかもしれない。一気に呑むと、

「おかわりできるんですか」

胃はなんともなかった。精神的なもののようにであった。それだから薬も効かない。ちくちくと痛むのではなく、膨れて苦しいだけのことだ。それがますます酷くなってきて、腹がぱんぱんになり、風船のように膨れてきていた。溜息を出さないから、溜まる一方で、力士のように上半身だけが巨大化していた。

「あら、面白そうね。中が空気だそうね」と、憎き嫁は何を考えているのか、針を手近づいてきた。

「やめてくれ。破裂したらどうするんだよ」

「本当に気が小さい人」と、また嫁にバカにされていた。

わたしは、胃腸科ではなく、精神科を訪ねていた。

「先生、この胃、なんとかなりませんか。溜息でいっぱいになって、苦しいんです」

医師は、問診したあと、簡単な性格テストも行った。そして、結論が出た。

「あなたは、いい人すぎるんです。律儀で真面目で、かわしかたも知らないでしょう。すべて受け止めてしまう。そして、何を云われてもにこにこ笑っている。周りにどんなに罵倒されてもね。いいたいことを云わなければいけません。昔から腹膨れるとは、云いたいことを云わないときに使われる言葉です。さあ、いまから病院の屋上に行きましょう」

そうして、医師はわたしを病院の屋上に連れて行った。誰もいない。都会の騒音だけが反響していた。

「さあ、ここで思い切って叫んでください。日頃、云いたくても云えない腹に溜まったものを一気に吐きだしてみてください」

わたしは、その言葉が下剤いや上剤となって、腹に溜まったむしゃくしゃをどっと吐き出した。腹は空気が抜けたようにすうっとスリムになった。溜息も不満も全部出しきった。

「ばかやろう。おまえとなんか別れてやる。亭主をコケにしやがって。年寄りだからと頼っているんじゃねえや。自立しろ。おれの人生どうしてくれる。みんな勝手なことを云いやがって、おれだって、やりたいことは山ほどあるんだあー」

第964話

お蔭さま

日本に滞在して、何が不思議かって、あることの存在が不思議であった。わたしの名はダニエル・ベッドフォード。生化学の研究で日本の大学の研究室に厄介になっている。そのあるものは、わたしが成田国際空港に到着したときから、どうやら見えないものが、日本人の周辺にあるらしいのだった。会話にときどき登場するもの、それは「お蔭さま」という正体の知れないものだった。日本語の勉強もしてきたつもりが、その動物か人間の化身か判らないお蔭という実体については、習ったことがなかった。

わたしが空港で、出迎えた助教授のミスター田口に、少し発音の悪い日本語で、
「お元気でしたか」

と、挨拶すると、

「ダニー、ええ、お蔭さまで」と、彼は返してよこした。はっとして、わたしは、彼の周辺を見た。誰もいない。出迎えているのは、ミスター田口ひとりである。ということは、そのお蔭というのは、彼の近くにいまはいないものなのだ。様付けで呼ぶのは、日本語では目上の人か、自分より偉い人に付けるものだから、そのお蔭というのは、きっとミスター田口よりは偉い、教授か、恩師なのか。それが、元気と関係あるとすれば、命の恩人か、病気を治療してくれた医師のことかもしれないと思った。

だが、わたしは、そんなどうでもいいことを、彼に訊くのが躊躇われた。

大学の研究室は、設備ひとつとってもアメリカとは格段の差だった。見たことのない機械が並んでいた。その分野では日本が少しリードしていた。わたしは、研究所の所長をしている宮本教授と握手していた。

「しばらくぶりです。学会以来ですね。実に立派な設備ですね」

と、わたしが感嘆の声をあげると、教授も云った。

「お蔭さまで」

今度のお蔭というのは、助教授の云ったお蔭とは違っているようであった。この設備を作り上げたエンジニアのことか。それとも、この設備に対して予算を出した政府のことか。時と場合で、どうやらお蔭という対象は変わるようであった。わたしは、いよいよその姿が見たいと思うようになっていた。一体、お蔭とは、どんな生き物か、どんな人物なのであろうか。

どうも、科学者というのは、訊きたがらないもので、教えたがらないものだ。それで、些細な疑問など、忙しい研究の邪魔になるようで、訊きそびれていた。わたしの目的は、日本のバイオやゲノムといった研究の最先端を覗くことにあった。

ところが、元来のこだわりから、どうしてもそのお蔭という生物らしきものの存在が気になって仕方がない。ついに、恥をしのんで宮本教授に訊いてみた。

「笑わないでください。わたしは、まだ日本語を完全にマスターしていませんから。みなさんの会話にちょくちょく登場する『お蔭さま』という生物か人物について教えていただきたいのです」

すると、教授は笑うどころか、悲しむような顔をした。

「そうですね、あなたがたアメリカ人には、お蔭さまがないのですね」

そう、しばらく教授は考えこんでいたが、

「おまじないとでもいいでしょうか。それを云わなければ、自分の身に降り注ぎ、戻ってくる災いというのがあります。なんとというか、それを口にすることで、罪から逃れられます」

「罪？」

「はい、わたしたちは、こうして幸福に暮らしていられるのは、不幸な人がいるからだという考えが根底にあります。勝者と敗者ですね。この世はゼロサム・ゲームの実証の場なのです。誰かが戦争で死ぬから、われわれは平和に暮らしていられる。誰かが、貧乏しているから誰かが金持ちでいられる。それに感謝をしなければならないという後ろめたさと云いますか」

「そのための呪文なのですか」

「東洋には陰陽説というのがあります。陽の射すところ必ず蔭ができる摂理を天地の自然に方程式のようにすべてあてはめました」

「ふむ、哲学的ですね。禅とは関係がないのでしょうか」

「仏教にもあります。ただ、その考えはさらに古代へと遡ります」

わたしは、日本人の謙虚さがその辺から来ているのかと思いましたが、それでも難しい命題で理解できない。

「どうも、判りません」

「そうですね。わたしたちには、お蔭さまがいつも見えています。あなたがたも、その気持ちになれば見えるんですが」

「いま、見えるんですか」わたしは、驚いて辺りを眺め回した。

「ええ、おりますよ。ほら、部屋の隅にうずくまっています」

そうして、教授は、部屋の隅に向かって一礼した。助教授も、両手を合わせて祈るような真似事をした。

「どうして、わたしには見えないのでしょうか」

「無神経といえ失礼ですが、あなたがたには、敗者を認めない国民性がありますね。破産したものは徹底的に叩く。勝つものだけが英雄だ。自由競争の資本主義社会で、長い間に弱者を見てこなかったために、そうした意識が欠落してきたのです。仏教には喜捨があり、ムスリムにもザカートがあります。あなたがたはそれを義務づけていません。弱肉強食の世界で、切り捨てる非情さがあります。イラクの戦争も然り、経済政策然り」

わたしは、なんとなく自分がいま生きていることの下に犠牲になっている多くの人間がいることを知った。すると、わたしの足下に、なにやら、蠢く生き物が足にすがるようにしているのを見た。

「ああ、なんだろう。いままで、気がつかなかった。この生き物たちは。人間の形をしているが、手足が取れている。肉の塊のようだが、顔があり、哀れみを乞うように見上げている」

教授はしみじみと云った。

「ようやく、あなたにも見えましたか、お蔭さまが、それは、地雷で手足をもぎとられたイラクの子供です。あなたがたの繁栄の下に犠牲者がいる、それがお蔭さまです。わたしたちは頭を下

げて、いつも謝辞を念じています」

見ると、研究室の床を這うようにして、たくさんの子供たちが、ボロをまとい、腹を減らし、水を頂戴と、わたしの足下に這ってくるのだった。

第965話

閉じこもり

若い人のひきこもりが問題になっているが、老人の閉じこもりもまた社会問題になっている。隣近所のつきあいがないから、孤独死が多い。それで町内では声をかけあうという運動をしているところもある。

わたしは、古本屋だから、そんなお宅にちょくちょくお邪魔する。まず、本を処分したいと呼ばれる家の半分がそんな老人の独り暮らしだから、時代を反映している。なぜ独りなのかと考えると、昔は、大方はその町で仕事があったが、いまは、若い人だけでなく、田舎では仕事がない。それで、首都圏で初めから就職するのだ。親たちは田舎に残る。

本を処分したいと、ある大きな屋敷に呼ばれた。

「引っ越しするから、本だけでなく、タンスなんかもいらぬかえ」と、老婆に聞かれる。「いやあ、うちは本だけです。なんだったら、知り合いのリサイクルセンターを紹介しましょうか」

長年の生活で、自然と溜まった家財道具から衣服、食器と、使っていないものが箱に入ったまま、部屋の隅だけでなく廊下にも積まれている。

「広い家ですね。掃除が大変でしょう」と、わたしはがらんとした広い部屋を眺め回していた。「昔は、この家に使用人も入れて十二人暮らしていました。おじいさんが亡くなり、息子たちが県外に就職して、所帯を持ったり亡くなったりと、だんだんと家族が欠けてゆきます。モノだけはいつまでも勿体ないから捨てられないで残るんだね」

不思議なことに、各部屋にテレビが置いてあって、そのテレビがみんな点いているのだ。「テレビがみんな点けばなしですよ」と、わたしは余計なことを云った。すると、老婆はざろりとわたしを睨んだ。何か、悪いことを聞いたように思った。

七つある階下の部屋のすべてのテレビが、誰もいないのに点いているのは不気味だった。誰かがいるようにも思った。

「本当におばあちゃん、独りなんですか」

「あなたも詮索好きですね。ご覧の通り、誰もほかにこの家にはおりません」

テレビだけが笑っている。喋っている。

わたしは、本をダンボール箱に蔵いながら、世間話を老婆としていた。

「ひとりだったら、食事の支度もつまらないでしょうね」

「そうだね。近くの商店が最近、コンビニとかになってね、そこに電話をすれば、食べるものを

配達してくれるんだよ。わたしは、ご飯だけ炊くの。味噌汁もインスタント。おかずもできあいさ」

わたしは、ひとりきりの味気なく淋しい老人世帯を現代日本の象徴のように思った。そういえば、スーパーに朝行くと、前のお総菜が、半額以下で売られているのだが、その処分コーナーに年寄りたちが群がっているのをよく見ていた。一袋百円で、三種類のおかずが一人分食べられる分はある。老人たちはそれに煮酒に使うような安い酒を晩酌用に買っているのをたまに見る。

わたしは、自分の老後のことを考えていた。多分、国民年金だから、いまの値にして五万か六万くらいしか貰えないだろう。その頃もアパート住まいだったら、家賃と光熱費を除けば、食費なんかあるのか。月に一万円も食費がなかったら、やはりスーパーの処分コーナーに走ってゆくよりない。一日二百円で喰うことを考えなければならない。

老婆はほとんど家から出ないという。近所もみんな長年の間に引っ越したり、代替わりしたり、マンションやアパートが建ったりして、住民も替わってしまった。話し相手もないようで、わたしを掴まえたように喋ってきた。

「おばあちゃん、窓も締め切っていると、健康によくないから、たまに開けたほうがいいですよ」

またわたしはお節介をした。

「いいんですよ。いまは物騒だから、中を覗かれないからね」

どうしても陰気くさい空気が籠もってしまう。本もそれで一部黴ていた。わたしは、すべての窓という窓を全開にして、大掃除をしたい衝動にかられた。そして、いらぬものはすべて処分してすっきりとしたい。

「この家は、売りに出しているのだが、なかなか売れなくて。売れたら、東京の息子の団地に行くんだよ。わたしはね、この町から出たこともないんだ。都会で暮らすなんて考えもしなかった。墓は誰がみるんだろうかねえ」

三人の娘息子はみな関東方面だという。親戚も隣町だから、八十過ぎて、老婆は友達も話し相手もない町にぽつんとひとり暮らしていた。病院に行く月に一回だけ外に出るのだという。あとは閉じこもりであった。

老婆はそれでもまだきちんと生活をしているほうだ。別の老人の独り暮らしに呼ばれたときは、玄関を開けた途端、生ゴミの腐った臭いがプーンとした。わたしは、一瞬、入るのを躊躇ったが、息を止めて突進した。台所には食器が山積み、やたら青いゴミ袋が積んである。犯人はそれだった。出せばいいのにと考えた。本人はけろりとしている。多分、この異臭に慣れてしまっているのだ。

本にもその臭いがしみついてとれない。店に持ち込むと、何日もその臭いで悩まされる。いまはいいものが出てきて、わたしは、店の入口でスプレーをする。臭いは本当に一瞬で消えるのだ。

老婆の場合は、女性だから、その辺はきちんとしている。だが、新聞紙でも、紐の類でも勿体ないと、この先、何に使う予定もないのに、きちんと整理してとっておいているのが、廊下の隅に積まれている。

本のタイトルを眺めながら、この家の長い間の歴史をそこに見ていた。家の建て方という本、昭和三十年の本だ。マイホームの夢があった。子供の躰、まだ幼い息子たち。学習参考書まで出てくる。捨てないでとっていたのだ。愛についての随想、そんな老婆の若いときもあった。ダンボール箱に六個。この家の本の歴史はそれに詰められた。

老婆の寂しさを語るように、無人の部屋でテレビだけが喋っている。

第966話

毛豆の季節

夏の青い枝豆より、秋に出る殻に毛の生えた毛豆のほうが美味しいのは何故だろうか。それは、若い日より、熟したのが美味しいのは、女でも好みの問題だ。リンゴなら、夏リンゴの青いのが好きだが、人それぞれで、甘い酸っぱいのと相手も変わる。わたしは、辛口のじゃじゃ馬が好きだった。

どうしても話が女のほうに行ってしまう。秋は味覚、食卓の上が賑やかだ。

この毛豆、近頃はなかなか口に入らなくなった。たまたま、近所のスーパーで見つけて、嬉しくなって買った。そのままゆがいて塩付けて食べるのも好きだが、塩水に浸けて、出しておく、自然と発酵して酸っぱくなる。毛豆の漬け物は津軽だけだろうか。それが秋の味覚としてはわたしの中では一、二だ。やめられなくなり、丼に何倍でも食べる。誰か止めてくれと云うほど食べる。その毛豆を見ると、わたしはゲオルグ夫妻を思った。

以前、フランス人の夫婦がうちにひと月いたことがある。洋菓子の伝授に来たのをホテルに泊めたり、わが家に泊めたりしていた。そのときに、ムッシュー・ゲオルグにビールのつまみにその毛豆を出したら、夫婦でゲタゲタと笑うこと。自分の腕の体毛を指さして、豆にも毛が生えていると珍しがる。その後、毛蟹を出したら、二人とも笑い転げていた。豆だけでなく、蟹にまで毛が生えていると。青森は寒いから、蟹も豆も毛皮を着ているんだと、わたしは訳の分からないフランス語で説明した。

だから、毛豆の季節になるとなんとなく、二十数年前に青森に来た、若きパティシエエを思い出す。

両親が、フランスに行ったとき、田舎町の菓子屋に立ち寄って、つい、社交辞令で、「今度、青森にいらっしやいよ。ご夫婦で」と、云ったものだから、彼らは、てっきりご招待と思ったという。外国では安易にその言葉は使えない。

その年の春に手紙が来て、夏に日本にバカンスで行きたいからと手紙が来た。外人の達筆は、みみずになんも見えない。読めないのだ。フランス語というのは大学で少し嚙ったくらいで、アーベーサーくらいしか知らない。読めないから、短大のカナダ人の先生のところに行って、翻訳してもらった。

わたしも返事を書かなければならないから、汗をかきかき、辞典を引っ張り出してきて、手紙

を書いた。会社の同僚に見せると、

「ちゃんと文章になっているんですかね。願えで、ごぜえますだ、とフランス語でも訛っていたりして」と、笑って信用していない。

「いいんだよ、昔、空、青かったのような単語の羅列でも通じるだろう」

果たして、その手紙が着いたようで、ゲオルグ夫妻は成田空港にやってきた。わたしと父は二人で迎えに出ていた。歓迎と書いた旗を作って立っていた。まだ三十を過ぎたばかりの髭のムッシューは、どこかポーランドのワレサに似ていた。奥さんは長身でカトリーヌ・ドヌーヴといった感じの美人だった。さっそく、ペラペラと喋ってくる。わたしは、ゆっくりとやさしい言葉で話してほしいとお願いした。それでも聞き取れない。

この三ヶ月、特訓した。朝は五時半に起きて、ラジオのフランス語会話をやり、教育テレビを録画して、夜は夜でみっちりと独学だ。そんな付け焼き刃の語学など通じるわけがない。

上野まで電車で来て、そこから新幹線なのだが、駅前のケーキ屋に連れて行った。おしぼりが出てきたから、父はパンと手で叩いて破ると、それがマナーだと思い、二人とも、手でパンとおしぼりの入った袋を叩いて破った。お客がみんな驚いて見ていた。

昼にざる蕎麦を食べさせた。ずるずると音を出して食べるのを見ていて、夫婦は笑いを堪えていた。下品なのだろう。どうやって食べるのかと見ていたら、笑いながらずるずるとやっていた。

父の会社の工場で、半月は菓子の作り方を教えた。あとは、バカンスだから、十和田湖やねぶた祭、弘前と連れ回す。テレビにも出てもらった。宣伝に使っているのが悪いと思った。それでも滞在費がかからないから彼らは助かる。

毎日、日本食でも田舎料理に辟易していた。わたしは、何事もエクスペリエンスだと云って、彼らに強制的に食べさせた。あまりげんがりしているのだから、レストランでランチのフルコースを食べさせると、ようやく生き返ったようにメルシーボクを連発していた。

せっかく日本に来て、田舎の青森だけでは可哀想だと、帰国する三日前まで、日光と鎌倉をレンタカーで案内した。だんだんとわたしも会話に慣れてきていた。一緒に生活するとひと月でも片言は云えるようになるから、外国で一年暮らせば、かなり喋れるようになるのだろう。

懐石を食べさせたり、茶道の真似事をさせたりして、わたしは一緒になってやって初めて判ったのだが、われわれ日本人であっても、懐石も風炉釜でのお茶も初めての体験であった。いつもこんな作法でやっているのかと聞くから、

「とんでもない。こんなことは初めてだ。いつもはネスカフェと納豆におしんこだ」と、云ってやる。外から見る日本というのも、案外われわれは知らない。一度一緒になって覗いてみるのもいい。

ムッシューとは年が近いから、いつも冗談の応酬だった。フランスではフルコースはデジェスティフで終わらない。と、何を話すと思ったら、ベッドインまでの長いコースなのだ。そうした猥談も機知に富んでいい。

毎日、おやすみの代わりに、わたしは、「アドマン(またあした)」と云うのが癖になった。

いよいよ、ゲオルグ夫妻が日本を発つ日。わたしたちは箱崎まで見送りに行った。いい思い出

とお土産を抱えて、フランスの片田舎に帰ってゆく。そのゲートで、ムッシューは毛深い手を振っていた。二人に手を振りながら、わたしは云った。

「アドマン」

すると、二人ともにやりと笑った。

第967話

蔵出し

蔵出しと云っても、酒のことではない。蔵のすべてのものを処分することだった。わたしは古本屋という商売柄、何度か、その現場に立ち会った。

Sさんは文学仲間で、この北国で医者を長年やっていたが、このたび、医院を閉めることになった。健康上の理由もある。年も数えでさ来年は八十だ。

蔵の中に入ると驚いた。漱石などの明治・大正の文豪の初版本がごっそりとある。和本から考古学、古美術、民俗学などの戦前からの名著といわれる高価な本がびっしりと埋まっていた。

この市は昭和二十年の七月にB29の大編隊に焼夷弾をばらまかれ、全市がほぼ消失した。その戦災で焼けた街のど真ん中に蔵がある。わたしは、その扉の厚さを見て驚いた。二尺以上はありそうだ。それほどの厚さの漆喰で保護されていたら、焼夷弾ぐらいでは貫通しないだろうと思った。

「いやあ、屋根の弱いところに直撃されたら蔵も落ちますよ」

と、Sさんは云う。空襲が始まったとき、用意していた味噌樽から、味噌を扉や窓の隙間に塗ったくり、火が入らないようにして逃げたという。焼け野原の写真を見ると、鉄筋の小学校と、寺と、倉庫、銀行などの堅牢なコンクリートの建物だけがかろうじて建物の姿を留めているにすぎない。あとは、綺麗に舐めるように焼けてしまった。街中にひときわ目立つのがSさんの蔵であった。いまは、外側からは見えない。どの家も、蔵を家の中に入れた格好で、戦後は自宅を新築したらしい。わたしは、近所の家に行って、よく蔵の中で遊んだ。

Sさんの家の蔵も外に建っていたのが、いまは、家の中から入るようになっている。本だけではなく、古美術から土器、そういった資料的価値の高いものがガラスケースにきちんと納められている。

問題は、それをどうするかということにあった。わたしを呼んだのは、雑本をとりあえず処分するためであったが、その雑と呼ばれる本にもいいものが沢山あった。

「お金はいらない。わたしは、お金のために出すのじゃないから。君が儲けてくれればいい」

医者だからそれは判るにしても、ビジネスはビジネス、そうは云っても、甘えるわけにもゆかない。

本を縛る作業に、Sさんの友人で、この地方では執筆活動をしている民俗学のMさんが手伝いに連日来ていた。Mさんは、博物館や郷土館の仕事も手伝っているほど、その方面では大家と云われる。わたしの店にもおいでになり、ちよくちよくと専門書を注文してくれたりした。

蔵が家の奥にあるから、広く、長い家の奥より、わたしは台車が使えないので手で運んだ。入り組んだ家の中をかなり歩かなければ玄関には着かない。それを何十往復もするから、汗がびっしょりでふらふらになる。

古本屋で大変なのは、エレベーターのない団地の四階から本をどっさりと降ろすときだとか、重い本を抱えて、一人で何千冊もの本を運び出すときだ。わたしも五十を過ぎてからは、若いときと違い、体力がなくなっている。ぎっくり腰も商売柄よくやった。

汗止めのため、タオルを頭に巻いて、本を運んでいる姿は重労働の作業員だ。本の持ち方が悪かったら、腰を痛めるので、自然にコツを覚えてくる。

作業をしながら、Sさんが、いろいろと手にした本の思い出を話し始めるから、そこで中断する。本というのは、本人にとって、一冊ずつ、いろんなエピソードがある。それだけで、分厚い書誌学の本が書けそうなくらいだ。本にかけてある書店のカバーにも思い出がある。住所を見ると、博多であったりすると、その本の出た出版年から、「ああ、この本は結婚する前に、ある人と最期の旅行に行ったときに買ったものだ」と、いろいろな光景が出てくる。だから、カバーも捨てられないで付けたままだ。作家から贈呈された署名本にも、年号と識語が書かれているから、その当時の思い出話が続く。なかなか先に進まない。

「もう、八十になると、先が見えてくる。わたしも生きてあと何年だろうか。いまは、モノというものはいらぬ。ただ、こうしたコレクションが、四散するのが辛いのだ」

半世紀以上もかけて集めて保存してきた小さな町の博物館だ。郷土に関するものが多いから、わたしは、県の文学館や郷土館に一括寄贈したらどうですかと、勧めると、どうも役所は嫌いらぬ。それなら、私立大学の研究室に寄付というのは。それには乗ってきた。本はできるだけ、次の世代に受け継がれ、活用してもらいたい。そう念願するのが、蔵書家の気持ちだ。自分が精魂傾けて揃えてきた蔵書だ。一冊も無駄にすることなく活かしてもらいたい。古本屋に売ると、全国の必要な方には渡ることになる。目録で通販をやるからだ。それよりどこか一括で引き取るところがあればとSさんは親心のように思っていた。

「Mさんよ、あんたもそろそろ年だ。あんたの書庫も二つあって、相当な学術文献があるだろう。いまから、その行く末を考えておいたほうがいいよ」

Sさんは警告するようにそう云った。子供さんのいない老夫婦もいるが、子供がいても、本を読まない。全く興味がない。親父がしてきたことに反発して大人になった息子たちは、別の生き方を選ぶことが多い。いまの時代、活字離れで本が読み継がれなくなると、いろいろと云われているが、確かに、読む本の種類も内容も変わってきているから、親が読んだ本はいらぬと云うかもしれない。

ここに、大変な問題が、各地で起こっていた。図書館でも家庭でも、本に関して、断絶が起きているのだ。親から子に受け継がれない本は、ゴミとなって捨てられる運命を辿る。いつからか、どこかで、切れていたのだ。

わたしは、現代もこれからも書物の受難の時代と思っている。それは、いろんな文化がいろんなところで粗末にされ、廃棄され、まるで戦災で焼き払われているような時代なのだ。

Sさんは蔵から出して、すべての本を安全で活用の道を探るところへ疎開させようと考えていたが、それはどうだろうか。いっそ、このまま蔵に仕舞っておいたまま、わたしは、戦時中のよ

うに味噌を持ってきて、蔵を封印したい気分になられた。それがいまは最も安全なような気がして。

第968話

月見る月

月見る月はこの月の月。十五夜がくる。薄を飾り、秋の収穫を供える習慣はもう見られないか。

月見をしようと息子に云うと、天体望遠鏡を持ってきたという笑い話がある。

「月見は、ただ月を眺めているんだ」と、わたしが云うと、

「月を見ているだけって、何も面白くないじゃないか」

そうくると思った。

「ほら、月には餅つき兎が見えるだろう」

「全然。あれはいろんな海と呼ばれる平らなところとクレーターがあるから、影ができていますんだ」

世の中、科学的になったら風情がなくなった。花も観賞するということがなくなると、花の組成などを調べる視線で見たりするのだろうか。

「昔の人は、十七夜月といって、立って月の出を待っていたり、居待ち月、寝待ち月と、生活の中に月は欠かせないものだったんだ」

「ふーん、暇だったんだね。ケイタイもパソコンもテレビもなかったからだね。他にすることがないのかな」

短詩型文学を若い人たちがしなくなり、どこの結社も老人ばかりで、そうした文化がこの先、どうなってゆくのだろうかという危惧感が、全然関係ないようだが、この話にはある。情緒がなくなると、自然観が衰退してゆく。

わたしも、独身の頃に天体望遠鏡を買って、机の上に置いてあった。仕事から帰ると、缶ビールを呑みながら、月を見ていた。百倍以上あったから、クレーターもはっきりと見える。覗きながら、別の世界にいるような気分になった。他の星雲や惑星を眺めていても、わたしたちが、宇宙の中で偶然に生かされているという事実を目の当たりに見て、ぞっとしたことがあった。その孤独感はたまらない。一種の恐怖体験だった。

そのときから、月に兎は見えなくなった。古代ギリシアの人々が見てきた星座の形も、いろいろなものに見えなくなると、わたしは情緒をひとつ無くしていた。すべてのものを元素で考えるようになったら、この世界からお伽噺も空想も夢も消えてしまいそうだ。

老母が、先頃の映画「赤い月」を見て、その原作のなかにし礼の本を買ってきて読んでいた。自分たちも満州にいて、その赤い月を見た記憶があるからだ。生まれてこの方、不思議な体験

といったら、その大きな赤い月を見たことぐらいだった。

あれは、昭和二十年の敗戦まで数カ月のときであったという。ソ連国境に近い、アムール川の傍の山の中の営林署にいた。父はすでに現地召集されて国境警備の部隊に配属されていた。母がひとり、赤子を抱えて留守していた。

とある夜、とてつもなく大きな赤い月が天上に出ていた。

「あれはなんだ」と、近所の人たちも一斉に外に出て、空を指さしていた。いままで見たこともないような巨大な月が真上に出ている、不気味な血の色をしていたという。

「あれはなんだったんだろうねえ」と、いまでもよく話題に出すから、わたしは笑って、

「そんな、ありえないことだ。地平線の近くでなかったのかい」

「いや、真上だったよ」

「大きく見えるのは、案外と地平線の近くや山の端で見えるんだ。周りに比較するものがあると、目が錯覚を起こすんだね。それと、赤い色は黄砂などの塵が赤く見せるんだ」

と、いとも簡単に母の主張をねじ伏せようとしていた。

「いや、あれはそんなもんじゃないよ」と、頑固な母は科学的な根拠を否定して、譲らない。

「みんなして、この先に何が起こるんだろうって、噂していたもの」

大変な事態が起こる予兆ではないのかと、迷信のように時の人々は信じていた。それは当たった。いままで何事もなく、戦争から隔離されていたような平和な満州が、八月九日を境に地獄と化してゆくのだから。

息子が科学的な質問をする。

「月の表面にはどうしてクレーターがいっぱいあるのかな」

「おお、それはいい質問だ。子供電話相談に電話しなさい」

と、逃げようとしたが、わたしはある話を思い出した。

「それはだな、地球には大気があって、隕石でも地球に突入してきても、摩擦熱で燃え尽きてしまい、地上には破片しか到達しないんだが、月には大気がないから、大きなのが直にぶつかってしまうのだ」

「でも、それは、小さいやつだろう。あんな大きなクレーターだから、きっと巨大なやつがぶつかったんだ。そんなのが地球にどうして当たらないのかな」

「いい質問だ。月は地球の衛星だろう。地球を防衛するために神様が造ったものなんだ」と、話はいい加減な嘘になってくる。

「それで、地球にぶつかってくる小惑星や彗星をみずからの身を投げ出して身代わりになったのだね。月とは実に献身的で可哀想な実体なのだ」

「それじゃ、宇宙から飛んできた彗星なんかを、月の周期に関係なく、向かってきたら、地球の前に立ちふさがるようにして待ち構えていたというの？」

「そうだ、だから、地球にはほとんどクレーターというものがなく、動物たちも安心して進化を続けられてきたんだね」

「なんだ、そうだったのか。月って、ゴールキーパーだったんだ」

だんだんと話が情緒の世界から離れていった。月を見ると、何故かサッカーを思い出す。とて

も俳句なんか浮かばない。

第969話

抽 選

自家製の古書目録をやって、十五年になる。その間に七十五号を発行した。一回に三千冊平均の本を掲載しているから、いままで二十二万冊以上の本を出してきたことになる。それでも、半分も売れない。

注文は毎回沢山来るが、同じ本に注文が殺到するときがある。一冊の本に十人くらいから注文が来ると、「しまった」という気分になる。お客のほうは何枚も上手だから、こうした失敗は数知れず。高価な本を安く売ることは、お客の興奮度で判る。まだまだ勉強不足だ。

「せっかく、欲しい本があっても、いつもお宅は売り切れ。うちは九州だから、目録が届くのは青森からだとな日はかかる。先着一名様とやっているから、地元や東北の人は早く落手するだろう。なんとかならんもんかね。近畿以南から先に郵便を出すとか、ハンディをつけてもらわねば」

そんな苦情が電話できたから、去年から目録販売は先着順でなく抽選にした。よそもやっていることだから、いまはあたりまえになっている。そこで、目録にいついつ抽選いたしますと書いて出す。

それでも、欲しい本があると、「価格の三倍出すから、なんとかうちに」と、裏取引も出てくる。三倍はおいしいと、すぐ乗らないところが真面目な古本屋。融通がきかない頑固なオヤジなのだ。

中には、疑って、本当に抽選しているの？ と聞いてくる。

「ええ、うちでは、警察官立ち会いのもとに、時には自衛隊も呼んで厳正にやっています」

というのも怪しい。実際は、メールやファックス、はがきや電話注文などの注文書を箱に入れて混ぜたら、目を瞑って一枚抜く。ただ、人情からいうと、たった一冊の注文の方をどうしても優先したくなる。店としてはどっさり注文いただいた方が上客なのだが、一冊外れたらお終いというのであれば可哀想だ。うちに本を注文して当たる確率は、一冊だけはがきに書くことだと、手のうちを見せてしまえば、次回から、みんなはがき一枚ずつに一冊の狙っている本を書いてくるのではないかと。ただ、どうしてもダブるからやむなく抽選となる。

たった一冊の本といっても、古本屋にしては取り扱う膨大な本のほんの一冊にしかすぎないが、お客にとっては何十年も探し続けた貴重な本であったりする。軽はずみに考えると大変なことになる。

「はがきに二重丸をつけて、期待していますと書いたでしようが」

と、抽選で外れた方から脅迫電話がくる。

「すみません。もうひとりの方は、はがきに三重丸をつけていたもので」

そのお客は、後悔して、今度出すときは四重丸にしようと思うのだった。

本の恨みは恐ろしい。食べ物の恨みなんてものではない。あるお客から、外れた本の行方を教えてくれと何度も電話をいただいて辟易したことがある。相手が古書店なら教えもするが、一般の方は絶対に云えない。

抽選まで、夜も眠れず、うろうろしていたと、遠い親戚の人から聞いたことがある。そんなに楽しみにされたり心配されるような本を取り扱っているのかと驚く反面、古本屋をしてよかったと思うときである。

抽選が終わると、すぐに電話が来たりする。数百名のご注文のひとつひとつをいちいち覚えていないので、送るため揃えた本の山から探すのも大変だ。

「どうでしたか、わたしの注文は。当たりましたでしょうか。調べてもらいたいんですがね」

そんな電話が一番困る。丁度、本を送るための梱包に忙しいさなかのことだ。早く包んで送らねば、あちこちから、まだかという催促の電話も来る。一人でやっているから、抽選結果はお知らせいたしません。一週間しても来ないときは外れです。と、目録にも明記してあった。大方の古書店はそうしているようで、当たり外れは通知しないことになっている。本の発送をもって当選に替えさせていただきますとは、大手さんでも使う言葉だ。

気持ちは判るが、そんな電話が殺到すると、作業が中断して発送が遅れる。

「なんとか判りませんかね」と、電話でねばられると、うろたえてしまう。

「はい、多分大丈夫でしょう。今回は重複注文があまりなかったもので、多くの方に本は送れるようです。ただ、外れたのは、たった一人だけです」

「よかった。たった一人だけですか」

「そうです。よほど運のない方だったんですね。そういう人って、なににつけても不運の方で、宝くじでも当たったためしがないとか、奥さんも一生の不作とか、果ては逃げられたりね、どうしようもない人っているもんですね」

「はははは、そうですね、バカな人っているもんです」

「生まれたときから何をやってもダメな人ですね。裏目裏目についていない。いつも貧乏くじだ。それでも諦めないところがすっかりバカで。はははは」

電話でお客と笑いあっている。それでやめればいいものを。つい話に調子がついた。

「それでね、そういう人って、案外と組違いのひとつ手前とか、一億円の宝くじの前後賞のさらに前後だったりするんですよ。すれすれでいつも大物を逃している。人生をかすっているんです。全く、運のないバカな人がいるもんだ。はははは」

お客は安心して電話を切った。わたしは、愉快的気持ちで、そのバカなお客の名前を見ようと、たった一枚の外れのはがきを見てみた。そうしたら、たったいま電話で話をしていたお客だった。さあっと血が引いた。

第970話

いまわの際

わたしにずっと酸素吸入と点滴が続けられていた。もう、病院のベッドで危篤状態になって一昼夜が過ぎた。呼吸が荒くなってきた。意識が朦朧となってくる。医者が聴診器を取り出して、わたしの胸にあてがっていた。看護師がわたしの脈を診ている。家族が病室に入れられた。いよいよお陀仏か。助からない病気だとは知っていた。インフォームド・コンセントで、いまは患者も知る権利がある。

わたしのベッドの周りには二十五になる息子、まだ嫁に行っていない二十七の娘とわたしの妻、と三人が取り囲むようにして立っていた。わたしにはもう何も聞こえないのだが、ひたすらわたしの名前を呼んでいるようであった。わたしの耳には自分の呼吸するような機械的な音より聞こえない。わたしはすでに機械の力を借りて生きていられた。すべての装置を停止すればとっくに死んでいるのだろう。延命のための機械がよくなったお陰で、死ぬべき人間も数日から数ヶ月も無駄な生をこうして病床に横たえることになる。

医者は、難しい顔をしていた。もう時間の問題だろう。一分、いや三十秒でわたしは絶命するかもしれない。死ぬとはどんなことなのだろうか。前に本で読んだのだが、人間の死ぬ瞬間には光を見ろという。そして、お花畑に立っているような美しい光景を目にして、安らかな気持ちになり、全く苦しまないどころか、ヘロインでもやっているかのようないい気持ちになってゆくのだと。それは、死の世界から生還した人の証言から明らかになった。どの人も、同じ体験をしているから、科学者たちは、きっと、人間の死ぬときには、そのようなプログラムが初めから組み込まれているに違いないと推測していた。

わたしは、いろいろな体験をしてきた。まだ六十前だから、死ぬには早すぎるのだが、死んでもいいような経験をいままでしてきた。

人間の持つ欲望のいやらしい面を嫌と云うほど見せつけられてきた。何も、仕事だけではない。社会がどうのと大きな土俵でものを考えずとも、家族という小さな単位の間人間関係の中でも、それは縮図のようにわたしには見えるのだ。ただ、どんな経験をしてくるても、死に際という経験だけはしたことがない。

よく、人間は死の間際に本当の姿になるというが、わたしの場合はどうあがいても仮面もつけていないのだから、どう変わることもない。それより、わたしの死ぬ寸前の家族の顔が見たいものだ。本当の顔を見せるだろうか。

妻はわたしよりひと周りは下だ。まだ、美貌が残っている。エステにいままでどれほどの金を注ぎ込んだものか。女優と同じで、自分の肉体にいくらでも投資すれば、ある程度若さというものは保てる。いまはそんな若さも金で買える時代なのだ。

そこまでして美貌を維持したいというのは女の夢い願いと云うのもない。妻の場合は愛人がいるのがはっきりと判っていた。しかも、ずっと年下のホストに入れ込んでいた。わたしは、どうせ何もできない体なのだから、それは知っていて知らないふりをしてきた。

妻はわたしに多額の保険も掛けていたし、死後はその男と再婚し、そっくりとわたしと入れ替えるつもりなのだ。いまは、悲しむふりをしている。真迫の演技じゃないか。よくも平然と涙なんか零せたものだ。

娘も、財産より欲しいものはない。すべて、金だ。ブランド商品に囲まれていれば幸せなやつで、彼氏もそうした金が自由になるやつを選んでいた。薄っぺらいいま流行の女で、その辺は妻に似ていた。わたしの身の周りの世話をするような顔をして、小遣いをせびっていたのだ。必死で、パパなんて叫んでいるが、本当は死んでくれたらさっぱりするのだ。なぜなら寝たきりになって介護だなんて、デートをする時間を潰すからだ。そして、財産さえ入れば、あとは親子三人、いや四人か、で新しい浪費の生活に入る。わたしが締めてきた分を取り返すように使おう。

息子も、何を考えているのか判らない。大学を中退すると、仕事にも就かないで、毎日いい若者がぶらぶらと遊んでばかりだ。わたしは、小言を云うと、逆上したり、ぷいと家を出たり、親父は煙たい存在でしかなかった。やたら、電化製品やパソコンばかり買いまくり、部屋の中は遊園地さながらだ。こんな男に育てたつもりはなかった。やる気がないから、就職もせずに、いつまでも脛を嚙っている。

いまは男泣きに泣いて、わたしを必死で呼んでいるのだが、それとて、小銭でなく、もっと遊んでくれる金が入るのだ。わたしの手を握りながら、早く死ねと心の中では呟いているのさ。

家族は希薄な関係になってきていた。それが、すべて、裕福で気儘な生き方をするだけの余裕のある家庭であったから墮落してしまった。すべて利害関係だけでくっついている家族という名の砂糖菓子だ。

わたしの周りが慌ただしくなってきた。医者はなにかを叫ぶと、わたしの腕に太い注射をした。もう終わりだ。なにをしても無駄だというのが自分で判る。視力も落ちてきていた。聴力なんかすでにない。うすぼんやりと視界に妻と息子、娘の三人の泣き叫ぶ顔だけが見えていた。この長い一分の間に、わたしはいままでの家族の嘘とつくりを思い出してきていた。あれもあった、これもあったと、すべてが今日のこのときのための創作であった。だが、わたしは一縷の望みを繋いでいた。家族というものを最後の最後までどこかで信じていたかった。それは、わたしの思い過ごしで、本当の涙を流しているのだと。

「ご臨終です」と、医者は時刻を告げた。視界が遠くなってゆく中で、わたしが最後に見たものは、三人の家族のにやりと笑う顔であった。

若いときから親父はもてた。町内でも三羽鴉と云われていた。なんの鴉かという、浮気鴉であった。歴代の愛人は十指に余る。商売も右上がりであったし、人任せにして遊び歩いて、なんとかなったいい時代だ。ふところも豊かであった。羨ましかった。同じ年の頃のわたしは借金に喘いで、あくせくといまも働き、そんな余裕も時間もない。愛人に貢ぐどころか、逆に貢がりたい。

わたしが小さなときは、おふくろも強かった。わたしと妹の手を引いて、愛人のところに行き、きちんと話し合ってきた。手切れ金を叩きつけて、よその町へと行ってもらったという。ものごころのつかないときで、そんなおふくろの勇猛果敢な格好を傍で見ているにも関わらず、覚えていないのが残念だ。

まさか、夫婦間で、そんなに長い間に痴話喧嘩が絶えなかったとは思ひもしなかった。子供の見ていないところで夫婦のすさまじいバトルがあったのだろう。特に我が家の歴史に残る合戦は、わたしが生まれるときのことであった。まだわたしが腹に入っていたとき、親父はおふくろにアップーカットをくらわした。それでおふくろの顎が外れて、骨接ぎに行ったという。その後生まれたわたしが、子供のときから顎がかくかくと鳴る。それはいまでもそうなのだ。そして、あるとき、長い飴を口に入れたとき、たまたまその飴が口の中で縦になり、つかえ棒のようになって取れなくなった。大きく口を開けたら、かくんと顎が外れた。外れた顎は閉めることができない。

「あわわわわ」と、口を大きく開けたまま、わたしは骨接ぎへと走った。その格好はとても誰にも見せられない。

「おまえが顎が弱いのも、お父さんのせいなんだよ」と、おふくろはいつも云うが、そんな外傷が遺伝するものか。その理屈なら、たんこぶや青タンまで遺伝して生まれてきそうだ。

いまはもう時効だからすべてをバラすが、それは恥ではなく男の戦歴だ。ということ、いまは叱られるからヘタなことは云えない。

わたしが社会に出て、親父の仕事を手伝うようになってから、ちよくちよく親父が夜出かける飲み屋があったのが気になった。いろんな人の目撃情報から、どうやら、堤川という市内を流れる川端にある小料理屋に消えてゆくという。わたしは、そこが怪しいと睨んでいた。おふくろが可哀想だということもある。自分だけもてたと羨望もあった。ある程度年取ると親というより男の気持ちが判り、どうでもよくなるのだが、その頃はわたしも結婚はしたばかりだが、二十代で若かった。

友達とたまたま呑み歩いて、次にどこへ行こうかということになったとき、
「そうだ、いいところがあるんだ。前から入ってみたいと思っていた店だ。綺麗な子がいるらしい」

そうして、タクシーで川の傍の飲み屋街に着くと、わたしは細い階段を上がって、二階のあまり綺麗ではない小料理屋ともスナックともつかない店へと入った。カウンターの中には婆さんが二人いた。友達はきょろきょろして。小声で聞いた。

「どこに可愛い子がいるんだよ」

わたしは期待が外れた。どう見ても中にいる人は六十近い。和服をきちんと着ていて、その上から割烹着を付けている。柔和な笑顔が感じのいい人であった。他に客は年寄りばかりだった。

滅多に若い客は来ないような店であるらしかった。何か、われわれが場違いな感じがしたであろう。

「何にいたします」

にこにこ優しそうな笑顔がたまらない。きっと、この人だ。この人が親父の愛人に違いない。おふくろにはないもの、それを女将に見てとった。

「とりあえずビール」

友達はがっかりしたようにしてふてって呑んでいた。わたしは、料理を作る女将の横顔をちらちらと盗み見ていた。やはりなあ。こんな人が親父の理想なんだ。親子で一番それが判る。親子ゆえに判る。

料理が出された。どれひとつとっても手づくりでおふくろの味だ。心づくしもあり、なんとなく嬉しくなる。すると、突然、女将はわたしに云った。

「あの、木村さん？ 間違っていたらごめんなさいね」

「はい、そうですが」

「どうりで、お父様のお若いときにそっくり」

当てた。一発でバレた。女将は急にサービスがよくなり、あれこれと頼んでいないのに手料理を出してきた。

かつて、町中でロマンスというクラブにいたというのは聞いていた。綺麗な人であったろう。

それからのわたしは、その川端の飲み屋に入り浸ることになる。親父と顔を合わせないようにして、わざとずらして行っていた。わたしには判る。親父の惚れた理由が判る。

「ここに来ているのは、親父には内緒にしてくれよ」と、女将に口止めを頼んだ。親父の愛人の店に来ることが秘密を持っているようで楽しい。

ある日、仕事が終わったとき、珍しく親父がわたしを酒に誘った。どこへ連れて行くのかと思ったら、タクシーは川端へと向かった。

「おまえ、川端の二階の店にちょくちょく行っているそうだな」

親父は、こいつ、とわたしの頭をこづいた。

第972話

本日開店

わたしはいつも古本屋の客であった。一番好きな店は古本屋であった。あまり好きになりすぎて、自分がそこに座っていようとは想像もしなかった。

その年の春に、わたしは家内に相談した。

「このまま、社員に給料を払ったら、われわれは三ヶ月も我慢しなけりゃならんという現状では、食費どころか幼稚園の費用もアパート代も払えない。おまえも大変だろう。おれは、自分の本を売ることにしたよ。古本屋に売ったって二束三文になっちゃうから、この蔵書で古本屋をやる

んだ」

だが、そうは云ってもすぐにはできない。わたしの持っている本は専門書や文学系で、あまり売れそうにない。さりとて、このまま潰れそうな会社においても生殺し状態だった。

「やはり、マンガ本もなければならぬから、よし、これから半年かけて集めよう」

ところが、どうやって集めたらいい。蔵書は四畳半二つが本でびっしりだった。わたしは、四方が本で囲まれている部屋を書斎にしていた。それだけでは一万冊もない。親父の本を入れても一万四千冊。店の棚を埋めるためにはもう少し欲しい。しかも、いまの蔵書では偏りすぎている。

わたしは、あれこれと思案した挙げ句、市内のちり紙交換さんにハガキを出すことにした。ちり紙交換なら本もかなり持っているはずだ。

店の名前もいくつか考えていて、青森の名産の果物の名を候補に揚げていた。それなら親しみがあるだろう。高木恭造に憧れていたから、彼の方言詩から「まるめろ文庫」と名付けた。一番先にそのまるめろ文庫の値札をワープロで作し、裁断すると、家内と二人で夜遅くまでかけて、一冊づつ本に値札をつけていった。

さっそくアパートにちり紙交換さんから電話が来た。いままで他の古本屋に持ち込んだが、その奥さんと口論になり、面白くないから別の店にしようと思ったという。

車で行ってみると、スクラップが積んである家の中に本がきちんと分類されて用意してあった。わたしは、初めだから高く買った。相手は気をよくして、これからも頼むという。

「ところで、お店はどこにあるの？」

と聞くから、ドキリとした。

「いま、開店準備中で、在庫を集めているんです」

場所もまだ決まっていない。車一台分のマンガ本や推理小説があった。嬉しくなった。千冊はあるだろう。

本が足りないと、あちこちの親戚や友人、姉妹からも本を譲ってもらった。そうして、アパートの廊下や階段、押入なども本でいっぱいになってゆく。

家内といい物件を探して歩いた。夏だった。暑い日差しがきついなか、わたしたちはできるだけ、アパートから歩いてゆける近くの貸店舗を探した。家賃などもできるだけ安いほうがいい。なぜアパートから近いほうがいいのかというと、そのころは三人の息子が上は小学三年、下はまだ三歳だった。何かと、子供たちも歩いてこられる距離がいい。

「末っ子はどうしようか」夫婦で相談だ。

「やはり、保育園に入れよう。おまえが朝から夕方まで店番していると、会社から帰って、夜はおれが店に座るから。その間は保育園だな」

ようやくのことで、商店の並ぶ、旧国道に面したところに間口二間、五坪の小さな貸店舗をみつけた。さて、店をやるにしても資金がない。実家の押入にあった書画骨董を持ち出して好きな友人に売ると、その資金が出た。親には内緒だった。

さっそくその金で店舗を借りた。だんだんと古本屋が現実のものになっていった。会社のつきあいの業者はたくさんいるから、みんな安くやってくれた。看板を頼み、テントもつけた。レジ

に机、そんなに備品はいらない商売だ。事務機の間屋から卸し価格でスチールの本棚を購入し、店に並べてゆくと、なんとか形ができてきた。開店チラシなんかも、自分でワープロで打って作り、その原稿をなじみの印刷屋に頼んで刷ってもらった。

開店日は八月二十六日と決まった。夫婦で夜になると、夏休み中の子供たちにも手伝ってもらいながら、アパートからせっせと運んでは本棚に本を並べた。時間が空くと、日曜日などに子供たちにも手伝ってもらい、開店チラシを遠い団地に配りに回ったりした。

そのころ都会ではあちこちに筍のように出てきていた新しい古本屋のスタイル、二分の一屋でやろうとしていた。古本屋というのはかなりのキャリアがいる仕事だが、いまのブックなんとかと同じで、なんでも定価の半額で売るといふ古本屋のスタイルならシロウトでもできそう。看板にも大きく「本が定価の半額の店」と書いた。

わたしは、「喰う」ために仕方なく大事な蔵書を売らねばならなかった。そう決意したときから、本はわたしの中では本でなくなった。すべてが商品になった。レコードも十五年もかけて千枚くらい集めたものを惜しみなく店に並べた。もうどうでもいい。コレクションは解体だ。レコードは一枚づつ、盤質も値札に記入してゆく。

いよいよ開店の日だ。朝刊に新聞折込でチラシを入れていた。店の玄関に本日開店と大きく書いた紙を貼った。わたしは仕事があるから会社へゆく。家内一人に店を任せる。大丈夫だろうか。チビは今日から保育園だ。六時までは預かってくれる。ところが、会社に行くとき置いてゆくのだが、泣いて手こずらせた。

「ぐるりんこを三回やってあげるから。そうしたらいいだろう」

ぐるりんことはチビの両手を持って、鉄棒のように前転させるのだ。それが好きなのだ。それからは毎日、それを保育園の玄関でやらねば泣くのだ。初めて親から離れる。甘えんぼうの末っ子だ。

親父は古本屋をバカにして、

「おまえ、古本屋なんかやるんだって？ 一日どれぐらい売るんだ。二千元か？ 三千元か？」

と、笑っているが、それでは食えない。一日一万が目標だ。そうすればなんとか食えるのだ。わたしは、一日そわそわして仕事が手につかない。

家内から電話が会社に入る。

一あなた、本の仕入ですってよ。

本を売りたいという電話が三本も来ていた。わたしは仕事を抜けだし、会社のライトバンで本を買いに家々を回った。いい本が入ってきた。店を持つとはこんなことなのだ。読みたい本が山とある。嬉しい。と、わたしはいまだどこか古本屋の客でもあった。店に夜、顔を出すと、家内はすっかりと疲れた様子で、二人でレジを点検した。初日の売上は二万三千元であった。

夕方に店をバトンタッチして、それから家内は近くのスーパーで買い物して夕食の支度をすれば遅くなるから、毎日、朝のうちに夕食の支度をすることにした。子供たちは学校から帰ると、公園で遊んでいるか、店に来て母親にべったりとしていた。チビはわたしが会社帰りに保育園に迎えに行く。そうした生活パターンができていた。

開店初日。わたしたち家族は久々に外食することにした。外で食べるのもずっと行ってないから、子供が悦んだ。店の近くに居酒屋があった。定食も出している。わたしはビール一本だけ

つけてもらい、家内と乾杯した。

これからどうなってゆくんだろうか。不安な気持ちと期待と二つが混在していた。

「ああ、みんな売りに出したらさっぱりしたよ」

わたしの書齋は空っぽになった。どんな貴重な本でももう取っておかない。すべて売り払うのだ。わたしは、憑き物が落ちたように、本のコレクターではなくなっていた。

第973話

老後の設計

いまから老後は早いだろうか。五十過ぎたらもう考えてもいい。わたしは、図書館へ行って、そんな本ばかり借りてくるようになった。

先が見えてきたから、わたしは、あと十年ですべてをやめる予定を立てた。すなわち、2014年になれば、わたしも六十三になる。そこで、古本屋は誰かに譲るか、完全にやめてしまう。

十年後とは、老父母はそれぞれ九十七と九十三と、生きていないと思う。両親をまず見送る。それから、子供たちはどうだろうか。五人いるうち、長男は三十六。もう子供が二人くらいいて、仕事も軌道に乗っているか。次男は三十四。孫は中学生になっている。そして、三男もバタバタと職を変えたりしていたが、三十過ぎたら、どこかに落ち着いて、結婚はしているだろう。娘は二十七か。彼氏をとっかえひっかえしている年齢でもない。やはり落ち着くところに落ち着いて、結婚して子供がひとり。末っ子は二十四だから社会人だ。料理が好きだから、どこかの厨房に入っているかもしれない。

そして、妻は五十か。若く見えるから、四十と云っても信じるだろう。それに騙されて、もっと若い男と再婚する。わたしは、すべてを卒業する。ひとり気楽な身分になり、自分の好きなことをするために、世界放浪の旅に出る。

シナリオはできあがっていた。期限付きで、これからの十年を暮らすのだ。だから、それ以降のことは、余計なことは考えなくていい。不動産は新たに買う必要もない。家だって、リフォームなど考えなくていいし、生命保険もそれ以上の長きでは考えなくていい。日本にいないから、すべてを処分するという前提で計画を立てている。

すべてが期限付にしたら、周りが見やすくなった。判りやすくなった。そうすると、十年以上も長持ちするものは買わないのだ。車も、パソコンもあらゆるものが十年使えればいい。そうして、線引きしてみると、どんな辛く苦しいときを迎えても、あと何年だと、がんばれるような気がした。

そして、あっというまに十年が過ぎていた。

ところがどっこい老父母はまだ生きていた。父はすっかりと恍惚の人になり、元気な分、徘徊はするは、垂れ流しはするは、目が離せない。母は寝たきりだが、それがまたしぶとい。下の世話までしなければならない。こんなものが食えるかと我が儘はますます酷くなり、あちこち痛い

と騒ぎまくる。

息子たちは会社を経営していたが、絶頂を極めたあとは下り坂が待っている。借金まみれになって、身動きがとれない。三男は女に騙されて、身ぐるみはがされて、すってんてんになると、郷里へと戻ってきていた。すっかりと自信をなくして、親のところに転がりこんで仕事もしない。そうかと思うと、嫁に行った娘は子供を連れて出戻りだ。末っ子はいつまでも予備校へ通って、目下浪人中。

妻は離婚どころか、こんな便利な男は死ぬまで離せないと、わたしを下男か奴隷のように酷使する。庭の草むしりから、部屋の掃除、炊事洗濯皿洗い、果てはマッサージまでやらされて、くたくただ。

だから、店も閉められない。外国旅行なんてとんでもない。そんな余裕も夢もなくなった。「お父さん、金を送ってくれ」と、東京の息子たちから資金手当の電話がくる。家にいれば、娘と息子二人の成人者が居候。

「腹減った。飯はまだか」と、態度がでかい。

「おおい、わしにも飯」と、惚けたじいさん。

「たったいま食べたばかりだろう。一時間おきに飯、飯とうるさい」

「ゲホゲホ、心臓の発作の咳が出るから、救急車を呼んでおくれ」

奥の部屋からは寝たきりのばあさん。いつものことだ。

「毎日毎日救急車は来ません。この前も怒られたばかりでしょう。霊柩車なら呼んであげるよ」

「お父さん、赤ちゃんのミルクとパンパース買うからお金ちょうだい。買い物に行く間、おんぶして面倒見てね」と、娘。

店の裏に住まいがなければとても同時にやってゆけない。

「この本はいくらですか」と、古本屋の店頭からお客の声。電話が鳴る。

「はいはい、仕入ですか。本を売りたいと」

赤ん坊がピーピーと泣く。ばあさんがトイレと騒ぐ。腹減った、飯作れと息子。

こんなはずではなかった。老後はコバルトブルーの海、珊瑚礁のある無人島で、優雅に暮らすはずであった。これは明らかに設計ミスだ。わたしの余生は崩れさろうとしていた。

第974話

最終形

蕎麦好きが高じて手打ち蕎麦屋を開業したというのはよく聞く話だ。人は面白いもので、終いにはその好きなすべてが所有したくなる。女だったらワイフにしてしまう。わたしもクラシックファンであったが、コンサートを聴きに行ったり、レコードを買い集め、音楽雑誌を読むだけ

では満足しなくなった。その音そのものを自分のものにしたかった。それで、音楽的才能がゼロのくせに、ドボルザークのチェロ協奏曲に憧れて、一生に一度だけ、あの曲を弾いてみたいものだ、何を思ったのか、ふらふらと楽器店に行って、チェロを買ってしまった。まだ二十歳過ぎたばかりで、アルバイト代の四ヶ月分の高価な楽器を手に入れた。

独学ではなかなか弾けないので、芸大のヴァイオリン科に行っている友人から、チェロの学友を紹介してもらった。芸大の学生だから授業料も安い。わたしは、大きなチェロを抱えて、それから週に二回は雑司ヶ谷の学生のアパートに通った。学生は、ポール・トルトゥリエの弟子の倉田澄子の愛弟子というから、わたしはトルトゥリエの曾孫弟子ということになるのだろうか。

毎日がボーイングとスケールの練習で飽きてしまった。基本からみっちりと身につけなければならぬ。その単調な根気のいる基本段階で、多くの初心者たちは諦めてしまう。

「どんなにつまらないと思うエチュードでもね、歌うように弾いてください。正確に弾こうと思わないで、歌うんです」

音楽性とはそんなことなのだ。年下の先生にそう云われて、わたしは堅い人間であると気が付いた。楽譜を几帳面に「読む」という目が働いて、そればかりに気を取られる。きっと頭の中の構造が理科系なのだ。

練習曲ばかりではつまらないからと、弾けもしないくせに、バッハの無伴奏チェロ組曲の楽譜を買ってきて、ギコギコと鳴らしていた。ひどい音で、アパートの住民が、窓ガラスを叩いて抗議するほどであった。仕方なく、ミュートという、音をセーブする器具をチェロに取り付けて鳴らしていた。

結局、名曲は自分のものにならずに終わっていた。リスナーで留まるべきであった。

本好きが高じると何になるか。わたしの場合は古本屋になり、最後は出版社の真似事で、本を作りたいというところまで行った。江戸の昔より、古本屋は新刊も取り扱い、出版もするというのが、あたりまえであった。何も、わたしが特殊ではなく、本が好きな人間の性とでもいうか、そこまで行ってしまうものらしい。人の本でもできあがると嬉しい。編集段階から、すでに創作に入る。装丁を考えるのもそれ自体が工芸の域である。悲しいことに、わたしにはアートの感覚が薄いから、その部分は人に任せる。周囲に芸術家が沢山いるから頼むには事欠かない。どれも商業ベースに乗らない、自費出版とか同人誌などだが、もっと凝った本も作ってみたいと思う。弘前の蘭さんの作る緑の笛の豆本なども、素晴らしい仕事だ。柄折さんなどの装丁家の仕事を見ても、ヨーロッパの昔からある本の装丁の世界に憧れはある。それは、職人の世界であり、時には、皮を使い、木を使い、銅版を打ち込んだりと、唸らせるような芸術品になる。日本ではあまりやらないが、ヨーロッパでは、自分の大事な本はそうして装丁家に依頼して、この世にただの一冊の本に造本してもらうのだ。そのために、フランス装などの本、カバーと表紙が兼用のような簡易な装丁が出回るのはそのためでもある。

本好きが高じると、また別の形になってゆく。わたしの古本屋のお客で、何人かが、ついにそこまでやってしまった。

それは、図書館を作ることであった。図書館を持つということが、蔵書家の最終目的としては素晴らしいことだ。大宅壮一氏が、せっせと集めた雑誌十万点をもって図書館にしたことは知られている。そこでなければ見ることができない雑誌があるから、貴重な文庫でもある。雑誌が読

み捨てられ、この世から処分される運命にあるのを大宅氏はくい止めようとすべての雑誌を集めることを仕事とした。

うちのお客で、社会教育を一環してやってきた間山洋八さんも、とうとう、自宅の庭に洒落た建物を建てて、社会教育の図書や資料を収納した私設図書館を作ってしまったし、県庁の村上さんは、いまは岩木町の助役をしているが、自宅の一室を郷土に関する本や資料の図書室にしまった。徹底しているのは、郷土を歌ったレコードの古いものまで蒐集していることだ。うちからも随分と買っていった。それをきちんと分類整理して、ファイリングシステムに乗っ取り、図書カードまで作っている。

上北の藤田さんは、さらに変わっている。戦前戦後のベストセラー本ばかり集めて、ベストセラー図書館を作った。プレハブまで建てて、家族に反対されながらもとうとうやってしまった。

碓ヶ関の杉の子図書館さんからも毎月、児童書の注文がくる。ご夫婦で、温泉町の一角に、地域の子供たちのために、絵本や童話などを揃えて一般開放している。そこまでなら、結構各地にあるのだが、こちらもそれだけでは終わらない。明治以降の少年雑誌から、とても現代の子供たちが読めない文献資料の類まで蒐集しているのだ。こと、子供の本に関するものなら、珍しいものを文庫にしようとする異常なくらいの熱意で望んでいるのだ。何がそうさせるのか。本が読みたくても読めなかった悔しさからとか、悪書が良書を駆逐するという風潮をどこかで止めなければということなのか。いずれにしても、そうした個人の財産を投げ売っても、本を残そうとする執念には感服する。

そこまでやるか、というところまで徹底的にやる、人間とは面白いものである。

第975話

電 送

郵便局だ、宅配便だと喧嘩していたのは過去のものとなった。あんな原始的なことでもめていたとは、何か信じられない。いまは、郵便局も郵政事業はやめてしまったし、宅配便の会社はすべて業態転換して、宅配業務から撤退していた。荷物を運ぶという仕事がなくなったからだ。

道路を走る車もない。電車も飛行機も、乗り物というものも、ほとんど用をなさなくなっていた。未来は、新しい物体電送装置が開発されていたのだった。

「あんたたち、学校に遅刻するわよ。あと三十秒でベルが鳴るじゃない。急ぎなさい」

橋本さんが中学の息子をせきたてる。

「判ったよ。うるさいな」と、ただいま反抗期の真っ最中。息子が鞆を手にカプセルに入った。すると、瞬時に姿が消えた。

「おまえ、それじゃ、仕事に行ってくるからね」

旦那さんがカプセルに入った。やはり、一瞬の光で手品のように消えていた。

新聞の配達もなくなり、書籍も週刊誌もすべて契約すると、電子ブックにダウンロードできるから、郵便から新聞の配達というのもなくなって、第一、家庭には郵便受というものがない。

カプセルのランプが赤く点灯した。何か送られてくるのだ。電子宅配便だ。小包がカプセルの中に現れた。

「あら、誰からかしら。函館のお母さんから、かんかいの詰め合わせだわ」

受け取りは、電子印鑑をボタンで押すだけで、メールで送り先の業者に届くシステムになっている。

晩ご飯のおかずなんかも家に居ながらにして買えるから便利だが、なにか味けない。買い物して見て歩くという楽しみがなくなった。

この電送システムが普及してからは、デパートもスーパーも商店街も消滅してしまった。街は、どうなってしまったのだろうか。橋本さんも暫く駅前の変わりようを見ていないので、街がどうなっているのか確かめたことはない。すべて、いまは工場から直送なのだ。問屋もいない、商店もいない。かつて、出版社から本が直送されたように、いまはすべてが産地直送で、米でも野菜でも果物でもすべてのものが、生産者から新鮮なものが家庭に瞬時に送られてくる。魚なんかは活きがよすぎて、ピンピンと跳ねて捕まえるのが大変だ。

橋本さんは、モニターで売り出しのチラシを見ていた。目玉商品、先着〇名様という農協のセールだった。卵もワンパック三十円と安い。南瓜が五十円、大根一本百円、みょうがも安い。そうした野菜の写真をダブルクリックすると、買い物籠に入る。登録してあるカードで支払すると、それから三十分以内に買った品物が電送されてくる。

洋服や化粧品、家庭日用品のすべてがそれで買えるから、家から外に出なくていい。

電送一それは、物質をすべてプラスとマイナスの電子に分けて分解すると、同じものを集めて圧縮し、ファイルにしてメールのように送るというものだ。送られてきたファイルはすぐさま解凍されて、また元の形に復元される。

物で成功した科学者たちは、マウスで生き物のテストもして、やがてそれが安全だと確認されると人間を送ることに成功した。

カプセルは巨大な全方向のスクャナーになっている。読み取るだけでなく、分解もしてゆく。細胞も究極は電子と核でできている。その組成を読み取ると、記憶させて、バラバラにして送ったものを向こうのカプセルで取り出して完全に復元させるのだ。たまに、トラブルがある。送られてきた人間が大騒ぎをする。

「ああ、ぼくの、ぼくの片方の耳がない」

どこかにファイルの一部が漏れているときは、繰り返しボタンを押すか、システムの復元を選んで、過去の状態へと戻すことができるのだ。

橋本さんが、お昼にサイバーレストランからパエリアを出前してもらおうと、メニューから選んで支払も電子マネーですると、できたての美味しそうなパエリアがカプセルに現れた。奥さんが、そのほかほかの料理を食べているところへ、また赤いランプが点灯した。

「あら、何かまた送られてきたわ」

すると、カプセルに現れたのは、サングラスに覆面の強盗だった。

「おい、金を出せ。命が惜しかったらな」

と、手にはナイフを持っている。意外に強い奥さんは、動揺もしていないで平然と答えた。

「あら、残念ね。どこの家にもいまはお金というものはないのよ。電子マネーだもの」

「それなら、貴金属はあるだろう。指輪とか、とにかく金目のものを出せ」

仕方なく、橋本の奥さんは、強盗にダイヤの指輪とかを手渡した。強盗は急いでカプセルに入ると、自分の隠れ家のアドレスを素早く入力して、瞬時に消えた。ところが機転をきかした奥さんは、停止ボタンを押すと、アドレスを刑務所に替えた。そして、改めて送信した。哀れ、強盗は、刑務所に直送になっていた。

第976話

合併

企業の合併、銀行の合併、球団の合併から市町村の合併と、ここ数年は合併で世間は慌ただしい。

市町村の合併は最初のかげ声から比べれば、なにか意気消沈したような感じがする。現実の問題が山積しているから、それをクリアしないと住民が納得しない。

親戚で、合併を進めている町の職員組合の長をしているのがいるが、彼が呑みにきて、その現場の話を聞かせてくれる。

ある村では組合がない。ある町でも組合費の負担が違う。給与体系も違う。合併によって、組合のあり方も問われるし、給与もどう調整するのか。税金や水道料金も高い安いがある。安くなるのは結構だが、小さな村より大きな市のほうが高いときがある。東京都のように人口が多ければ、税金も安い。一人当たりの負担が軽いからだ。田舎のほうが引っ越し転勤してくると高いと驚くのは、それだけ貧しいからだ。田舎の大名のほうが施策もまずく、年貢も高い。無論、ぴかりと光る地方行政をしている名君も各地にいる。

この合併問題は、来年までどれほど進むか。そして、合併したあとに遺恨を残さないか。

新しい町の名前の付け方も問題になっている。中央市とはなんだと、さっそく噛みついた詩人がいた。なんとセンスのない名前の付け方であろうかと。こんなことでは日本は地名から死んでゆく。

我が町を捉えても、かつての町名変更が、町を判らなくしてしまった。勝手に役所で考えたのだろうが、かつての鍛冶町、大工町、蛸貝町といった歴史的な名前を取り払って、本町、中央町とやってしまった。いまだに、本町五丁目がどこなのか判らない。そうした単純思考の人たちに重要な地名ということを任せるのも大変だが、市民から募るのも大変だ。民主主義だから多数決でいいのかもしれないが、すべてのアンケートの結果を見ても判る通り、そのときどきの流行がトップに出てくる。名前でも言葉でも人でもそうだ。十年経ったら、百年経ったら変わるものを選ぶという危惧がある。

吉里吉里人という、実際、岩手にその町があり、行ったことがある。東北人ならではの発想だ。いや、そのうちそれが現実のものになるやもしれぬ。

実は、東北六県の知事たちが、密かに会合を開いていた。

「貧しい村々がどう結びついても解決にはならん。借金を抱えた婿と嫁が一緒になったって、借金の額は変わらねえべ」

「共稼ぎするごった」

問題はそこだった。どこも借金財政に喘いでいるところばかり、裕福な町は初めから合併なんか考えていない。苦しいから一緒になって打開策を探るのだ。

「そこでだ、こんなみみっちい足し算はやめようと思ふ。もっと壮大希有に考えるのが東北人だべさ。どんだ、思い切って、東北六県みんな合併してしまうというのは」

「それなら、地名はそのまま残るんだなす。表面上はいままでとなんら変わらなくなる。市町村も県も呼び名はそのまま留めて、行政機構そのものが一緒になるのなす」

「東北道と韓国式にやるだな。北海道の次だからいいべ。そして、県とは呼び名だけ残し、本当は郡になる。よって、知事も県議会も解散。市町村単位でも解散して、もっと大きな土俵で話し合う地方議会を新たに作るべし」

「そんだ、そんだ、そりがいい。どうせ、この先、地方交付税はあてにならんしな。もう、国は地方を切り捨てにかかるとるのは目に見えとる。こうなったら、みんなまとまって独立だ」

「独立戦争ばすっとか」

「おめ、バカか」

そうして、貧しい東北、みんなにトウホグとバカにされ続けてきた田舎者の僻みがいま、一緒になろうとしていた。小さな田舎が巨大な田舎になろうとしていた。井上ひさしも大賛成、いがらしみきおも手を叩いて悦んだ。いまこそ、立ち上がれ田舎者。

どこへ行っても、その合併の話で持ちきりであった。いまや、東北人は中央を敵対視して、被害者意識でまとまろうとしていた。北海道の内地という呼び名もどこかわたしたちは昔から疎外されて別の国というふう聞こえるが、中央に対しての地方、この呼び名が意外に東京もんには判らない。この前も、

「中央ってどこですか？」と東京人に真面目に聞かれてしまった。自分たちが中央にいるということの意識がないのか。

合併でみんな浮かれているところへ、一人だけ浮かぬ顔をした奥さんが通りかかった。どうも暗く沈んだ様子だ。

そこへテレビ局がカメラとマイクを向けて、アンケートにやってきた。

「奥さん、今度の合併問題はどう思いますか？」

そうすると、奥さんはわあっと泣き崩れて、抗議するように云った。

「合併、合併ってうるさいんだよ。合併はないほうがいいんだ。みんな、大騒ぎして、悦んでいるが、うちの父ちゃんはね、糖尿病に加えて、腎臓やって、今度は肝臓だろう。挙げ句の果てに肺炎という合併症で苦しんでいるというのにさ。何が合併だよ」

病気だけは合併してほしくない。

第977話

長い夜

秋の夜長だった。日が暮れるのが早くなり、つるべ落としと云っても、いまの人は判らないから、水道の水がといってもなんのことか。小泉人気と云えばそうかと判る。仕事をしていて、ふと窓を見ると、とっぴりと暮れている。そして、時計を見上げて、まだ五時を過ぎたばかりだと思ふのだ。

秋よりも冬のほうが夜が長いのに、冬の夜長とは云わない。初老ということが、どこかかなしさを秘めていて、人生の夕暮れという感じがする。いわばその入口で気が付いた意識が、夜長を思わせる。すっかりと婆あになれば、真冬と同じで、もうどうでもよくなる。

その夜は実に長く感じた。なにかにつけてものがなく、起きていたいと思う夜であった。人恋しい夜というものがある。起きていて本を読んでいても、何かカリカリと書き物をしていても、ひとりを強く感ずる。それは、周りが眠っていて、ものおともせず、静かすぎるからだ。そして、寒い。北村は、襦袢を出してきて、羽織りながら机に向かっていた。三時だった。

北村は、若い頃にそうしたように、ラジオのスイッチを入れてみた。真夜中でも、番組はオールナイトでやっているか、どこかの局が入ってきたりする。選局のつまみを回しながら、北村は人の声を求めて、深夜放送を探す。コマーシャルが聞こえてくる。久屋大通のとか地名を述べていた。懐かしい町の名前が出てくると、それは名古屋のラジオ局の番組をキャッチしたのだ。もっと遠くの放送局はないのかと、北村はつまみをミリ単位でそっと回してみる。ロシアの放送が聞こえてくる。何を喋っているのか判らない。英語の放送から朝鮮語の放送と、いろいろ混じり合って、電波が一瞬掴まえられては、また逃げる。不安定な音の糸をたぐり寄せようとしていた。

この北国の海辺の町の北村の自室にも、きっと各国の目には見えない細々とした電波が侵入してきて、そんな電波で充満しているに違いない。

五時だった。ここまで起きていたら、朝まで起きていればいいのだが、北村は、蒲団に入っても、眠れないでいた。ひとり蒲団の中で悶々としたが、どんなに目を閉じてもいろんな雑念が邪魔をして、ますます眠れなくなってくるのだ。もやもやと興奮している自分が、眠りの入口で扉から入ろうとすれば、ふと現実の問題を思い出して、引き戻されていた。

時計を覗く、七時だった。ということは、北村は二時間も蒲団の中で眠ろうとして、寝返りばかり打っていたのだった。ここまできたら、もう朝なのだから、起きるしかない。すっかりと寝不足だろう。そして、いつものようにカーテンを開くと、なんだ、まだ真夜中じゃないか。外は暗かった。また寝ようとした。

すると、その時、北村の娘と女房が部屋に駆け込んできた。

「おいおい、何事だ。驚かすなよ。こんな夜中に」

二人とも、おどおどしていた。

「あなた、大変なのよ。起きてちょうだい」と、いつになく、怖がっている。女房にも怖いもの

があったのだ。

「なんだよ。何があったっていうのだ」

「テレビを点けてみて、大騒ぎしているから」

北村は、部屋のテレビを点けてみた。番組はどこも臨時ニュースの中継を流していた。世界各国の現在の様子が衛星放送から同時に画面に映っていた。ニューヨークもパリもモスクワもニューデリーも東京も、各国の都市の様子が放映されていた。

「何が起こったんだよ。何もおかしいことはないじゃないか。テロがあったわけじゃなし、どこの都市も平穏で、普通の状態じゃないか。戦争が起こったとか、そんな雰囲気もないし」

「あなた、あなたには判らないの？ よく画面を見て。おかしくない？」

「おかしくないかって、異常は見つけれないが……」

すると、じれったそうに女房は叫んだ。

「バカね。鈍感。よく見てよ。世界中、真夜中じゃないの。いまは八時なのよ。夜じゃなくて、朝の八時なの。それなのに、朝日があがってこないのよ」

そうして、娘も震えて急に泣きだした。

「嘘だろう」

北村は、窓を開けて外を見た。近所の人たちがまるで地震でもあったかのように外に出て、空を見上げながら話していた。

一……このように、いまから五時間前に、突然太陽が姿を消してしまいました。

テレビでは深刻に天空の異常を伝えていた。

政府は閣議を開いて今後の対応について話し合った。

「やはり、こんなときはアレしかありませんな」

「そうです。アレです」

「よし、決まった。全国からストリッパー嬢を集めるんだ」

どうも、神話教育から頭が離れない保守系老獺議員たちであった。

各国もパニックに陥っていた。突然、昼がなくなったので、国連でも焦っていた。このままでは大変なことになる。大地も空気も急激に冷えてゆく。そうするとどうなるか。真冬というものではなく、太陽の熱が届かない、天王星や海王星のように地表の温度はマイナス二百度以下という絶対温度近くまで下がる。そうなると、動植物が生息育成はできない。すべての生きとしいけるものが絶滅して、この地球は氷の世界になってしまうのだ。

人々は次第に寒くなってゆく長い夜に悲観して、自殺しようとするものが絶えない。それを思い留ませようと、肉親が説得していた。

「失望してはいけない。朝はどんな人にも来るんだから」

「朝は来ねえっていうの」

「日はまた昇るんだから」

「昇らないっての」

そんな地球の危機に際して、科学者たちは最後の手段をとることにした。各国で保有している戦略核をすべて使うことにした。

「月を太陽にするのだ。ミサイルをすべて月に向けて発射するんだ」

原子力の平和利用、そして核の廃絶が同時に行われる。太陽は核爆発をしているのだから。

そうして、原子力を使うすべてのものがそれに向けられた。いくらあっても足りないだろう。月の表面は核爆発で、いつも煌々と天上で光り輝いていた。

やがて、すべての核がなくなり、原料も尽きたとき、すでに人間たちには成すすべがなかった。

ゼウスはその様子を天上より眺めていた。

「よしよし、アポロよ、そろそろ天の岩戸から出してやるんじゃない」

太陽はすると、また昇ってきた。景気はまたよくなってゆくのだろうか。あまりにも長い夜がすぎた。

ところで、誰が一体太陽を隠したのだ。ゼウスとは誰であったか。古事記とギリシア神話を一緒にくたにするやつだから、いい加減なやつには違いない。

第978話

古本異変

なんだってそうだ。人間のやる気なんか、見返りがあるから起こるのだ。パチンコでも競馬でも、事業でも、たまにおいしいことがあるとか、努力した甲斐があるとかで、頑張れるのだ。それが、このところは、何をしてもダメであった。それはどの商売も長引く不況でそうなのだが、ことに古本業界は、右下がりはずっとしてきたから、毎年毎年貧乏になってゆくばかり。去年の実績を今年はとれない。前年割ればかりしていると、どうなるか。人間腐ってくるだ。

本が読まれなくなったと嘆いているうちはまだよかった。夜ごと、自棄酒を飲んで、クダまいていたときはまだそんな感情も持ち合わせていた。それが、年々叩きのめされてくると、いくら貧乏に慣れて、打たれ強い古本屋のオヤジでも、次第に無感覚になってゆく。

「おやじさん、本を買ってくれるかい。いい本を持ってきたんだが、見てくれる？ まだ、見ていない新品同様の本もあるし、定価の何割で買ってくれるのかな」

「はあー」

「どうだい、この美術全集なんか、買ったままで、包装もほどいていないんだ。一度も見ていない証拠だろう。高く買ってくださいよ」

「はあー」

北村古書店に本を持ちこんだ客のほうがりきっている。店主の北村は、ぼうっとしていて、反応がない。

「おやじさん、大丈夫？」

と、お客が北村の目の前で手を揺らす。

「はあー」

こりゃダメだ。すっかりとやる気をなくしている。本が売れないから、買う気も失せていた。

それに、最近はお姉ちゃんたちが、綺麗な新刊のベストセラーものばかりを持ち込むから、ますますやる気がなくなる。昨日も、若い子が来て、

「おじさん、ハリー・ポッターが揃えであるのよ。カバーも綺麗だし、ねえ、高く買ってよ」

と、甘えた声で迫る。いつもの北村なら、はいはいと、無条件で高価買い入れ。ところが最近は無関心、無感覚、無反応。

「それがどうした」と、逆に開き直る始末。そんなベストセラーものなど、どんどん入ってくるから、百円の均一台にもずらりと並ぶ。もう五十円でも売れない。

「ただでもいらないよ」と、断ると、ショックを受けた女の子が、今度はしくしくと泣きだした。女の武器は涙だ。それは最後の手段なのだ。

「泣いてもダメなものはダメ。あなたがいらぬものは、ほかの人もいらぬの。売れるものは買うが、売れないものは買わない。これ、あたりまえ」

売りにくるお客に理屈が通らない。特に女の子には説明しても無理。とにかくどうでも引き取ってくれとごねるのだ。

店の中は入る本が多く、出る本が少ないので、自然に増加してくる。本棚とワゴンからも溢れて、通路の平積みになる。それでも置くところがないから、入口を塞ぐような格好で、終いにはお客が入れない。そんな状況で、いい本はここのところ暫くは入ってこない。北村が胸をときめかせるようなものすごい本にお目にかかったことがない。次々に店に持ち込むのはハリー・ポッターばかり。温厚な北村もついに怒った。

「うるさーい。ここは古書専門店なのだ。新しい本はブックなんとかへ持ってゆけ」

ところが、その大手のブックなんとかも、買い取り拒否しているとかで、どこでも余っているものは、どこでも買わない。それはそうだ。古本の組合に加盟している古本屋は全国で二千数百店、非加盟の古本チェーンを入れても、その何倍もない。ところが、超ベストセラーとなると、短期間に百万、二百万冊と売れるのだ。それが、順次古本屋に持ち込まれる。当然、一店に何十冊と同じ本が入る計算になる。ところが、そうしたベストセラーものというのは、熱しやすく冷めやすい。過ぎてしまえば見向きもされない。流行と同じで、そのときどきのものが多い。稀少価値のある絶版の本がいくら探してもみつからないのと、この大量消費の本と、本の業界は二極分化しているような感じがする。

北村古書店に、長年に渡り、本を蒐集してきた古書マニアの方が、本を処分に訪れていた。

「ご主人、今日は、車に積んできた本はですな、多分、ご主人から見ても大変な値打ちものですぞ」

そんな余裕のある言い方にもボウツとしている北村。もうどんなことがあっても驚かない。年輩の蔵書家は、うやうやしく風呂敷に包んだ本を店に持ち込むと、帳場の台の上で開いて見せた。

「どうです。すべて限定本ですぞ。限定五百の朱書きでちゃんと番号もふってありますな」

「はあー」

驚かないで、ただ口をアホのように開けている北村に、逆に驚いたのはお客だ。

(この古本屋はただものではないな。それとも、この本の値打ちが判らないのかな)客は動じない北村の胸のうちを探るような視線を送った。

「ならば、これなんかはどうですか。小説の単行本、すべて初版で帯付き、極美のものばかりですぞ」

「はあー」

北村は全く買う意欲を見せない。じれったそうにしていたお客は、ついに怒り出した。

「あなた、この本の意味が判っているんですか。これは、限定本ですぞ。この世に五百部しかないという貴重な本ばかりです。そして、これは初版本で帯付き、判りますかな」

すると、北村は目が醒めたように不機嫌になって返答した。

「限定、限定ってうるさいな。最近の本は売れないからどこの出版社でも初刷が五百冊なんだ。売れないから初版で終わりだ。いいか、ここの五十円均一台に置いてある本はすべて、限定本みたいなものだ。それで、どの本も初版帯付きだ。初版、初版と騒ぐんじゃない。それは昔の話だ。いまは、みんな初版で終わるんだ。逆に、重版の本を持ってきな。それはいまじゃ、珍しい。高く買ってやる」

お客は這々の体で逃げ帰った。この二十年で、古書の世界も様変わり。

だから古本屋のオヤジたちは、みな死んだ目をして、口をぽかんと開けて座っているのだった

第979話

再 現

毎日、人々は正確に出勤する。家を出るときに、テレビでは同じ占いをやっていたし、隣のご主人も同じ時間に出勤のようで、通りで顔を合わせて会釈する。

電車も同じ快速に乗る。ただ、降りる駅が違うので、乗り込む車両が別々になる。小畑武史は、いつも三両目の一番後ろのドアから乗るのだ。そのために、並んでいる位置も並ぶ顔ぶれも毎日同じであった。その車両の位置も重要で、会社のある駅のホームからの階段の位置と、そのドアが一番近い関係にある。そうすると、どっと混雑する階段をもみくちゃにされなくても、一番で降りてゆけるのだ。

都会というところは、同じ通勤という往復の中で、人々は効率を考え、一番楽な方法を次第に学習し、選択してゆくことから、パターンというものができあがってゆく。武史も、毎日の通勤という都心に向かう大きな川に身を置いて、流されていった。それは無意識に近い巨大な生産ラインの工程であった。

会社のビルに入るとき、同僚と顔を合わせるのも、ぴったりと九時五分前であった。廊下で総務の女子社員とすれちがう。少し武史の気持ちが揺れる子であった。

「おはようございます。あら、今日は素敵なネクタイですね」

彼女はそう云った。その言葉で、武史ははっとして昨日を思い出した。彼女は、同じ廊下で、武史に昨日も同じ言葉をかけた。たまたまの偶然だろうか。今日の武史はいつもの無意識の自分

とは違った。どこか醒めている。周囲を実に細かなところで、第三者的な目で観察する意識を持っていた。社会をそうした目で見れるか、見れないかということで、随分と違うものだ。懷疑というのはそうしたところから生まれてくる。

「小畑君、すまないが、十時までに逢商事へ例の打ち合わせに行ってくれんかね」

部長が武史にそう命じていた。武史は驚嘆の声をあげた。

「えええ？ 部長、それは昨日、打ち合わせに行ってきました。その結果報告は昨日の午後に渡しておりましたが」

すると、部長は怪訝そうな顔をして、

「君、何を云っているのね。わたしはそんな報告は受けていないぞ。寝ぼけているのかね」

武史はその言葉ではっとして、日付を見た。間違いない。確かに昨日の今日だ。それとも、部長の云うように、夢で同じ予兆を見たというのか。それが、現実と混同しているのか。それにしてもリアルすぎる。すべての時刻と行動と場面が一致していた。デジャヴということであれば、それは断片にしか過ぎないのだろうが、武史のいま体験していることはそっそりそのままの昨日なのだ。

武史は逢商事で、昨日と同じ打ち合わせをして、うんざりしていた。一字一句同じであった。武史は、これと同じことが起こる映画をだいぶ前に見たことがある。タイムスリップして、昨日に戻っている自分がいるのだ。それかもしれないと、思い直した。ということは、これから起こることは自分だけが予言できるということだと武史は思った。

会社へ戻り、部長に報告したあと、係長が社用で銀行に行くというので、昨日の出来事が思い出されて、武史は係長に注意した。

「銀行では、バッグは手から離すんじゃないよ。ひったくりが多いから、がっちり抱えていて、椅子の上に置いたりしないほうがいいよ」

昨日、係長は会社の金を三百万ひったくられていた。その忠告はしておいたほうがいいと云ってやった。

それから、と、武史は昨日のことを思い出していた。

「そうだ、三時十六分に地震があるんだ。震度三だからたいしたことはなかったが」

すると、パソコンの画面に向かって、昨日と同じ作業をしていた武史がちらりと時計を見た瞬間、ぐらぐらと建物が揺れた。女子社員たちがキャーと悲鳴をあげて、逃げようとした。部長もうろたえていた。

「皆さん、大丈夫ですよ。これは震度三だから、すぐにおさまります」

武史だけが笑って座っていた。未来が判るといえるのは実に素敵なことだ。そう思った。突発的なことはありえない。すべてが体験済みだ。

だが、武史には解せないことがあった。それは曜日と日付だった。それだけは翌日になっているのだ。

「すまんが、今日は本当に木曜日で十月の七日なんだね」

すると、隣の女子社員が笑って、

「さっきも云いましたけど、どうしたんですか小畑さん。おかしいですよ、今日は」と応えた。

その言葉も昨日と同じなような気がした。すべてが虚であり実であるような錯覚すら覚える。

退社時間になると、部長からいつもの呑みの誘いがあった。昨日も呑んだばかりだ。こう、毎日まいにちでは、体がもたない。

「どうかね、小畑君、一杯行こうじゃないか」

「部長、確か、昨日も二人で呑みに行きましてよね。財布の中が空になりますよ」

と、武史が心細いはずの財布の中をちらりと見ると、万札が入っている。おかしい。昨日と同じ額が入っている。部長は断る武史にぎろりと怖い目を向けてこう云った。

「小畑君、毎日の流れを勝手に変えてはいけないんだ。君はわたしと呑みにゆくんだ。そういうふうになっている」

部長はぼそっとおかしなことを云った。その後の光景も武史はすべて知っていた。ガード下の小料理屋で二合徳利を四本空ける。そうして、酔って家に帰ると武史の妻は不機嫌で、イヤミを云うのだった。寝たのは十二時を回っていた。長い一日が終わった。武史にとっては一日分、人よりも長生きしたような気分だった。

翌朝、テレビを見ると、十月八日の金曜日。間違いはないと確認していた。

「あなた、二日酔いじゃないの？」

と、妻が昨日の続きで不機嫌だ。朝ご飯はオートミールが出た。確か、昨日もおとといもだった。

「またオートミールかよ。たまに納豆に味噌汁がいいな」

すると、妻がぎろりと部長と同じ怖い顔で睨んだ。

武史が会社に行くと、廊下で総務の気のある女子社員とまた同じところすれちがった。

「おはようございます。あら、今日は素敵なネクタイですね」

武史は耳を疑った。同じ言葉をかけられていた。

事務所の中で、武史のところに部長が来て云った。

「小畑君、すまないが、十時までに逢商事へ例の打ち合わせに行ってくれんかね」

武史は、その言葉ですべてを了解していた。立ち上がって、叫んでいた。

「やめてくれ」

そうして、ガラス窓に顔をくっつけながら、狂った人のように泣きわめいた。

「おれを、ここから出してくれ」

まるで判で押したような毎日。傷のあるCDのような人生。それに気が付いた人間だけが、日常の檻の中の恐怖に戦くのだった。

第980話

パスワード

おれおれ詐欺だけではない。偽の請求書や、ありもしない通信費の支払いや、メールでも彼女になりすました見知らぬ女のようなのが頻繁に入ってくる。世の中、見えないことをいいことに、手紙や電話、メールでの詐欺が横行していた。ピッキングも巧妙になり、普通のシリンダー

の鍵なら数秒で解錠してしまうから、いまはアパートでもパスワードと磁気カードによる鍵が多くなってきた。

伊藤さんの家でも、年取ったじいさんがいる。ばあさんは耳が遠いから、電話には出れないからいいとして、それでも、怪しい請求書や振込用紙ではひっかかるかもしれない。

伊藤家の夕食時に、高校生の娘とお父さんとみんな珍しく、家族全員が揃ったところで、奥さんからみんなに提案があった。

「最近はおれおれ詐欺が多いから、我が家では電話に出たり、ドアを開けるときには、みんなパスワードを云うことにしましょうか」

すると、横文字に弱いじいさんが、

「なんだ、そのお、パスとかなんとかとは」

「合い言葉よ。おじいちゃん。ほら、山とか川とかの」

孫娘がいつも教える。

「それはいい考えだな」ビールを呑みながらお父さんも賛成した。

「それで、どんなパスワードにするんだ？」

「そうねえ、うちで亀を飼っているから、家の中では兎という、外の人は亀と云うのはどうかしら」

「ダメよ。そんなの。兎と亀なんて、誰でも云いそうだよ」

娘が反対した。誰でも判るものはパスワードにはならない。

「それなら、家の人をパンツと云うと、外の人はサルマタって云うのは」

お父さんが提案した。娘がゲタゲタ笑う。

「バカ、云えるわけじゃない。ところで、サルマタってなあに、お母さん」「難しいわね」

みんな首を捻っていると、じいさんが、ぼんと手を叩いた。

「わしにいいことが浮かんだ。家の人をな、アメノミナカヌシノカミと云うたら、外の人はな、アマツヒコヒトホノニギヒノミコトと云うんじゃ。それなら、犯人はとて云えんじゃろが」

「あのねえ、おじいちゃん、犯人じゃなくても、わたしたちも云えないでしょ。第一、舌を噛んだらどうするのよ」

みんなで考えることは、すべて連想ゲームにしかすぎない。よくあるのが、「海」と云ったら「山」。「谷」と云ったら「川」。喜多村と云ったらキムタク。そんなことはすぐにバレる。意外な組み合わせでなければ合い言葉は難しい。

結局、「亀」と「狸」になった。これは意外な組み合わせだ。どんな童話や故事にも、かつてこの両者が引き合いに出されたことはないだろう。

「だけどな、もしだよ。パスワードを忘れてしまったらどうするんだよ」

時々、お父さんは酔って帰ってくる。泥酔したときに、玄関で忘れてしまったら、ドアを開けてもらえない。鍵は持っていても、用心のためにチェーンロックもしているから、中からでなければ開かないのだ。

「大丈夫よ。プロバイダーさんなんかも、そんなときのために、簡単な質問を考えているでしょ。家族にしか判らない、ほら、ペットの名前とかを聞くやつよ」 最悪の場合はパスワードの再

発行に使う、そうした第二の手を用意するといった周到さ。

そこまで考えないと、いまは家族を守ってゆけないほど世の中は物騒になってきていた。

「ということなんだ。我が家もいよいよ、セキュリティを考えたってわけだ。だけど、君だけにはパスワードを教えてあげるね。そうすると、家族がいるときでも、堂々と緊急のときは電話ができるだろう」

伊藤さんのご主人には愛人がいた。オフィスラブというやつだ。会社の誰も知らない。二人はいつも、判らない場所でアフター・ファイブに少しの時間だけ逢っている。

「いいの？ そんな大事なパスワードなんか教えて」

愛人の宏美は、秘密を知ったときのように恐る恐る聞いた。

「いいんだよ、宏美、君はぼくにとって、家族の一員さ。ぼくは、君がいれば何もいらぬ。一緒になりたいくらいだ」

割り切ったクールな関係も、時間が経てば、次第に情が顔を出してくる。セックスだけの関係というの、初めのうちだけのものだ。

伊藤さんの奥さんも鈍感ではない。旦那に女がいるくらいことは、薄々と感づいている。女は女に対しても敏感なものだ。ちょっとした移り香でも、見たことのないハンカチ一枚でも見逃さない。それに、残業というときの旦那の少し動揺したような云い方。些細な言動から、嘘を見抜いていた。

女がいるに違いない。そう確信するに至ったが、決定的な証拠を掴めないでいた。奥さんの勘では、恐らく会社の女子社員だと睨んでいた。だが、その相手を絞り込めない。旦那の不審な行動とちぐはぐな証言を繋ぎ合わせてゆくと、ひとりの女が浮かんでくる。日頃、テレビのサスペンスを見ていた奥さんは、推理マニアでもあった。

ある夜、残業だといって、また遅く帰宅した旦那さんが、酔っている様子でドアの外に立っていた。ドアチャイムが鳴る。いつも、残業だと平然と云っていたが、今日は、実は奥さん、会社に電話をしていたのだ。旦那さんはとっくに帰ったという。嘘がこれでバレた。

「どちら様ですか」

奥さんはわざとしとやかに云った。

「ぼくだよ、開けてくれ」

「ぼくと申しましても、最近亭主のふりをして入り込むぼくぼく強盗もあるとか。パスワードをおっしゃってくださいな。亀と云ったら……」

旦那さんは、はたと困った。酔いもあったが、動揺もあった。慌てるとますます思い出せない。

「しまった。忘れてしまった。こんなときは……」

「そんなときは、秘密の言葉でパスワードの再発行ですわ。それなら、質問いたします。よろしいですか。愛人の名前は？」

「宏美一」

ひっかかってしまった。

「あら、そうなの。宏美ねえ。今夜一晩、外で寝てください」

そう、ぴしゃりと云われて電灯は消えた。

第981話

散りもせで

一見華麗な舞台に見えるショッピングセンターも、商店街と同じで、空き店舗が目立つようになった。地方都市人口二十八万のA市には、デパートとビッグストアが9店舗も出店していた。人口の割合からして多すぎる。マーケットを食い合いして、共倒れにならんとしていた。

ショッピングセンターの中に入ると、うまく隠しているが、壁と思っているところは間仕切りで、先月まではテナントが入っていた。営業不振で次々と歯が抜けるように店舗が欠けてゆく。だが、それを埋める出店申込みがない。そのままにして空けておくと格好が悪い。悪い噂が流れてもいけないから、さも、壁のように嵌め殺してしまうのだ。どこの大型店に行っても、そんな不自然な壁がある。あるいは、工事中に見せかけ、それはいちいちオープンするというお知らせもなく、ただ、次の出店を待つといった無様な形をとるよりしかたがなかった。

ブルーフォレストというショッピングセンターが東北一の規模で当地にオープンしたのは三十年前になる。その間に一度、おおがかりなりリニューアルをしていたが、ここ十数年はそんな改装資金もなく、店舗建物は老朽化していた。

もっとも売れて、ピークを迎えたのはバブル崩壊前の昭和の終わり頃で、それからは、下り坂なのは、全国的なトレンドだった。

市内に大手スーパーが次々に開店し、駅前にも複合型のファッションビルがオープンすると、郊外型店舗と、旧市街のデパートと、客の取り合いで拮抗する形となった。

売上は、どこも二十年前をピークにして、年々減少傾向にある。毎年、前年割れをして、いまや三十年前の売上に迫ろうとしていた。経費、賃金は倍以上になっているのに、肝心の収入が逆に昔に後退するように落ちている。

どこの店長もオーナーもすっかりとやる気がない。去年までは暗い顔をしていたが、近頃はそれが悲しい顔になってきていた。そして、鬱病になり、どこかおどおどとして、様子がおかしい。

ブルーフォレストの二階で長く婦人服の店をやっていた三崎もそうだった。親父さんが社長をしていたときは、売れに売れて、笑いが止まらなかった。社長が亡くなると、息子の孝義が後継者として店に立った。そのときから、すでに衰退の一途だったから、このままではいけないと、孝義は逃げ道として、異業種に参入しようと、三階の空きスペースに飲食店をやった。カレーの専門店だった。ところが、初めのうちは、カレーが本格的な味だと評判をとっていたが、飲食店街のレストランやスパゲッティ屋が、対抗するようにメニューでカレーを前面に出してきたら、味と価格で負けた。

結局、店は数千万円の投資金額を残したまま、二年で畳むこととなった。また借金が増えた。銀行ではすでに、融資枠がないので、新たな借入はできない。自宅もすべて担保にしていたから

、あとは商工ローンのような危ない金融よりなかった。

それまでは二代目として、ゴルフをしたり、新車を乗り回していた孝義だが、一挙に貧乏のどん底に叩き落とされていた。社長夫人として、ブランドものに身を固めていた奥さんも、恥をしないで別のスーパーにレジ打ちのパートに出ていた。ちょうど、子供にも金がかかるときで、煙草代にも事欠くときに、息子二人を都心の大学にやっていた。私立大学にひとりやると、授業料と生活費で仕送りが月に二十万になる。二人で四十万だ。親がどんなに節約して、苦しい生活をしていても、息子たちはアルバイトをするでもなく、海外旅行までして遊んでいた。親の心子知らずで、あれこれと飲食に湯水のように小遣いを使う息子たち。

ブルーフォレストでは、テナントで入っていた、昔からの仲間の店が次々に倒産して閉店していった。テナントの賃料で維持している本体の組合は、数十年の赤字にやはり喘いでいた。個店だけでなく、建物を管理する組合自体も収入減で大変だった。

そこで、なんとか空き店舗を埋めるために、安い条件で声をかける。いままでは、売上の六パーセントの歩合を各店舗から徴収し、さらに坪当たりの家賃、共益費、販促費と称して二万は取るから、五十坪のフロアを借りている孝義の店なら、月に百五十万の店舗維持費が売上から天引きされる。年に二千万近い。その他に、人件費も光熱費も独自のPR費もかかる。どう計算しても、社員に給与を支払うと、自分たちの取り分はなくなる。

孝義の向いに新しい婦人服の店がオープンした。商売敵が目の前にできたことに腹が立った。しかも、ターゲットは同じミセス専門だ。似たような婦人外装で、しかも同じメーカーのブランドが並ぶ。それとなく挨拶がてら、向いの店長に入店条件を聞いて孝義は驚いた。従来の店舗の半分以上の特別待遇だ。調べると、他のテナントも、後で入ったところはみんな安く入っている。孝義は他の店長たちと、組合の長に抗議に行った。

「おかしいじゃないですか。われわれはここで三十年も、このショッピングセンターのために貢献してきたんだ。それなのに、後で入ったところに、まるで、マンションの売れ残りを半額以下で売るように差をつけるとはどんな見なんですか」

組合側の言い分は、このまま空き店舗が増えると、やりくりができなくなり、みなさんの負担を増やさなければならなくなる。売上歩合を現行の六パーセントから十パーセントに増やすと、ますます経営が苦しくなるだろうという返答だった。

地方のこうした大型店も、いまの国の施策に似ていた。国民に消費税を強いるように、税金を上げてゆかなければ本体が維持できない。

手形を落とすために、毎日、綱渡りのような資金繰りをしていた。孝義は、商売をやめたくなった。毎日が地獄であった。すっかりと疲れきっていた。破産したら楽だろうなと考えるようになった。このままでは、いつまでも終わらないタンタロスだ。

銀行に融資の交渉にゆく。担当の窓口は、高飛車に云った。

「元金どころか利息も滞納しているのに、追加融資ですか。そんな無茶な。うちも不良債権の整理を上から云われているんですよ」

「だったら、いいです。店はたたみましよう。もう疲れました。やればやるほど墓穴を掘るから」孝義は開き直って云った。

すると、融資担当は急に怒った。

「ダメですよ。やめるなんて考えたら。死ぬまで借金を払ってもらいますからね」

銀行がやめさせてくれない。さりとて破産も怖くてできない。ずるずる、ずるずると蟻地獄に落ちてゆく。

政府は景気が上向いてきたと大本営発表を繰り返していたが、もう誰も信じない。嘘の世界に住んでいるのだ。孝義にとって死ぬことのほうが楽に思えるほど追いつめられていて、どうしたらいいものか、宙ぶらりんのまま終わらない明日だけが見えた。

もうすぐ冬がくる。孝義は、銀行から帰るときに、並木を仰いだ。そこにはすでに裸木に近い樹木が立っていた。それでも、何枚かの葉っぱは、枯れているのに散れないで、なおも枝にしがみついていた。

第982話

温泉へ行こう

若いときから温泉は好きであった。最近では、親孝行もあり老父母を近場の温泉に週一で連れてゆく。この北国はまるで温泉のメッカでもあるかのように、四百を超える温泉があった。全部を回っても、一週間に一回なら、八年以上もかかるのだ。

最近では温泉ブームに翳りが出てきていた。例の温泉の素を使ったり、水で薄めたりと、成分表示もインチキだ。そんな客を騙すようなことをしているから、客離れを起こす。

ある山峡に、ずばり、正直温泉という名の温泉がオープンした。そこは、絶対に客に嘘をつかないということで、連日、予約客でいっぱいだった。効能がいいとか、サービスがいいとか、料金が安く、料理と部屋がいいとか、そんなことで、呼び込みしても、嘘があると行きたくなくなる。そうなら、程度が落ちても、正直なところがいいと、団体客も面白いと詰めかけていた。

その名物は湯治三十三カ所巡りだ。どんな風呂かと泊まりに行ってみた。

旅館の旗を手にした法被姿の番頭さんが、迎えに出ていた。

「ようこそ、正直温泉へ」

「あのう、ここは本当の温泉なんですよ」

わたしは恐る恐る訊いた。

「少し、ちよろちよろと湧いてはいますがね、あとは水で薄めて沸かしております。はい」

「だったら、草津の湯とか玉川温泉だとか、湯田中だとかは嘘ですか」

「おほん、うちは嘘は申しません。すべて、温泉の素を使っております。売店でも全国の温泉の素を売っていますので、お帰りにお土産にどうぞ」

すべて、バラしているところが、逆に安心して入れる。わたしたちは、部屋に入ると浴衣に着替えて、さっそく温泉巡りをしようと、川沿いの露天風呂や岩風呂などが、大小さまざまある大浴場に行ってみた。脱衣場に、どこにでもある効能書がある。

「注意・このお湯は飲んではいけません。いままで飲んで五人が死にました」と、朱文字で大きく書かれていた。

「効能・色白になります」

とあるから、いま流行の美白効果がある温泉なのかと、成分表示を見ていたら、「キッチンハイター」と書いてあった。

「おいおい、ばあさんよ、ここのお湯は危ないぜ。漂白剤が入っている」

別の風呂にも効能が書いてあった。

「効能・婦人病、慢性病、胃弱、神経痛、痔、皮膚病になります」

この温泉は実に正直であった。普通なら、そうした病気を防いだり、治したりするのが、この温泉はどうやら入ることによって促進されるらしい。さらに成分表示を見ると、

「アミノ酸、食塩、かつおぶし粉末、グラニュー糖、味噌、ワカメ、豆腐」

わたしは、首をかしげてもう一度見た。

「なんだ、味噌汁じゃないか。ということは、おれたちは具か」

夕食のお膳についての料理も、いちいち説明書が添えてあった。山菜は、すべて中国産です。川魚も韓国から冷凍輸入したものです。牛肉はアメリカ産で、検査をしていない危ないものを密輸しました。鶏肉に至っては、香港で処分されたものをただで貰ってきました。この山で採れたものはひとつもありません。

みんな、怖がって、箸もつけない。それでも、仲居さんたちはにこにこ、

「お客さん、ご安心くださいな。当旅館は、皆様方全員に生命保険をかけております。万が一ではありませんね、十に一、死んだり、入院したりしても、ご遺族が泣いて悦ぶ額を保証しておりますのよ、ほほほほほ」

確かに正直過ぎるくらいだ。

売店に行くと、いろいろと温泉まんじゅうなどのお土産が売っているが、そのコーナーの天井から大きな文字で、「名物にうまいものなし」と、書かれている。「すみません。この温泉でおすすめはありますか」

と、わたしが訊くと、売店の人が、ケラケラと笑いながら、

「おすすめして、後で恨まれるものばかりですから。どれも不味いですよ。第一、あなた、こんな大きな箱に入って、この値段の安さ。一個五十円のお菓子ですよ。おいしいわけがないじゃないですか」

誰も買わないどころか、みんな群がって買っていた。評判はいい。

「どれ、不味いものでも買ってゆくか」

「このお菓子なんか、包装紙だけを替えて、中身はどこも同じですよ。マレーシアに安く日本の輸入業者が作らせているんですよ。日本ではこんなに安く作れません」

誰も、本当にどれほど不味いか、試してみようと買ってゆくのだ。

その正直温泉が人気を得ている話を聞いて、隣の温泉旅館も、真似をした。

「正真正銘の温泉です」

と、大きく看板まで立てた。

次の週に、わたしたちはそこの旅館の温泉に入りに行った。

入ってみると、どろどろしていて、底が見えないほど濁っている。確かにぬめぬめして、その温泉は強そうだ。手足が黒くなるほどだ。湯ノ花が多いのだろうかと思っていた。入った後味がどうしても悪い。逆に体が汚れて臭くなったように思うので、そこの旅館の番頭さんに聞いた。

「あのう、ここの温泉は本当に本物ですか」

「ええ、うちでは、水で薄めたり、温泉の素などは使っていませんし、よく、よそでやっているお湯の循環ということもやっていません」

「それなら、本物なんですね」

「そうです。もっとも、ここ十年間はお湯を替えたことはありませんがね」

第983話

金縛り

金縛り体験というのは、なった人でなければ判らないし、信じない。わたしは、いままでは三回やったことがある。いずれも若いときのことだ。あの恐ろしさは忘れることはできない。

一度目は、岡崎のアパートで暮らしていた新婚時代のときだ。それは朝方起こった。蒲団に入っていて、部屋が薄ぼんやりと明るくなったのを見ていた。目だけが起きていた。だが、体が動かないことに気が付いた。自分の意志で、指一本も動かさないことで、わたしは焦っていた。それは、急激に叩き落とされたような恐怖だった。そのときは、妻が隣の蒲団で寝ていた。部屋の様子はリアルに判る。情景だけがはっきりしているのだ。隣の居間も見えていた。応接セットがあり、ステレオがあり、テレビの位置まで確認していた。

体が動かさないことで、わたしはもがいていた。声を出して、妻に知らせ、助けてもらおうとしたが、その声も出ない。幽霊なんか信じないわたしは、そのとき、怖いものの存在を考えなかった。自分が、すでに死んだか、いままさに死にかけているものと、そう思った。それで、一生懸命、隣に寝ている妻に助けを求めるようにして、声をかけようと必死だった。

明け方に死ぬ人が多い。そのころは若者のぼっくり病というのが話題になっていて、健康な若者が、朝方、蒲団の中で突然死するというのが各地で起こっていた。わたしの意識の中にはそのことがあった。救急車を呼んでもらわねば、このまま、意識も薄れて絶命してしまうのだろう。うううう、と声にならない声をふり絞って出していた。

すると、妻がわたしの異常に気が付いて、

「どうしたの？」と、起きて声をかけ、わたしの体を揺り動かした途端、金縛りは解かれていた

。

「ああ、よかった。体が動かなかったんだ。このまま死ぬかと思ったよ。おまえに助けを求めて叫んだのだが、声も出ない。怖かった」

わたしは全身に汗をびっしょりとかいていた。

「金縛りにあったのね。うううと、うなされていたもの。びっくりしたわ」

半覚醒の状態にあって、まだ体は寝ている状態にあるのに、意識だけは起きています。それは焦る。

二度目のときは、実家に戻ってきて親と一緒に暮らし始めたときのことだ。親は若い夫婦のために、母屋の二階を綺麗に改装までしてくれた。たまたま仕事が休みで、二階の炬燵に足をつっこんで昼寝をしていた。誰もいない部屋だった。妻も買い物に出ていたし、わたしは滅多に昼寝などしないのだが、仕事疲れが溜まって、読みかけの本を胸元に置いたまま、いつのまにか寝ていた。

ふっと目覚めたとき、そいつは起こった。一度、経験しているから、そう驚かないと思ったら、今度のは違う。人の気配がするのだ。この部屋に何者かがいる。影が動いている。わたしの視野には入らないが、どこかに感ずる。それで、意識はあるのに、体は微塵だに動かない。誰なんだ。見えない実体が、ごそそと動いている。音が聞こえるから、聴力もあったのだ。今度の金縛りは、ぽっくり病などではなく、明らかに、魔物の仕業だと思っていた。わたしは、やはり焦った。起きあがって逃げようともがいていた。このままでは殺されるという恐怖があった。声を出そうと、その呪縛を取り払うために必死でうなっていた。

そのときは、また意識がなくなり、買い物から戻った妻に起こされて、夢だったかもしれないと、後で思ったが、どうも、夢にしては現実味を帯びていたから、あれは金縛りであったものと思う。

そして、三度目のときだ。それは会社のデスクに向かっていたときに起こった。

そんな日中に、しかも寝ているときでもないのに、同じ状態になるというのは、いままでに経験したことのない恐怖だった。

そのころは、わたしは会社の経理を任されていた。会社は資金繰りに詰まり、もう、二進も三進もできないところまで追い込まれていた。いつ倒産してもおかしくはなかった。その異常な状態の中で、ストレスから、わたしはパニック障害をやり、自分では心臓の発作だと思っていた。それが、酒という薬で和らぐことを覚えてからは、昼から会社でブランデーを飲んだりしていた。そうでなければとてもやってゆけない。

従業員の奥さんから匿名で電話がはいり、

「旦那の給与はいつ払ってくれるのさ、家のローンもあるんだよ」

と、給与が遅配になつているので家族からものすごい脅迫電話がくる。と思うと、取引先が手形を返しにくる。

「こんな先の手形は受け取れません。今後、原料の納品は現金にさせてもらえませんか」

とうとう、信用がゼロになり、倒産するといった悪い噂も飛び交っていた。電話も怖い。すべてわたしが矢面に立つ。

一手形が落ちませんよ。残高不足です。あと、百五十万、四時まで待ちますから、なんとしても持ってきてくださいよ。

わたしは、体が硬直したまま、動かなかった。身動きがとれなかった。完全に金縛りに遭っていた。

第984話

熊が下りてくる

今年は猛暑だった。作物も豊作までゆかないが、成りはよかった。畑がそうなら、野も山も自然のものも実を沢山つけたはずだった。それなのに、各地で山から熊が下りてきていた。毎年の秋は、早く寒くなるときなら、熊も冬ごもりのための食糧を求めて里に下りてくることはあった。だが、今年は残暑が秋まで続いていた。紅葉もいつもの年より遅いのだ。

わたしは、山歩きが好きで、暇さえあれば千メートル級の近くの山を歩いていた。やはり、熊が出没するというので、出かけるときは必ず、熊よけの鈴と、蚊取り線香を持ってゆくことにしている。普段は山で音楽を聴くなどという愚はしないのだが、それも熊よけのために、携帯ラジオを登山道を登るときから鳴らしながら歩いてゆく。音を出してゆくと、熊のほうから避けてくれるのだ。

わたしが、登山道を歩いても、普段はなかなか小動物たちと出会うこともない。彼等こそ用心深く、決して人間たちの傍には寄りつかないものだ。それが、その日は違っていた。山のほうから、野うさぎたちが、一斉に下りてくるのを見かけた。うさぎだけではない。ネズミやリスといった土の中にいたり、木に棲む森の動物たちも、山を必死で下りてくるのだった。そんな光景はいままで見たこともない。

何かあるのかと、不吉な予感がしていた。七合目まで登ったところで、笹藪から、ごそごと何か黒いものが出てくる音がした。わたしは、身構えた。熊だろうか。至近距離だから、もし、親子連れの熊と遭遇したら襲ってくるだろう。そんなときは上よりも下に逃げるのがいいと、何かの本で読んだ。北海道で、六人のパーティが熊に襲われた。山の斜面を上へ逃げた二人が熊に追われて捕まった。下に逃げた四人が助かっていた。熊は前足で斜面を駆け上がるのは得意だが、駆け下りるのは苦手のような感じだった。それにジグザグに下りてゆけばいいとも書いてあった。荷物はわざと熊の前に投げ出すのだ。それに注意を向けているうちに逃げるのだ。野生の動物を侮ってはいけない。走る速さも力も、人間より数段上だ。

藪から出てきたのは、熊の毛が確かに見えた。わたしは、そのほうに向けて、リュックサックを投げた。中身が散らばるようにわざと口を開けて放った。せつかくの弁当がひっくり返っていた。

すると、その熊の毛は、人間の口を利いた。

「おいおい、何を勿体ない」

よく見ると、熊の毛皮を着た人間だった。

「なんだ、驚いた。熊だと思った」

わたしは、まだ足と声が震えていた。

「この辺りにはいないさ。わしはよく知っている」

髪も髭も伸ばし放題だから、熊と間違えてもしかたがない。

「この山に住んでいるんですか」

わたしが聞くと、

「そうだ。この上に小屋がある。だが、引き払って、これから下山するところだ」

どうやら、昔からいたマタギと称する山人らしかった。獣を捕獲し、その肉と毛皮を村人に売って生計を立てている。いまは、滅びつつある職業だった。

「まだいいが、これから来月を過ぎたら、あまり山に登ったりしねえほうがいいな」

マタギは、石に腰を下ろして、一服し始めていた。わたしは、持ってきた荷物から、野菜ジュースの紙パックを男にあげた。

「どうしてですか。何かあるんですか。登ってくるときに、うさぎやリスなんかも沢山目にしましたが」

「そうだろう。あんたには、聞こえないんだ。あの音がな」

「あの音？」

じっと耳を澄ませても、風の音以外は何もしない。

「体も何も感じないだろう」

男にそう云われても、別に変わったことはない。

「そうさな、人間どもは何万年もの間に、そうした知覚を、本能とでもいおうか、忘れてしまいやがった。わしには、まだ太古の人間の耳と鼻と目がある。そうした血がいまだに流れている数少ない人間のひとりだ。昔の人間も、いまより数倍もものを見、嗅ぎ、聴く能力があったのだ。そして、感ずる力も備わっていた。それがどうだ。おまえたち街の人間ときたら、機械の力ですべてを退化させてしまったのだ」

わたしは、男が何を云おうとしているのか判らなかった。

「それと、熊が下りてきたり、動物たちが山から下りてくるのとどんな関係があるんですか」

「はははははは」

男は笑っただけで、何も話そうとはしない。暫く、二人の間には沈黙が流れていた。

「まあ、おまえさんにだけは聞かせてやろう。もっとも、どうせ、街のやつらと同じで信じないだろうがな。近いうちに山という山が爆発する。いままで、街の人間どもがしてきたことに、神は怒られたのだ。山は火を噴き、街を焼き払う」

わたしは、ここ十年の間に、毎日のように各地で地震が頻発していることを思い出した。活動期に入ったという学者もいるくらいだ。それは造山活動も含めて、地殻が活発に動くということだ。

「わしは、いままで地震という地震をすべて予知してきた。そういった特殊な能力でもない、昔、血の中を流れていた記憶を覚えているだけのことだが、わしに教えるんだ。危険を回避するように。逃げろ、逃げろとな」

男はすべてを知っているかのような目で遠くを眺めていた。

「十二月には気を付けるんだな。大きな地震がくる。わしは、船で北へと向かう。ずっと北だ。そこは安全だ。それだけだ」

男は不気味な予言を残して、笑いながら下山して行った。十二月というと、いまは十月だから、あと二月。何が起こるのだ。わたしは、空を仰いだ。野鳥たちも狂ったように村のほうへと飛

んでゆく。いままでも異常気象や天変地異は頻々と起こっていたが、これから大きな何かがあるというのか。

山は走るように燃えていた。それは、わたしの見た紅葉と重ね合わせた幻想だった。何も見えないし、何も聴こえないし、何も感じない。さわさわ、さわさわと風の音だけが下りてくる。

第985話

閉じられてゆく肉体

すべてが嫌になってきていた。仕事もうまくゆかない。何をしても好転しないばかりか、ますます泥沼にずぶずぶと沈んでゆく。世の中の景気はかなり悪いどころか救いがたいところまで来ていても、誰も何も云わない。ただ、死ぬやつだけが静かに去ってゆくだけのことだった。これから経済も政治も大変な地獄を迎えるということに気が付かないで、バカな茶番の繰り返しだ。テレビも新聞も人の話もあまりにもくだらなくて見ていられない、聴いていられない。

おれは、こんな世の中を捨てたくなかった。どこか隔絶した世界に棲んでみたいと思うようになってきた。テレビはいつも消していた。新聞も読まなくなった。それでも、どこからか聞こえてくる話には耳を塞ぎ、目を瞑った。家族もまたその俗世間にずっぴりと浸かって、その信者になりきっている。そして、自分勝手に我が儘、欲にまみれている。そんな家族もいない。家も会社も出たいと思うようになっていた。こんなときに、サラリーマンの蒸発というのが起こるのだろうか。おれのように嫌々生きているのが多いのだろうか。それで酒に逃げたり、ギャンブルにのめり込んだり、趣味という別世界に逃避したりしているやつが多いのだ。

おれは、最近になって耳が遠くなってきているのが気になっていた。人の話が聞きとれない。電話も遠いような気がして、耳を澄ませて、神経を集中するようにして聞いていた。年のせいにするにはまだ早い。ようやく五十を過ぎたばかりだ。

耳鼻科で、聴力検査をしてもらうと、グラフを医師から見せてもらい、四十デシベルも平均的な数値より低いということで、難聴認定されていた。

「補聴器はいいのがいまはありますよ」

そう云われて愕然としていた。おれは耳から老いてゆくのか。やはり抵抗があるから、多少不便でも我慢することにした。難聴も度合いによって、障害者の認定を受け、市で補助が受けられる。安い補聴器も勧められた。おれは、否定するように首を横に振り続けた。

次にきたのは目だった。視力が落ちていっている。おれは中学のときから近視で、高校に入るとまもなく眼鏡をかけるようになった。それから三十年余り、その間、そう視力が落ちたということはなかった。両目がそれぞれ〇・〇五だから、一番上の大きな文字が前進してようやく見えるという程度だ。それが、仕事でパソコンを一日十二時間は使用するから、眼精疲労を起こしていた。目薬はいつも机の上に置いていたし、ブルーベリーのドリンクなども気休めで飲んでいた。

パソコンの画面が掠れてゆく。老眼がかなり入っているというので、仕事用の眼鏡も持っていた。遠近両用でも、最近境界がなく、見た目には判らないというが、それにも抵抗がある。三つの眼鏡を使い分けしていた。車に乗るときの遠方を見る眼鏡。室内で使うもの。そして、パソコンに向かうときのものだ。

それもだんだんと眼鏡が合わなくなり、視力が衰えてゆくの目が増しに判るようになった。

それで、やむなく眼科で検査を受けてみた。

「とりわけ、狭窄症とか、網内剥離ということもないみたいなんです。他の原因も検査してみましたが、どうも原因不明です」

医師は匙を投げた。すでに、仕事ができないところまで落ちていた。目を近づけてもモニターの大きな文字も判読できない。まして、車に乗ることもできないでいた。人の顔も見えなくなっていた。薄くぼんやりと、なにかが動いているぐらいの視力だから、完全な弱視だった。それぐらいになると、眼鏡で矯正という段階ではない。

おれは、ぞっとした。このまま失明したらどうしようか。すでに、仕事ができないから、自宅にいた。外出もできなくなっていた。耳も全然聞こえなくなっていた。家族に補聴器を勧められて一応付けてはみたが、それもなんの効果もなく、最大に合わせても聞こえない。やがて目も光すら感ずることがなくなってきた。

そうすると、口も利けないことが判った。まさに三重苦だ。見えない、聴こえない、喋れない。それだけで終わらなかった。思考能力も初めは焦点がぼやけたようになっていたものが、霞がかかったようにぼうっと定かではなくなってきた。

おれは、家内に連れられて、東京の総合病院で診察を受けた。珍しい病気だということで、数名の医師がをサンプルとしておれを実験台にしていた。結論はこうだ。精神的なものが作用して、肉体に様々な障壁を作っているのではないかとということだけが判ってきた。

「目は見えているんです。耳も聴こえているんです。ただ、見ようとしない、聴こうとしない無意識が働いて、その機能を拒絶しているんですな。ただ、奥さん、それだけではないんです。ご主人の皮膚にも異常が現れてきているんです」

おれは、そうした会話を家内が掌に文字で書いてくれるのを判読していた。それによれば、おれの皮膚がまるで外敵から身を守るかのように硬化していつているという。象皮病というのが昔はあった。それは性器や足などの末端がとてつもなく膨れて大きくなると、皮膚が象のようになりがさがさになるという病気であった。おれの皮膚は、膨らむことはなかったが、まるで乾燥したようにかちかちになってきていた。いまや、人に触られても、その感覚がまるでない。そうになると、外気との接触も断つかのように、体の表面も閉じられていた。

嗅覚もなくなったようだ。当然、味覚もない。口に入れられた病院の食事がなんの味もしない。異物を呑み込んでいるようなものだった。

ああ、おれは感覚という感覚をなくしていた。一体、どうなってしまったんだ。

そのうち、だんだんと手足が動かなくなってきた。体が自分の意志で、どうにもならなくなったとき、おれは、意識が薄れてくるのを感じていた。まるで、幼虫が蛹になるときはこんなふうだと思うように、おれは世界から遮蔽されるように閉じていつていた。

第986話

万引き

卓雄は高校二年生だ。親が授業料を溜めていて、呼び出され、恥ずかしい思いをしていた。いまは、商売をしている家でも、サラリーマンでも、ボーナスが出ないとか、収入が減らされたりで、どこも大変だった。クラスで五人は授業料を滞納している家があるという。それが三月も続くと退学とならざるをえない。減免措置というのものもあるが、基準が難しい。高校で十人に一人が、家計が苦しいと高校中退で辞めてゆく生徒がいる。後の生徒でも、遅れながらもようやく払っている家もある。いまや、年金も二人に一人が払っていない時代だ。大変な世の中になったものだ。

卓雄は、ケイタイも親が払えずに、止められた。仕方なく、コンビニからプリペイド式のケイタイを購入してちびちびと使うようにしていた。当然、小遣いもなし、買い食いもできないし、友達とカラオケに行くこともできないでいた。

少年の犯罪が増えたのには、そんな裏面もある。万引きもすごいものがあった。ある学校では生徒の半分以上が一度は経験したというアンケートもあった。万引きだけではない。アルバイトをしていて、レジの金を着服する。商品の横流し、備品の持ち出しなどは日常茶飯事に行われているという。

だが、若者を信用しなくなったスーパーなどでは、パートとアルバイトの募集を三十歳以上に切り替えた。新卒の募集が減った理由は、不景気による人員削減だけではなく、若者たちは、せっかく採用し、社員教育の手間暇をかけても、三年もたたないうちに半数以上が辞めてしまうこともあるが、それだけではなく、そうした犯罪が多いからなのだ。

企業のリサーチをしていたテレビ局が、人事担当者にインタビューしていた中にそんな回答があった。モラルが完全に低下していた。それは誰が悪いのか。当然、毎日のように新聞やテレビで騒いでいる大人たちの不祥事だ。政治家が逮捕される。警察官や役人が贈賄、横領、詐欺であげられている。学校の先生まで紙面を賑わせている。いまや、どんなことをしても許される時代なんだという風潮が若者の間で定着し、罪意識が希薄になっているのだ。

政府は、そのために少年法を改正し、荒れるアメリカを手本に、青少年犯罪の撲滅のために、法律の枠で締め付けてきていた。

以前は万引きというものは、単なるゲーム感覚で行われていた。スリルがあり、そのドキドキ感がたまらない。子供たちの遊びであった。ところが、最近是不景気で、小遣いもないから、万引きは盗みそのものになり、換金目的に変わってきた。現金を盗むという機会は少ないが、商品なら、盗り放題だった。コンビニでもスーパーでもデパートでも、防犯ビデオカメラは設置してあるが、それとて、必ず死角があるということを少年たちは知っていた。中にはグループで如何に万引きの完全犯罪をするかという研究までしている生徒がいた。

だんだんと凶悪化する少年犯罪に歯止めをかけようと、警察が対策に乗り出した。

卓雄は、いつものようにコンビニで獲物を探していた。なるべく高いものを万引きする。そのほうが売るときに金が入る。半額でも売れるもので、値段の高いものは化粧品だ。一個盗むと、今日のマック代は出るだろう。ケイタイのプリカもそろそろ切れそうだ。三千円はかかる。

高い商品は、まんなかの通路には置かない。外から見える棚に置いてあるのだ。だから、雑誌の棚に立つ後ろに化粧品なんかは並べてある。卓雄は、手口をすべて習得していた。まるで手品のように素早い動きも練習してきた。週刊マンガを立ち読みするふりをして、後ろ手でそろそろと狙い目のものを掴む。雑誌がそれをシャツの中に入れるのに、覆いとなる。

たまたま、他の客の少ない時間帯であった。間の抜けたようなバイトがひとりだけレジのところに立っている。もうひとはバックヤードに商品を取りに行ったところだ。防犯カメラは三秒おきに収録する位置を変える。その三秒の空白を狙うのだ。ドキドキしてきていた。いつもながら、これほど楽しい遊戯はない。

卓雄が、そろそろと雑誌を読みながら後退し、化粧品の瓶を後ろ手に掴むや、学生服の内側にさっと隠した。その間一秒の早業だ。しめしめと思っていた。

すると、どうしたわけか、コンビニのバイトが不安な視線を卓雄に送り、店の外に出て行った。店内には誰もいない。しめた。もう一個盗める。卓雄が、もう一個に手を伸ばそうとしたときに、外からものすごい光が卓雄を照らした。ひとつだけではない。いろんな方向から、卓雄を目がけて照明が照らされていた。卓雄は幻惑した。目が開けられない。何が起こったのか一瞬判らなかった。まるで、ステージでストロボをたかれたアイドル歌手のようだ。ようやく目が慣れて、外を見ると、いつのまにか、機動隊の投光器がずらりと並び、ジュラルミンの楯が整列していた。パトカーも数十台が包囲しているようだ。警官の数も数え切れない。

卓雄は怯えてしゃがみこんだ。何があったんだ。一体、このコンビニにテロの爆弾でもしかけられたというのか。卓雄は危険を感じて、身動きができないでいた。そのとき、拡声器から、刑事の呼びかける声がした。

「君は完全に包囲されている。無駄な抵抗はやめて、おとなしく出てきなさい」

誰のことだろうかと卓雄は考えていた。空にはヘリコプターの音。テレビ局が取材中継のために飛ばしているのだろう。

「繰り返す。化粧品を万引きした君だ。すでに君の素性は判っているのだ」

「卓雄、出てきて、お願い。もう二度とこんなことはしないで」

「卓雄、お父さんだ。頼む。小遣いはなんとかやるようにするから、出てきてくれ」

卓雄の両親までが、いつのまにか説得のためマイクに向かって泣いていた。

卓雄は茫然自失と立ち上がっていた。

「ぼくが、何をしたというんだ。たかが万引きしただけじゃん。それなのに、それなのに……」

仲間の告別式に出た。無宗教であった。供花、供物一切を遺言でご辞退すると、新聞の死亡広告欄に出ていたから、あの人らしいとは思った。わたしは、数珠は持たないのだが、当日はその必要がない。坊さんがひとりも来ていない。祭壇も質素で、焼香もない。遺影と花だけが葬祭場の中央にあった。

参列の人々は、祭壇の前に進み出ても、何かいつもと違う雰囲気戸惑っている。それを見ていた司会者が、マイクで、

「ご会葬の皆様にお願いがございます。ご焼香はございません。のちほど献花をしていただきますので、どうぞ、お座りになり、お待ちくださるようお願いいたします」

と、静かにこれからの式の進行について説明していた。どうしていいか判らない人がうろうろしていた。

ずっと、会場にはモーツアルトのレクイエムが流れていた。あの人がしてやったりと、遺影で笑っていた。

読経がないから、最初から、七人の親近者による弔詞があった。同じ職場の同僚から教え子と、身内から代表して一人、親友と続いた。亡き人について語り、それに耳を傾けるとというのが、一番いい悔やみになるだろう。

わたしは、いい告別式を見てきて、自分のときもそうしようと、勇んで家に帰った。

「おふくろよ、おれの葬式は無宗教でやってくれよな」と、八十過ぎた婆さんに、五十過ぎた息子が頼んでいた。

「聞いたかい、おじいちゃん、この息子はわたしたちより先に逝く気だよ」

と、笑っている。いまは、死ぬのは年功序列ではないのだ。順番なんかあるものか。先立つ不幸もくそもない。この不況の最前線に立たされて、ストレス攻めに遭い、借金まみれで苦勞している世代が、過勞死したりしている。それに比べて、年金をたんまりと貰っている老人たちは、元気がいい。悠々自適で長生きして当然だ。

周りの同世代がバタバタと死んでゆくとき、わたしもいつ死んでもいいように、心の準備と周りの始末だけはしておこうと、あれこれと、いままで考えたこともないことを、書き残しておくことにした。

それをある日、女房に云ってきかせた。

「いいか、おれの葬式は無宗教でやるからな」

「それまで、わたしがいればね」

「そうか、別の女房になっている可能性もあるな」

「大丈夫だって、そんな葬式代なんかうちにはないでしょう。無宗教どころか、葬式も出せないから」

「それはちと、淋しいんじゃないか。そうだ、結婚式も会員制があるから、葬式も会員制にして、みんなから集めた金でやるとか」

「何云っているのよ。あんたの仲間というのは、ほとんどおじいちゃん、おばあちゃんばかりでしょう。みんな先に亡くなって、あんたがひとり残って、死ぬときは、もう知り合いは誰もいないの」

「そうか、いまから、もっと若い友達を作っておかなければならないのか」

考えてみれば、わたしの周りはみんなわたしより遙かに年輩の人ばかりだ。毎年、何人も仲間の葬儀に出るのはいいが、みんないなくなると、誰がわたしの骨を拾ってくれるのだ。そんなことも心配しなくてはならない。

「それと、戒名なんかもないからな」

「大丈夫だってば、そんなお金はないから。わたしが付けてあげる。院と居士なんか勿体ないから、三つくらいにしてね」

「どうせ付けるなら、世界一長くしてくれよ。卒塔婆に書ききれないくらいによ」

葬式も金がかかる。借金ばかり残して死ぬと、葬式どころではない。

「それから、自然葬にするから、骨は墓に入れるな。細かく砕いて、散骨にするんだ。海に撒いてくれ」

「いやよ、あんたの骨を食べた魚をわたしたちが食べるかもしれないじゃないの。気持ち悪いわ」

もうそこまで夫婦仲は冷えていた。

「それで、火葬はしなくていいからな」

「土葬なんかもっといやよ。鳥葬というのはどうかしら。鼠葬というのもいいかもしれない」

「バカ、気持ちの悪い。とにかく、おれの葬儀の後に、家族親戚みんな集めたら、ここにレシピを考えておいたから、この通りに料理を作って出すんだ」

女房はメニューを見ていて、首を傾げた。

「こんな、五十キロの肉なんか、どうして用意するのよ。高くて買えないじゃないのよ」

女房は肉料理を会食で出すのもおかしいが、レシピの中に肝臓やホルモン、骨付きカルビがあるのに、しばし考えていた。

「これって、ひょっとして……」

むらむらと吐き気を催してきた女房に向かってわたしは云った。

「そうなのだ。いままで誰もやったことのない食葬をしようと思う」

第988話

死ンドローム

若者たちが絶望している。生きる望みがないから、あっさりこの世とおさらばをする。そうした死に至る病が世間に症候群のように蔓延していた。

一人では死ねないから、集団自殺がインターネットの掲示板でほのめかされ、また実行されている。

戦前には、死ぬ宗教というのがあって、この世を憐む集団ができた。それはアメリカや南アメリカのある国にも以前起こったことで世界を驚かせた。何か、世の中が窮してくると、先行きに

悲観してそうした集団自殺が起こる。これは、動物の集団自殺と関係がないだろうか。動物たちは本能的に、個体維持のために増えすぎると自殺に走る。人間にもそうしたプログラムが遺伝子に組み込まれているのではないか。

いまの日本では自殺者が三万人を超えて、交通事故死より遙かに多くなった。だが、この三万人という数字は自殺とはっきりと判っている数字だ。遺族が、世間体のため、また保険金のために事故だと云っているのも沢山あるだろう。実数はその何倍もあっても不思議ではない。

例えば、薬を飲み続けなければ死んでしまう患者が、生きていても治るわけでもない、薬の服用を止めたときも、それは自殺になるだろうが、新聞では病死ということになる。癌でも手術を拒否し、治療もしない人は自殺になるのだろう。

一度、自殺願望のグループのチャットルームに入り込んで、会話をしたことがある。彼等の話題は、専ら、どうしたら苦しまずに楽に死ぬかということであった。ただ、その部屋に入る人は、やめさせたり、非難したりしてはいけないと、断りがあった。そうした余計な人は入室禁止である。

自殺のサイトも沢山あって驚く。いままでの死ぬ動機というのが、失恋であったり、病気であったりと個人的な理由が圧倒的に多かったが、近頃は時代を反映してか、仕事がないというのが、若者たちを自殺に走らせる。年金も出ない、税金も上がる一方で、憲法改正して、そのうち戦争に巻き込まれる。上のほうはしたい放題で、甘い汁ばかり吸っている。全くバカにしているような、この暗い日本に生きていても仕方がない。そうした社会的要因が増えてきているということは、大変なことだ。これからますます経済は落ち込み、戦前に逆戻りしてゆく。だが、戦争が起こると、お国のために、死んでいきますという若者ではない。恐らく、そうした局面に立つと、ますます自殺するものが増えるだろう。あまりのバカらしさがピークになる。

こうした情勢が、さらに悪化しながらも、国は退廃的になり、国民は墮落し、世が犯罪多発で乱れると、国自体が鬱病になってしまう。そんな未来を覗いてみよう。

通行人たちが、全員ヘルメットをかぶっている。プロテクターや防弾チョッキはすでに外出着の必需品となっていた。老人から子供まで、何が外で起こるか判らないから、みんな怖々と上を仰ぎながら歩いていた。ビルの上からいつ人が落ちてくるか判らない。直撃を受け、巻き添えで多くの通行人が死んでいたからだ。ビルの屋上へ通じる非常階段はすべて閉鎖され、窓という窓はロックされていた。それでも、ガラス窓を割ってまで、飛び降り自殺する者が後を絶たない。

車もスピードを落として走っていた。道路に寝ている人影を見つけたら、回避しなければならない。また、いつ車に自殺者たちが飛び込んでくるか判らない。電車なんかは、しょっちゅう人身事故のためにダイヤが乱れっぱなしだ。線路の両側はいつも血と肉片で真っ赤になっていた。洗い落とす暇もないから、そのままにしている。

自殺の名所の岬の崖は、連日の自殺志願者たちが列をなしていた。そうした自殺ツアーもできていて、バスが何台もやってくる。行きは満員、帰りは空バスだった。

もう誰にも止められない。生きてることが却って苦痛だった。国保、年金、も上がり、消費税も五割になってからは、どんなに働いても収入の七割が税金で持ってゆかれる。それでも、働く場がある人はいい。失業率が五十パーセントを超えたとき、全く喰うこともできない若者たちが、行き場を失っていた。

自殺は連鎖反応を起こす。藤村操が華厳の滝に飛び込んだら、真似をする者が後を絶たないように、暗い時代の風潮となる。時代に敏感なのは常に若者であり、多感で傷つきやすく、純粋に自分と世界を見つめてしまう。それが死と直結する結末を導くのは、この国にいたら、やがてむしりとられ、殺されると思う恐怖心もあった。

いまや、北からの脱北者に習い、日本からの脱日者が成田から続々と離陸していた。果ては亡命するものが目白押し。

日本は完全に腐っていた。ちゃらんぼらん政治家の悪政で、住み難くなった国なんか捨ててやると、健全な者たちはあっさりと出てゆく。

居残り組はすべて自殺症候群に罹患していた。みな衝動的に発作を起こす。タクシーに乗っていると、運転手が崖縁でハンドルを切った。飛行機のパイロットも、突然操縦桿を下げる。台所で大根を刻んでいた主婦が、庖丁をじっと見つめている。

死は日常化していた。道路にも髑髏が散乱していた。川にも海にも水漬くかばね……。

細々と生き残っている人たちも、税金滞納で国税庁の役人から脅かされていた。

「腎臓を売ってでも金を作れ、いいな」

いまやヤクザよりも恐ろしい。

二〇〇四年。それは、単にそのプロローグにしかすぎなかった。

第989話

寝小便物語

わたしは小学生になっても寝小便をしていた。四年生まで続いたろうか。それで、夜は祖母に、赤ん坊のようにおしめをさせられた。だけど、さすが恥ずかしさが判る年になると、おしめだけは拒否したから、祖母はシーツの代わりにビニールのシートを敷いて、わたしを裸で寝せた。夏ならひんやりと気持ちいいのだが、真冬は冷たくて、すっかりと冷え性になって、神経痛のような症状で、足が病んだり、ちんぼが病んだりした。

その痛みでよく泣いたので、祖母はわたしの足にニンニクともぐさのお灸をしてくれた。小学生のチビが老人のようにお灸だから、姉妹は珍しそうに、わたしのちんぼを見ていたりした。

寝小便の原因はいくつか考えられる。便所が階下にあったことだ。その頃の家は、二階の奥が住居になっていて、一階が親の商売で、洋菓子屋と喫茶店、奥が工場になっていた。階下の便所には怖くて行けなかった。わたしが五歳のときに、曾祖父が便所であたって死んだのだ。人の死んだ便所にひとりで行くことができないでいた。

それで、おまるを用意して、枕元に置いていた。六畳一間に、祖父母と姉妹と六人が寝ていたが、みんなでそのおまるを使っていた。今でも克明に憶えているおまるは、リスの絵柄のついた製菓工場を使う、栗のシロップ漬の一号丸缶であった。

それを置いていても、寝小便をしたのは、父母が小さいときから別室であり、共稼ぎで夜遅くまで店に出ていて、いつも傍にいなかったことも原因のひとつではなかったか。店に出入りする

と叱られたから、親の顔もあまり見ないで育った。親子関係が希薄なのは、姉妹も同じで、姉なんかは母と口喧嘩すると、いつも、親らしいことをしたことがあるのかと、そこまで云った。お手伝いさんがずっといたから、おふくろの味というのもあまり知らない。

学校の参観日があれば、いちいち事務室に顔を出して、「明日、参観日だからね」と、父に確認に行ったものだ。父は、普段、子供の顔も見ない罪滅ぼしを日曜日に埋め合わせをしていた。日曜になると、近くの松木屋デパートの食堂に連れて行って、お子さまランチを食べさせる。

姉妹は、そんな家庭で育ったから、普通のサラリーマンの家の子が羨ましく思っていた。嫁に行くのも、商売人の家はやめようと思っていたらしい。

寝小便が親を求めるための精神的な行為であるとすれば、親から離れば直るものだろう。そのために、五歳のときに、夏休みのひと月を寝小便を直すために、祖父に連れられて、東京と明石の親戚の家に泊まりに行かせられた。

六時を過ぎたら、水ものは口にしないという約束を、チビは守っていた。それで、明石の親戚たちがみんなして、夕食後に西瓜を食べていたが、わたしは食べないと、首を横に振った。よその家にいたから、緊張していて、お寝小は殆どしなかった。ひと月の間に失敗したのは一度きりだった。その一度も、知られてはまずいと思ったのか、わざとぐすぐすといつまでも寝ていた。

「起きんとあかんよ」と、従姉に云われても、「まだ眠いから」と、蒲団に入っていた。時間稼ぎをしていたのだ。そのうち、体温で乾くと判っていた。

みんなに寝小便小僧とバカにされていた。というのも、蒲団を毎日外に干していてバレてしまったのだ。

「いいじゃないか、エジソンも寝小便だった。天才には寝小便が多いんだ」

と、伯父は慰めてくれた。

わたしの出る量はすごいものがあつた。日本地図どころではない。世界地図だった。子供のときから地図を眺めるのが好きであつたから、それを夢でも実現していたのか。地理が得意で、高校でも地理を専攻したのはそれなのか。

祖母は、寝小便を直すために、松の根を煎じた甘苦い茶を毎日わたしに飲ませた。いまでも憶えている実に嫌な味であつた。あれこれと試してみたが、効果がなかつたようだ。

修学旅行のときも、母が先生に話していたのか、夜中に何回かわたしを起こしにきた。

そうした寝小便も小学生で終わった。

わたしは、あの蒲団の中で、じゅわっと放尿するときの快感が忘れられない。実は気持ちのいいものであつた。変態と思われても仕方がないが、経験のあるものでなければ判らない不思議な開放感があつた。

そのうち、年取ってくると、子供に還り、老人用のパンパースをするようになるのだろうか。快感はそのときもあるのだろうか。

うちの息子三人ともに小学生まで寝小便をしていた。寝小便は遺伝するのか。三人ともにであつたから、毎日の洗濯が大変だつた。なんとか直したいと、病院まで連れて行つたが、薬では効

果がないことを知った。精神的なものなのだ。

わたしは、星取票を部屋に貼り、ひと月、全くお寝小をしないで白星が続いたら、なんでも好きなゲームを買ってやるとモノで釣ろうとした。それでも時々失敗して全勝はできなかった。

家を建てて、引っ越ししてもまだ続いていた。それが、再婚し、他人が家に入った途端、三人ともぴたりと直った。いまでも不思議な感じがする。

寝小便も恥ずかしいと思う気持ちが、やがて懐かしさに変わるとき、それだけ遠くやってきた自分を思うのだ。

第990話

行き先表示のないバスに

夜、最終のバスを停留所で待っているあなた、そう、あなたです。一番最後に来るバスは、行き先が空白であることを知っていますか。

われわれは、そんなバスに何気なく乗ってしまった乗客です。ただ、無口で疲れ切っている乗客の多くは、残業しての帰りだとか、憂さ晴らしにちょっと酒場で酔ったお父さんとか、夜遊びをしてお金がなくなった女子高生とか、また、今日も仕事がなく、足が棒のようになった失業者とか、とりわけ、人生に疲れ、取り残され、出遅れたものたちが、どうやら乗っているらしいのです。

黙って座席に座っていれば、自分の家に連れて行ってくれると信じているからこそ、眠っていたり、じっと暗い車窓の外を眺めているふりをしながら、ガラスに映っている自分の顔を見ているのです。

ここに、ひとりの中年男、北村拓也が乗り込んできました。彼は、五分ほどバスに揺られていて、おかしいことに気が付きました。

「おい、おかしいぞ、このバスはさっきから同じところをぐるぐると回っているだけじゃないのか」

拓也は、運転手のところに行き、乱暴な口調で問いつめました。

「このバスはどこへ向かっているんだ。どこ行きという表示がないだろう」

すると、運転手はせせら笑うようにして、ちらりと拓也を見ました。

「どこだっていいでしょう。走っていればそれでいいんだから」

「なんていう無責任な運転手なんだ。目的地もなく、ただやみくもに走っているというのか」

運転手は、軽蔑したように拓也に云いました。

「そんな、お客さん、あなたも一体、どこへ行こうとして飛び乗ったんですかね」

そう云われて、拓也ははっとしました。

「おれは、そう云われれば、どこへ行こうとしていたんだ」

「ほらね、みんなそうなんですよ」

「嘘だ」

「それなら、他の人に訊いてみたらどうですか。乗ってれば、どこだっていい人ばかりなんだから」

そう云われて、拓也は信じられないといった目を乗客に向けました。OLがぼんやりとした顔で座っていました。

「あなた、どこへ行くために、このバスに乗ったんですか」

OLは顔を赤くしながら、狼狽していました。

「そんなことって、考えたこともありません。うちの会社の人もみんなそうですよ。おかしいことかしら」

「それじゃ、後ろの奥さん、あなたは、どこで降りるか判って乗っていたんですよね」

主婦は迷惑そうな顔をして、

「それは、みんな最初はそうじゃないの。でも、気が変わることもあるし……」

と、どうもはっきりしません。拓也は後ろの席に座っている女子高生に訊きました。

「あなたなら、まだ若いから、自分の行き先ぐらい判るよね」

高校生は俯いていましたが、ちらりと拓也を叱られた子のような上目づかいで見ると、

「それって、どうしても云わなければいけないんですか。その、答を出さなければいけないものなんですか」

そう云われると、拓也も返答に窮します。

「これは、数学の問題じゃないんだ。どうしてみんな、こんな判りきった問題を考えようとしらないんだ」

拓也は乗客たちに向かって弁舌をふるいました。

「どうしてみんなは、他人事のように考えるんだ。これは、みんなの個人的な問題ではないですか。どこで降りるか、どこへ行きたいのか、どうしたいのか、それも判らないで乗っているなんて」

すると、全員が声を揃えて云いました。

「だって、運転手さんを信頼しているもの」

「なんだと？ あんな、同じところをぐるぐるとただ回っているだけの運転手をか」

それまで、鼻歌を歌っていた運転手が口を開きました。

「あんたねえ、いちいちうるさいんだよね。このバスはね、ブレーキがきかないの。だから、停まることができないからただ走っているんだ。どこへ行くか、どこで燃料が切れて停まるか、このバスに訊いてくれ」

ブレーキが故障しているって？ 拓也はようやく事の重大さと異常に気が付きました。このバスは止められないから走り続けているのです。

そうすると、ものすごい恐怖に包まれました。

「おれを、ここから降ろしてくれ」

拓也は、気が狂ったように、ワンマンバスの停車を求めるボタンを押し続けました。運転席の後ろのランプが点滅しています。

次も通過いたします

料金表だけがどんどんと上がってきます。このバスに乗っているだけで、すでにバスとは思えない料金になってきていました。六百万円の数字が点きました。それはそうです。もう、みんな何年も乗っているのですから。

拓也は泣きました。他の乗客たちは冷ややかな視線を拓也に向けていました。

「お客さん、じたばたしないでください。死なばもろともです」

運転手は口笛までふいて、ジクザグにわざと走らせていました。

これは怖い話だとは思いませんか。でも、もう逃げられません。誰のことかって？ あなたですよ。あなたもいまこのバスに乗っているのです。行き先のない停まらないバスにね。

第991話

後日譚

喜多村は、ただただ虚ろな目で、ぼんやりと座っているだけの毎日だった。すっかりとやる気がない。ノートパソコンも閉じたきり、開けることもないまま。

ときたま溜息を吐いたり、涙ぐんだりして、精神的にもおかしかった。

このまではいけない。何かしなくてはと、喜多村はハローワークへともかくも行ってみた。求職のコーナーにはものすごい人が並んでいる。順番待ちで時間だけが経ってゆく。病院も混んでいるが、ここも社会の病院のようだった。

ようやく喜多村の番が回ってきた。

「あのう、わたしですが、何をしたいか判りますか？」

担当職員は、首を傾げて喜多村を異様なふうに見た。

「あなたが、何をしたいかと？ わたしにあてろというほど、暇ではないんですよ。冗談はやめてください」

「冗談で云っているのではないんです。本当に、自分が何をしたいのか判らないんです」

「それでは、自分のやりたいことを決めてから、もう一度、相談に来てください。あなたの希望する仕事はないかもしれませんが。もう五十過ぎていれば難しいということを一応考慮しておいてください」

喜多村は、はたと気が付いた。

「おれは、なんで、こんなところにいるんだ？ おれは、仕事を探しに来たんじゃない。生き甲斐をみつけにか、いや、違う」

喜多村は自問自答していた。どんなに考えても、この穴の空いたような脱力感を埋める薬はないようだ。おれは病気なのか、とも思った。そうして、この毎日、ぽっかりと空いた空虚を満たすものがなんであったか、少し前のことを考えていた。そして、判った。

「そうだ、暇つぶしなのだ。おれに必要なものは」

そんなときに、ばったりと文学仲間の小畑に逢った。

「なんか、いつもの喜多村じゃないよな。元気がないというか、抜け殻のようだな」

「判るか。このところ、目的を見失ったみたいなんだ。本も読む気がしない。食欲もない。性欲はとっくにないが、仕事も力がはいらない」

「そうか、最近は書いていないんだろう。指先物語が千回で終わってからさ。それからおかしくなったのじゃないのか」

「そうかもしれない。頭の中が考える力もなく、真っ白になっているんだ」

「何か、また書けよ。毎日、またメールでみんなに送ったらどうだ」

「そうかなあ、何を書こうか。前に、ショートショートが終わったら、毎朝、今度は、『喜多村拓の朝のポエム』を、流そうかといったら、詩人仲間の田村が、朝から不快な思いさせるなよと云うもんで」

「よし、それなら、同人仲間の高谷さんが毎日、メーリングリストで配信してくる『おはよう日記』の向こうを張って、『おやすみ日記』というのをやったらどうだ」

「それは、ただのパクリだよ。高谷さんが怒るだろう。それとも、キムタクのエロ話というのはどうだろう」

「ダメダメ、それこそ管理人の逆鱗に触れ、立入禁止になってしまう。うーん、何かいいアイデアがないだろうか」

「それじゃ、喜多村拓の日替わり大根足小説というのはどうだ」

「なんだ、それは」

「毎日、みんなに原稿用紙二百枚くらいの長編小説を書いて送るんだ」

「ふーん、それで、おまえはいつ仕事をすんの、いつ寝るんだよ」

小畑も喜多村が可哀想に思ったが、内心ほっとしていたところだ。

「まあ、無理しないで、しばらくは休養するんだな」

そうして慰めるよりない。

同人誌の合評会があった。いつもの居酒屋の二階に喜多村は少し遅れて行った。

「いやあ、終わってさっぱりしたよな」

「そうね、毎朝、うんざりしていたもの」

「おれなんか、喜多村に読んでくれた？ と訊かれるとドキリとするんだ。あんなくだらない小説を毎日読めと送ってくるのは、迷惑メールどころか脅迫メールだよな」

「そうそう、知らぬは本人ばかりなり、どれほど沢山の人が困惑しているか判らないんだから」

「喜多村が来た。しっー」

喜多村が茫然自失と現れた。

「よう、何かふぬけという感じだな」

「うん」

「まあ、いままで三年間頑張ったんだから、少し休筆するんだな」

「うん」

「それがいいわよ、ねえ」

「でも、暇で仕方ないから、明日から『喜多村拓の朝の俳句』を配信しようと思うんだが」

「ええ」と、一同驚く。

「余計なことは考えないで、お願いだから、じっとしていてね」

「それとも、朝の折句にしようかな、川柳もいいかなあ」

すると、全員が、喜多村をなだめに回った。

「頼む、本当にもうゆっくりと静養してくれ」

中には土下座して頼む者もいた。

それでも人の迷惑を考えないで、何かまた次を考えている喜多村であった。

第992話

世界の大きさ

高校生の娘が、せっかく当たった公団から引っ越そうと云ってきた。我が家は3LDKだ。客間はひとつ空けておいたが、そこは物置のようになっていた。中学の息子と六畳間に間仕切りして三畳の部屋にして二人で使っていたが、確かに狭いだろう。小学生の頃はよかった。だんだんと大きくなってくると、寝るだけでも大変だ。まして年頃の姉弟をひと部屋に押し込めることはできなくなる。

こんなひしめき合っている団地に暮らしていると、不思議なことを考えるものだ。わたしは、娘に云って聞かせていた。

「最近な、お父さんは思うんだ。よく、散歩をして団地を歩いていると、この同じ四角の建物の中にびっしりと部屋があって、そこで暮らしている人がいるんだなあって。それだけじゃない。団地から出れば、住宅が密集している街を歩くとね、そこでもそれぞれが家庭を持ち、生活しているんだ。衣料店は着るものを細々と売って生計を立てているだろうし、ラーメン屋さん、雑貨店と、どんな街角にもあるだろう。よく、みんな営業しているものだなって思うんだ。でも、お父さんの足で歩いてゆけるのは、ほんの数町内だけの話なんだな。街というのは、いまは広がって、どこまで行っても家が切れない。この地方の市でもそうだ。三十万の人々が、川沿いや海の傍、丘の上と、土地があればそこに家を建て、またアパートがあれば、そこに暮らしている。

車で走れば、家のない郊外には出るが、いくらも走らないうちに、隣町になると、また同じ家々が軒を連ねる光景になるんだ。それは地図で見るとほんの十キロかそこらなのだが、ものすごい広がりや距離を感じない。そんな市町村がこの県には六十七もある。どんな岬の先にも、山の上にも建物が見えて、そこで人間が暮らしている。それで人口が百五十万足らず。多分、お父さんが一軒づつ、この目で家を確認していても、一生かかるだろうね。

新幹線に乗って旅行すると、車窓にそんな家が瞬間に飛んでゆく。村も町もあつというまに過ぎてゆく。そうした歩くと端から端まで結構ある街でも、時速二百六十キロでは何秒もかからない。

お父さんは、昔、よくひとりで夜汽車の自由席に座って旅行したものだ。ケチケチ旅行が好きだったんだね。真夜中に暗い外を顔をくつつけるようにして眺めていると、遠くにちろちろと民家の灯りが見えたりするんだ。人里離れた淋しい野原の真ん中や、山峡にぽつんと家があり、そこで誰かが生活しているということを思うと、何か淋しくなったりするんだ。

街や県だけでも、広いと思うのに、それが、半日も新幹線で走っても、まだ日本だ。地球儀で見ると実にちっぽけな日本なのだが、新幹線でも広いと思うほど、長さを感じるね。それが、飛行機ならひとつ飛びだね。空の上から地上を眺めると、米粒のような家々が建ち並び、車が蟻のように走っている。街もひとつの塊に見えるが、そこには何万人という人々が生活し、商売をしたり、田畑を耕しているんだ。

それで外国に旅行すると、そんな国が沢山あるということに驚く。何をいまさらと思うかもしれないが、最近はや早い乗り物に慣れているから、距離感が短縮されているんだね。世界のサイズ

が小さく見えてきているんだが、人口が増えている分、家の多くなっている。街という街が広がってきていた。いまは人口が抑制されたり、自然減で逆に廃屋や空き店舗が増えてはいるがね、いずれにしてもお父さんが子供のときのこの街は、倍以上に膨れてしまっている。郊外なんか、少し歩けば田圃ばかりで、民家なんかまばらだった。いまはどうだ、びっしりと団地や問屋街、ショッピングセンターなどが建ち、どこまで行っても田圃が見えない。

まあ、そんなことで、街だけでも大勢の人が住み、家が無数にあるのに、それが県だ国だというと、気が遠くなるほどの生活があるんだ。そして、さらにお隣の国に行っても、さらに地球の裏側のどんな砂漠に行っても、そこにはドライブインがあったり、集落があったりする。

それで驚いてはいけない。それとてこの太陽系の中の太陽の直径の百九分の一しかない小さな地球の話なのだ。銀河系宇宙まで考えると、地球なんか塵にも見えないだろう。一番近い恒星までも光速で七年もかかる。ということは、秒速三十万キロの掛けるところの一時間三千六百秒の二十四時間の掛けるところの三百六十五のさらに掛けるところの七という数字の距離なんだ。それが、この銀河系宇宙で一番近い、隣の太陽なんだね。そこにも地球の様な生物がいるかもしれない。

そうした星雲の銀河系みたいなのが、この宇宙にはごろごろあるんだね。宇宙の果てまで二百億光年。そのさらに向こうには何があるのかって？ それは元に戻るというんだね。宇宙は閉じているとしか説明できない。無限ということはどう解釈するのだが、考えるだけでもおかしくなってしまう。世界とは実に広いのだな」

黙って聞いていた娘がようやく口を開いた。

「それで、わたしの部屋はどうなったのよ」

「そうなんだな、問題は、四畳半のスペースだけの話なんだがな」

第993話

台風を捕まえろ

ついに今年は上陸した台風が十個を数えた。異常というしかない。例年では二・三個が上陸するぐらいだから、わざと狙ってきているとしか思われぬ。国民はみんなうんざりし、政府の上層部はこの予算の少ないときに、災害というダメージをくらわせた台風にかんかんに怒っていた。

臨時閣議を開いた議場で、総理は叫んだ。

「台風を捕まえるんだ。何がなんでも捕獲してこい」

科学的な論理はまるでダメな総理に、何を云っても仕方がない。総理の話はこうであった。

「台風だって、いきなりあのような巨大な渦巻きで出現するのではあるまい。きっと、台風が南洋で生まれるというからには、台風の赤ん坊が最初にあるはずだ。その赤ん坊をとっ捕まえてれば、台風は日本にやってくることはないだろう。どうしてそんな簡単なことを科学者たちは考えなかったのだろう。みんなバカばかり揃っているのじゃないか」

と、自分のバカを棚にあげて、そう防衛庁長官に命じた。そう云われれば、その気になる愚かさ。みんな、きっと生まれたばかりの台風は手で捕まえられる大きさに違いないと信じた。

さっそく、海上自衛隊の護衛艦と、捕鯨で使われなく母船、そして、大型ヘリコプターと哨戒機まで揃えての大掛かりな台風の捕獲作戦が始まった。ただ、いつ、どこで台風が発生するか判らない。それを気象衛星と、レーダー、そして飛行機を飛ばせることで、その情報をキャッチしようと、太平洋上で、いまだかつてない台風の搜索が開始されていた。

「台風の子供ってどうやってできるんだろう」

「まあ、生まれるというくらいだから、必ず父親と母親がいてもおかしくはないな」

「でもな、二つの台風が交尾しているなんて、そんなの聞いたことはないぞ」

「それなら、卵なのかもしれん。台風が来る前に、産み落としてゆくんだ。そいつがやがて孵化するんだな」

「だったら、その卵を鯨を引き揚げる網で捕獲すればいい。かなり大きいんだろうな」

そんな話をするぐらい、無知がはびこっていた。

ところが、実際に、竜巻も台風も最初からあんなに大きくはなかった。風と温度の違う空気が発生させる気圧の違いが、次第に大きな渦を巻いて、台風に成長してゆく。その最初の芽を摘むのだ。

台風が発生する海上というのは、かつての記録からほぼ明確になってきていた。その海域で搜索していたレーダーに異様な雲の動きが映った。

「大変だ、すでに台風の子供が、空に上がっている」

海の上で捕まえようという計画は変更された。米軍の協力を得て、爆撃機から巨大なビニールの袋を出して、豆台風を捕まえることにした。操縦士が肉眼でもはっきりと確認できる至近距離まできた。

「よし、捕獲ミサイルの発射準備」

ミサイルは台風の上空目がけて発射された。そいつは、台風の真上で爆発すると、カプセルからパラシュートのような巨大な形の傘を広げて、台風を包んでしまった。

別の部隊からは、まさに海の上で生まれようとする台風の赤ん坊を発見したと連絡が本部に入った。護衛艦から、高速艇が海の上を飛ぶように走った。その台風はまさに卵から孵ったばかりの直径が十センチそこそこのものだった。

「捕まえました。小さいやつだから、ガラス瓶の中に入れて蓋をしました」

現場から連絡が入る。

「よし、でかしたぞ。それは実験材料にするというから、大事に母船まで持ってくるんだ」

台風のエネルギーは広島型の原爆の数千個に匹敵するというから、以前から、そのエネルギーを活用できないかと、科学者の間で研究が進められてきていた。いま、ようやくそれが現実の段階に入ったというわけだ。捕まえた台風たちは、ぞくぞくと、太平洋上に浮かぶ、巨大な円形の檻に入れられた。檻といっても、周りはすべて強化プラスチックでできているから、外に逃げ出すわけには行かない。直径は二十キロはある、とてつもなく大きなサークルだった。それが海に浮かべられ、高さも千メートルと、子供の子台風が暴れるぐらいの広さは確保してあった。

その檻の中で、台風たちは、勢力が衰えるまで何日もの間、暴風と雨をその檻の中に吹きつけさせた。サークルの壁と水面には、風雨を感知して、発電する装置が張りつめられていた。

ガラス瓶に詰められた台風の赤ん坊が自衛隊員によって横流しされたのが、後のニュースで判った。ネットのオークションで競売にかけられ、東京の物好きなサラリーマンが貯金をはたいて落札したというのが判明した。

何も知らない、若いサラリーマンは、彼女のアパートにそのガラス瓶を持ち込んでいた。「ほら、これが台風の赤ん坊なんだ。中に煙が入れてあるから、はっきりと台風の形が見えるだろう」

「ほんとだ」

二人は、神秘的なものを見つめるようにして、じっとガラス瓶の中心に渦巻き、ちゃんと台風の間目もある、直径十センチの赤ん坊から目を離さないでいた。

「可愛いわ」

「そうだろう。とても獰猛なやつとは思えない」

「わたし、触ってみたい。どんな感触がするのか」

いつもパンドラの筐を開けるのは女であった。愚かな彼女は瓶の蓋を開けてしまった。すると、閉じこめられていた台風の赤ん坊が部屋に逃げた。開けていた窓からするりと空に上がると、いままでの鬱憤を晴らすように、周りの雲を仲間に入れながら巨大化していった。

一大変です。東京の上空に突如として台風が発生いたしました。

盗まれた台風が逃げ出したことが判明した。そうすると、取り締まりも強化しなくては、あちこちで台風が発生することになる。そこで臨時閣議が開かれた。

「台風法案を国会に通しましょう。台風の売買の禁止、及び台風を自宅で飼ってはいけないなどの法律を整備すべきですな」

そのころ、民間の船が、台風の赤ん坊が高く取引されるというので、密漁に出ていたのだ。かつてプロメテウスが太陽の火を盗んだように、いま、台風が乱獲されようとしている。それは第四のエネルギーになろうとしていたのだから。

周りが大騒ぎして台風を捕獲していたとき、当の台風はまさに台風の間目になっていた？

第994話

古本争奪戦

毎日のように北村古書店には仕入の電話が来る。その九割が外れである。一買ったばかりのピカピカの本があるんだけど。いくらで買ってくれるのかな。

若い娘さんから電話が来ると、その声を聞いただけで、もう拒絶反応を示す。一で、どんな本なんですか。北村の声はすでにやる気がない。

一はい、「世界の中心でアイーンをさけぶ」とか、「アホの壁」とか、「能無革命」とか、「ハリボテ」とかですが。

(やはりなあ。もの見事にベストセラーばかりだ。そんなもの、うちじゃ、五十円でも売れない)

—そうですか、あなたの本はブックなんとかに売ればいいですよ。それより、あなたのおじいちゃんの本はありませんか。

北村は、はなっから断ることはしない。どんな家にも、きっと見捨てられて、埃をかぶっている面白そうな本はあるのだ。ただ、みんな、新しい本なら高く買ってくれるものと誤解している。

と、今度の電話は期待できる。

—古本屋さんですね。いま、古い家を解体しているんだが、何か納戸に古めかしい本がぎっしりと入っているんですね。おたくが引き取りに来ないと全部家ごと廃棄しますが。

北村はそんな電話は興奮してくる。Tさんの家というのが、電話をかけてきたのは解体工事を請け負っている建設会社の人だ。場所を聞いて、北村は十五年前のことを思い出した。

—その本とは、相撲関係とか映画、演劇の本ではないですか。

—そうですよ。よく知ってますね。

—やはりそうだ。そうした本の蒐集家で有名な人だったんです。前に、売ってくれないかと、じいさんが生きていたとき、頼みに行ったんだ。その部屋で見たんだ。相撲と映画の蔵書をね。そのときは断られたが。そのじいさんは確か、七年前に亡くなりましたね。

北村はわくわくしていた。ひとりで店をやっているのだから、客がいなくなるのを見計らって、店を閉めると、バタバタと離れたところにある駐車場に車を取りに行った。

すごい買い物になる。今年、最高の掘り出し物だ。星取表や、番付も戦前からの古いもの、果ては映画のポスターなどの古いものがごっそりとある。あのじいさんも亡くなって、あのとき売っておけばよかったものを、全部、ゴミになって捨てられるところだ。いままで、五十年以上もかけて、あちこちから買い集めたコレクションも、死んだらゴミになるのだ。北村は、儂いものは命だけではなく、モノにもいえるものとして、淋しいものを感じていた。

家はまさにショベルカーで半分壊されていた。かろうじて納戸と壁のない二階が見えていた。「ああ、古本屋さんね。少し遅かったね。たったいま、リサイクルセンターが来て、本を持っていったよ」

そう、若い大工が証言した。

「なんだって、おれを呼んでいながらか」

北村は気が動転して、語尾が荒くなってきた。

そこへ、電話をよこした棟梁がやってきた。

「なんだって、リサイクルが持っていったと？ おれは、家具だけだと思ったよ」

さっそく、リサイクルセンターの社長にケイタイで電話をしていた。電話で押し問答していた。道具や家具はいいものがなく、がらくたばかりだが、本はまだ金になるから持って行くと、社長は云うのだ。

「おれが、後で交渉してやるから、今後のこともあるからな」

そう、棟梁は北村に謝っていた。北村は気が抜けた。ふらふらと二階に上がる階段を上がり、裸になった家の隅から隅まで本を探して歩いた。杏村の全集の端本が見つかった。きっと、手当

たり次第に持っていったから、残して行ったのだろう。全集も揃わなくなる。

庭には廃材や粗大ゴミが積んであったが、その草の上にもぱらぱらと本が落ちていた。リサイクルのやつら、本の値打ちも何も判らないでと、北村はぶつくさと愚痴りながらも、泣きそうになって、本を拾い集めていた。外に散乱している本の中にも、岡本かの子や林芙美子の小説の初版本があり、坪内逍遙の演劇の本も転がっていた。そうした貴重な本を踏みつけていたのだ。ムラムラと怒りがこみ上げてきた。ご馳走を横取りされた無様な古本屋を初めて北村は演じていた。

拾った本をわずかに車に積んで、がっかりして店に戻ると、棟梁から電話がかかってきた。一本を持ってゆくよう頼んだ憶えはないから、返してくれというと、倉庫に取りにきてくれとさ。

よし、やった。ざまあみろ。明日の朝、敵陣に乗り込んで取り返しにゆくことになった。北村は胸がすうっとした。こういうのは早い者勝ちだが、仁義なき戦いでもあった。

翌朝、ワゴン車にアルバイトを乗せた。

「さあ、野郎ども、取り返しにゆくぞ。準備はいいな」

「あのう、すみません、ぼくひとりよりいませんが」

「いいんだ、一応云ってみたかったんだ」

そうして、敵の店まで車で乗り付けた。ところが、敵の親分は雲隠れ。アルバイトの女の子が裏の倉庫に案内して、埃と黴でいっぱいリンゴの木箱を二十いくつ見せた。

「社長が、これを持って行ってくださいって」

見ると、どうも捨てものばかり。相撲の本は一冊もない。

勇んで出かけてきたが、出鼻をくじかれた。すごすごとゴミを車に積んで引き揚げた。後で、棟梁に電話した。

一ゴミを掴まされて。いい本は一冊もないよ。

一ちくしょう。やられたかな。

リサイクルの親分もさるもので、ちゃっかりといい本の箱は抜いてあった。だが、その証拠がない。北村が見たのは十五年も昔のことだ。

店の前に、木箱の中を広げて、北村は埃の中から宝物を探していた。鼠が囓っている。そのうち、底から鼠の木乃伊が出てこないだろうか。北村は戦いに負けた。逃した魚は大きかった。最後に完全にうっちゃられていた。

第995話

国家機密

この十年間を考えても、各地で頻発する地震には異常なものを感じず。しかし、政府も科学者も何も見解を発表しない。国民も地震慣れしたのか、このたびの新潟の地震を静観している人も

多い。いつ、どこで、何が起こっても驚かないほど、天災に免疫ができていた。台風もこれほど直撃するのも異様だし、猛暑から火山活動の不気味な動き、大洪水と、立て続けに日本を襲う天変地異は、何かの予兆のように思えるのに、これから何が始まるのか、国民も鷹揚に構え、騒ぎ立てるものはいない。

フリーライターの笹田雄悦は、その異常さに動物の本来持っている勘が強く作用する人間のひとりだった。大概の人間たちは、そうした危機感を安全な機械装備の文明の砦の中で忘れてしまっていたのだ。雄悦は、中東やアフリカの飢餓や紛争の地帯をかつて、共同通信社時代に取材のために走り、負傷したりマラリアに罹ったこともある。その経験から、自己防衛の本能にさらに直感が研ぎ澄まされていった。

今回は、週刊誌から頼まれた特集記事、「年末に巨大地震襲う」という企画の取材で動いていた。取材は表だった人々をアポを取って会うといった正攻法ではいい記事が書けない。裏の裏から刑事のように捜査することで、より奥深いナマの情報を手に入れることができるのだ。

雄悦のコネクションは、高校と大学の同期生だった。雄悦はつくばの大学を出ていたから、科学者や官僚に知人友人が多い。高校も地方とはいえ、進学校だったから、東大、一橋を終わって省庁入りした友人も多い。

雄悦は、持ち前のつつこみで、相手の真意を吐き出させる心理作戦も習得していた。さっそく、科学技術庁の下部機関で地震予知連絡会に派遣されている同級生の本間を訪ねた。

「おお、笹田か、書いているのか、小説」

本間はまだ文学に首をつっこんでいるものと思っていた。

「いや、おれは鎌田慧ばりのノンフィクションが向いていると思っているんだ。それで、いまは間屋を辞めて、フリーで書いて喰っている」

「そうか、おまえの研究熱心と驚くほどの情報収集能力からすれば、ノンフィクション作家のほうが似合っているかもな」

「ところで、新潟の地震の後だが、次はどこか知っているんだろう」

雄悦はいきなりそう結論から切り出した。本間が狼狽したのは目だった。その微妙な目の光を、雄悦は見逃さなかった。

「どうして、そんなことを聞くんだ。地震が予知できれば、おれたちは失職だ。できないから、こうした対策本部を設けて、国から予算まで割譲してもらっている」

本間は昔から惚けの本間というあだ名までついていた。いつも涼しい顔をしているが、彼の弱みは知っている。女だった。

「どうだ。久しぶりだから、今夜一杯」

そう、雄悦は本間を夜の巷に誘い出した。知り合いのキャバクラ嬢に金を渡して、本間に差し向けた。雄悦なら、本間は警戒して何も云わないだろうが、初めて逢った行きずりの女であれば、口を滑らせるかもしれないという計算があった。

後で、ベッドを共にした女から、本間が何かを話したかとケイタイで訊いた。―それがね、口は堅い人。下の方は柔らかいんだけどね。逆だったらよかったのに。何か、年末に家族で外国に引っ越すとか云っていたわよ。

―そうか、ありがとう。

雄悦にはそんなことは一言も云わなかった。ますます怪しい。何かを隠していることは明白だった。

今度は、雄悦は、官房長官の下で執務をしている友人の風晴に酒の席を設けて逢っていた。「おまえ、最近、いやに海外出張が多いな。それもイギリスだ。何かあるのか？ 向こうにー」普通はジャーナリストの関係者には警戒するものだが風晴とはツーカーの仲だった。巨漢の雄悦は、人当たりがよく、いつもにこにここと笑っているようだが、眼だけは冷ややかで笑っていない。

「取材かよ。いいか、いまの話はオフレコにしてくれよ。英国に皇室の別荘を用意しているんだ。皇太子紀もご病気でな。皇后様もできたら、マスコミの煩い国内よりも静かに静養できる英国の保養地をご希望らしい」

どうやら、十二月には静養に出発するという。そうしたことは表向きの話であることは雄悦は知っていた。風晴も何かを知っていて、隠している。

雄悦はさらに奥深く潜入するために、情報屋のルートにも鼻薬を嗅がせて慌ただし閣僚の動きを見張らせた。ひとつの疑問が謎として残る。その解せない点が、結ばれてゆくとき、ひとつの大きな輪郭を現してくる。

カレンダーが師走になると、街はどこもクリスマス一色になる。景気が悪いくせに、それでも街は華やかさで彩られ、クリスマスソングがイルミネーションの中に流れるとき、恋人たちはウインドウショッピングに誘われる。

雄悦は、ある重要な政府の要人と会う約束を漕ぎつけた。それは彼の得た情報を利用した、脅迫めいた内容での半ば強引な取引であった。

「編集長、原稿は八割方できています。あとは、今夜ですべてが明るみに出ますよ。ガセネタではなく、かなり信憑性のある記事になりそうです」

雄悦は、そう云い残して出版社のビルを出るとタクシーを拾っていた。

隅田川。最近、川から眺める都会の遊覧ということで、お台場までの海の遊覧ができる。その日も、日曜ということで、カップルがデートコースで船に乗っていた。

「あら、なにか浮いているわよ」

「なんだろう。人間だよ。死体だ」

船のデッキにみんな集まってきていた。悲鳴が続いていた。水上パトロール船が通報を受けてやってきた。土左衛門を船に引っ張り上げている作業も慣れたものだった。最近、自殺者が後を絶たない。毎日のように死体は浮いていた。

「この仏さんは、身分を証明するものを持っていませんね。顔も潰されている。明らかに殺人だ」

笹田雄悦は、知りすぎた。国家の機密事項を掴んだ夜に川に浮かんだのだった。

「おや、雪だぜ。猛暑の夏の年は厳寒の冬になるっていうが、こんなに早く初雪というのもおかしい年だぜ」

死体を揚げた手を息で暖めながら空を見上げていた。異常気象は続いていた。

第996話

宵山

京都、本屋町通りを南に下れば、「貴船」という暖簾の下がった小料理屋があります。鰻の寝床のような旧家を改造した建物にはいれば、先ず屋号を書いた古い看板が目につきます。名だたる俳人に認めて貰ったという年代物が貴船五代目の老舗の風格を垣間見させます。

自分は先刻より貴船の階上の部屋で、仲間が来るのを待っておりました。仲間とは大学時代の友人達で、今宵は同窓会ということになりましょうか。自分はこうした会合や待ち合わせで、待つ側にいるのが常でした。

—よう、早いやないか田村。

—木島君か。のっそりと顔を出した木島は

相変わらず色黒で登山好きな猛者でありました。

—やあやあ、久し振りやなあ。

—今晚は。

続いてはいつてきたのは、久我と悦子。三年前に夫婦になり、確か子供がひとりおりました。友人が結婚したことも、子供が産まれたことも自分にとっては衝撃でありました。彼らがまた自分より高い地位にいるようで。

—なんや、揃うとるやないけ。

—あらっ、悦子、元気？

集団でやってきたのは、大阪住吉で薬問屋を継いだ秋本。英文学を専攻した岡田女史。
—五年ぶりね、懐しいわあ。

足立万里子。確か大津に住み、中学の教師をしている、長身で美貌の人でありました。
—あと三人は欠席やから、これでみんな揃うた。

幹事役の木島は、用意されていたビールの栓を抜いて卓に廻しました。

—ほんま、ご苦労さん。早速、乾杯といこうや。

乾杯のあと、料理が運ばれました。豆腐でんがく、吸物、オイル焼きなど。昔から学生の面倒見のよい女将も顔を覗かせ、賑やかに宴は聞かれました。

—へえっ。出世頭やな。専務様か。専務ちゅうたら、どないなことすんね。

久我の名刺を見ながら、木島は素っ頓狂な声をあげました。話しは学生時代の思い出から、現在の暮らしぶり、友人の消息と尽きません。ただ、自分だけは話しの中で孤立しておりました。自分を態と無視して、笑いあったり、お酌しあったりして……。

自分は別なことを考え込んでおりました。今朝届いた義母からの手紙の内容についてです。

《あなたの決心がつかないのなら、送金は今月から止めます。それがあなたの為になると思えば心を鬼にして……》

一日、郷里からも見放された不甲斐ない自分を思い詰めてばかり。

一ときに、田村、自分、いま何やっとなんや。

話題の銚子が自分に向けられギクリとしました。

一ぼくか。別に。アルバイトをしたり、しなかったり、それで、なんとか喰ってる。

一なんや、就職浪人五年生かいな。相変わらずやのう。

一久我さん、そないこと云うたらあかん。

笑いながら岡田女史。

一ぼくは、諦めてる。

自分は、ぽつりぽつりと話しながら、いつも己をどこかで弁護しておりました。

一昔からそうやった。のう田村、友人だから云うのやけど、目的がないのと違うか。

もう惑う齡でもないって。

秋本。いや秋本だけではありません。彼らみんなが、判りきった、物事の筋道を尤もらしく語るのです。

一よかったら、うちで使うてやってもいいが。

また秋本。自分は冗談と判っていても、どこかで屈辱として受け取っておりました。

恥は、自分の内面に十年も二十年も残留し、思い返すたびに赤面するほど自分にとって苦しみでありました。小心で卑怯な自分の厭な性格は直せるものではないと諦めてはおりますが。《殺してやる》自分は顔で苦笑し、胸腔では現状否定へと叫ぶのでありました。押し殺した思いは言葉にはならない……。

一いいやない？ 田村くんには何か志があるよ

うやし。岡田女史。

一前に、故郷に錦を飾るまで帰らんと、古いこと云いよったなあ。

木島までがそんなに云いました。自分は顔が赤くなり、口を噤んだきりでありました。こうしたとき、咄嗟に言葉で逃げることを知らず、あとで後悔することになります。自分のような田舎者は特に口べたで悩みました。木島の云ったことは本当です。小さなことすら成就できない自分の中に次第に負債が蓄積してゆき、今に見ている、と九回裏逆転ホームーばかりを考えるようになっておりました。

一ところでな。話題は変わりました。

一藤川菜美さん、去年の秋口に式あげたらしいで。

久我は判然とそう云いました。

一しっ。田村くんが悪いやないの。

それを制するように足立万里子の小声。

一そうか、田村、好きやったんやなあ。

自分は平常心を欠いておりました。無性に煙草を飲みたがり、コップ酒を呷りました。

藤川菜美。忘れかけていた名前が、いま、またこの不浄な酒の腐に甦ったのです。しかも、波女が嫁にいったという事実の付則書きまで突き付けられて。自分は芙美を愛しました。彼女については聖域としていつも遠くから愛しておりました。いまでも気持ち

の中で煮え切らない思いだけが残っております。いつか立派な地位を築き、彼女を迎えにゆく輝かしい自分を夢想していたものでありました。なのに、藤川菜美は自分と異なった生活へと歩みはじめた、そのことが、その裏切りが、自分に眩暈を起こさせ、吐き気すら催させました。自分の聴覚は膜で遮蔽されたように、みんなの活し声も遠くなり、自分についての囁きや嘲笑いにすら聴こえました。

一さあて、仕上はお香煎をふった茶漬にしようやないか。貴船の茶漬は天下一品や。

誰れかがそう云い、茶漬が女将から振る舞われました。自分には口にはいるものはすべて異物であって、味はしませんでした。

一ここはお開きにして、川原に涼みに出まひよか。

腰を上げた木島に読んで全員が貴船を出ました。

鴨川の川原は暗がりの中に点々と電灯がとまり、涼み客でいっぱいでした。川辺に提燈がずらりと吊され、四条大橋の人の流れや喧噪が川面に映り、この特別の夜を演出しておりました。すでに男女の組み合わせは定まっておき、仲間うちで、自分だけが余計者であります。銘々が腕を組み、語らい、自分は彼らについてゆくより仕方なく。

家々は戸を開けて、奥の座敷に様々な屏風を飾って公開しておりました。自分たちは一軒一軒この夜だけの古風な美術展を見て廻りました。美しさも自分の視覚に感じない、自分の中で何かが閉じたままであります。

青年の多くは自らを仮の姿と思いたがり、いつの日か凱旋するときを待っている、と、秋本は云いました。当てこすりのように。自分は人一倍野心が強く、そのために今日を犠牲にしすぎました。気が付けば、この古都に五年、身を埋め徒らに時を貪り、自らの行末すら見失っておりました。

自分たちは四条通りを烏丸の方へ歩きました。市の辻々に山や鉾が聳え立ち、鉦の音が鳴り響き、人の川に流され、祇園祭の宵山は暑い夏の夜を酔わせて、狂気に近いものがありました。久我夫婦は写真を撮りあい、岡田女史と木島は厄除けのちまきを買ってはしゃいでおりました。長刀鉾、月鉾。山車の上に乗った市の子らが笛を吹き、太鼓を打ち、鉦を叩く奉納ばやしは耳を塞いでも聴こえてきます。コンコンチキチン、コンチキチン。祇園祭は歓びの祭ではなく、恐れを抑えるための祭です。昔、京の都に疫病が流行し、沢山の人々が死んだ。その不安な気持ちを祭の形にしました。観光客の群に向かい、ガイド嬢がそんな説明をしておりました。あれは、函谷鉾。ゴブラン織りの胴掛けの絵が美しい。足立万里子と秋本はそれを指示し見とれているようでした。コンチキチン、チンチン、チキチンコンチキチン。人の流れのなかに、自分はいつか藤川芙美の姿を索しているようでもあり、まだ逢ったこともない架空の女の後ろ姿を追っているようでもありました。自分は彼らからはぐれるようにして歩いておりました。自分の掌の中には、妬みや羨望や殺意や、凡そ人間の持てるあらゆる悪意が握りしめられ、その反面、淋しさや虚しさや辱しさなどが掌のまわりに渦巻いておりました。コンコンチキチン、コンチキチン。自分の視界の隅に駒形提燈がゆらゆら揺れて流れます。自分はこのまま迷子になりたかった、田村は気がふれて行方が判らなくなると彼らは口々に云うのでしょうか。どうすることもできないでおりま

した。自分の状況に出口なし。この夥しい人の流れの中に誰かを索し、手を差し伸べ。自分はふっと人に押し流されるままに、彼らから離されてゆきました。夜祭りは絶頂を極め、鉦は叩かれ、笛は鳴り、泣き出したいような淋しさに尽きる、そんな思いが熱く胸底に溢れました。自分は見知らぬ女の名を呼び、何処かへ流されてゆきます。川の流れに身を浮かべるように、人波に紛れて、彼らを見失い、また自分の行く末も見失い。一体、何処へ帰ったらよいのでしょうか。誰を索しに行ったら。

第997話

左手(ゴーシュ)

いつの間にか、体が傷ついている。それが判らないほど、おれは年老いたのだろうか。五十半ばを過ぎて、自分の怪我也記憶がない。

それは、左足の太腿だった。朝、起きて着替えたときも気が付かなかった。歩くときに、妙な痛みを左足に覚えた。ズボンの上から触ってみたら痛い。よくあるのが、打撲の覚えがないのに、手足が青く痣になっているときだ。いつぶつけたか判らないのは年寄りと同じだ。それと同じことかと、トイレでズボンをずり降ろして見た。すると、どうしたことだろうか。太腿の横に四本の蚯蚓腫れが走っているではないか。ゆうべ、シャワーを浴びたときには確かになかった。ということは、夜中にできた傷だろう。傷の長さは五センチぐらいで、何か猫にでも引っかかれたような傷だった。うちで飼っている猫も引っかくが、ゆうべはおとなしくしていた。夜中におれの部屋に入ってくるようなことはない。傷は新しいもので、全体が赤く腫れ上がり、どこかに引っ掛けたことも覚えていないのだ。夜中にトイレに起きて、寝ぼけて一とも考えたが、そんな釘が四本も出ているような危険なところはマンションの中にはない。

女房にも見せた。朝は互いに共稼ぎで出勤なので、構ってられないくらい忙しいのだが、「また、女に手を出して引っかかれたんじゃないの？」と、冗談で相手にしない。「夜中についたもんだよ。覚えがない」と、おれは真面目に抗弁した。「よく見ると、人の爪で引っかいたものね」と、今度は真剣に女房も観察する。「女の、そうよ、生霊の仕業かもしれないよ。あなた、何か心当たりがあるんじゃない？」と、女房はこんなときでもおれを信用せずに、鎌をかける。おれが遊んでいると思っている。そういう自分はどうなんだ。最近化粧を変えて、おれより一回りは下なのだが、また一段と綺麗になったように思うのは、男ができたからか。それでも互いに詮索はしないというたんぱくな性格が、妬くこともなく自由放任だ。熟年夫婦はそれがいい。

サウスポーというのは別に珍しいものではない。外人には多いというが、日本人には少ないというだけだ。

おれは生まれたときからの左利きだ。遺伝でないとなれば、赤ん坊のときの抱き方が、右手を

押さえる形で抱かれたから、左手だけが自由に動くようになったとか、そうもいわれている。左利きを矯正されたのが小学一年のときだった。学校は二人用の机に男女が座るが、女兒は左で男児は右側に座るのだ。それで、いつも隣の女の子と字を書くときに肘がぶつかるからとよく喧嘩をしていた。先生がそれを知って、二人の座る席を入れ替えた。簡単なことで、それっきり喧嘩をすることはなくなる。親がそのことを知って、習字教室に通わせた。ところがそれは六年通ったが、役には立たない。確かに筆を持つときは右手だが、鉛筆に持ち替えると左手なのだ。箸も左だが、不思議とボールを投げたりするのは右手だった。おれの左利きはどうか腕ではなく、手先の問題らしい。なんとなく、それでもペンも右で書く練習をした。急ぐときは左手に持ち替えると、見ている親に笑われた。どちらも使えるというのは便利な面、言語障害も起す。一時、おれは吃りになった。脳の左右の判断をある部分、強制的に入れ替えるという無理が言葉に來たようだ。

中学に入ったときはバスケットボール部に入ったが、コーチからは、両刀使いはシュートのときに相手を攪乱できるからいいと両方を使わせた。不便なようで、使い方では便利なこともあった。

女房が、しげしげとわたしの箸使いを見て、「あら、わたしが間違っているかっておかしくなりそう」と、思い出したように飯のときに言った。

「あなた、左利きだったの？」と、いまさらながら言う。

「何年夫婦やってんだ。それほど、おれに関心がないということだな。愛人は元気かい」と、こっちも相手に牽制球を送っている。子供がみんな社会人になり、この街を出て、所帯を持った。いまは、猫と夫婦だけの淋しいマンション住まいだ。女房は病院勤務で、夜勤もあるが、すれ違い夫婦で、週に何回顔を合わせるか。おれも長年勤めた会社を早期退職の肩たたきで、リストラ組に入った。ちょっとのブランクはあったが、昔の仲間拾われて、いまは子会社の嘱託社員として、後二年のご奉公をしている。

足の傷のことは忘れていた。傷跡も痛みも薄れていったころだ。突然、左手が動かなくなった。パソコンのやりすぎで、腱鞘炎になったのだろうか。だけど、痛みはない。まるで、重く、自分の意志で動かないというのは不気味だった。神経がどこかやられたのだろうか。職場ではパソコンは右手だけでなんとか叩いていた。上にそのことを隠せずに話すと、

「それは危ないな。脳梗塞ということもある。君の年齢では失礼だが、検査をしてもらったほうがいいな。テレビでやっていたが、健康だと思っていた人も検査を受けたら、軽い脳梗塞をしていたというし、いまはいい機械があって、すぐに調べられるそうだ」

そんなことを言われたら、あまりいい気はしない。もう老人の入口に差し掛かっていると指摘されたようなものだ。若い人でもなるというから、一応、近くの総合病院に行ってみた。受付で訊いて、脳神経外科の初診窓口に入った。普段から病気知らずで、病院などあまり縁のないところだ。いままで一度も手術などしたこともない。なにをされるか判らないので、恐々と窓口で症状を告げた。

医者はいろんな可能性があるので、すべて検査をしてみようと話した。MRI検査の予約も

した。年も年だから、きっと、あちこちに様々な病気が見つかるかもしれない。おれはそれが怖かった。

病院で準看をしている女房にそのことを夜に話したら、嬉しそうにおれのほうを向いて、目を輝かせて言うのだ。

「あら、それって、かなり深刻かもしれないわよ。あなた、生保は入っていたわよね」と、来た。こいつは、保険金のことしか頭にはないのだ。

「そうじゃなくって、その、入院となれば、一日いくらと降りるでしょう」と、焦って笑いでごまかしていた。

検査結果は目を瞑って聞いた。判決を聞く被告のように心臓が締め付けられる思いだ。「どこも異常がないですな。糖尿も調べましたが、血液も心電図もどこにも原因と思われるところが分かりませんでした。後は、心因性のもも疑われますから、精神神経科に相談なさってみてください」医師は淡々とそう義務的に告げた。

という審判は、おれが精神異常だということか。原因が判らないというのが辛い。と、言われてもそこまでは受診にゆく気にはなれなかった。脳が壊れていると診断されるほうがさらに怖い。

腕は動くが手先だけが動かない。いくら命じても駄目だ。自分の手でありながら、自分の手でないような。それでいて、神経はある。抓ったり、叩いたりしたら痛みは感じるのだ。皮膚は温かく、おれの血が通っている。これでは、第一、仕事ができない。どうしたらいい。

片手でやることは確かに日常生活でも不便だった。トイレも困るが、自分で着替えをするのも、両手が必要だ。だけど、片腕がない障害者もいるから、きっと工夫次第では仕事もなんなくこなせるだろう。そんなことを考えながら、片手でデータの入力作業を会社でしていたときだ。事務の女の子から、おれ宛の郵便物が来ていると、届けにきた。

「ありがとう」と、おれはそいつを何気なく左手で受け取っていた。開封しながら、おや、動いている。おれの命令通りに動いた。接触不良の機械が繋がり、接続できないネットが通信できたときの歓び。七日間、ストライキをした左手は突然、元のおれの手に戻った。脅かしやがって。

「どうだ、たまにやるか」と、上から呑みの誘いを受けた。おれは断らない。終電までに帰ればいい。どうせ、女房は夜勤で、猫しかいない暗い愛のない部屋だ。急激に秋になると、いままでの残暑が嘘のように、街の体温は降下してきた。秋口はどうも人懐っこくなるようだ。

上は、おれとは同期入社だった。リストラされたおれを子会社で拾ったのは彼だった。この年で再就職は難しい。一年先の給与と退職金で、どこまで持つか。そんなときの救いの糸を垂れてよこした。

呑みといっても、互いに派手な遊びの年は過ぎた。せいぜいが居酒屋で、串焼きと生ビールだ。上は同期にしては、すっかりと年取った。苦労が髪と眉間に出ている。彼は、鶏口牛後で、会社分割のときに名乗りを上げて、あえて子会社に出向したのは正解であった。いまは、親会社が恐竜のように最後の足掻きをしているところだ。

「左手が動いたってな、そいつはよかった。どこも悪くなかったようだし、まずは乾杯だ」

「おれたちの年になると、バタバタと逝っている。癌も脳梗塞も糖尿病でもだ。今回のことでは

、検査でみんな調べてもらってよかったと思っている」

おれは、一週間の緊張から解けたように美味しいビールを呑み干した。

「おれも、日帰りドッグにでも入らないとは思っている。だが、本当のところ、怖いね。ポロポロと出てきそうで。健康状態は、会社ではマイナス査定で、どうにもならん」

上もおれも思うところは同じだった。企業戦士でいままでやってきて、定年間近で病魔に掴まるというのが一番いけない。

金曜日の夜の電車には若い人たちが多かった。終電ではないが、呑んで帰る若者の集団もあって、混んでいた。ちょっとしたラッシュ状態だ。

ミニスカートで派手な化粧をしている若い子がおれの前にいた。後ろから押されて、その子に接触した。これはまずい。いまは、痴漢にされる冤罪が多い。関わりにならないように、世のサラリーマンたちは、両手を挙げて、吊り革を掴んでいたりする。染めた髪が、おれの鼻先をくすぐる。こんな若い愛人でもいたらいいなと、変な気持ちになっていた。いままで、両手で吊り革を掴んでいた左手がないことにおれは気が付いた。手は、どこに行った？ 自分の左手に感覚はあるが、所在がわからない。また命令をきかないことを確認した。すると、左手に女の子の尻の感触が伝わった。下着に手が触れている。嘘だろう。どうしたのだ。それはおれの意志ではなかった。勝手に左手が動いている。Tバックの薄い下着の間に指が入った。女の子はもぞもぞと始めた。これは大変だと、おれは手を離そうとしても動かないから、体をずらせた。女の子から少しでも離れようと、避難させた。指先には確かに濡れた感覚がある。そのときだ。女の子が「痴漢よ。この人」と、泣き叫んだ。どきりと、声のほうを見た。わたしの横にいた若いサラリーマンが女の子に手を掴まれていた。

「ぼ、ぼくが何をしたって、ぼくじゃないですよ」と、周章狼狽している。哀れな青年は、おれの濡れ衣を着せられた。他の同乗者たちも騒ぎ始めた。次の駅で取り囲まれ、女の子も一緒に降りた。サラリーマンの青年は青くなっている。おれはほっとした。

その後、身震いが走る。いま、たったいま、おれの左手は何をした？ おれは、いままで痴漢どころか、女の子の手も握ったことはない紳士であった。むらむらとくる気持ちは男だからあるにはあるが、そんな、痴漢をしようと思ったことは一度もなかった。

おれは、自分の駅に降り立って、家までの道すがら、自分の左手を握ったり、振ったりして、自分の意志で左手が再び動くことを確認して、ますます怖くなった。<多重人格>という言葉が浮かんだ。おれの中に別のおれがいる？ だけど、それは違う。おれという意識まで乗っ取られてはいないのだ。電車の中でおれはおれであった。あ那时的行為を働いていたときも、おれは確かにおれのままでいた。手だけが、まるで別の人格を持つ動物のように動いた。そんなことがあるか。あってたまるか。

家に戻り、それは久しぶりに呑んだ酒のせいだと思うことにした。それでも不安になる。夜中になっても眠れないので、また起きて、パソコンの電源を入れた。何か疑問があると、グーグルで検索する癖がついてしまった。聞けないこともいろんな人が教えてくれる。その情報の多くは屑だと言う人もいるが、参考意見にはなるだろう。検索の窓にキーワードを打つ。<指が勝手に動く>と入れた。すると、世の中には似た症状で困っている人の質問も出てくる。

一寝る寸前に意思とは関係なくピクツというか、軽く指を折る感じに動くことがあります。自然

な現象なんですか？

—48歳 男性です。半年くらい前から、力を抜くと意思とは関係なくピクツというか、軽く指をおる感じに動く事があります。左手の薬指が必ずそうなります。精神的にも肉体的にも疲れは溜まっています。何か重大な疾患が考えられるでしょうか？

それに対して、医師と思われる人からのアンサーが書き込まれていた。

—重大なサインです。つまり「疲労が蓄積している」というサインです。冗談ではなく、体全体の疲労により主にビタミンB1・6・12の不足により、筋肉が勝手に軽い収縮をする状態です。応急処置としては、アリナミン系のビタミン剤を、市販のものなら15粒ほどを数日間、処方されたものでも1日3回服用して、疲労の回復をすることです。

そのようなことなら、考えられないことはない、確かにおれは疲れている。リストラのショックから立ち上がっていないのだ。

それで、さっそく、翌日、ドラッグストアで、ビタミン剤を買って吞んでみた。いままで栄養剤やサプリなど、口にしたこともない。おれは強健だと自信があったからだ。

ビタミン剤は効き目があるようだ。なんとなく、何の病気かと判らないのが怖い。それが、原因と対処法さえ判れば安心だ。手はいつものように動くし、また以前のおれに戻って、書類をPDFにして、支店に配信するという仕事をパソコンに向かってしていた。

<売上高の係数分析の結果、どうだい、電車の女の局部の感覚は？ よかっただろう>

そこまでキーを叩いて、はたとおれは指を止めた。変な会話が入っている。よくあるのが、ウイルスだ。やられたかな。だけど、自動的にウイルスチェックはしているし、ワクチンソフトからファイヤーウォールも機能しているので、外部から侵入はできないはずだ。念のためにスパイウェアということもあるだろうから、スキャンを試みよう。結果はウイルスはゼロだった。ちゃんとソフトが機能している。侵入はできないようになっている。それなら、何故だ？

<各支店の動向は、昨年対比で次のような数字に、大金が必要だろう。愛人を作って貢ぐためにはな>

また、変な会話を書き込まれている。誰だ。誰がこんな悪戯を。と、おれが、ふと、左手を見ると、左手が勝手に素早いスピードでキーを勝手に打っているのだ。なんなのだ、こいつは。インターネットに繋がると、会社のネットバンクにログインした。パスワードはおれと上だけが知っている。そうして、左手は、普段使われていない小口支払い口座に五百万を送金した。そこから、おれがいつも気に掛けていた取引先のエステシヤンの女性の口座にそのままの金額で送金された。美人経営者で、おれとは何度か食事をしたこともある。どうして、左手は彼女に送金したのだ。大変なことをした。間違いでは済ませられない。おれは、顔が引きつるような恐怖で、椅子から立ち上がった。ようやく手はキーボードから離れた。女子社員たちは、何かあったのかと、一斉におれの顔を見た。

駄目だ、疲れている。おかしい。どうも狂っているとしか思えない。おれは気分が悪いからと早退した。病院に足が向くが、それもどうもあてにはならない。やはり、精神科だろうか。隠れ二重人格というのがあって、おれの知らない欲望だらけのおれが操作されている。確かに、おれ

はこの方、不正もしたことはないし、浮気もしたことはない。真面目一筋で会社のために生きてきた。だけど、女房との不仲はずっと前からあるので、浮気願望はないわけではない。宝くじを当てたら、男の夢でもある若い女を囲うということも考えなかったといえは嘘になる。会社の金に手をつけるということは、前に考えなかったことではない。手口は二重三重に回すことでうやむやにさせる方法があると、ちらりと抜け道も考えたことがある。だけど、そんなことをして何になる。リストラの復讐か。バカな。

おれは、あの左足の脛に搔き傷があった朝のことを思い出した。あの朝からすべてが始まった。前日に、女房と口論になり、リストラから子会社に拾われたことも、おれが不甲斐ないことだと、自己嫌悪に陥っていた。自分の頭を壁に打ち付けたい思いがした。そのまま酒を呑んで寝た夜中に、左手が、おれの肉体を搔き切ったのだ。無意識の中に欲望のままに動く自分がある。それを思うとき、ずっと深い人間の無意識の闇に性悪の顔が見えた。

よく、犯罪に手を染める人が逮捕されて話すのに、魔が差したという言い方がある。魔とは、もう一人の自分なのだ。

「簡単なテストをやります。この質問表に○×で回答してください」

おれは、心理クリニックの看板を見て、ふらりと入っていた。病院といっても病院らしくはない。どこかのホテルのラウンジといった落ち着いた雰囲気があった。医師は、白衣を着ていない。看護師もそんな格好はしていない。普段着で対応する。オフィスの中という感じもした。癒し系のBGMが流れている。

テストの結果はすぐに出た。

「強迫観念が少し強いかなというだけで、いまのところメンタルな面で問題はなさそうです。真面目で責任感がある方ですね。ただ、完璧主義者でいらっしゃる。それはご自分で疲れてしまう場面は多かったと思いますね。ストレスはそこから普通の人より溜まりやすい」

おれは、医師に左手の症状を話した。総合病院で診てもらった結果も報告した。内科も外科もどこも異常はないと。疲れているかどうか、フリッカーテストで値を測定したが、そんな精神的な疲労も見受けられない。

「おかしいですね。肉体的にも診断されたように、精神的にも健康そのものです。あなたが心配されているような、多重人格でもなく、うつ病でもない。統合失調症の疑いもゼロです。お話をお聞きすれば、現在のおかれている立場も悪くはないでしょう。世の中には再就職もできないあなたのような年齢の方ははいくらでもおられる。生活も安定されて、奥様との仲もそんなに険悪でもない。付かず離れずといったところで、心労がかさむストレスはあなたの言うようにならないように思われますが」

まったく、医師の言う通りだった。おれはまだ恵まれている。借金があるわけではない。貯金もあるし、仕事もうまくいっている。それに、息子たちもちゃんと仕事をして家庭は円満のようだ。何の苦労もない、合わせな男ではないか。

「大丈夫ですよ。気にしないほうがいい」

と、医師が言ったときだ。おれの左手が、なんとしたことか、医師の顔を平手打ちしていたのだ。医師は椅子から転がり落ちた。

「な、何をするんですか！」と、看護師も駆けつけてきて、おれを後ろから羽交い絞めにした。

「先生、すみません。わたしは、別に叩くつもりはなかったんです。この、左手がまた勝手に動いて……」

医師も信じられないといった顔で見上げていた。

おれは、逃げるようにクリニックを出てきた。医者不信が以前からあったのが、思いもしない暴力で出た。このままでは、左手は次に何をするか判らない。とんでもないことをしでかす前に、なんとかしなくては。

おれは、そのままドラッグストアに駆け込んだ。腕が骨折したと偽り、包帯とギブスを購入した。それを売場の従業員に頼んで左手が動かないようにぐるぐる巻きにしてもらった。これでは仕事はできない。だけど、なんとか理由をつけて、片手でやるよりない。もう、おれは自分の左手を信じることはできない。こいつは実に恐ろしいやつだ。

もう、会社には行けないだろう。どうしたものか。不正経理はいずれバレる。間違いでは済まされない。

会社の近くを歩いていたら、送金したエステシャンが会社に行くところのようだ。おれを認めると手を振った。おれは慌てて、彼女の華奢な腕をとって、知り合いに見つからないように、ビルの中に連れ込んだ。

「五百万の件で来たんだろう」

彼女の目元が複雑そうに動いた。

「そうよ。あなたの署名があったので、変だなとは思った。商品を返品した代金でもないし、額が多すぎるから。でも、どうしたの、その左手ー」

四十にしては若く見える彼女は颯みながら言った。

「それなんだ、この手がいけないんだ。悪さをしないように拘束しているところだ」

おれの言うこともトンチンカンに聞こえるだろう。誰に話しても信じない。おれが気違いと思われて終わりだ。

「その金なら、返してもらったら困るのだ。うまく処理したから、出されたらわたしの首が飛び」

それで意味が判ったと、彼女は困惑したような顔で、おれを離れた位置で見ている。

「どういうことですか。説明していただかないと」

すると、おれの左手がまた勝手に上がり始めた。

「やめろ、やめるんだ。彼女には何もするな」

おれが、そうして左手に話しかけている姿を見て、彼女は慄いていた。明らかに、誰の目にも異常な光景だ。

「とにかく、間違っただけのものとして、振り込んでおきましたから」

彼女はその場を後退りするようにして逃げ帰った。せっかく好意を抱いていたのに、もう、これで何もかも終わりだ。

おれは、この左手を始末しないと、いずれ、おれがこの左手にやられるという戦慄を覚えた。これは、別の生き物だ。得体のしれないものが、入り込んでいるのだ。

おれは、家に戻ると、台所から刺身包丁を取り出した。このままではおれはおまえのために破滅する。こんな左手なんか、なくていい。包帯を取ると、ギブスも取り、おれは、気味の悪い生

き物のようなおれの左手を眺めて、包丁を突きたてようとした。そうするより早く、別の意志のある左手は、おれの右手の包丁を奪いとった。と、おれの右手を刺しやがった。大変なことになった。両手のもみ合いが始まった。血を流しながら、右手は必死に左手の包丁を押し返している。指先が切れて血が噴出していった。

その騒ぎを聞きつけて、夜勤明けで寝ていた女房が起きてきて叫んだ。

「何をしているのよ、バカなことしないで、早まらないで」と、女房は左手から包丁を取り上げようとした、そのとき、ズブズブという肉に入り込む感覚が左手に伝わった。女房の悲鳴がまるで、交通事故で潰されてゆく人間の断末魔のように、この世の声とも思われぬ野太い声のまま腹を押し返してその場に倒れこんだ。台所は血の海だ。

「誰か、助けてくれ」と、おれは、血だらけの包丁を手にしたまま外に飛び出した。近所の人たちが叫びを聞きつけて通りに出てきたところだ。それを、おれの左手は次々に刺した。

「やめろ、やめるんだ」

おれの逃げる前では、隣の住人たちが次々に刺されてその場に倒れる。おれは、半狂乱になって、左手と格闘していた。

「なんとかしてくれー」と、血だらけで助けを求めると、住人たちは逃げ惑う。遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。左手は、世の中に復讐するかのように、冷静に包丁を突き立てていた。そこには殺意は明らかにあった。<みんな死ねばいいんだ>と、いつか失職したときに、世界の不幸を背負ったように思ったおれは、そう腹の中で叫んだことがあった。それがおれか。左手はおれの本心の代行者なのか。やめさせなければ……。おれはおれの胸を刺した。心臓をひと突きだ。どうだ。ざまあみろ。おまえは、もう動けなくなるんだ。手、も、出せ、まい……。

第998話

原初の海へ

ココハドコダロウ。オレハミズクシカバネカ。生キテいるのか死んでイルのか。水の中に身体が回転している感覚だけが、自分という存在を捉えてはいた。なんだか心地いい。思い出そうとして、海馬が麻痺しているかのように言葉も出てこない。自分の名前、今日は、何日の、何曜日、昨日、一昨日、先月、去年、遡っても、記憶は剥離している。ぼろぼろに遠大な道程を光速で飛来して、記憶喪失の長いトンネルを潜り抜けてきたものののように、薄れゆくキーワードをまさぐる。

落ち着けとも言い聞かせる自分は、何者で、どこにいるのか。天地がひっくり返ったような無重力の宇宙としたら上も下もないものを。

失いかけているものを取り戻そうと、脳裏のいくつもの扉を開けては検索を開始していた。それでも、どんどんと過ぎ去るもの、逃げるものの尻尾だけが、遠くなって、すでに手が届かない。

いまは、確かな感触は、水の中にいることだ。しかも、息をしていない。口の中から肺の中まで、きっと水で満ちている。目も見えない。だけど、不思議に生きている確かな思考だけが働く。

おれは、死んだのか。しかし、ここは、ひどく懐かしい海のような。近づく恐怖が蘇る。記憶を失う瞬間の光景が、サブリミナル効果のように無意識の世界に焼き付けられていた。生と死の瞬時のすりかえられる激痛も感じない幽体離脱。それをおれは見た。確かに水だった。空中をもがいて、手足をばたつかせて、どこまでも落下してゆくおれの先には群青の水の壁があった。そこから先が切り取られたように削除されている。

ドクドクドクと、音のする。目は見えないが、どうやら聴覚は生きているようだ。水の中での音は、大気で聴く音よりも近い。音の伝導が低く大きかった。思い出した。おれは、スキューバをしていた。スノーケルにフィンの足で蹴って、海底まで一気に潜る。そのとき、聴こえたのは、遠くを航行する連絡船のスクリュウ音だった。近づいてくる恐怖から、海面に頭を出してみると、船は沖合いを通過していた。そんな疑似体験を思い出したのに、それは失われたファイルの断片で、おれという人間の重要でないデータの一片にしかすぎない。

おれは、浮いているのか沈んでいるのか。手足は動いた。ぐるりと体を動かすことも可能だ。狭い海底の洞窟の中に閉じ込められているという感じがした。あるいは、すでに死んで、ホルマリン漬けにされた死体か。巨大なビーカーの中で、実験材料にされるために、アルコールの海に逆さに入れられているような。

どんな状況なのか、理解しがたいところにいるのは事実だ。ただ、息をしていないのに生きているということは、この世ではないのだ。すでに別の世界にいるのかもしれない。

おれは、じっと奥深いところに漂っている糸の端でも見つけようと、堪えていた。どんな場面

でもいい。言葉でもいい。手がかりになるものを見つけるのだ。

すると、さっきの海を自由に泳ぎまわるシーンが再現された。そこから、さらに前後まで行ってみることだ。夢も目覚めると、現世の空気に触れて、石室の壁画が消えてゆくように、追い求めるおれの手では遅すぎる。

海面に顔が出た。波間から白いビーチが見えた。そうだ、そこからズームしてみろ。女がいる。見覚えのある顔だ。波打際に立ったまま、こっちを見ている。ひどく懐かしい顔だが、誰だろう。水着の上に白いタオル地のガウンをかけている。

それもまた水に吸い込まれるようにして流れてゆく。

落下してゆくときの身震いするほどの絶望感はどうだろうか。そこからまたその前後を必死になってたぐり寄せてみる。記憶の糸というものは、途切れたらお終いだ。

今度は、違った場面が出てきた。ビルの屋上におれは立っていた。高い。足がすくみ、手に汗を握る。高所恐怖症のおれが、そんな屋上のへりになんか立つはずがない。そこまで歩く勇気もないくせに。

ずっと遙か眼下にミニチュアの車のライトが走る。ビルの谷間を俯瞰すれば、立体がすべてひん曲がったガラスの刃に見える。氷柱のようにおれのほうに伸びている。その先に神経を集中させ、おれを吸い込ませる。きっと、それからのシナリオは飛び降りたおれの脳髄から突き刺さり、肺から腸へと先端は串刺しにする。じっとりと汗ばむ。ふらふらとしきりに失神しそうなところを戦っている。

そこでは死なない。真下に水がない。おれは水と関係したところでないと死なないような気がした。その場面も急速に酸化して色褪せてゆくように留めておくこともできない。

恐怖という、吸い込まれる感覚から、今度はかなり怖いのが、覗いてみることにした。まるで、それは脳細胞のひとつずつのドアを叩く気の遠くなる作業だ。次の部屋に何があるか、恐る恐るページをめくる。物語の第一章のドアのノブに手をかけた。開けていいものか。後悔しないだろうか。見てはいけないものを見るのではないか。きっと、最初の場面から、壮絶な死の場面が出てくるわけでもあるまい。

記憶を逆流する旅というものは怖いものだ。神経を逆撫でする。ざわざわと、逆方向に入りこんでゆく。鼻腔の涙腺から、ペニスの尿道から、カテーテルを突っ込まれて、入ってはいけない奥の奥へと異物が侵入してくるような。

いきなり、おれはドアを開けた。今度は、どうしたことだ。どこかの駅のホームだった。朝のラッシュが過ぎて、ホームもそんなに混んではない時間帯。山手線だろうか。背景の街から場所を特定しようとした。それは破壊された画像であった。ビルのジャングルがあるはずが、広々とした砂丘がどこまでも起伏の畝を畳みこませていたし、ホームに立つ通勤客の顔がない。男女の区別もつかない。ただ、茫洋として、そこに何か人型が突っ立っていると認識するようなものだった。

駅名を見ようとしたが、電光掲示板の文字も不確かなら、文字という文字が証拠隠滅したように霞んでいるではないか。それは夢なんかじゃない。現実の光景が、映画かテレビ番組か、旅行ガイドブックの写真か、そうしたものと合成されていただけなのだ。

恐怖はいきなり来る。おれは、どうしたわけか、ホームの黄色い線から出ていた。線路に落ちるスレスレのところ立っていた。スピーカから、怒声が聞こえる。何を怒っているのか言葉が濁っている。顔のない制服が、遠くから走ってくるのが見える。警笛を鳴らして電車が猛スピードで入線する。また手に汗だ。電車が迫ってくる。運転士ののっぺらとした顔が見えた。口はある。大きく開けられている。何か叫んでいるようだ。おれの体は宙に浮いた。まさか。飛び込み自殺。なんで、おれが自殺しないといけないのか。理由を探した。思い浮かばない。一秒が一分に思えるスピードだ。人間の動きも緩慢だ。声もスローモーで野太く、低音で間延びしている。

と、おれの体を後ろに引く手があった。ものすごい力から、おれは巨体の男を想像していた。のけぞる形でホームに転倒した。後ろ向きにおれの手を引いたやつの顔が逆向きに見えた。女だ。その女だけが目鼻がちゃんとある。見覚えのある女。怒っている。そうだ。その顔はビーチで見ていた女と同一人物だった。

そこで途切れる。おれは泣きはらした赤子のように睡眠に陥った。

夢を見ていた。いや、夢の中で劇中劇のような夢を見ていた。眠っているのか覚醒しているのか判らない状態に、夢の中の夢なのかも判らない。時間の感覚もなくなり、いまが夜なのか昼なのか。ただ、真っ暗な水の中を浮遊しているだけなのだ。

落下してゆく夢は小さいときから何度も見た。どうして、同じ夢ばかり何度も見るのか。それは大人になって社会に出てからも、思い出すとぞっとする場面だったということ思い出した。

幼児の体験がおれに与えた恐怖感の記憶はないし、親からそんな目に遭ったという話も聞いたことはない。その夢を何十年ぶりかで見ていた。

おれは空にいる。空というのかどうか、掴むところが何もなくて時速二百キロで落下し続けている。もがいて、なんでもいから掴みたいと手足をバタつかせるが、何もあたるものがない不安がおれの精神をも垂直に落としてゆく。急降下するエレベータの中で感じる全身の軽さ。血までが、上昇するような気持ちの悪さ。内臓は吐き気がするほど横隔膜に押し付けられる。

誰も助けてはくれない。泣いて、叫んで、発狂したいほどの声を限りにわめいても、独りだ。独りであることの、おぞましさは、得体のしれない醜悪な未知の生物のようにおれに嫌悪感で押し潰そうとしている。

やがて、雲も風も切れて、下界がくっきりと見えてくる。海だ。キラキラと耀いている海が、鉄板のように変容してくる。水に落ちたら助かるという思いは一変した。落下してゆくスピードとおれの体重を掛ければ、一平方センチメートルあたりにかかる衝撃は何トンになるのかと、計算までしていた。水は鋼鉄の板になる。幼少のときには、そこまで考えはしない。ただ、海が眼下に見えたとき、ひどく気持ちが溶解してゆくの判った。誰かが呼んでいる。その声は誰だろう。女の声だ。あの女か。懐かしい声に呼ばれて、おれは夢現の境界からふたたび水の中の生物へと還ってきていた。

幼少のときから繰り返し見てきては、夜泣きし、両親をいつも起していたという神経質な子供であったことを思い出した。いまでこそ、夜驚症という名前がついたが、薄っすらと、自分の幼児のときの恐ろしい夢から泣いて起きるのではなく、部屋を徘徊し、怯えている格好をするのを、大丈夫だからと、抱きしめた人は誰であったろうか。電灯を点けたら、狭い部屋に何人も寝て

いるようであった。それがおれの姉弟だったか。おれの家族構成も覚えていない。親の顔も名前も不確かだ。

やはり、記憶がかすれてゆくのが判る。簡単なことも覚えていないのはどうしたことか。過去から消えていつている。それがしごく当然のようにも思っている。

夢から醒めた夢はまた死ぬところだった。今度は列車が鉄橋を渡ってくる。自分は線路の上にいる。逃げ場がない。下は遥かに溪谷が見える。川は流れているが、その高さに怯えた。また手に汗を握るような感覚。いつも逃げ場のない、死ぬ寸前の夢ばかり見て、また泣いて騒ぐのだ。その夢は幼児のときに何度もやはり繰り返して見たものだ。どこから来たのか。

祖父らしい年寄りが出てきた。おれの小さな手を引いている。たくさんの人が立っている暗い部屋に映像が動く。音楽と外人の言葉が聞こえる。そこは映画館のようだ。映画館で、こんな列車に轢き殺される絶体絶命のシーンを見たからか。

おれは、ひとつのシーンから、様々な断片を蘇らせた。見失ったピースは次々にその色合いで隣り合わせを見つけた。くっついてゆくと、夢の全貌が見えてくる。

ただ、どうして、そんな死ぬ夢ばかり見るのだろうか。海でも川でも、水で死ぬというのか。ビルの屋上や駅のホームはどうだ。そこには水はない。関連性はないだろう。おれは、推理する力もなく、思考はぼやけてきていた。もうすぐ、何もかも消えてゆくかのようだ。意識はある。記憶も少しずつ断章を現す。おれという人間がどうしてここにいるのかということの意味を解剖している。もう少しだ。真相に辿り着けるだろうか。何か、知ることがものすごい怖いことであつたりしたらと、思うときもある。知ってはいけないこともある。判ったときに、自分自身の意思がとてつもなく深いところに急降下してゆくのではないかと危惧した。

次に眠りに落ちたときに見た夢は、暗い部屋だった。天井がドームのように蒲鉾型になっているようだ。椅子が並んでいる。前にも後ろにも左右にも。人の頭が見える。揺れている。直下型地震のように縦揺れだ。下からどンドンと突き上げてくるような、不気味な動きがあった。左右に揺れる恐怖より、上下に揺れるほうが恐ろしい。何故、足元の小さな照明だけが点いていて、天井の電灯は消えているのだ。Fasten Seat-Beltの文字だけが暗闇に浮かんでいる。大勢の人間たちが椅子に座っているようだ。ここはどこだ？ 思い出してきた。おれは飛行機に乗っていた。子供のときか。いや違った。シートベルトを締めろというサインが読めるのだから、大人だろう。それは、夢ではなかった。初めて見るものだが作り話ではないような迫真の感がある。それは現実に体験したことの回想に思えた。かなりのリアリティに満ちている画面が、それは夢ではないとおれに突きつけている。

とすれば、何かあったのか。乗客の多くは無言であった。英語でアナウンスがあった。一当機は乱気流により暫くの間、揺れますので、シートベルトは着用の上、座席についてサインの消えるまでお待ちください。

おれは、その飛行機でどこに行こうとしているのか。それに至る前後が判らない。また、難問のように、ひとつの場面だけを意地悪くおれにカードを出してくるようで、次のカードをあてるといいうのか。

ただ、判っているのは、夜だということか。外人が多いようだから、その飛行機は、国内ではないということだ。まるで、記憶の中に手術用の細いスコープを潜入されているよあうに、お

れは、伸び上がって、機内の様子を確認しようとした。スチュワーデスたちも補助椅子に座って、きちんとシートベルトをしている。それが規則であるかのように、危険防止のために異様に揺れる空域に耐えている。

飛行機は突然、ストーンと落ちた。無重力になったように、一瞬、体が浮いた。スチュワーデスの一人と、シートベルトをしていないで、トイレに立とうとした乗客二人が、宙に浮いたと思ったら、天井まで飛んでいた。悲鳴が機内を共鳴した。強かに頭を打って、状態を逆さにして一人は通路に、後の二人の女性客は客席に落下した。それが他の乗客の頭を直撃した。猫を自転車で轢いたときのような鈍い声が出た。大騒ぎになった。それでも、飛行機の激しい揺れは収まらないから、救出も手当てもできない。スチュワードも座席にしがみつこうとして、じりじりと現場まで腰を低くして行くよりない。周辺の乗客はパニックになり、なにやら聞いたことのない言語でわめきたてている。全員が、座席にしがみついて、不安な様子で機内を見回している。子供は泣きやまない。乱気流などよくあることで、旅慣れた人ならひどいものは何度も経験しているはずだ。それが、今回ののは、異常のようだ。隣のご婦人は胸でクロスを切っている。何人も指を組んで、お祈りをしているようだ。

左右に揺れるのも、程度が酷い。機長のアナウンスが入るが、スピーカーからは口籠もった英語がよく聴こえない。乗客の興奮のほう伝わって、スチュワーデスたちも必死で宥めようとするが、機体が急降下をしているのは判る。機は斜めに前方に傾斜している。着陸する体勢と一緒にだ。それが素人の誰の体にも感じることで、止まらないエレベータの中にいるようなものだ。次に何が起こるのか、防御本能で、多くが不安できょろきょろしながら、身構えている。

機内の電灯は消したままだ。何故つけない。それは、点けると負傷者の血などで、ますますパニックになるからだろう。暗くしていれば、乗客は見えない分だけ大人しくなる。それは聞いたことがある。離着陸のときに、電灯が消えるのは、どうやら、離着陸のときに飛行機の墜落が多いからだと言った。人間は、闇に閉じ込められると神妙になる。

おれは、夢ではない、回想という記憶の再生装置で、過去の体験をもう一度見ているというより、現実の場所にいた。それでも、次のページが読めないのはどうしたことだろうか。結末は知っているはずなのに、全然、その最後のページが、どうなってゆく運命なのか、覚えていないのだ。

急激に寒くなってきた。空気がどこかへ流れ出る音がしている。気圧が下がってきているように耳がつんとした。と、上から酸素マスクが自動的に降りてきた。アナウンスで酸素マスクを着用してくださいと、指示が出た。スチュワーデスは、怪我人の手当をしながらも、周囲の乗客にマスク着用のデモンストレーションをしていた。誰もその命令に背くものはいなかった。必死でマスクを手にとると、口にあてがった。次に何が起こるのか。それが知りたくて、目は定まりなく、情報を他者に求める視線を送り合った。だけど、返ってくる視線は、どれも不可解な焦りの色に満ちていた。

次にアナウンスが入ったときには、機長の声も興奮して、尋常ではなかった。多少、荒っぽい、早口で伝えられたが、おれは、英語力が弱く、意味が判らない。

「なんなのだ。何があったのだ。日本語で話せ」と、ようやくおれは叫んでいた。周囲はその声

にも無関心だが、みんな自分のことで忙しい。座席の下からそれぞれがオレンジ色の救命胴衣を取り出して、慣れた人はもう着用していた。それを隣もその隣も真似て同じようにする。スチュワーデスがやってみせなくても、そうして僅かの間に、全員が胴衣をつけていた。胴衣をつけるということは、機体なんらかのトラブルで、故障したということではないか。薄れゆく記憶を必死で留めながら、おれは考えた。この飛行機は不時着するつもりなのだ。下は海なのだろう。海面にうまく不時着したとして、何かの映画のシーンのように、全員がシューターで、ゴムボートに乗れるものか。それよりも、脱出するにどれぐらいの時間がかかって、機体に海水が入り、沈んでゆく速度と見合わない、犠牲者が多数出ると。当然の推理もしていた。

もし、不時着に失敗したときは、海面にぶつかって、機体は爆発し、粉々になる。爆発の火災と風圧で、多くが即死だろうし、衝撃もすごいだろう。時速五百キロで突っ込んだことを考えたら、車の事故ごときではない。車でも時速百で衝突した事故では、車は原形を留めていないし、人間はボロ人形のように車外に投げ出され、手足がバラバラになって助からない。

多くの航空機事故のことを新聞ではリアルに書かないが、週刊誌の記事や、それを後にまとめたノンフィクションの本で読んだことも思い出された。大抵は全員即死。助かる見込みは殆どない。しかも、気休めにシートベルトをしているが、時速五百キロの落下での衝撃はベルトは吸収できない。どうなるか。大抵の犠牲者の死体は、ベルトで切れて、上半身と下半身が真二つになっているというではないか。ということは、おれの臍から下は、おれの頭と胸と手からさよならをして、別々の肉塊となって海の底に沈むのだ。そうか、海の底がおれの死に場所であったのだ。それがあの暗い水の中で浮遊しているわけと繋がる。だけど、おれは死んではない。確かに生きている感触があった。何故だ。まさか、あの世にいてもいいの。おれは信じてはいなかった。あの世だとか、黄泉の国だとか。天国も地獄もこの世にあって、靈魂なんか、宗教のまやかしではなかったか。無神論者のおれは、死ぬということは無の世界だとずっとそう唯物的に信じてきたのじゃなかったか。死ぬのが怖いと思うのは、それがためだ。来世とか、靈魂不滅を信じる者こそ幸せだ。神も仏も信じて死ぬやつらは、次に行く場所があると思うからだ。

飛行機の中だけの出来事が長く感じた。交通事故で死ぬ直前の数秒が、それだけで一冊の小説になったのも読んだことを思い出していた。人間の死の瞬間というのは、実に長いということをもろで、生き返った人の証言で書いた物語がある。生から死への数秒がスローモーにゆっくりと流れてゆくのだそうだ。前に見た夢の光景とそっくりだ。それがこれか。周囲の人間の顔がまるで阿呆に見える。隣のご婦人の祈りがそうだ。男のような野太い声になって聴こえるのは、テープをゆっくりとしたスピードで再生されているかのようだ。それも同じだった。その隣のビジネスマンらしきスーツの男性は、必死に手帳にメモをとっている。何を書いているのか。遺書を書いておかないと、自分の最後の記録が残らないとでも思っているのか。

機体は不気味にぎしぎしと音が鳴る、天井が歪んでいる。冷静に観察できるのは、そこにいるおれなのだが、そこにはいないという確信ががそうさせる。夢の続きと、映画のシーンのように観客の眼で捉えているからだ。

その次に起きたことは、一瞬のことで、おれには理解するだけの能力もなかった。突然、飛行機の屋根だけでなく側面も割れた。座席ごと、バウンドして、多くの乗客たちと共に、空に飛んだ。火の玉が広がってくる。みんな頭を低くした。おれも咄嗟にシートベルトを外していた。

と、ものすごい力で、吹き飛ばされていた。おそらく、意識はその時点でなかったと思う。おれが見ている一部始終は、おれの記憶のレンズを通してのからだ。カメラはずっと回っている。どんな残酷なシーンでもカメラのレンズは目を瞑ることがない。

おれの体はバラバラにはならなかった。火傷もなく、空中にあるのが判る。そこからは、何度も夢でか、見続けていた、フラッシュバックするシーンと同じだ。おれは落下している。月明かりか何か、海面がある部分だけ光らせてどんどんと近くなってくる。

こんな高さから海に落ちたら、助かる方法はあるのか。人間の落下速度は、そのスピードで水とはいえ、叩きつけられたら、骨は砕け、内臓は破裂し、たとえ足から落ちても、相手は海面という鋼鉄にも近い硬度に変容するのだ。ダイビングのようにはならない。と、同じことばかり考える。普通は落ちて行く短い間に死んでいるという。そのこともおれを観客のように妙に納得させた。

死の衝撃とはどんなものだろうか。あまりに瞬間的で、ゼロコンマいくらかという寸前までは、生ある体が、その瞬間を過ぎるとただの肉の塊になるというのか。

すでに海がすぐ近くに見える。来る。来るぞ。

おれの記憶はそこで途絶えていた。そして、目覚めるように、また水の中にいる。温水だ。体のどこも痛くはないが、意識は次第に遠ざかる。どうしたものか。外の音がせわしくなってくるのが伝わる。外とは何なのだ。「はあ、はあ、はあ」という息がする。女の悲しげな悲鳴が聞こえる。気がついたら水はなくなっていた。苦しい。強烈な傷みが全身に走る。助けてくれ。いままでに体験したことのない、強烈な傷みだ。押し潰されるような全身の激痛。暗く狭い洞窟から無理やり搾り出されてゆくようだ。それとおれの意思は消えて行くように幽かな物音しか識別できなくなっている。あまりの苦しきのうちにどこかに出た。

「オギャー、オギャー」とおれは泣いた。

「よく頑張りましたね。元気な男のお子さんですよ」

おれが耳にしたのは、その声が最後だった。

第999話

九九九

会社の寮でおいちょカブが流行していた。トランプの博打で、数字を足して九になればカブで一番強い数字なのだ。初めはみんなに二枚ずつ配られる。絵札はゼロと数える。自分の手が九だったり、それに近い数字なら勝負に出る。ダメなら降りてもいい。三枚目のカードをもらい、それを加算すれば降りられない。駆け引きのいるゲームで、相手の顔ばかり見ているが、うまいやつはいつもポーカーフェイスであったり、強気の演技をしたり、相手を誘い込む失望を見せたりと、心理的だが単純なゲームであった。

北村はそれにはまった時期があった。負けがこむと止めることができない。取り返してやろうと、明け方までやることになる。青天井に近いゲームなので、掛け金が次第に熱くなって倍々

になってゆく。一晩で北村は月給の半分も取られたことがあった。

賭け事は北村の家では、代々の身上潰しの原因で、親からはくれぐれも博打には手を出さないと、口が酸っぱくなるほど云われていた。

北村家は、戦前は雀荘まで家業としてやっていたほどだ。麻雀をやらない男がいないほど、みんなのめりこんでいた。その血を北村はきちんと受け継いでいた。それで、中学のときに、級友を集めて、自室で麻雀の勉強会をみんなですいているときに、母親がいきなり入ってきて、ものすごい形相で怒った。当たり前だ。中学では早すぎる。北村家の女たちは、賭け事で苦勞してきたから、アレルギー気味になっているところがあった。自分の息子にだけは絶対に賭け事はやらせない、どこかでその騒ぐ忌まわしい血を正常に戻そうと思っていた。徹底的に打ちのめされてからは、北村は賭博に手を出すことはなくなったはずだった。

一応、何でもやってみるといった興味本位で、競馬の場外も、パチンコも、花札も麻雀も、ひと通りのことはやった。だが、熱くなりやすい性格だから、自制しているところもあった。自分で自分の怖い性分を知っているのだ。

麻雀でも、絶対に降りない。死なない。親がテンぱっていて、自分の手がたいしたことがなくても向かってゆく。だから、負けるときはとことん負ける。勝つときもとことん勝つ。ビリかトップのいずれかなのだ。そんなバカな打ち方をするから、友人たちは、呆れてものも云えない。

おいちょカブでもすってんてんに負けこんで、泣く女房から生活費を脅かしてまで取り上げると、注ぎ込むといった愚拳を繰り返していた。まさに地獄の生活になってきていた。いいカモだという噂も広まっていた。それが上司の耳にも入った。

「なんだって、北村君は、最近、株に狂っているんだって？」

と、上司に云われた。

「ええ、カブは怖いですよ」

「それはそうだろう。株で儲けたと近頃は聞いたことがない」

そうしたカブ違いもあった。

北村はカブのやりすぎで、寝ても覚めても目の前に数字がちらつくようになった。切符の下の数字を無意識で足していたり、電話番号や車のナンバープレートを見ても、加算してカブをやっていた。すっかりと病気だった。単純なゲームなので、ポーカーにしてもブリッジにしてもそうだが、そうたいして面白いものとは思えないのだが、金が動くとどうしても負けの分を取り返そうと、そのことばかり考えるようになり、それは終わりのないゲームになる。

ただ、仕事の上で、すべての数字を足すという意味のない作業をするので、大事な計算書が合わなくなる。

「北村君、どうしたんだ。小学生でも判る足し算や掛け算が、どうしてこんな滅茶苦茶な数字になるんだね」

はっとして、気が付くといつのまにかカブをやっている。いつも、気持ちのどこかで九を置いていた。どうして九が一番いいのか判らない。一桁の正数で一番多いからか。九を目標にしているうちに、いつからか九が苦になってきていた。九と九を掛けると八十一。八と一を足すと九。二掛ける九は一八。一と八を出すと九。九足す九足す九は二十七。二と七を足すと九。どれも九

になる。十はブタなのだ。ゼロと同じ意味になる。すべてが満たされてしまえば、何もないことと同じなのだ。その高まりのギリギリの数字が九なのだ。そこで止めることが、なにか人生の一番のエクスタシーという絶頂感にいるような気にさせる。北村は常にその強い数字に自分の人生のカードを足していった。

若いときは、それで家庭が犠牲になった。子供が三人もいて、しかもまだみんな小さい。乳飲み子までいるというのに、ミルク代まで賭け金に換わっていった。女房はあてつけのように、毎日の食事を一汁一菜にした。

北村は毎日同じ質素なものばかり食べさせられて、いい加減に頭にきていた。

「なんだよ。毎日、毎日、こんな味噌汁に漬け物だけの食事かよ。肉や魚はどうしたんだ」

女房は、疲れ切った顔で、赤ん坊に乳を飲ませながら云った。

「あなた、カブが好きなんですよ。だから、毎日、カブの味噌汁にカブの漬け物よ」

蕪の季節になると、北村は若く貧しくバカげたあの頃の生活を思い出すのだった。そして、いまだに九に縛られている北村がいることに変わりはない。

第1000話 最終回

千話一夜

目が覚めたら、世の中がすべて変わってあればいいと思ったことはないだろうか。ある朝、目覚めたら十年後の世になっていたとか。そうした未来に飛び出したい願望を持つ人は、現在が苦境である人だ。逆に、過去に戻りたい人もいるだろう。そうした人はきっと幸せであったに違いない。

北村拓也が目覚めたとき、やけに冷えると思っていた。すぐには起きられないでいたのは、いつもの朝とは気分が違う。長い夢から醒めたように、意識がはっきりしなかった。部屋の中がぼんやりと見える。隣に妻の元子が眠っている。おかしいと拓也は飛び起きた。寒い。ベランダに雪が積もっているではないか。今日は、十月の二十七日のはずだ。それがたった一晩で外には一メートルを超える雪が積もっている。元子とは別居して久しいのに、どうしてあれほど拒絶した拓也と床を一緒にしているのだろうか。拓也は一晩でがらりと世界が変わっていることに気づいた。

階下に降りてゆく。まだ家人は誰も起きてこないようだ。家財道具が、以前のようにそっくりとそのままになっている。老父母がトイレに立ってきたところに逢った。別居して、家を出て行った両親がどうして、またこの家にいるのだ。拓也は何がなんだか判らなくなっていた。

居間のテレビを点ける。ニュースをやっていた。今日が二月一日だという。カレンダーを見る。二〇〇二年の二月一日になっている。おかしい。おかしいぞ。と、拓也はかなり気が動転していた。そこへ、元子が朝の支度で起きてきた。

「何よ、朝っぱから煩くして、どうしたのよ」

「おまえ、じいさんとばあさんが戻ってきたのか？」

「何を寝ぼけているのよ」と、元子は笑う。

「おはよう」と、老母が嫁と普通に口を利いている。あれほど憎みあい、仲違いし、出ていったのが、どうしたわけか。

「どうして、今日が平成十四年の二月一日なんだ。どうして、三年近く前に逆戻りしているんだ」

みんな、朝の忙しさの中、拓也の惚けた話なんか聞いていない。三男の拓人が起きてきた。「おい、おまえ、いつ千葉から帰ってきたんだよ。それにその格好、高校のときの制服じゃないか」

千葉で働いているはずの息子が高校生の格好で家にいる。と、娘の夏海も起きてきた。中学のセーラー服を着ている。しかも、高校でフェンシングをやるようになってからは、背丈もメートル七十、体重も増えた夏海が、急に細く小さくなっていた。四男の信義もランドセルを背負っている。中学のはずが、まだ子供だった。拓也は、ようやく気が付いた。ちょうど時計が千日分も戻っているのだ。

また幸福な北村家に戻っていた。いままでの千日は一夜の夢であったというのか。拓也は信じられなかった。夢にしては長すぎる。リアルで、すべての記憶が鮮明だ。これも夢だろうか、頭を叩いてみた。昨日までのことも現実で、たったいまも現実だということが、どうしても納得がゆかない。

拓也は、大事な約束を思い出した。同人誌の遙というのに所属していたが、その十五号が完成して、主宰の金澤さんの事務所に取りにゆく電話をするはずだった。

一金澤先生、遙の十五号の件なんです。

と、拓也は金澤さんの事務所に電話をしていた。

—なんですか。その遙って。

—ですから、印刷所から上がってきた、われわれの同人誌ですよ。

—さて、云っている意味が判らないんだけどね。まあ、春になれば、同人誌を立ち上げようかと思っはいるけどね。そのときは是非参加してもらいたい。

金澤さんは惚ける人ではない。拓也は、やはり過去へ戻っていることを確信した。この千日が夢であったとは、簡単に処理できないでいた。

そうだ。ノートパソコンにはなんらかの記録があるはずだ。拓也は二階の書斎に走った。ところが、書斎なんかはない。その部屋にはロックバンドのポスターが貼ってあり、体をトレーニングするための器機が置いてあり、ボクシングの試合の写真が飾ってあった。そこはまだ三男の部屋だった。拓也の部屋はない。

「おれの書斎は？」

すると元子が同情するような顔をした。

「やはり、あなたおかしいわよ。書斎だなんて。あなたの居場所なんてこの家にはないのよ。廊下でパソコン打ったり、トイレで本を読んでいたじゃない」

思い出した。いつも、あの頃は居間の食卓や廊下の電話のそばにねそべるようにしてパソコンを置いて打っていたのだ。

家族がまだまとまっていた。家庭が壊れないでそこにあった。そして、拓也のノート。唯一の

帰れる場所があった。

拓也は恐る恐るノートパソコンを開いた。ウィンドウズMeの画面が出てきた。まだXPにはなっていなかった。拓也は毎日欠かさずに日記をつけていた。そいつを開いて見た。

一月三十一日

昨日まで毎日書いていた詩はやめにした。これからはショートショートを書こうと思う。掌の小説に比べたら、足下にも及ばないだろうから、ほんのつまらないという意味から指先物語としよう。人差し指は行くべき道を示す。バカにするときも指をさして嗤うのだ。そうしたアイロニーを書いて、メールで送ったらどうだろうか。

日記はそこで終わっている。拓也は確認した。昨日まで打っていた千の小説も、二〇〇四年の十月二十六日までの日記が消えている。

困ったときにヘルプを開く癖ができた。機械の操作だけでなく、人生にもヘルプが常に傍にあればと拓也は思った。パソコンなら元に戻すことができる。操作の取り消しをすればいい。拓也は焦っていた。これから複雑で悲惨になる過去へなんか戻りたくはなかった。どうせ、こんなふうにタイムスリップか、夢から醒めるなら、未来に醒めたかった。

だが、ひょっとして、やり直しがきくのだろうか。歴史は変えられるのだろうか。そうも思った。同じ復習をするのであれば、それはいらぬ時間の反復になりそうだ。

パソコンのヘルプには、知りたいキーワードで文字を入力すると、どうすればよいか親切に関連項目が出てくるようになっている。

拓也は、「元に戻して」と、打った。すると、そこには「人生の復元」という項目が出てきた。その青い文字列をクリックすると、説明書きが出てきていた。

—あなたの設定した人生の復元ポイントは二〇〇二年二月一日です。

啞然として、その設定を思い出そうとしていた。

「そうだった。忘れていたよ。すっかりと忘れていた。おれは、自分で自分が嫌になったから、復元ポイントまでリセットしていたんだ」

拓也は気の触れた人のように、嗤い続けた。

拓也が選択したこと、それは未来にはではなかった。もう一度、家族を取り戻したいための過去への回帰であった。